

骸骨の魔王と赫灼の焰王

エターナルフォースブリザード

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

至高の四十一人の一人のオリ主がモモンガ様と一緒に転移しちゃう何番煎じか分からないネタ。

小説書くのは初めてなので生暖かい目で見守って下さい。

クトゥルフ神話ネタが極稀に出て来る予定。

*タグにオリキャラを追加しました。

目次

プロローグ 終わり始まり	1
第一話 異常事態と嫁	6
第二話 忠誠の儀	33
第三話 守護者	54
第四話 ブラック企業ナザリツク	66
第五話 会議	81
第六話 楽しみ	98
第七話 暴虐の王	117
第八話 食事	139
第九話 偵察、そして出撃	156
第十話 ヴェンデ村	171
第十一話 東の間の平穏	191
第十二話 情報と今後	211
幕間 ヴェルフニア・セレンルーナのとある一日	234
第十三話 城塞都市オランジエ	254
第十四話 初仕事	272
第十五話 再会	295

プロローグ 終わりと始まり

左右を女神と悪魔の彫刻が支える両開きの扉の先には、神域という言葉が似合う空間が広がっていた。

見上げれば吸い込まれてしまうような高い天井を持つその広大な空間は、白を基調とした壁には誰も気に留めないような細部にまで異様なほどに拘り抜かれた意匠が施されており、訪れる者は息を呑み、呼吸を忘れて見入ってしまうだろう。

数百人入っても余裕がある広大な空間の入口からは美しい真紅の絨毯が伸びており、左右の壁には四十一の紋章が刻まれた赤い旗が飾られている。

最奥にある階段の上にはこの空間を支配する者が座するための荘厳な玉座が置かれ、その周囲にはいくつかの影があった。

「もうすぐ終わりですね、フォーマルハウトさん」

影の一つ——玉座に座しながら悲し気に言葉を零した者は闇を切り抜いたかのような漆黒のローブを身に纏い、その手には七匹の蛇が絡み合うような形状をした金色の杖が握られていた。

蛇たちはそれぞれが違う色の宝玉を啜えており、杖全体からは赤黒く悍ましいオーラが漂っている。

杖を掴む手に皮膚はなく、肉もなく純白の骨が露出している。それだけでなく大きく開かれたローブから覗く胸元も肋骨や背骨が露出していて腹部には大きな真紅の宝玉が浮いていた。

フードに包まれた頭部も同じ様子であり、本来そこに収まっているはずの物が存在しない眼窩の奥には吸い込まれるような闇が広がっており、中には瞳らしき赤い光が揺らめいている。

「そうですねー。最後に二人きりってちよつと運命感じちゃいますよね、モモンガさん」

悍ましい骸骨の姿をした男に朗らかに笑いながら返事を返す者もまた異形の者——ではなかった。

フォーマルハウトと呼ばれた玉座の横に立つ男は、少なくとも人間の見た目をしている。

その背格好は中肉中背の青年だ。黒い軍服のような衣服は裾が膝下辺りにまで達しているコート型であり、ゆったりとした形状ながらも機能性と実用性が追及された造りで頑強さも折り紙付きだ。所々には銀色の糸で刺繍が施されており、特に左腕に安全ピンで固定された腕章に施された燃え上がる焔のような紋章は見事と言う他ない。

邪魔にならないようにと適当に短く切られた髪は赤く、血のような真紅の瞳の奥では小さな無数の光の粒子が縦横無尽に動き回っていて上等な宝石よりも輝いて見える。

「ちよつと、変なこと言わないで下さいよ。もしかしてフォーマルハウトさんってそっちの趣味だったんですか？」

「冗談ですよ、冗談」

「……本当ですか？」

骸骨——モモンガは疑うような視線を向けながら、フォーマルハウトから距離を取るように身じろぎした。

「本当ですよ。本当ですから、そんな距離取らないで下さいって」

「だったらいきなり爆弾差し出すような発言はしないで下さいよ……」

呆れた様子のモモンガではあったが、そのやり取り自体は嫌いではなかった。

こういつた馬鹿なやりとりは二人の間では長く続けられており、もはや定番と言えるものだ。だからモモンガもそれが冗談だと分かっていたし、フォーマルハウトもモモンガがそういう反応をしてくれると期待してのやり取りだった。

「で、モモンガさん。ユグドラシルが終わったら次はどんなゲームやるか決めてたりしますか？」

「いやー、全然決めてないですね」

DMMO—RPGユグドラシル。

二一二六年に満を持してサービスが開始された体感型MMORPGだ。

ユグドラシルの売りは他を圧倒するほどの異様な自由度であり、プレイヤーは人間種や亜人種どころかスライムやゴレムなどの異形

種すらアバターとして選ぶことが出来る。その数は七百種類にも上り、さらに別売りのクリエイトツールを使用すれば外見を自由に変更することも出来る。

凄まじいのは種族だけでなく、職業に至っては基本職と上級職を合わせれば二千種類を超え、魔法は六千種類にも及ぶ。

意図的に同じ組み合わせにしない限り同じキャラクターを作ることは不可能なほどだ。

もちろんその自由さはキャラクターメイキングのみに留まらず、クリエイトツールを用いればアイテムの外装や内包データなどでさえも弄ることが出来る。

こういった高すぎる自由度によってユグドラシルは瞬く間に大ヒットゲームとしての地位を確立した。

しかし、どんな物にも終わりはあるものだ。

隆盛を誇ったユグドラシルもサービス開始から十二年が経過し、人口減少やそれに伴う収益の悪化、他タイトルの台頭など様々な要因が重なった結果、サービス終了という憂き目を見ることになる。

「俺も決めてないんですよねえ。まあ、何か面白そうなゲーム見つけたら連絡下さいよ。また一緒に遊びましょう」

「……ええ、そうですね。フォーマルハウトさんも何かやるなら連絡下さいよ?」

「そりや当然ですよ。嫌だつて言ってもスパムメール並みに連絡しますから覚悟して下さいよ」

そう答え、フォーマルハウトは自らの記憶に刻み付けるように目の前の空間を眺める。

ユグドラシル全土を見渡しても、これだけ造り込まれたギルド拠点は他に存在しないだろう。

ユグドラシルでも悪名高きギルド、アインズ・ウール・ゴウン。

異形種のアバターを持つ社会人プレイヤーのみで構成されたこのギルドはDQNギルドとしてユグドラシル全土に名を馳せ、最盛期では所属メンバーがたった四十一人しかいないにも関わらずギルドランキング九位にまで上り詰めたほどだった。

そのアインズ・ウール・ゴウンの輝かしき偉業の一つが、今フォーマルハウトたちが居るナザリック地下大墳墓だ。

アインズ・ウール・ゴウンは元々ユグドラシルにある一つのダンジョンとして存在していたナザリックを初見で攻略し、ギルドメンバーの面々が己の持てる技術と想像力、そして課金力によって魔改造を施した。

その結果、全部で六階層しかなかったものが今では全十階層へと拡張され、数多のモンスターとNPC、性根の捻じ曲がったトラップの数々が設置された難攻不落の要塞へと変貌した。

かつてアインズ・ウール・ゴウンの悪行に憤慨した他プレイヤーたちが結成した千五百人からなる討伐隊を、たった四十一人で文字通り全滅させた伝説からもその魔改造度合いが知れることだろう。

そんな誇らしい思い出の場所も、あと数分で消え去ってしまうのだ。

「懐かしいな、色んな馬鹿やったなあ……」

浮かんでは消えてゆく思い出に浸りながら、フォーマルハウトは感慨深く呟く。

かつて四十一人居たギルドメンバーも、時の流れと共に次々とユグドラシルから去っていった。

エロゲイイズマイライフを豪語したバードマン。悪という言葉に拘った大悪魔。正義を体現するギルド内最強の聖騎士。動き回るピンの肉棒。

どれも愉快で、気の置けない仲間たちだった。

しかしユグドラシル最後の日である今日、最後まで残っていたのはギルドマスターたる死の支配者モモンガとPK中毒プレイヤーフォーマルハウトの二人だけ。

二人で毎日のように金策に勤しみ、ギルドの運営資金を稼いで衰退してゆくアインズ・ウール・ゴウンの維持に奔走してきたのだ。いつか仲間たちが戻ってくることを期待して。

結局その願いは最後まで叶わず仕舞いだったが後悔はない。

あるのは最後の時までナザリック地下大墳墓を残すことが出来た

という達成感と、この場に二人しかいないことの寂しさだけだ。

「そうだ、楽しかったんだ……」

モモンガの小さな呟きが虚空へと消えてゆく。

その言葉はフォーマルハウトの心の内をも表してた。

辛いこともあった。怒ることもあった。しかし、楽しかったのだ。

二人は目を瞑り、思い出の中で終わりを迎える。

そして、その瞬間が訪れた――

第一話 異常事態と嫁

「……ん？」

初めに違和感を覚えたのはモモンガだった。

隣から聞こえた小さな声に反応し、フォーマルハウトは閉じていた目を開いてモモンガへと問い掛ける。

「どうしました？」

「いや……もう、時間ですよね？」

「え？」

そう言われて時間を確認すると、既に終了予定時刻は過ぎていた。

思いつくのはサービス終了時刻の延期か、機材トラブルなどで強制ログアウトが遅れているかなどだ。

そういった告知メールが運営から送られていないか確認するため
にコンソールを開くが――

「あれ、開かん」

「コンソールですか？ こっちもですよ。ログアウトも出来なければ
GMコールも利きません。一体どういうことなのか……」

モモンガの声色には苛立ちが含まれていた。

表情には出さないがフォーマルハウトも同じ気持ちだ。

終わりの瞬間に特大の不具合を発生させて水を差すような不始末
を仕出かすユグドラシル運営に対して、ジリジリと焼けつくような苛
立ちが募る。

「どうかなさいましたか、モモンガ様、フォーマルハウト様？」

聞こえるはずのない声に、二人の苛立ちは霧散する。

それは鈴を転がすような美しい女性の声だったが、アインズ・ウー
ル・ゴウンに所属する三人の女性プレイヤーのどれとも違うものだ。
そもそもこの場にはモモンガとフォーマルハウトの二人しかいない
のだから、第三者の声が聞こえること自体があり得ない。

では誰の声なのか。その謎はすぐに解明された。

「失礼致します。どうかなさいましたか、モモンガ様、フォーマルハウ
ト様？」

声が聞こえた方へと二人が視線を向けると、そこには心配そうな表情を浮かべた女性が立っていた。

艶やかな長い黒髪を持つ女性。優雅な白いドレスを纏う女性らしい豊満な体と傾国の美女と評するに相応しい天上の美貌は異性だけでなく同性をも魅了するだろう。

しかし最も特筆すべきは、その人に非ざる特徴だ。左右の米神からは山羊を思わせる角が前方へと伸びており、腰からは漆黒の翼が生えている。

二人はこの女性を知っていた。だからこそ、硬直し、言葉を失い、動揺する。

「アル……ベド……？」

「はっ！ 守護者統括アルベド、御身の前に」

モモンガの喘ぐような問いにアルベドは跪き、臣下の礼をもって答えた。

それは本来有り得ないことだった。

ユグドラシルではプレイヤーたちが都市や城、ダンジョンなどを制圧してギルドホームとして利用することが出来る。

その際、課金アイテムやクリエイトツールなどを使用してダンジョン内を自由に改装したり、配置するNPCを作成したりする権利を得られるのだ。

そして彼女——アルベドはかつてのギルドメンバー、タブラ・スマラグデイナが心血を注いで創り上げたNPCである。

十ある言葉の影のうち、この場にいるプレイヤーは二人。それ以外の八つの影はNPCたちであり、そのうちの一つが玉座の横で跪き臣下の礼を取るアルベドだ。

彼女は守護者統括という地位を与えられ、玉座の間に正式に配置されたNPCだ。それゆえにこの場にいる違和感はない。

他七人のNPCたちは玉座に配置されていたわけではないが、最後なのだからとモモンガとフォーマルハウトが玉座の間に連れて入った者たちなので、そこには何の不都合も無い。

ではなぜ、二人は今動揺しているのか。

(NPCが……会話を?)

絶句するフォーマルハウトはユグドラシルのNPCに関する仕様を思い返す。

基本的にユグドラシルのNPCたちは会話出来ない。マクロなどの事前設定によって特定条件下に決められた言葉を発することは出来るが、ただそれだけだ。

今日の前で繰り広げられたように、自らの意思で会話などしない。出来ないのだ。

だが、モモンガがアルベドと会話をしている様子を目の前で見せられては受け入れるしかない。

(は? え? いや、待って、何でモモンガさん普通に会話してるの?)

俺がおかしいのか? そんなはず——)

そのあり得ざる状況にフォーマルハウトの混乱は最高潮へと達した。

その瞬間に彼はふと冷静な状態へと立ち返る。

時化で荒れ狂っていた海が急に凪いだように、彼の焦りは急激に沈静化される。

唐突に頭の中がクリアになったような感覚に違和感を覚えながらも、フォーマルハウトは未知の状況に対する答えを模索する。

(考えられるのは……大型アップデート? でもサービス終了の告知は確かにあったわけで……ならサービス終了と同時にアカウントや世界観を引き継いでユグドラシルIIがサービス開始された? いや……あり得ない)

ユグドラシルなどのDMMO—RPGにおいて、相手の同意無しに強制的にゲームへ参加させる行為は営利誘拐と認定される。

ましてログアウトも出来ないともなれば、それは仮想世界への監禁行為ですらある。

果たしてゲームの製作会社や運営会社がそんなリスクを冒すような真似をするだろうか。

答は否だ。

(なら、この状況は何だ? まるでNPCたちが生きているかのよう

に振る舞うこの状況は何だっというんだ？)

横目で様子を窺えば、モモンガが玉座の下に跪く者たちに口頭で命令を下している。

鋭く力強い瞳を持ち、執事服に身を包んだ白髪初老の男性。彼はナザリック地下大墳墓の家令、セバス・チャンだ。

その後ろに乱れぬ見事な整列をして跪いているのは、戦闘メイドプレアデス。それぞれが様々な特徴を持つ六人のメイド達であり、有事の際には戦力として機能する。

セバス以下七名、全員がアルベド同様プレイヤーメイドのNPCだ。

本来NPC達に指示をするにはコンソールなどのシステムを利用するか、事前設定したコマンドを口頭で告げるかの方法を取る必要がある。

これらはいずれにせよ具体的な指示を与えることは出来ず、追従させる、待機、指定ルートの巡回などごく簡単な指示しか出来ない。

だがモモンガがセバスへ下していた命令は、ナザリック地下大墳墓から外に出て、周囲一キロ圏内を偵察、知的生物がいた場合は交渉して連れてこいというものだった。

ユグドラシルでは到底実現不可能な命令にもセバスは二つ返事で了解した。

命令を受けて玉座の間を後にするセバスとプレアデスたちの背中を見送り、再びフォーマルハウトは思考の海に沈んでゆく。

(コマンドを用いない指示を受諾して行動した……自由度が高すぎるな。それに拠点防衛用NPCは拠点であるナザリックから出すことは出来なかったはずだ。どうなるんだ?)

考えつくのはユグドラシルが現実になってしまったという可能性だった。

突拍子もない考えだが既に陥っているこの状況こそが突拍子もない状況であるため、あり得ないと笑って否定するのは躊躇われる。

確証があるわけでは無いが、仮にそうだとしたらこの自分の体こそが現実の体となる。ならば最優先は身を護ることだ。ゲームの時と

同様に蘇生出来るとは限らないのだから。

「フォーマルハウトさん」

「うえい？」

名前を呼ばれたフォーマルハウトが思考の海から脱して周囲へ意識を戻すと、そこにはモモンガしかいなかった。

「あれ、アルベドは？」

「一時間後に第六階層の闘技場に他の階層守護者たちを集めるように指示したので、さつき出ていきましたよ。一応この場にいたNPCたちは忠誠を誓っているようです」

「なるほど……で、どうしましょうか、これ」

「どうしましょうか……」

途方に暮れながら二人は考える。

やがて諦めたようにモモンガが骨だけの頭を振りながら結論を出した。

「とにかく情報が不足しすぎてますから、情報集めからじゃないですか？　ここが現実だと仮定すると、流星に何かの間違いで死んだりすると大分不味いので」

「そう、ですね。流星は我らがアインズ・ウール・ゴウンのギルマス、冷静ですね」

「いや、全然ですよ。アルベドに声かけられた時なんて滅茶苦茶焦ってたんですけど、何か急に冷静さが戻って来たというか、精神が沈静化したと言うか。そのお陰で今も冷静なんです」

「ああ、モモンガさんもですか？　俺も凄く焦ってたんですけど似たような感じで妙に心が落ち着いたんですよ」

フォーマルハウトもその現象には心当たりがあった。

原因まではわからないが、そのお陰でひとまず冷静さを保つことが出来たのだ。

「多分ですけど、精神作用無効の効果じゃないでしょうか？　私の持つスキルにそういう効果のやつがあるので。フォーマルハウトさんの種族も持つてましたよね？　確か……く、クツガーでしたっけ？」

「生ける炎です。何ですか、履いてる靴に何かあったんですか」

アインズ・ウール・ゴウンへ加入条件は社会人であり、アバターが異形種であることが条件だ。それをクリアして加入しているフォーマルハウトもまた、人間のような姿をしているが紛れもない異形種なのだ。

生ける炎はクトゥルフ神話における旧支配者と呼ばれる存在の一つだ。森一つを瞬時に焼き払うほどの炎を操る力を持ち、旧神と呼ばれる地球の古き神々によって封じられた邪神である。

ユグドラシルにおいては精霊エレメンタル系列の隠し種族に当たる炎属性の扱いに特化した種族であり、炎以外の属性攻撃を扱う際に様々なペナルティを受けるが、その代わり自分が与える炎属性ダメージには凄まじいボーナスが発生する。フォーマルハウトはこれに加えて、職業構成も炎属性に特化しているため、炎属性攻撃を用いた際の攻撃能力は全プレイヤーの中でもトップクラスを誇っている。

精霊エレメンタルを始めとする異形種には人間と違い、選択した種族由来のスキルを所有しているものが殆どであり、フォーマルハウトもモモンガ同様に精神作用無効のスキルを所有していた。

「あ、それです、それ。ともかく、そういうパッシブスキルの効果が表れてるんじゃないかなって」

「ああー……なるほど。ということはユグドラシルで使えた魔法やスキルなんかは使えるんでしょうか？　なら仮にNPCたちが敵対しても何とかなると思いますが」

「その辺りも色々試すために、第六階層に向かおうと思います。NPCたちの忠誠もそこで調べようと思つていますが……そちらはどうしますか？」

「ううん……」

フォーマルハウトは小さく唸りながら顎に手を当てて考える。

精神作用無効のスキルが効果を発揮しているなら恐らく魔法や他のスキルも使えるだろう。それが出来るならばアイテムだつて使えるだろうし、現にモモンガが手に持っているギルド武器たるスタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンの赤黒いオーラエフェクトは健在なのだから。付与された機能が働いているのならば、問題なく使え

なくてはおかしな話だ。

そしてモモンガが心配しているNPCの忠誠心に関しても、フォーマルハウトはそれほど心配してはいなかった。

可能性としてNPCたちが敵に回ることを考えていないわけではなかったが、先ほどまでモモンガの命令に対して当然のように従っていたセバスタチを見るに、その可能性は限りなく低いと判断する。(なら……少し気になるやつがいるな)

ある存在を思い浮かべ、フォーマルハウトは胸を躍らせる。

「ちよつと気になる子がいるので、第八階層に行こうかと」

フォーマルハウトの言葉に、モモンガは呆れたような雰囲気——皮膚が無いので表情の変化は無い——を漂わせた。

「だろうとは思ってましたけど、あそこで何かあったら不味くないですか？　ちゃんと考えてます？」

「まあ、あったら不味いんですけど、多分無いと思うので大丈夫です」

「……はあ」

モモンガは額を抑えるようにして天井を仰いだ。

フォーマルハウトは昔からこうなのだ。

多分勝てるので大丈夫。そう言い残して敵対プレイヤーの集団にいの一番に飛び込んで暴れまわる独断専行の常習犯。

考える頭が無いわけではなく、それほど悪いわけでもない。しかし、最終的に考えるのが面倒になって戦ってみてから考えるスタイル。

ギルド内では、とりあえず殴ってから考える脳筋プレイヤーやまいこの教えと魂を体現する者と言われることもあった。

「フォーマルハウトさんはそう言うだろうなって思っていましたよ……」

「流石はギルマス。俺のことわかってるじゃないですか。以心伝心ですわね！」

「嫌な以心伝心ですね……とりあえず、わかりました。ただし少しでも異変があれば撤退して下さい。こちらは闘技場で魔法やアイテムが使えるか、NPCは味方なのかと調べますので、結果が分かれば

＜伝言＞の魔法で連絡します。魔法が使えない場合は用事が済み次第ここで落ち合いますよ」

「ういうい。守護者たちが集まるのは一時間後でしたよね？ たぶんこっちの用事の方が早く終わるんで、終わったらそちらに合流します。万が一の時にモモンガさんだけだと危険かもですから。もし時間近いのに来なそうならそちらから＜伝言＞お願いします」

「はい、お願いします」

了解の言葉を残し、モモンガの姿が掻き消える。

「指輪で転移したのか。アイテムは問題無さそうだな」

装着している真っ白な手袋に覆われた手の右薬指に嵌められた指輪を眺める。

赤色の大きな宝玉がついた綺麗な金色の指輪だ。宝玉の中にはギルド、アインズ・ウール・ゴウンを示す紋章が刻まれている。

リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウン。ギルドメンバー全員に配られたギルド拠点内での転移能力を持つ指輪だ。

ナザリックは外部から内部や階層間の魔法やアイテムなどによる転移を封じられている。階層間の移動は専用に設置された転移門を利用する以外に方法は無い。

しかし広大なナザリックでそれは移動に難がありすぎる。全十階層存在するナザリックで目的の階層まで移動するために、わざわざ用の無い階層を経由しなければならないというのは効率が悪すぎた。

そこで利用されるのがこの指輪だ。この指輪の効果はナザリック全体に展開された転移障害を無視した転移が可能となるのだ。好きなタイミングで好きな階層へと転移することが出来る便利アイテムだ。

「おっ？」

フォーマルハウトの頭の中で電子音が鳴り、同時に聞き慣れた声が脳内に響く。

《フォーマルハウトさんですか？ モモンガです》

「はいはい、フォーマルハウトです。聞こえますよ、モモンガさん。アイテムも魔法も大丈夫そうですね」

声の主はその場に居ないはずのモモンガだ。
モモンガが使ったのはくメッセージ伝言の魔法だ。

遠く離れた場所にいる者にも自分の声を届けることが出来る情報系魔法の一つで、便利な連絡手段の一つとして利用されている。

《ええ、でも攻撃系の魔法はまだなのでそちらもこれから試してみます。では》

「うい」

短く返事を返すと、プツンと通信が終了する。

「さて……」

天井——目的地である第八階層があるであろう方向を見つめて決心する。

「行くか！」



身を隠せるような大きな岩も存在せず、罅割れた大地に今にも折れてしまいそうな枯れ果てた細い木がまばらに生えているだけの世界。

生命の息吹が全く感じられないこの場所こそが、ナザリック地下大墳墓第八階層、荒野だ。

「さて、来たわけだけど……」

まずは周囲を見渡す。

ここはかつて千五百人のプレイヤーをたった四十一人で撃退したという伝説を生み出した戦いにおける最後の決戦場だ。

様々なNPCやモンスター、そしてトラップが配置された第一から第七階層全てを突破してここまで辿り着いたプレイヤーは千人とも千二百人とも言われており、どうやっても四十一人で返り討ちに出る数ではない。

しかし、この階層での戦いはそれを可能にした。

その時の様子を見たプレイヤーたちからはチート扱いされ、運営への問い合わせが殺到するほどの戦いが行われたのがここなのだ。

ゆえにフォーマルハウトは警戒する。

大丈夫だと高を括つてはいたが、実際問題ここに配置されているものの内の一つでも敵対状態となっていた場合は撤退するしかないなる。

万が一不意打ちでもされようものならば、そのまま即死まであり得るのだから。

ここにはそれだけのものら……ナザリック地下大墳墓における最強の存在たちが配置されている。

「ひとにゆうはくあおみどり
アオクリアオムラサキハクジ
アオミドリシンシヤクワヅメ
にあおむらさき。くりみずあさぎにだいだい あおうのはなたまご
ひとにひあおむらさきたいしや」

唐突に聞こえて来た無意味な音の羅列に、フォーマルハウトはびくりと身を震わせた。

しかし、フォーマルハウトはその音の羅列を意味のある言葉であり、声であると認識する。述べられた言葉の内容は敵意を示さず、敬意すら感じられる挨拶だった。

声の主を確認しようと振り返ったフォーマルハウトが見たのは、空中に浮かぶピンク色の肉塊だ。

体長一メートルほどで毛も皮膚もないつるんとした胚子の姿。によりりと尻尾が生えた体はやけに明るいピンク色をしており、頭の上には天使の輪っかが浮いている。背中からはとても飛べそうになり枯れた木の枝のような翼が生えており、羽ばたくでもなく空中に浮いている。

(どうする、何て返事をすればいいんだ？ モモンガさんはアルベドとどんな風に話してた？ 確か——ああ、沈静化した。もういいや普通に話せば。たぶん大丈夫だろ)

焦りながら考え始めて数秒で沈静化され、急激に思考が普段の樂觀的なものへと立ち戻る。これによってフォーマルハウトは真剣に考える必要性が感じられなくなり、考えることが面倒になった。

必要に迫られなければ考えない。必要でないのならば自然体で居る。それがフォーマルハウトという男だった。

「ヴィクティムか？ 久しぶりだな」

「あおみどりひ、

アオクリアオムラサキハクジ

アオミドリシンシャクワヅメ

にあおむらさき。

ねりこくたんしんしゃあおみどり くわぞめしんしゃにゆうはく
あおむらさきだいたいやまぶきぞうげ？」

「ああ、あの子に会いに来たんだが……何も異常は無かったか？」

聞きながらフォーマルハウトは心の中で首を傾げた。

聞こえてくる言葉の内容とヴィクティムから発せられる音が剥離しているような感覚がするのだ。

しかし結局考えるのを諦めた。

難しいことを考えるのは自分の領分ではないし、今は必要ない。そう言わんばかりに考えることを放棄して、とりあえずそういうものなんだと受け入れることにする。

「あおみどりひ、

くわぞめはだもえぎ

ひだいだいこくたんしんしゃあおみどり

ひとにひあおむらさきちはい」

「そうか、ならいいんだ。念のため第八階層の巡回にあらとルベド

に問題が無いか確認してくれるか？」

「ぞうげだいたいひとあおむらさきうのはな

あおむらさきだいたいやまぶき、

アオクリアオムラサキハクジ

アオミドリシンシャクワヅメにあおむらさき」

「俺はあの子のところにいるから、＜伝言＞でも直接でも構わないから確認が終わったら結果を教えてください」

「あおみどりひ。だいたいぞうげだいたい、きみどりもえぎぞうげ
ぼたんおうどやまぶきときわたまごたいしやぞうげ？」

ヴィクティムの質問には流石に悩んだ。

素直に答えて良いものか。

これまで見たNPCたちは、今発生している異常事態をNPCたちは認識していないような反応をしている。

もし異常事態——自らが意思を持ち、自分で考え行動する力と権利を手に入れたと知ったらどうなるだろうか。

自由を求めて突然牙を剥いてくるのではないだろうか。先ほどは低いと考えて切り捨てていた可能性が、フォーマルハウトの脳裏を過ぎる。

「ん？ ちょっと待ってくれ」

脳裏に響いた電子音によって考えが遮断される。

「モモンガさんですか？」

《はい、攻撃魔法もアイテムも問題なく使えました。それと、メッセージ〈がセバスに繋がったのでNPCとも連絡が取れるみたいですね。あとこれが一番重要なんですけど……フレンドリィ・ファイアが解禁されているようです》

「は？ マジですか？」

モモンガの言葉が信じられずに思わず聞き返す。

ユグドラシルでは同じパーティーやギルドに所属する者同士で攻撃が通らないように設定されていた。

広範囲に対する攻撃魔法や状態異常付与などが飛び交う以上当たり前ではあるのだが、今はそれを抑制するためのシステムが存在しない。

仮に範囲内に即死効果を与える魔法を放てば、範囲内にいる味方も纏めて即死させてしまうことになるのだ。

《現状では攻撃する時に気を付けるしかないですね。そちらはどうですか？》

「今ヴィクティムと話していました。ヴィクティムが言うには第八階層に異常は発生していないらしいですけど、一応階層内の巡回とあれらとルベドの確認を頼みました」

《わかりました。では第八階層のことは任せてもいいですか？》

「了解です。ふう」

その言葉を最後に通信を終えて一息つくくと、ヴィクティムが心配そうに様子を窺っていた。

尤も、この胚子には表情というものが存在しないのでそういう雰囲気感を漂わせているというだけではあるが。

「ああ、ヴィクティム。今は結構深刻な状況なんだ」

「こげちやしんしやきみどりときわ たまごたいしやぞうげ！
うすいろだいだいくろ だいだいはいもえぎぬればしんしや
だいだいくろぞうげ？」

「いや、そういうのじゃないんだが……まだ俺もモモンガさんも詳しくは分からないんだ。だから巡回と確認の方は頼む。何か少しでも異常があればすぐに知らせて欲しい」

「ぞうげだいたいひとあおむらさきうのはな

あおむらさきだいたいやまぶき。

こげちやにゆうはくたまごあおみどり、だいだいおうどにゆうはくひ
ひやまぶきだいたいあおむらさきたいしや、

アオクリアオムラサキハクジ

アオミドリシンシヤクワゾメ

にあおむらさき」

そう言い残してヴィクティムはふよふよとゆつくりとした速度で
——フォーマルハウトの徒歩よりも遅い速度で去って行く。

（あれじゃ俺が見た方が早いんじゃないか……？ いや、とりあえず
目的を果たしてから色々考えよう）

フォーマルハウトは意識を切り替えて、目的地へと歩く。

ナザリック地下大墳墓は全部で十ある階層ごとに区切られている。

そして、その階層ごとに特別な領域が存在する。

例えば第二階層の黒棺^{ブラック・カフセル}。第五階層の氷結牢獄。

そして今向かっている場所もまた、これらに連なる特別な領域のうちの一つ、ナザリック地下大墳墓第八階層、虚無の湖岸。

そこはフォーマルハウトが創り上げた特殊領域であり、彼があの子と称する者が守護する領域だ。

（ああ、緊張するな）

目的地に近付くにつれて、胸が締め付けられるような感覚に襲われる。

魔法で飛ぶなりして一気に移動すればいいのだが、この湧き上がる緊張感がそれを許さない。

ユグドラシルでその領域とあの子を創り上げた時からそうであった。

訪れる度に緊張し、去る時には後ろ髪を引かれる思いをする。フォーマルハウトにとつて虚無の湖岸とはそんな場所だ。

やがて遠くに見える嘘のような光景に安堵する。

(よかった、とりあえず見た目の変化は無いみたいだ)

そこはこの荒野の只中であつて、別世界のような光景をしていた。まずこれまでは灰や茶が主であつたにも関わらず、スポットライトに照らされているかのように上空から柔らかな光が降り注ぐその領域は鮮やかな色合いをしていた。

緑、赤、白、橙、桃、黄、青、紫……それ以外にも無数の色を持つ様々な植物たちが群生している。

それは花だ。

色彩豊かな花畑。それは荒野のど真ん中に広がっている。ある場所を境にそれまで踏み締めていた罅割れた大地が、突然花畑へと変わるのだ。

次に目を引くのは湖だった。

池と称する方が正しいと言えるかもしれない小さな湖だったが、湖面は凜ぎ、水は美しく透き通っている。

そして最後に小屋だ。

小さな湖の湖岸には、花畑に囲まれた小さな小屋が建っていた。

森の奥に棲む妖精たちが住んでいそうな、お伽噺にでも登場しそうな雰囲気漂わせる二階建ての木造建築。都会の喧騒に疲れた者が見れば間違ひなく憧れるだろう、そんな癒しを思わせる小屋。

「……ああ、こんな家に憧れてたんだよなあ。第九階層の豪華絢爛つて感じもいいんだけど、こういう感じも捨てがたい」

立ち止まっていた足を動かして小屋のドアの前に立つ。

フォーマルハウトはもうこれ以上ないほどに緊張していた。

「……はあ……行くぞ」

ドアノブに手をかけたまま一息、気合を入れてドアを開く。

小屋の中は何の変哲もない普通の小屋だ。

豪華な装飾が施された煌びやかなものでもなく、玉座の間のように荘厳な雰囲気を醸すものでもない。

入口には使い古された小さな絨毯が敷かれ、すぐ目の前には二階へと続く階段があった。階段を上らずに左へ進むとリビングだ。入って右側の壁には暖炉が付けられており、中央には木を削って作ったと思われる少し歪な木製の四角いテーブルと椅子が四つ、テーブルを挟むように二つずつ向かい合って置かれている。

正面奥には十分な広さを持つキッチンスペースが広がり、そこではお湯が沸かされていた。

その光景に懐かしさを覚え、フォーマルハウトは立ち尽くしていた。

キィ……と軋むような音が静かに響き、階段の下に繋がるような位置に付けられていた扉がゆっくりと開くと、小さな影が姿を現した。

「……」
ここでフォーマルハウトの緊張は最高潮となり、すぐさま沈静化される。

それでも胸を締め付けられるような小さな緊張を感じ、極めて大きく感情が動いた時にしか沈静化が発生しないことを知った。

新たな発見ではあったが、目の前に現れた存在を見て、そんな些末なことは遥か彼方へと吹き飛んだ。

（ああ、やっぱり綺麗だ。こいつが動いているところを見れるなんて……）

現れたのは、黒くみすぼらしいマントに身を包む、柔らかな微笑みを浮かべた小さな白い肌の少女だった。

床に着くほど長く艶やかで、窓から入る光を反射して煌めく金髪。神が手ずから造形したとしか思えないような美貌。

柔らかな視線を生み出す瞳は左右で色が違うオッドアイだ。左の瞳は美しい宝石をそのまま嵌め込んだかのようなサファイアブルー。右は本来白いはずの眼球が漆黒の闇色をしており、瞳は黄金。アンバランスで非現実的な左右の瞳は神々しさと悍ましきという相反した二つの雰囲気と同時に醸し出す。

裾がボロボロに解れた美貌に不釣り合いな黒いマントから覗く足は裸足で何も履いておらず、右足首には黒と紫の中間色をした水晶の

帯が捻じれ合って一つの輪となったような奇妙な形状をした足輪が着けられている。

「……フェニア、だよな？」

喘ぐように、しかし確信を持ってフォーマルハウトは目の前に立つ少女の呼び名を紡ぐ。

そんなフォーマルハウトが滑稽に映ったのか、少女は微笑みを深くする。

「他に誰がいる？ そうだ。私だよ、フォーマルハウト。お前のヴェルフエニア・セレンルーナだ」

ヴェルフエニアは嬉しそうにそう答え、ふわりとフォーマルハウトの胸に飛び込んだ。

突然のことにバランスを崩しそうになりながら受け止めたフォーマルハウトは、腕の中にいる少女の体温と甘い香りに思わず理性を失いかける。

比類ない美貌を持つ少女にこうして抱き着かれれば、男ならば誰でもそうなるだろう。

(うおおおおっ！ 小さい！ 柔らかい！ 温かい！ 良い匂い！
ああ、待て、すりすりしないでくれ！)

心の中で悶えながらも鋼の精神でそれを表に出さないように必死に我慢し続ける。

沈静化が発生するも、首にぶら下がるように抱き着くヴェルフエニアの体温と匂いに再び興奮が湧き上がる。

十数秒の間に都合十回の沈静化が発生し、十一回目の沈静化の発動と共にようやく慣れたのか、何とか沈静化が発動しない程度には冷静さを取り戻した。

「あ、あの、フェニア？」

「うん？ どうした？」

胸元に顔を擦りつけていたヴェルフエニアが顔を上げると、それまで角度的にフォーマルハウトからは見えなかった部分が見えるようになる。

それはヴェルフエニアの胸元だ。

天上の美を持つ少女の胸元。視線が向かないわけも無い。
そしてフォーマルハウトは絶句する。

「……」

「？ なんだ？」

ヴェルフエニアが纏ったマントから覗く面積は決して広くは無かった。広くは無かったが、そのマントの下がどのような状態なのかを把握するには十分な面積だった。

「なんで……服を着てないんだ？」

沈静化が起こる間もなく一瞬で興奮が振り切れて逆に冷静になったフォーマルハウトは固い声で問い掛けた。

ヴェルフエニアが纏う漆黒のマントは、彼女が腕をフォーマルハウトの首へと伸ばしているために大きく前面が開けた状態になっていた。

そこから見えるのは白い肌だ。

陶磁器のように肌理細やかな肌は雪よりも白く、白より白い。これを純白と呼ぶなければ何と呼べばよいのかわからない、シミ一つ無い神聖さすら感じさせる肌。

マントが開けて露わになった体軀は病的なまでの瘦身で、腕も脚も不用意に触れば砕け散ってしまいそうなくらい華奢だ。

その身に女性らしい膨らみは皆無であるが、ヴェルフエニアは恥じらう様子も無く全てをフォーマルハウトの前へと曝け出していた。

「なぜ、とは？ お前がそういう風に私を創造したのだろうか」

当然のことのように告げられたフォーマルハウトは、止まっていた思考を動かして、自らが生み出した目の前の少女のことを思い出す。

ナザリック地下大墳墓第八階層、虚無の湖岸の領域を守護する者——領域守護者たるヴェルフエニア・セレンルーナは、フォーマルハウトが創り出したNPCだ。

ナザリック地下大墳墓を制圧し、それぞれで改造を施す際に全てのギルドメンバーがNPCを作成する権利を手にした。

拠点ごとに存在する作成可能NPCのレベル合計値上限という制限があったため、全員が最高レベルである百レベルNPCを作れたわ

けでは無かったが、フォーマルハウトは百レベルNPCを生み出す権利を手に入れることが出来た。ギルドメンバーに土下座までして拝み倒して、第八階層の一角を自由に改造する権利と一緒に。

その日からフォーマルハウトは没頭したのだ。

彼女と、この領域を生み出すことに。

ヴェルフニア・セレンルーナはフォーマルハウトの理想だ。好みの容姿や性癖と、膨大な課金と、己の持つ想像力（妄想力）と、技術と、労力を詰め込んで生み出した最高傑作。

その中でも特に苦労したのが性癖の一つであるこの裸マントだ。

十八禁どころか十五歳制限に引っかけられるだけでもBANが危ういユグドラシルにおいて、このNPCの存在は運営に喧嘩を売っていると思われても可笑しくない。

だが、どこまで出来るかという挑戦心と理想を表現するのならば妥協を許さないという気迫が彼を動かした。

膨大な量の利用規約を三度読み返し、出来上がった外装データを運営へと送って使用して問題無いかの確認を取っては調整する毎日。

その末にこうして裸マントの美少女が出来上がったのだ。

詰まるところ、マントの下が全裸である理由はフォーマルハウト自身にあった。

「……ああ、うん。そうだったな」

そんな苦難を乗り越えて創り出したヴェルフニアだったが、この設定までは流石に忘れていた。

彼女を創って数年経つが、内部パラメータの調整や戦闘時AI、あるいはフレイバーテキスト上の設定変更などは行つたが、見た目だけは弄つたことがなかった。

さらにユグドラシルではどう足掻いてもマントの下は見れないのだ。

例え心血を注いで作成した外装データであっても、マントの下に広がる楽園を覗き込むことは出来ない。

やがてその部分には興味を向けることが無くなり、いつしか全裸であるという設定すらも忘却してしまった。

「ふふ、おかしな男だ」

再び気持ち良さそうに顔を擦りつけるヴェルフエニアの頭を撫でながら、遠い目をして懐かしさに浸りつつ設定を一つずつ思い出してゆく。

そうして思い至った。思い至ってしまった。

彼女に施した設定の中で、最も最初に設定した言葉を。

「……なあ、フェニア。お前は俺の何だ？」

恐る恐るといった感じの問い掛けに、ヴェルフエニアはゆっくりと顔を上げ、微笑みを浮かべながらフォーマルハウトを見つめて口を開く。

「先ほどからおかしなことを聞くな？　しかし、答えよう。私はお前の嫁だ」

心の中でフォーマルハウトは羞恥に染まる。

ユグドラシルでフォーマルハウトがヴェルフエニアを作成する時、フォーマルハウトは決して妥協を許さなかった。

その理由は、自分の理想を詰め込んだ嫁を創造しようと考えていたためだ。

現実の女との関わり合いが少なすぎた結果、フォーマルハウトは色々と拗らせてしまったのだ。

そして加入したアインズ・ウール・ゴウンにてエロゲイイズマイライフを豪語するギルドメンバー、ペロロンチーノと出会い、二次元の世界にどっぷりとハマり込んでしまった。

元々ライトノベルやゲームの世界へと強い憧れを抱いていたこともあって、自分の理想を表現する権利を手に入れたフォーマルハウトはこれでもかと言うほどヴェルフエニアの作成に心血を注いだ。

そうして生まれたNPC、ヴェルフエニア・セレンルーナの設定に躊躇無く『フォーマルハウトの嫁』と書き込んだのだ。

（後悔は無い。こんなに可愛いんだから。後悔は無いんだが……）

自分の趣味嗜好のストライクゾーンと真ん中のヴェルフエニアだ。愛し合うことに不服も後悔もあろうはずが無く、むしろそうならいいなと心のどこかでずっと思っていた。

しかし、だ。

(これがモモンガさんに知られたら流石に恥ずかしいなあ……)

フォーマルハウトは過去に俺の嫁ですとギルド内で幾度も公言していたので、ヴェルフエニアのことをとても気に入っているというのはモモンガも承知している。

だがまさか設定にまでそう書き込んでいるとは思えない。

「ふふ、さて。質問は終わりか？　ではお茶にしよう」

「あ、ああ、そうだな。頼むよ」

ヴェルフエニアはぴよんと少し跳ねるようにフォーマルハウトから離れ、マントを翻してキッチンへと向かう。

その後ろ姿を見ながら、これもそういう設定だったな、とフォーマルハウトは思い出す。

フォーマルハウトが虚無の湖岸を訪れたらお湯を沸かし、二人で紅茶を楽しむ。フォーマルハウトが施したその設定はユグドラシルにおいては何の意味も持たないフレーバーテキストであったが、今はどうやら違うらしい。

(しかし、出来るのか?)

ユグドラシルはゲームだ。

プレイヤーが何か行動を起こすにはそれに応じたスキルを取得していない限り、その行動が成功することはなかった。

料理スキルを持っていないプレイヤーが料理することは出来ないし、ポーション作成スキルを持っていないプレイヤーがポーション作成することは出来ない。

ユグドラシルの魔法やアイテム、NPCの設定が有効である以上、デメリットや制限も有効であると考えるのが当然だ。

そしてヴェルフエニアは紅茶を淹れるために必要な料理スキルを所持していない。フレーバーテキストには『料理は出来ないが紅茶を淹れる腕は一級品』と書き込んだが、どうなるのかはフォーマルハウトにはさっぱり見当が付かなかった。

(爆発とかしないよな?)

結局のところ、そんなフォーマルハウトの心配は杞憂に終わった。

少ししてキッチンスペースから戻って来たヴェルフエニアが持つトレイの上にはティーポットが一つとティーカップは二つ、きちんと乗っていた。

紅茶の知識が無いフォーマルハウトにはきちんと淹れられているのかわからないが、ティーポットから注がれた紅茶も見た目は美しく、香り豊かでもあった。

「紅茶のことは詳しくないが、良い香りだ」

「香りだけではなく味も良いぞ」

促されるように紅茶を口に含むと、芳醇な香りが鼻腔を通り抜ける。舌の上で踊る紅茶の美味しさを正しく表現する言葉をフォーマルハウトは持っていなかった。

ただ、言葉に出来ないほどの美味しさに思わず瞳が潤む。

深刻な環境汚染によって荒れに荒れた現実では紅茶など一般庶民であるフォーマルハウトでは殆ど口に出ることが出来ないほどの高級品だ。

口に出来る食料と言えば専ら合成食糧やサプリメントであり、それらは言うまでも無く味など二の次で最低限の栄養素を摂取するための物だ。

生まれてこの方初めて口にした『食料』の素晴らしさに、フォーマルハウトの体は喜びに打ち震える。

「ところで、第八階層に来るのは随分と久しぶりではないか？ 何かあったのか？」

「ああー……」

ヴェルフエニアを作成した当初、フォーマルハウトは毎日のようにこの場所へ来て至福の時を過ごしていた。時にはギルドメンバーを連れて自らの嫁のお披露目会を行うこともあった。

今のように紅茶を飲んでいたわけでも何をするわけでもなく、ただ椅子に座っているヴェルフエニアを眺めたり、追従させて共に花畑を散歩したりしていただけなのだが、現実で荒んだ心を癒すにはそれだけで十分だったのだ。

だがギルドメンバーが次々とこの地を去り、そうしてのんびりと過

ごしているわけにはいかなかった。

ギルド維持のための運営資金を稼ぐために残ったメンバーたちと金策に勤しむ間、当然この場所へ来ることは出来ない。

徐々にギルドメンバーたちも減っていき、それに比例するように自然と足は遠のいてゆく。

やがてログインするメンバーがモモンガと自分だけとなり、フォーマルハウトはログインした時間の殆どをモモンガと共に金策に費やさなければならなくなったのだ。

そこまで来るともはや顔を見に来るだけの余裕も無く、この場所へ来たのは本当に久しぶりのことなのだ。

ギルドメンバーたちがこの地を去り、ギルド維持のために狩場をモモンガと共に駆け回る日々を語ると、ヴェルフエニアは悲しそうな表情を浮かべた。

「そう……か。あれらはこの地を去ってしまったのか……」

「ああ、だからしばらく来られなくて悪かった。許してくれ」

「許すも何もない。お前たちがいなければこのナザリックは今頃崩壊していただろう。むしろ、他の者らが去った後もこの地に残ってくれた礼を言わなければならぬ。私たちが捨てないでくれて、感謝する」

ヴェルフエニアは心の底から感謝を告げる。

次々と創造主たちがこの地を去って行く中で、この地とこの地に住まう者たちを守るために奔走した自らの創造主には感謝の言葉しかない。

もしも他のNPCたちが同じ言葉を聞いていたとしたら、感涙に咽び泣き、跪いて礼を述べていただろう。

フォーマルハウトに対等であれと創造されたためにそのような振る舞いは決してしないが、心の中ではヴェルフエニアも同様であった。

そしてヴェルフエニアは改めて誓う。

この創造主に生涯仕えようと。隣に立ち、いつまでも共にあろうと。

「ん？ ヴイクタイムか？」

《あおみどりひ、

アオクリアオムラサキハクジ

アオミドリシンシヤクワヅメ

にあおむらさき。

だいたいぬればはいぞうげひぞうげ

くりそしよくうのはな

あおむらさきだいたいやまぶきときわたまご

にゆうはくはいしろはだにちやたまご ひやまぶきやまぶきねり

あおむらさきだいたいしいしや》

電子音が響き、次いでヴィクタイム独特の意味を持つ奇妙な音の羅列が頭の中に流れる。

「それで、どうだった？」

《あおみどりひ、 くらあおみどりうのはな くらぞめはだもえぎ

ひだいだいこくたんしんしやあおみどり

ひとにひあおむらさきちはいたまごだいたいやまぶき》

「そうか、異常は無いか。それならいいんだ、ご苦労だったな。生命樹

に戻って休むといい」

《うすいろおうどやまぶきひきみどりひ

くりひとくわぞめあおみどり。

こげちやにゆうはくたまごあおみどり、だいたいおうどにゆうはくひ

ひやまぶきだいたいあおむらさきたいしや、

アオクリアオムラサキハクジ アオミドリシンシヤクワヅメ

にあおむらさき》

「ああ」

妙に聞き取り辛いがなぜか意味ははつきりと理解出来る言語に内心首を傾げつつ、ヴィクタイムとの＜伝言＞を終了する。

ともあれこれで当面の危機は去ったと言えるだろう。

第八階層に異常が無いのならば、あとは配置したあれらを起動出来るかどうか確認すればひとまずナザリック内での安全は保たれる。

（仮に他のNPCたち全員が敵対しても、ヴェルフニアとヴィクタイムに加えてルベドだけでも起動出来るならそれだけで簡単に殲滅出来るしなあ）

ナザリックにおける最強の存在の一つ、ルベド。

それはナザリック地下大墳墓における最強の個であり、タブラ・スマラグディナの手で通常とは違う方法によって生み出されたNPCだ。

近接戦闘において右に出る者はおらず、公式チート職業と揶揄されるワールドチャンピオンでありアインズ・ウール・ゴウン最強と言われたギルドメンバーのたっち・みーですらも勝つことは出来ない。

そこに自らの最高傑作である百レベルNPCヴェルフエニアと強力なスキルを保有するヴィクティム、モモンガとフォーマルハウトが加われれば、問題無く敵対者を殲滅出来るだろう。

勿論フォーマルハウトもそんな未来が来ないことを祈ってはいるが、ナザリックを半壊させてでも生き残らなければならぬ。

フォーマルハウトの眉間に皺が寄り、自然とその表情が険しいものとなる。

「何だ、どうかしたのか？」

訝し気な表情を浮かべたヴェルフエニアに問い掛けられて、慌てて不穏な考えを頭の片隅へと追いやる。

「あ、ああ、話してなかったけど、ちよつと異常があつてな。何か異変とかを感じなかったか？」

「ふむ……」

ヴェルフエニアは考え込める素振りを見せたが、心当たりが無かつたのか首を振った。

「いや、私は特に何も感じてはいないな」

「そうか。とりあえずモモンガさんに連絡するからちよつと待ってくれ」

ヴェルフエニアが頷いたのを確認して魔法を発動させようとする。しかし、ここでフォーマルハウトは異変が起きてからまだ魔法を使つたことがないことに気付いた。

モモンガから魔法を問題無く行使出来るという報告を聞いて自分も使える気になっていたが、これで自分は魔法が使えなかったらどうしようという漠然とした不安が募る。

しかし、その直後にフォーマルハウトが感じていた不安は霧散し

た。

分かるのだ。まるでそれが当然のことであるかのように魔法の発動方法や自らが保有するMPの量までもが。

「〈伝言〉……モモンガさんですか？」

魔法は無事に発動した。

何かが繋がるような感覚と共に短い電子音が鳴り、モモンガと通話が繋がる。

《ああフォーマルハウトさん、ちょうど良かった》

「ちょうど良かった？」

《そろそろ時間なので連絡しようと思ってたんです。合流してもらえませんか？》

「えっ、もうそんな時間でした？ わかりました、すぐ向かいます。あとフェニアも連れて行っていいですか？」

そうフォーマルハウトが告げた瞬間、ヴェルフニアの目が驚きに見開かれた。

《構いませんよ。第八階層に問題は無かったですよね？》

「はい。ヴィクタイムも巡回して特に異常はなかったと言っていました。それと、二人とも何も異常は感じなかったそうですよ」

《そうですか……まあ第八階層に問題が無いつてことがわかっただけマシですね。予断を許さない状況ではありますが、とりあえず合流しましょう。待ってます》

「ういういー」

「おい」

モモンガとの通信を終えたフォーマルハウトを見ると、妙にソワソワした様子のヴェルフニアが期待のこもった視線を向けていた。

「私も行っていいのかわかる？」

「ああ、構わないだろう？ 嫌ならいいけど……」

「そうではない。愛する旦那と一緒に居られるのだから嫌なわけがない。しかし、この領域の守護はどうする？ 私は領域守護者。この地を守護する者だ」

バカップルや新婚が口にするような甘い言葉に、フォーマルハウト

は頬を染めて胸を高鳴らせる。

一方でヴェルフェニアは砂糖をぶちまけたような甘い言葉を吐いたとは思えぬほど大真面目な顔をしていた。

これは全裸マントであっても平然としているというキャラクター設定への理由付けとして羞恥心が皆無だとフォーマルハウト自身が設定したことも関係しているが、それ以上に心の底からそう思っているからだ。そんな設定にしたことを完全に忘れていたフォーマルハウトは自分がおかしいのかと羞恥と嬉しさに悶えながら錯覚し、沈静化を受ける。

もはやこの領域に来てからフォーマルハウトが受けた沈静化の回数は二十を超えようとしていた。

「まあ、モモンガさんもいって言ってたし大丈夫だろ、たぶん。それに守護しなければならぬような敵が侵入してる状況でも無いしな」
「ふむ……まあ、お前がそう言うならば構わないが」

そう言って立ち上がったヴェルフェニアはぺたぺたと裸足特有の足音をたてながら、フォーマルハウトの隣に立った。

そして徐にフォーマルハウトの腕を取り、抱き締める。

「フェ、フェニア？」

「何だ、恥ずかしいのか？ ふふ、私の旦那は初心なのだな」

「……このままいくつもりなのか？」

「当然だ。お前の指輪と一緒に転移するには触れていなければならぬいんだからな。さあ、さっさと行くぞ。余りモモンガや階層守護者たちを待たせては申し訳ない」

男として間違いなく嬉しい状況なのだが、この光景をモモンガが見たら何と云うだろうか。遠い目をしながらそんなことを考えていた。

腕に伝わる瘦身ながらもしつかりと女性らしい柔らかさを持つヴェルフェニアの体の感触は素晴らしいの一言に尽きるものであり、現実でそんな機会がなかったフォーマルハウトにとってはずっと堪能していたものであった。

しかし、余り時間もないようだし、モモンガを待たせるわけにもいかない。

ヴェルフエニアのスキンシップにも慣れて来たフォーマルハウトは落ち着いたら存分にイチヤイチヤしようと密かに決意し、指輪を起動した。

第二話 忠誠の儀

ナザリツク地下大墳墓第六層はジャングルだ。

巨大樹と呼べるような木々や幾種類もの草花が生い茂る広大な森には高レベルの昆虫や魔獣たちが無数に配置されており、踏み込んだ哀れな侵入者を食い殺す。

森以外にも湖やいくつかの建築物などが配置されており、第六階層は他の階層よりも多様性に富む自然的な階層と言えるだろう。

ヴェルフエニアを腕にしがみつけたままフォーマルハウトが降り立ったのは、第六階層にいくつか存在する建築物の一つ、アンフイテートルム円形劇場だ。

中世ローマのコロッセオを参考に作られたそこは巨大な円形闘技場であり、無数のゴーレム達が居並ぶ観客席に囲まれた処刑場。

上を見上げればそこに天井は無く、地下であるにも関わらず無数の星々が煌めく美しい夜空が広がっていた。

これもまた、ギルドメンバーであるブルー・プラネットが心血を注いで創り出したものであり、その気合の入りようには圧倒されつつも懐かしさを覚える。

ヴェルフエニアもその素晴らしさには驚きの表情を浮かべていた。
(流石はブルー・プラネットさんだ……現実世界だと大気汚染でこんなに綺麗な星空なんて写真か映像でしか見られないからなあ。って、いけない、モモンガさんたちを待たせてたんだった)

空を見上げていた視線を落とすと、少し先にはモモンガが立っている。そしてモモンガの前には二つの小さな影が並んでいた。

彼らはモモンガが招集したナザリツクの各階層を管理、防衛する階層守護者の内の二人。第六階層を守護するダークエルフの双子姉弟だ。

「そろそろ行くぞ、フェニア」

ヴェルフエニアは腕を絡めたまま興味深そうに空を眺めていた。青と金の瞳が夜空に浮かぶ星々を映し、煌いている。

ヴェルフエニアは生み出されてからずっと、第八階層から出たこと

がなかった。虚無の湖岸から出ることすら少なかった。フォーマルハウトは追従させて連れ回すよりも虚無の湖岸でのんびり過ごすことを好んでいたからだ。ゲームのNPCであった彼女が自発的に設定された行動範囲を逸脱するような行動をすることは無い。

だから彼女にとつて、この階層の全てが新鮮なものだった。

生まれて初めて見る景色に感動し、同時に僅かだがフォーマルハウトを恨めしく思った。なぜ自分をもっと連れ回してくれなかったのか。デートの一つくらい誘ってくれてもいいではないか、と。

「……ああ、そうだったな。しかし、この階層は凄いな」

「そうだな。俺も久しぶりに見たけど、やっぱり凄いと思ったよ。他の階層もかなり造り込まれてるんだぞ？」

「今度はデートで訪れたいものだな。誘ってくれてもいいのだぞ？」

催促したヴェルフエニアは悪戯っぽい笑みを浮かべながら、横目でフォーマルハウトの様子を窺った。

フォーマルハウトは少しだけ面喰ったような表情を浮かべた後に、頬を赤く染める。そして少しだけ考えて、はにかみながら口を開く。

「……そうだな。今度ナザリックデートでもしようか」

思っていたよりも早く帰って来た返事に、今度はヴェルフエニアが面喰う。そして内容にも。第八階層でのやり取りからもっと焦ると思っていたヴェルフエニアにとつては肩透かしを食らったような感覚だ。

しかし、悪い気分にはならなかった。むしろ歩き出したヴェルフエニアは上機嫌であり、歩幅も自然と広くなる。それに釣られたようにフォーマルハウトの歩幅も広くなり、やがて数分もしないうちにモモンガの下に辿り着く。

「いらつしやいませ、フォーマルハウト様！ あたしたちの守護階層へようこそ！」

「よ、ようこそお越し下さいました、フォーマルハウト様」

二人を初めに迎えたのは健康的な褐色肌のダークエルフの双子だ。対照的な性格を見せる双子の姉弟に笑顔を向けながら挨拶を交わす。

「アウラにマーレか。久しぶりだな、元気にしていたか？」

「はい！」

天真爛漫という言葉が似合いそうな元気な笑顔を見せる少女はアウラ・ベラ・フィオーラだ。金色の絹のような髪を肩口で切り揃えた活発な雰囲気の少女であり、緑と青のくりつとした大きなオッドアイが煌いている。赤い竜鱗で出来たぴつちりとした軽装鎧を身に着け、上下共にその上から白色のベストと長ズボンを着用している少年的な出で立ちだ。

ベストの胸の部分にはアインズ・ウール・ゴウンの紋章が刺繍され、首には大きな黄金色のドングリをあしらったネックレスを身に着けている。

「は、はい。元気です！」

アウラの弟であるマーレ・ベロ・フィオーレはアウラに良く似ているが、その髪型はおかつぱであり活発な印象のアウラとは正反対の大人数のような雰囲気だ。おっとりとした顔立ちであり、瞳はアウラと同色だが左右逆のオッドアイ。藍色の竜鱗で出来た胴鎧にアウラ同様に白色が主の服に、森の葉を編んで作ったような短いマントを背負っている。ただし下半身はズボンでは無く短めのスカートであり、褐色の地肌が僅かに覗き見える。

胸元にはアウラのものに酷似した銀色のドングリネックレスを身に着け、小さな手で黒い木で出来た杖を大切そうに抱えていた。

「そうか、なら良かった」

「はい！ あの、ところで、そっちの腕に引っ付いてる子は……」

アウラの視線を受け、ヴェルフエニアが絡めていた腕をすりと放して一歩前が出る。

「私は第八階層虚無の湖岸領域守護者、ヴェルフエニア・セレンルーナだ。よろしく頼む」

「あたしは第六階層守護者、アウラ・ベラ・フィオーラ。虚無の湖岸つてことは、フォーマルハウト様が創造なさったってことだよ。よろしくー」

「ぼ、ぼくも第六階層守護者、マーレ・ベロ・フィオーレです。よ、よ

ろしくお願いします」

特にトラブルも無く溶け込めたらしいヴェルフエニアを見て、フォーマルハウトは胸を撫で下ろした。言ってしまうとヴェルフエニアはつい先ほどまで引きこもり生活をして来た少女だ。彼女を生み出した親でもある身としてきちんと友人が出来るかどうか心配だった。

仲間たちが創り出したNPCたちが動き、楽しそうに会話をしている光景を見ながらモモンガとフォーマルハウトは破顔する。

「おや、私が一番……というわけでは無いようでありんすね？」

口調の割りには若々しい声が聞こえると同時、大地から黒い影が噴き上がる。やがて影は一人を包み込めるほどの大ききになると、扉の様に形を変えた。そして影の中から小さな人影が姿を現す。

表れたのはスカート部分が大きく膨らんだ漆黒のボールガウンを身に纏い、深い愉悅の笑みを浮かべる真トウル・ヴァイン・バイア祖の少女。

可愛らしいフリルとりボンがついたボレロカーディガンを羽織り、レースが付いたフィンガーレスグローブを付けているため、殆ど肌が見えない。

唯一布に覆われていない顔は絶世という言葉が相応しい美しい顔立ちであり、白蠟染みた白い肌を晒している。銀色の髪は持ち上げてから流しているため、顔には一切かかっておらず、怪しく光る真紅の瞳はどんな宝石よりも美しい。

年の頃は十四か、それ以下だろうか。まだ幼さが抜けきっていない、可憐さと美しさを併せ持つ美の結晶。

ただし、小柄な体軀に反して胸の部分だけは不自然なほど大きく膨らんでいた。

「転移が阻害されてるナザリックで<転移門>なんて使うなつての。闘技場まで普通に来たんだらうから、そのまま歩いてくればいいでしょうが、シャルティア」

アウラが呆れたように指摘する。その凍りつくような声音には先ほどまでの子犬のような雰囲気は無く、そこにあるのは明確な敵意だ。

その横ではマールとヴェルフエニアがゆつくりとアウラから距離を取っていた。マールに至っては震えながらだ。

最高位の転移魔法を使って現れた少女の名はシャルティア・ブラッドフォールン。このナザリツク地下大墳墓において、第一、第二、第三階層と複数の階層を守護する唯一の階層守護者だ。

シャルティアはモモンガとフォーマルハウトの側で顔を歪めているアウラには一瞥もくれずに、二人の前に立つ。

ふわりと香水の良い香りがシャルティアの体から立ち上る。

「お久しぶりであります、フォーマルハウト様。そして——」

フォーマルハウトへ向けてスカートの端を詰まんで貴族の令嬢がするような礼をした後、シャルティアはモモンガの首へと両手を回してぶら下がるように抱きついた。

「ああ、我が君。私が唯一支配出来ぬ愛しの君」

妖艶な美女がやれば絵にもなっただろうが、シャルティアでは身長が足りず、子供がじゃれついてぶら下がっているようにしか見えな
い。

それでも女性慣れしていないモモンガにとっては十分な妖艶さだ。気恥ずかしさに一歩後退しそうになるが、気を振り絞って何ともない風を装ってその場に踏みとどまる。

「どうした？ そんなにモモンガを見て、羨ましいのか？ 安心しろフォーマルハウト、お前には私がいるのだから」

突然のことに言葉を失い、呆然とモモンガを見ていたフォーマルハウトへ飛びついたのはヴェルフエニアだ。第八階層でそうしたように、そしてシャルティアのようにフォーマルハウトの首へと手を伸ばして正面からその胸に飛び込む。

そして、同時に凄まじい敵意と殺意がヴェルフエニアへと叩きつけられた。それは密着していたフォーマルハウトにも感じ取れるほど濃密なものであり、思わず身を固めてその発生源を探る。

発生源は三つ。アウラ、マール、シャルティアだ。

アウラから発せられる敵意は先ほどシャルティアに向けられていた物とは比べ物にならないものだ。マールも表情こそ変わらないが、

いつもと変わらない表情で大人でも逃げ出したくなるような殺意を出している事がより恐ろしさを強くしていた。シャルティアに至ってはどす黒いオーラを撒き散らし、凄まじい形相でヴェルフエニアを睨んでいる。

シャルティアはモモンガを解放し、鋭い瞳のままヴェルフエニアへと口を開く。

「どこの誰かは知りませんが、同じ至高の御方々に仕えるシモベとして今のぬしの言葉……至高の御方々を呼び捨てにするなど許せるものはありませんんでありんすねえ……」

放たれた言葉の端々からは怒りに漏れ出していた。

その言葉を受けたヴェルフエニアもそれまで浮かべていた微笑みを消してフォーマルハウトから離れ、いつ襲われても応戦出来るよう戦闘態勢を取る。

それを囲むようにアウラとマールレが移動する。敬愛する主たちに不敬な態度を取る輩を決して逃がさないための包囲だ。これには包囲の中にいるフォーマルハウトとヴェルフエニアも肝を冷やす。

周囲を囲むのは全員が最高の百レベルに到達している階層守護者三人。それぞれの役割や戦闘スタイルなどは違うが、戦闘能力はナザリックにおける最大戦力の一角だ。ヴェルフエニアも百レベルだが、一対三では敗北は免れない。

だが、守護者たちが浮かべている怒りはヴェルフエニアからすればまったくの見当違いだ。フォーマルハウトにそうあれと生み出され、それに従った言動をただけなのだから。

ちらりとヴェルフエニアから向けられた助けを求める視線を受けて、フォーマルハウトは助け船を出す。

「……待て、シャルティア」

「フォーマルハウト様？」

なぜ止められたのか分からないといった表情で、シャルティアは可愛らしく小首を傾げた。アウラとマールレも同様に困惑した表情を浮かべているが、漏れ出していた怒りとヴェルフエニアへ向けていた敵意はひとまず収めたようだ。

「あー……お前たちの気持ちは嬉しいが、フェニアは俺がそういう風に設定したんだ。モモンガさんや他のギルドメンバーもそういう設定だって知っているから、大丈夫だ」

フォーマルハウトの言葉を聞いたシャルティアたちは一瞬だけ驚いたような表情を浮かべ、一斉にモモンガへと視線を向ける。そして、こくりと頷いたモモンガを見て納得したのかシャルティアたちの敵意は完全に収まったようだった。

「かしこまりんした。そういうことならば……ええと、フェニアと言う事はフォーマルハウト様が御創造なされたヴェルフニア・セレンルーナでありんすか？ 確か第八階層の領域守護者と聞いているでありんすが」

「ああ、そうだ。第八階層虚無の湖岸の領域守護者、ヴェルフニアだ。お前たちを怒らせるのは本意ではないのでフォーマルハウト以外には敬語を使うとしよう」

「確かに、わたしたちだけでなく他のシモベたちも怒るでありんしうから、その方が良いとは思いますが……フォーマルハウト様はそれでいいのでありんすか？」

「どうなんだ、フォーマルハウト」

「別に構わない。ナザリック内に不和を齎すことが目的じゃないからな。シャルティア、アウラ、マーレ、お前たちが不快な思いをしたのならそれは俺のせいだ。すまなかった」

会釈程度に頭を下げて謝罪する。

「フォ、フォーマルハウト様が謝られることではありんせん！」

「そ、そうですよ！ あたしたちが知らずに勝手に怒ったのが悪いんですから！」

「わっ、わっ、あ、頭をお上げ下さい！」

異様なほど慌てていたのを頭を上げると、三人が心底ほつとした表情を浮かべていた。

軽く頭を下げてただけでこれなら土下座でもしようものならどうなるのだろうか。そんな疑問がフォーマルハウトの頭を過ぎる。

「ほら、あんたのせいでしょシャルティア。ちゃんとヴェルフニア

に謝んなさいよ」

「はああ？ あんただって殺気飛ばして囲んでたでしょうが！」

「いや、別に私は気にしていないが……」

当事者であるはずのヴェルフニアを放置したまま徐々に口論がヒートアップする。チビすけや偽乳や男胸など子供の悪口のようなものが飛び交い始めた辺りで、モモンガとフォーマルハウトは懐かしさを感じていた。

アウラを設定したギルドメンバー、ぶくぶく茶釜とシャルティアを設定したペロロンチーノは姉弟だ。その二人はこうしてよく喧嘩をしていた。最も、今のように言い合いが発生するわけではなくペロロンチーノが一方的にやられているだけだったが。

「騒ガシイナ、御方々ノ前デ遊ビスギダ」

不意に聞こえた声は音を無理矢理人間の声に聞こえるように発生させたような、歪んで聞き取り辛い硬質なものだ。

現れたのはライトブルーの鎧のような外骨格を持つ、ヴァーミンロード 蟲 王の男。その姿は蟻と蠍を融合させて歪めたような二足歩行の人型昆虫の姿をしている。

しつかりとした力強さを感じさせる巨躯は二・五メートルほどもあり、さらにその身長は倍はある長さのたくましい尾や全身からは氷柱のような鋭いスパイクが無数に飛び出している。

四本ある丸太のように太い腕のうちの二本は巨大なハルバードを持ち、残った二本の腕はそれぞれ黒いオーラを撒き散らすメイスと歪んだ形状のブロードソードを持っている。

左右に開閉する大きく頑丈な下顎は人の腕を容易に噛み千切るこゝとが出来るほど鋭く、その奥にある口腔からは空気を凍てつかせる極寒の冷気が噴出していった。

「この小娘がわたしに無礼を——」

「事実を——」

「あわわわわ……」

「……はあ」

互いの言葉を聞いて再びシャルティアとアウラが睨み合い、それを

見たマーレが慌てる。ヴェルフエニアは呆れて溜息を吐いていた。

未だ続こうとしている二人の諍いにモモンガも流石に呆れ、意図的に低い声を作って二人に警告を発する。

「シャルティア、アウラ、じゃれ合いはその辺りにしておけ」

底冷えするようなモモンガの低く威厳ある声に、フォーマルハウトは驚きながらも懐かしさを感じた。

モモンガは悪名高きアインズ・ウール・ゴウンの長として悪の大魔王のロールプレイをしていた。死の超越者としての恐ろしい骸骨の姿とその身から発せられる黒いオーラを撒き散らす課金エフェクト、そして聞く者を震え上がらせるような低く恐ろしい声はまさに悪の大魔王として相応しいものだった。

(凄いな、モモンガさん)

警告を受けた二人の少女はびくりと体を震わせ、モモンガへと頭を下げる。

『申し訳ありません！』

モモンガは鷹揚に頷き謝罪を受け入れると、現れた者へと向き直った。

「良く来たな、コキュートス」

「御呼ビトアラバ即座ニ、モモンガ様」

ナザリック地下大墳墓第五階層守護者、コキュートス。凍河の支配者の異名に相応しい極寒の冷気を操る力を持つ蟲ヴァーミンロード王の武人だ。

言葉と共にコキュートスの口から冷気が漏れる。漏れ出した冷気はパキパキと音を立てて空気中の水分を凍らせ、ダイヤモンドダストのようにキラキラと煌かせた。

傍に立っているだけでダメージを受けそうなほどに強力な冷気であるが、最も近くに立つモモンガはそれを意にも介さない。そもそもこの場に冷気や炎、酸や電撃などに対する耐性を持たぬものなどないのだ。

「ム、ソノ者ハ……」

六つあるコキュートスの深い青色をした複眼がヴェルフエニアを捉える。

初対面の相手に興味を示しているといったところで、その声音に警戒の色は無い。

「フォーマルハウトさんが生み出した者だ。何度も紹介するのは面倒だろうから、紹介はまだ来ていない者が揃ってからにしよう」
「ハ、畏マリマシタ。オヤ、デミウルゴス、ソシテアルベドモ来タヨウデスナ」

コキュートスの視線を追いかけると、その先には闘技場の入り口から歩いてくる影が二つ。前を歩くのはアルベドだ。その後ろに付き従うように一人の男が歩く。十分に距離が近づくと、アルベドは微笑みながら敬意を感じさせる優雅なお辞儀を見せた。

男もまた優雅なお辞儀を見せ、口を開く。

「皆さん、お待たせして申し訳ありませんねえ」

涼し気な声を発したのは赤い三つ揃えにネクタイまでしつかりと着用した浅黒い肌の最上位悪魔だ。

身長は一・八メートルはある長身であり、東洋系の顔立ちは深い笑みを浮かべている。漆黒の髪をオールバックで固め、かけた丸眼鏡の奥には細めというよりは閉じられた瞳があった。

やり手のビジネスマンか弁護士かといった出で立ちではあるが、腰の辺りからは銀のプレートで包まれた尻尾が伸び、その先端からは六本の棘が生えている。

ナザリック地下大墳墓第七階層守護者、デミウルゴスだ。

「これで皆、集まったか」

「モモンガ様、まだ二名ほど来ていないようですが？ それにそちらの娘は……」

「その必要はない。残りの二人はどちらも特定状況下での働きを優先して配属された守護者。今回のような場合に呼ぶ必要はない。それと、あの娘だが後ほど紹介しよう」

「左様でしたか、畏まりました」

モモンガの言葉を受け、各階層守護者が了解の意を示すと、アルベドが口を開く。

「では皆、忠誠の儀を」

(忠誠の儀……う？ え、何それ？)

アルベドから放たれた聞き覚えの無い言葉にフォーマルハウトは動揺しながら、何か知っていないかとモモンガへ視線で問い掛ける。しかし、モモンガは首を横に振った。

そうこうしているうちに一斉に守護者たちが頷き、二人が口を挟めぬうちに隊列を整える。アルベドを一步前に立て、少し下がった位置に階層守護者たちが一列になって並ぶ。ヴェルフニアのみが移動せずにフォーマルハウトから斜め後ろに一步下がった位置にいるが、いつの間にかその姿勢は跪き、頭を垂れたものに変わっていた。

守護者たちの真剣な雰囲気呑まれ呆然としている二人から見て、一番右端にいるシャルティアが一步前に進み出る。

「第一、第二、第三階層守護者、シャルティア・ブラッドフォールン。御身の前に」

胸元に手を当て、深く頭を下げて跪く。臣下の礼を取ったシャルティアに続き一步前に出たのはコキユートスだ。

「第五階層守護者、コキユートス。御身ノ前ニ」

シャルティアと同じように臣下の礼を取ってモモンガとフォーマルハウトに対して頭を下げる。

「第六階層守護者、アウラ・ベラ・フィオーラ。御身の前に」

「お、同じく、第六階層守護者、マーレ・ベロ・フィオーレ。御身の前に」

次に踏み出したのはアウラとマーレだ。二人は名乗りを上げ、綺麗に声を揃えて前の二人と同じように頭を垂れて跪く。続いてデミウルゴスが前に進み出る。

「第七階層守護者、デミウルゴス。御身の前に」

優雅な姿勢を崩さずにしつつ、非常に心のこもった礼を見せた。

「守護者統括、アルベド。御身の前に」

微かな笑顔をモモンガたちへと向けつつ最後に名乗り跪いたのはアルベドだ。ただ、アルベドだけはそれだけでは終わらない。頭を下げたまま良く通る声で目の前に立つモモンガとフォーマルハウトへ最後の報告を行う。

「第四階層守護者ガルガンチュア及び第八階層守護者ヴィクティムを除き、各階層守護者並びに領域守護者ヴェルフニア、御身の前に平伏し奉る。……ご命令を、至高なる御方々よ。我らの忠義全てを御方々に捧げます」

六つの下げられた頭を前に、モモンガとフォーマルハウトからは緊張が高まっていた。

元々しがない一般人である彼らがこんな場面を経験したことなどあるはずもなく、特にモモンガは混乱から誤って一部のスキルを発動してしまう。

（モモンガさん混乱しすぎだ!? 気持ちはわかるけど絶望のオーラなんて出してどうするんだ!）

心の中で抗議するも、それを解除させる手段をフォーマルハウトは持ち合わせていなかった。必死に視線を送るがモモンガはそれに気付かず、さらにロールプレイ向けの特別な効果も無い後光を背負ったりもしてしまう。

モモンガもスキルを解除するという選択肢を思い浮かべる余裕すら無く、現実世界での映画やテレビなどで見た光景を記憶の彼方から呼び覚まし、絶対者たるに相応しい行動を取るべく苦心する。

「面を上げよ」
必死に絞り出したモモンガの台詞に、守護者たちは一糸乱れぬ動きで応える。

フォーマルハウトは、混乱しつつも魔王としてのロールプレイを崩さず取り繕うモモンガを素直に称賛した。

（モモンガさん本当に凄いな！俺じゃあんなところから持ち直せないぞー）

「まずは良く集まってくれた、感謝しよう」

「感謝なぞお止め下さい。我らは造物主たる至高の四十一人の御方々——アインズ・ウール・ゴウンの忠実なるシモベ。御方々よりご下命いただければ我ら一同、いかなる難行といえども全身全霊を以て遂行いたします」

『誓いますー!』

アルベドの声にあわせて、守護者全員の声が唱和する。

綺麗に揃えられて放たれた声にはNPCが敵対する可能性を考えていた二人を嘲笑する、金剛石が如き忠誠心が込められていた。

その光景を目にしたモモンガとフォーマルハウトは感動に打ち震える。かつての仲間たちが生み出したNPCたちが、これほど素晴らしいと知って。

そして、その感動に後押しされるように不安は消え、モモンガの口からはギルドマスターとしての言葉が簡単に滑り落ちた。

「素晴らしいぞ、守護者たちよ。お前たちならば私たちの目的を理解し、失態なくことを運べると今この瞬間、強く確信した」

モモンガの称賛を受けた守護者たちの表情が喜びに染まる。

「さて、お前たちも気になっていようであろう者の紹介をしよう。ヴェルフエニア・セレンルーナよ、前へ」

「はい」

モモンガに促され、フォーマルハウトの横をすり抜けてヴェルフエニアは前に出る。正体を知るシャルティア、アウラ、マーレ以外の守護者たちからの訝し気な視線が一斉に突き刺さるが、ヴェルフエニアは毅然とした姿勢で胸を張っている。

「フォーマルハウトさん、彼女の紹介を」

「え？ あ、ああ」

流れるにモモンガが紹介すると考えていたフォーマルハウトは虚を突かれる。守護者たちの視線が一斉にこちらへ向いてたじろぐが、何とか平静を取り繕うことに成功して口を開く。

「この子はヴェルフエニア・セレンルーナ、俺が設定したNPCだ。まず最初に言っておくが、フェニアは俺たちアインズ・ウール・ゴウンのメンバーに対しても敬語では無く普通に喋ることになっている。お前たちもそれでは多少不快に思うだろうから今後、俺以外には敬語を使わせるようにする。万が一言葉遣いを間違えても大目に見てやって欲しい」

軽い紹介を終わらせ、ヴェルフエニアの背中を押す。その行動を合図にしたかのようにヴェルフエニアは口を開く。

「第八階層虚無の湖岸の領域守護者、ヴェルフニア・セレンルーナだ。フォーマルハウトの嫁として創造された。だからと言って特別扱いする必要はないのでよろしく頼む」

爆弾が投下された。

「なっ！」

「嫁え!？」

「えええええええっ!？」

「え、あ、あの、えっと、その……」

驚愕の声を上げたのはアルベド、シャルティア、アウラの三人だ。マールは混乱しているのか前後不覚状態に陥っている。冷静に見えるコキュートスとデミウルゴスもその表情は驚きの色に染められていた。

モモンガもバツという擬音が聞こえてきそうなほどの勢いでフォーマルハウトを見る。

フォーマルハウトは頭を抱えた。どう説明しようか、と。嘘では無く事実であるというのが猶更問題を難しくしていた。何よりかつての仲間たちの子供とも言えるような存在に対して、自分の娘と言える存在を嫁扱いしていると知られるのが恥ずかしすぎた。

羞恥に染まった顔を両手で覆ってどうしようかと考えていると、頭の中に電子音が響く。

《ちよつと、フォーマルハウトさん! どういうことですか!？》

モモンガはく伝言^{メッセージ}を発動し、守護者たちには聞こえないほどか細い声で捲し立てた。

《……いや……その、まあそういう設定をしまして》

《あれ脳内設定じゃなかったんですか!？》

《何だ、そのの何が悪いんだ》

《急に開き直ったなこの男……》

「フォーマルハウト様! ヴェルフニアの話は本当なのですか!」

アルベドが詰め寄るような勢いで他の守護者たちの疑問を代弁する。その表情は真剣そのものだったが、何か期待が込められた表情にも見える。

「あ、ああ、その、本当だ」

肯定の言葉に短い感嘆の言葉が守護者たちから漏れた。

浮かべられている表情はみな一樣に明るいものであり、未来への希望を感じさせるようなものでもあった。

苦虫を噛み潰したような顔を向けられると思っていたフォーマルハウトは、返って来た反応が肯定的なものだったことに安堵する。ただしその後には続けられたアルベドの言葉には流石に驚かされた。

「では、結婚式などは如何いたしましょうか！」

「は？」

「お許しいただけるのでしたら、このアルベドが取り仕切らせて頂きます！ 至高の御方の御結婚なのですから、ナザリツクの総力をあげて盛大に——」

「アルベドよ、守護者たちもみな落ち着くのだ」

場を収めるために放たれたモモンガの諫める声に反応し、守護者たちは口を噤んだ。そしてアルベドが守護者たちを代表し、頭を深くさげて心の底から悔いるような声で謝罪する。

「も、申し訳ありませんでした、モモンガ様。この失態の罰は如何様にも……」

「良い、お前たちの気持ちも分かる。私もたった今知ったことだからな」

「モモンガ様も御存知ではなかったのですか？」

「うむ。まったく、我が友ながら驚かせてくれる。しかし、残念ながら今はそれを祝ってやっている暇はないのだ。ヴェルフエニアよ、ひとまず守護者たちの列に加わるが良い」「畏まりました」

ヴェルフエニアは優雅にお辞儀をして、階層守護者たちが並ぶ列の一步後ろへ移動して跪いた。

それを確認したモモンガは満足そうに頷き、守護者たちを呼び出した本題に入る。

「現在、ナザリツク地下大墳墓は原因不明かつ不測の事態に巻き込まれている。最低でもナザリツクがかつてあった沼地ではなく、山岳地帯に転移していることが判明している」

守護者たちはモモンガの言葉から事態を察し、真剣な表情を見せる。

ナザリックがかつて存在していたのはユグドラシルのワールドの一つであるヘルヘイムであり、猛毒の沼地が点在する大湿地帯、紫毒の沼地の中の一つ、グレンデラ沼地の奥地だ。

そこにはツヴェークと言う蛙が直立したような八十レベル程度のモンスターが大量に棲息していた。ツヴェークたちは敵を発見すると次々と仲間を呼んで襲い掛かってくるので上級者でも探索には苦勞する地獄のようなマップだ。

それが今では山岳地帯に転移していると言う。

「待って下さい、山岳地帯？ モモンガさん、それ本当ですか？」

「ええ、地表へと偵察に出したセバスからの情報により判明しました」
フォーマルハウトとモモンガのやり取りを耳にした守護者たちの表情がより一層引き締まる。

セバスもまたこの場に集まる者たちと同等の力を持つ百レベルNPCであり、特に搦め手無しの真つ向勝負でならばセバスは最強格とさえ言える戦闘能力を有している。そんな存在を偵察などという末端に行わせる簡単な任務に送り出したモモンガの判断に驚愕し、この事態をそれほど重く見ているということを感じ取ったのだ。

「もうすぐ戻ってくると思うんですが……」

辺りを見渡したモモンガは小走りに走ってくるセバスを発見する。

佇むモモンガとフォーマルハウトの下まで辿り着いたセバスは、他の者たちがそうしているように跪いた。

「遅くなってしまい申し訳ございません」

「良い。それよりも、偵察の結果を報告せよ」

指示を受けたセバスは一瞬だけ守護者たちへと視線を送る。

「構わん。今は非常事態だ。この場にいる皆が知る資格を持っている」

「はっ、畏まりました。まず周囲一キロは草木の少ない峻厳な山岳です。また、人口建築物は確認出来ず、小動物は何匹か確認しましたが、人型生物や大型の生物は一切確認出来ませんでした」

「その小動物というのはモンスターか？」

「いえ、戦闘能力が皆無と思われる単なる小動物です」

「ふむ……ご苦労だった、セバス」

セバスを労いながら、モモンガは暗澹たる気持ちとなった。

それはフォーマルハウトも同様であり、大した情報が手に入らなかったことによるものだ。沼地から山岳へと転移したという情報自体は大きなものだったが、発生した異常に大して手に入った情報が余りにも少なすぎる。

ただ、もはやここはユグドラシルですら無い、どこか別の世界だと言うことは何となく理解していた。それほどに今の状況は現実世界リアルやユグドラシルの常識とかけ離れていた。

なぜユグドラシルの魔法やアイテムが使え、どのような理由でどこに転移したのかという肝心な答えはまったく分からなかったが。

「モモンガさん、ナザリックの警備レベルを引き上げましょう。ここがどこかは分かりませんが、どんな危険があるかわかりません」

「そうしましょう。では各守護者よ、まずは各階層の巡回と確認を行い、異常を発見した場合は即座に報告せよ。同時に警備レベルを一段階引き上げる。何が起るか不明な段階のため、決して油断はするな。侵入者が居た場合は殺さずに捕えろ。出来れば危害を加えずにというのが望ましい」

守護者たちが一齐に了解の意を示し、頭を下げる。

「次にナザリックの運営システムに関して聞きたい。アルベドよ、各階層守護者間の警備情報などのやり取りはどうなっている？」

命令を出しているのはモモンガだが、これはフォーマルハウトも気になっていたことだ。

どれだけ警備を厚くしても情報が速やかに全体へ行き渡らないならば適切な対処を取ることは極めて難しい。

ユグドラシルではNPCというのは単なる拠点防衛のために用意された存在であり、設定されたプログラムに従って行動するだけだ。モンスターや守護者間での情報のやり取りなどあるはずもない。

「はい。既にデミウルゴスを総責任者とした情報共有システムは出来

上がっております」

二人は良い意味で予想を裏切ったアルベドの言葉に喜色を浮かべ、安堵に胸を撫で下ろした。

これで最低限、何か異常が発生してもその情報が上がってこないなどという事態には陥らないと判明して。

「それは重畳。では守護者統括アルベド、並びに防衛戦の責任者であるデミウルゴス。両者の責任の下、より完璧な情報共有システムを作り出せ。次に——」

守護者たちとのやり取りを繰り返し、次々とやるべきことを決めて指示してゆくモモンガを見て、フォーマルハウトはほうと感嘆の息を吐いた。

(やっぱりモモンガさんはこういう時頼りになるなあ……俺って戦うことしか出来ないし、みんなが引退した後も事務的なことは全部モモンガさんがやってくれてたし)

だからこそ、自らも最後の日までユグドラシルを楽しんでいたのだろうと確信する。

ユグドラシルにいた頃からモモンガの状況対応能力は群を抜いていた。

アインズ・ウール・ゴウンに居たメンバーは一芸に秀でた者たちが多かったが、同時に癖が強い者たちばかりだった。それら四十一人を長い間まとめて来た実績は伊達ではない。

「最後にこの場にいる者たちに聞きたいことがある。まずはシャルティア、お前にとって私たち二人は一体どのような人物だ？」

「モモンガ様は美の結晶。その白きお体と比べればどのような宝石でも見劣りしてしまうでしょう。フォーマルハウト様は力の結晶。その内に恐るべき力を秘めた暴虐の王でございます」

打てば響くように応えたシャルティアの評価に、二人は内心で愕然として横目で互いに視線を交わした。

「——コキュートス」

「モモンガ様ハナザリック地下大墳墓ノ絶対ナル支配者ニ相応シキ力ト智謀ヲ併セ持ツ御方。フォーマルハウト様ハ一個ノ武人トシテ類

稀ナ才覚ヲ持ツ御方デアルカト」

「——アウラ」

「モモンガ様は慈悲深く、深い配慮に優れた御方です。フォーマルハウト様は多くの敵にも怯まない勇氣溢れる御方です」

「——マーレ」

「モ、モモンガ様は凄く優しい方だと思います。フォーマルハウト様は、と、とってもお強い方だと思います」

「——デミウルゴス」

「モモンガ様は深謀遠慮に優れ、即座に実行に移す行動力を有した御方。まさに端倪すべからざるといふ言葉が相応しき御方かと。フォーマルハウト様はまさしく一騎当千の力をお持ちであり、策を弄されてもそれを力で粉碎することが出来る恐るべき御方です」

「——セバス」

「モモンガ様は至高の御方々の総括に就任されていた御方。フォーマルハウト様は何よりも圧倒的な力と戦闘技術をお持ちの御方です」

「——ヴェルフエニア」

「モモンガ様は我らがナザリック地下大墳墓の主にしてフォーマルハウトの無二の友。フォーマルハウトは私の愛しい夫です」

ヴェルフエニアの言葉にセバスがぴくりと反応を示す。

「——最後になつたが、アルベド」

「モモンガ様は至高の御方々の最高責任者であり、私の愛しい御方です。フォーマルハウト様はいかなる危険にも真っ先に切り込み、敵対者を容赦無く叩き伏せる烈火の如き御方です」

「……なるほど。各員の考えは十分に理解した。今後とも、忠義に励め」

守護者たちが大きく頭を下げたのを確認し、モモンガの言葉を最後に二人は指輪で転移する。

瞬時に視界が変化し、第六階層の闘技場から第十階層の玉座の間への入り口——悪魔を象った幾多のゴーレムたちが鎮座するソロモンの小さな鍵と呼ばれる場所へと転移する。

ここへ転移すると示し合わせたわけでもないのに二人同時に同じ

場所へ転移出来たのは、長年培ってきた連携能力によるものだろうか。

周囲を見回して誰もいないことを確認した二人は大きな溜息を吐く。

そして――

「何ですかモモンガさん、あのNPCたちの高評価は！」

「だから忠誠心がかなり高いって言ったじゃないですか！」

「カンスト通り越してバグってる領域ですよ！ 全員忠誠心バグの領域守護者ですか!?! 何ですかシャルティアの暴虐の王って、初めて言われましたよ！」

「私だって端倪すべからざるなんて言葉使う人初めて見ましたよ！」

人じゃないけど！」

「あれ絶対別人の話してますよね?!」

二人同時に叫ぶ。守護者たちの過剰評価に笑いながらそう突っ込んでやりたかったが、そう考えても冗談で言っている雰囲気ではなかった。考えを述べる者たちの表情は大真面目であり、答えに窮する様子もなかったことからその言葉が偽りではないということが分かる。

つまりは、本気^{マジ}なのだ。

二人があの評価を崩してしまえば失望される可能性がある。ここに来て裏切りの心配などはしていないが、かつての友人たちの子供とも言えるNPCたちに失望されるようなことは出来ればあつて欲しくない。

先行きに不安を覚えて冷静になったためか、フォーマルハウトは気になる言葉を思い出した。

「モモンガさん、アルベドの愛しい御方ってどういうことなんです？」

「タブラさん、そんな設定してたんですか？」

「……ああ、どうしよう……タブラさんに何て謝れば……」

頭を抱えて崩れ落ちるように膝をついたモモンガから語られた内容はこちらだ。

玉座の間で終わりを迎える直前、隣に立つアルベドがどういう設定

だったかを思い出せず、確認したこと。

表示された驚くほど長い設定に苦笑しながら斜め読みをしていたら、最後に『ちなみにビッチである』という設定を発見してしまったこと。

これはあんまりな設定だと思って、戯れに『モモンガを愛している』という設定に変更してしまったことを。

聞かされた話の内容に、フォーマルハウトは少しだけ呆れたがそれ以上に喜んだ。

これでヴェルフニアの設定に『フォーマルハウトの嫁』と書き込んでいたことで、自分だけ精神的ダメージを受けることはない。

「大丈夫です、モモンガさん。分かりますよ。アルベド綺麗ですもんね。俺もヴェルフニアの設定に書き込んでますから、俺の嫁だって。だから、応援しますよ」

「何も分かってないじゃないですか!」

「はっはっはっ、まあともかくやってしまったものは仕方ないでしょう。誰もこうなるなんて思ってたんですし、仕方ないです」

ユグドラシルの世界から異世界へ転移するなどということを予測出来るものなど存在するはずもない。

モモンガがやってしまったのも仕方が無いことではあるのだが、納得出来ない様子で慙愧の念に駆られていた。

「うう……タブラさん、本当にすみません……」

「ま、まあタブラさんなら案外許してくれると思いますよ。モモンガさん仲良かったでしょ?」

「仲は良かったと思いますけど、流石に……はあ」

モモンガは後悔で頭を抱えているが、フォーマルハウトはアルベドの生みの親と言えるタブラ・スマラグディナの姿を思い出して、むしろ喜んでそうだなと思った。親指をグツと立てて笑顔を浮かべている姿を夢想する。

そして、しばらくこのネタで弄れそうだなとも思った。

第三話 守護者

頭を地面へと押し付けるかのような重圧が消える。

かの偉大なりし二人の支配者のうちの一人たるモモンガから放たれた絶望のオーラは本来ならば同格の百レベルである守護者たちには効果が発動しない。

だが、その手に持つ黄金の杖——ギルドの総力を結集して作り上げたスタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンはモモンガが使用することを前提として調整されており、その効果によってモモンガの力を増強させる。

その結果、本来効果を発揮しないはずの絶望のオーラは、同格たる百レベルNPCに対してすら凄まじいプレッシャーを与えるほどの力を有していた。

ゆえにその押し潰すような重圧が掻き消え、崇拜すべき主たちが立ち去ったのだと知つてもすぐに立ち上がれる者はいなかった。

暫しの時間が経ち、張り詰めていた空気が弛緩する。誰かが零した安堵の息の後、最初に立ったのはアルベドだ。

アルベドに勢いづけられたように他の者たちも次々と立ち上がり、誰ともなく口を開いた。

「す、すごく怖かったね、お姉ちゃん」

「ほんと。あたし押し潰されるかと思った」

「流石はモモンガ様ですね。私たち守護者にすらその御力が効果を発揮するとは……」

「我々ヨリモ才強イトハ思ツテイタガ、マサカコレホドトハ……」

守護者たちは口々にモモンガを称賛する。

「あれが支配者としての器をお見せになられたモモンガ様なのね」「ですね。私たちが地位を名乗るまではお持ちだった力を行使しておられませんでした。しかし、守護者としての姿を見せた瞬間から、その偉大な力の一部を解放されました」

「ツマリハ、我々ノ忠義ニ応工、支配者トシテノ才顔ヲ見セテ下サツタトイウコトカ。シカシ……イヤ……」

「どうしました、コキュートス？」

言い淀んだコキュートスに対し、デミウルゴスが問い掛ける。被造物たるNPCにとつて、支配者たるモモンガはまさに神にも等しい。そんな存在が自分たちの忠義に応え、その力を見せてくれたのならそれはとても喜ばしいことのはずだ。

だからコキュートスが何かを言い淀む理由など、思い当たらなかった。

「ウム……モモンガ様ハ我ラノ忠義ニ応エテ下サツタ。シカシ、フォーマルハウト様カラハソノ御力ヲ感ジル事ハ出来ナカツタ」

コキュートスの言葉に、守護者たちの表情が沈む。

最高支配者たるモモンガは認めてくれたが、もう一人の支配者たるフォーマルハウトには認められなかったのかと落胆し。

「それは私が説明しよう」

暗い沈黙を破って口を開いたのはヴェルフエニアだ。

その表情はむしろ嬉々とした微笑みを湛えた明るい表情であり、落ち込んだ様子を見せる他の守護者たちとは対照的であった。

「お待ち下さい。失礼ながら、貴方は一体どなたなのででしょうか？」

先ほどフォーマルハウト様に対して不適切な発言をしていらしたようでしたが？」

口を開こうとしたヴェルフエニアを制したのはセバスだ。

ヴェルフエニアがどういう存在か説明された場になかったセバスには、フォーマルハウトに対する発言が許せなかった。

「ああ、セバス……殿と言えがいいか。私は第八階層虚無の湖岸領域守護者、ヴェルフエニア・セレンルーナだ。創造主はフォーマルハウトだ」

セバスは元々険しかった表情をさらに険しく歪め、鋭い眼光を発した。崇拜すべき支配者の一人であるフォーマルハウトの名を幾度も呼び捨てにしたからだ。

あからさまな不快感を示すセバスを見たアルベドが助け船を出す。

「セバス、ヴェルフエニアは至高の御方々に対して敬語を使わないとフォーマルハウト様がお決めになられて御創造されたのよ。私たち

を慮って他の至高の御方々に対しては敬語を使うようフォーマルハウト様が決められたけれど、フォーマルハウト様に対しては敬語でなくて良いと許可が出ているわ。だから気にする必要はないわ」

「なるほど、そうでしたか。しかし、フォーマルハウト様を夫と言っていたのは……」

「それも他ならぬフォーマルハウト様がお決めになられたことよ」

「なんと！ そうだったのですか！ ヴェルフエニア様、そうとは知らずに大変失礼致しました」

セバスが自らの非を認め、腰を折って謝罪を述べる。

知らなかったこととはいえ、至高の存在であるフォーマルハウトの妻と定められた相手だ、執事として無礼があつては許されない。

「いや、気にする必要はないし、私を特別扱いする必要もない。フォーマルハウトもそれを望んでいるわけではないだろう。他の領域守護者と同様に扱ってくれて結構だ」

「……畏まりました。それと、私はナザリックの執事として創造されておりますので、敬称は不要で御座います」

「私たちも敬称は必要ないわ。あなたは領域守護者だけど、フォーマルハウト様の奥方なのですから」

アルベドの言葉に他の守護者たちも頷く。

「特別扱いの必要はないと……まあ、そちらの方が有難くはあるな。どうも敬語は使わんと創られたからか、余り得意ではない」

「なるほど、畏まりました。ですが、他のシモベたちも何らかの反応を示すと思いますので、ヴェルフエニア様の立場については周知しておいた方が宜しいでしょう」

「そうね。各階層守護者は自分の階層にヴェルフエニアの件を周知するように。第九、第十階層に関してはセバス、お願いできるかしら？」
「畏まりました。ではヴェルフエニア様の言葉の理由も伺うことが出来ましたので、私は先に戻ろうと思います。お二方がどちらへ行かれたのかは不明ですが、お傍に仕えるべきでしょうし」

セバスはナザリック地下大墳墓の執事の地位を預かっている。

ゆえに自らの矜持と役職に基づき、主の下へ向かわなければならな

い。傍に控え、誠心誠意主に仕えることこそが、ナザリツクの執事として創造された彼の存在意義なのだから。

「分かりました、セバス。お二方に失礼が無いように仕えなさい。それと、何かあった場合にはすぐに私に報告を。至高の御方々……特にモモンガ様がお呼びの場合は即座に駆け付けます。他の何を放つても！」

言葉と共にアルベドが瞳を輝かせる。その瞳はまるで恋する少女……というよりは情欲に塗れた一人の女のようなのであった。聞いていたデミウルゴスが困ったものだという表情と共に眉間を抑える。

「ただ、寝室にお呼びという場合はそれとなく時間が必要だということとを伝えなさい。湯浴みなどの準備が必要でしょうから。勿論、そのままでもいいから来いという事であれば私は全然構いません。何時如何なる時に呼び出されてもお応え出来るように、身は可能な限り清めていますし、着ている物も細心の注意を払っています。つまりは当然のことですが、モモンガ様の御意志こそを最優先し——」

「了解しました、アルベド。あまり時間を無駄に費やすとお傍に仕える時間が減ってしまいます。それではお二方に大変失礼かと思えますので、申し訳ありませんがこれで失礼します。では、守護者の皆様も」

言外にお前の話は時間の無駄だと伝えながら、セバスは優雅に別れの挨拶をして小走りで行っていった。

まだ話し足りなそうな顔をしているアルベドから逃げるように。

「フム、デハ聞イテモ良イダロウカ。ナゼフォーマルハウト様ハ我ラニソノ御力ヲオ見セ下サラナカツタノダ？」

セバスが闘技場から去り、姿が見えなくなった辺りでコキユートスが口を開く。

気になって仕方が無い。そんなソワソワした様子だ。

「そもそも、あれが何という種族かお前たちは知っているのか？」

「当然でありんす。フォーマルハウト様は精^{エレメンタル}霊種最上位種族にして炎を司る生ける炎^{クトウグア}でありんすえ」

「そうだ。では扱う力はどのようなものだ？」

「炎でありんす。さつきから何なんでありんすか？ この程度のこと
はナザリックに住まう者たちならば常識。答えられないほうが不忠
を疑われるような知識でありんすよ？」

シャルティアの言葉通り、ナザリックに住まう者たちにとって至高
の四十一人の情報は頭に入っていて当然だ。

もちろんその全てを知っている者は直接創造された者くらいだが、
どのような姿をしているのか、何という種族なのか程度すらも知らな
いのは恥ずべきことですらあり、不忠の誹りも免れない。

「……なるほど、そういうことですか」

静かに呟いたデミウルゴスの顔には深い笑みが浮かべられており、
尻尾は機嫌良さげにゆらゆらと揺れている。ほぼ同時にアルベドも
何かに気付いたように顔を上げ、次いで恍惚さと歓喜が交じり合った
笑みを浮かべた。

「え、なにになに？ なんかつかったの、アルベド、デミウルゴス？」

「ええ、分かったわ、アウラ。なぜフォーマルハウト様が御力を解放さ
れなかったのか。恐らくだけれど、私たちを氣遣って下さったのよ」
アルベドの言葉に理解が及ばない守護者たちは首を傾げる。

「ドウイウコトダ、アルベド。デミウルゴスモ何カ氣付イテイルヨウ
ダガ」

「つまりはこういう事だ。フォーマルハウト様の御力は炎を操る力。
そんなものを我々に向けて解放すればどうなるかね？ 特にアン
デッドであるシャルティアや蟲^{ヴァーミンロード} 王のコキュートスは炎を弱点とし
ているし、何より隣に立っておられたモモンガ様もアンデッドだ。如
何に完全耐性を有していても、至高の御方の御力なのだからダメージ
が皆無とはいかないだろう」

シャルティアとコキュートスの背筋に電流が走った。

確かに自分たちは炎や熱を弱点としており、対策として耐性を有し
ている。しかし、スキル一つで押し潰すかのようなプレッシャーを放
つモモンガと同格の存在であるフォーマルハウトが力を解放すれば、
もはや耐性など関係無くダメージを受けてもおかしくはない。

「つ、つまりわたし達がダメージを受けないように氣遣って下さった

「ということでありんすね？」

「恐らくはそうだろうね。どうなんだい、ヴェルフエニア。今ここにいるメンバーの中では君が最もフォーマルハウト様のことを良く知っているだろう？」

「私もそう考えている。あれが能力を解放すれば完全耐性でも容易に貫通せしめる。同格の存在であるモモンガ様ならばともかく、我々程度ではただでは済まないだろう」

対等であれと創られたために普段はそんな様子を見せないが、ヴェルフエニアもまたNPCである。その心の内は忠誠心の塊であり、主たる至高の四十一人を神の如く崇める存在に他ならない。

実際は何も考えておらず、自分よりも焦ってスキルを発動したモモンガを見て辛うじて冷静さを保てたというだけなのだが、ヴェルフエニアがそんなことに思い至るわけがない。彼女の中では、信奉する神々の一柱が矮小な自分たちを気遣い、その力の解放を止めたということこそが真実なのだ。

確信をもって告げられたヴェルフエニアの言葉に守護者たちは一様に喜び、同時にフォーマルハウトへと畏敬の念を向けた。

喜びはシモベであるにも関わらず、気遣ってくれたという慈悲深さを感じて。畏敬は百レベルである自分たちにも、気遣わなければならぬほどの力を有しているということを知って。

知らないところで間違った理由でフォーマルハウトの株が上がる。とつくに上限突破していたはずの忠誠心がさらに増加した。

「はあ……それにしても、妻として生み出されるなんて、同じ女として羨ましいわ」

「まったくでありんすねえ。ああ……わたしもモモンガ様と……」

恍惚とした表情を浮かべたシャルティアに、アルベドが険を込めた視線を向ける。

「このビッチ」

続いて投げられたアルベドの軽蔑の言葉に、シャルティアは眉を吊り上げた。その表情はアルベドに対して嘲笑の笑み浮かべると共に僅かな怒りも表している。

「はあ？ 至高の御方々のお一人であり、超美形なモモンガ様でありんすよ？ 愛しく思わない方が頭が可笑しいのではないでありんすか？ ねえ、大口ゴリラ」

「確かにそうね。私もモモンガ様が愛しくて堪らないわ。でも貴方は単なる情欲でしょう？ 私は純粋な愛をあのお方に捧げているの。貴方とは違うのよ、ヤツメウナギ」

「純粋な愛い？ はっ、さっきまで寝室がどうの湯浴みがどうのと宣っていた癖にちゃんちゃら可笑しいでありんすねえ」

「あら、私は男女の愛の営みという意味で言っているのよ？」

「私だってそうよ、大体アルベドは——」

怒りに満ちた形相で罵り合うアルベドとシャルティア。実際に殺し合いに発展してしまう可能性は低いため心配はしていないが、零ではないため多少の不安が残る。

「あー、アウラ。同じ女性同士、二人のことは任せたよ？」

「えっ!？」

「え、えつと、が、頑張つてねお姉ちゃん」

「マツタク、喧嘩スルホドノコトナノカ？」

「私も悪いが面倒事は御免被る」

「ちよつと、コキユートス!? とうかヴェルフエニア！ あんたも女でしょうが！」

叫ぶアウラを無視し、ヴェルフエニアたちは少し離れた位置まで移動する。

触らぬ神に祟りなしと。

喧嘩に巻き込まれない程度に離れた位置でアルベドたちの様子を眺め、デミウルゴスが口を開いた。

「個人的には結果がどうなるのか、非常に興味深いところですね」

「ナニガダ、デミウルゴス？」

「戦力の増強という意味でも、ナザリック地下大墳墓の将来という意味でもね。ああ、しかし将来という意味では君がいるのだから安泰かな、ヴェルフエニア？」

「さあな、私の夫が子供についてどう考えているのかはわからん。た

だ、そういう意味では最高支配者であるモモンガ様の方が相応しいのではないか？」

「ど、どういう意味ですか？」

会話の意味が理解できていないマーレに対して、デミウルゴスはどう説明すべきか思案する。無垢なる者を汚すが如く大人の知識を吹き込んでやりたいというサデイスティックな欲求が湧き上がるが、それをすぐさま掻き消した。

悪魔らしく残忍かつ冷酷なデミウルゴスだが、同じく至高の四十一人に忠義を捧げるナザリックの仲間に対してはその限りではない。

「偉大なる支配者の方々の後継はあるべきだろう？ お二方とも最後まで残られたが、もしかすると他の御方々と同じようにこの場所を去られてしまわれるかもしれない。その場合、我々が忠義を尽くすべき御方を残していただければ、とね」

「えっと、そ、それは、どちらかがモモンガ様の御世継を？」

「ソレハ不敬ナ考エヤモ知レンゾ、デミウルゴス。ソウナラナイ様忠義ヲ尽クシ、オニ方トモココニ残ツテ頂ケルヨウ努力スルノガ、守護者デアリ、創ラレタ者ノ責務ダ」

「勿論、理解しているとも。しかし、モモンガ様の御子息とフォーマルハウト様の御子息にも忠義を尽くしたくはないかね？」

「ムウ……ソレハ確カニ懂レル……」

コキュートスが脳内で夢想したのは、二人の子供たちを背に乗せて走る光景だ。

それだけでなく、剣技を教示するところ。迫り来る敵から二人の子供たちを背に庇い、剣を抜き放つところ。成長した二人の子供たちに命を受けるところまでもを思い浮かべる。

「……イヤ、素晴ラシイナ。素晴ラシイ光景ダ。オオ、爺トオ呼び下サルカ。オ坊チャマ、凜々シイ剣捌キニ御座イマスゾ！ ナント、コノ爺ガ一本取ラレテシマウトハ、成長サレマシタナ。偉大ナル御父上方ニモ負ケヌヤモシレヌオヲ……」

恍惚とした様子で妄想の世界を垂れ流すコキュートスを見て、ヴェルフエニアは『こいつに子供の教育を任せてはダメだな』と思った。

コキユートスの夢が一つ潰えた瞬間である。

「ところでヴェルフエニア。君は何でそのマントの下は何も着ていないのかね？」

デミウルゴスの問いにヴェルフエニアは黒いマントの裾を引っ張った。

ちらちらと美しい純白の肌が覗いていたが、それを隠す様子はない。

「ああ、これか。理由はいくつかあるのだが……一番大きいのは夫にそうあれと創造されたからだな。どうも私の夫はこの格好が好きらしい」

「ふむ……なるほど」

「確か……裸エプロンに通じるものがあるとか言っているのを聞いたことがある。他には手ブラジーンズだの裸ワイシャツだのとペロロンチーノ——様と熱心に語らっていたな」

「じゃ、じゃあ、モモンガ様もそういう格好がお好きなんでしょうかな？」

「いや、確かモモンガ様と語らっていた時は、清楚系がどのとかいう話をしていたような……？ すまん、随分昔の記憶なので酷く臆げなんだ」

「清楚……ですか」

未だ争っている様子のアルベドとシャルティアにデミウルゴスは冷たい視線を送る。それにつられたようにマーレとヴェルフエニアも。

見た目はともかく振る舞いは清楚という言葉からは程遠い二人だ。未だ口汚く罵り合っており、万が一が無いように見張っているアウラも既にうんざりとした表情だ。

「デミウルゴス、統括殿とシャルティアはいつもああなのかな？」

「まあ、いつも通りなのではないかな」

「あれがいつも通りなのか。いや、第八階層に籠りきりだったからな。他の階層のことは全く知らないんだ。だからここに来た時も天井——いや、空の綺麗さには驚かされたな。フォーマルハウトから聞いて

はいだが、これほどとは。流星はブルー・プラネット様ということか」「いや全くだね。至高の御方々の御業の数々には本当に驚かされる」「み、湖とかもあるんですよ。良ければ今度ご案内します」「そうだな、頼もう。しかし、二人で行くと旦那に焼き餅を焼かれてしまうな」

ふふ、と楽しそうに笑うヴェルフエニアを見たデミウルゴスとマーレは羨望と嫉妬を抱いた。

至高の存在の妻であれと生み出された。その言葉の何と甘美なとか。

もしもナザリックでその権利の争奪戦でもやれば、血で血を洗うような大戦争が巻き起こってもおかしくはない。いや、起こると断言出来る。戦闘能力が皆無である一レベルの一般メイドたちも参戦するであろうことは間違いない。

生まれた瞬間からその権利を有しているのだ。例え男の身であってもそれほどに愛されていることを羨ましく思わない者などナザリックには存在しない。無論それを不満に思う者も存在しないが。「まあ、機会があれば是非第七階層も案内させてくれたまえ。ああ、もちろんフォーマルハウト様をお連れしてね。さて……コキュートス、いい加減に戻ってきたまえ」

同僚の声にコキュートスは妄想の世界から帰還し、心の底から満足そうに吐息を漏らす。

興奮冷めやらぬ様子でブシュウウと白い冷気を口元から噴出させながら、未だ残る妄想の余韻を振り払うように数度頭を振る。

「良い光景ダッタ……アレハマサニ望ム光景ダ。ヴェルフエニア、御世継ガ生マレタラ是非私ニ剣ノ指南役ヲ——」

「却下だ」

「何故ダ!?!」

その時のコキュートスの叫びは、それはそれは悲痛なものだった。「コキュートス、その話はまたにしたまえ。……アルベド、シャルティア、まだ喧嘩をしているのかね?」

睨み合っていた二人はデミウルゴスの声に反応し、視線を動かす。

しかし、答えたのは横で疲れたような表情を浮かべていたアウラだ。「喧嘩は終わったよ。今やってるのは……」

「第一妃はどちらかといわすこと」

「ナザリツク地下大墳墓の最高支配者であるモモンガ様が妃を一人しか持てないなんて余りにも可笑しなことだわ。ただ、どちらが正妃となるかという……あなたもそう思うでしょう、ヴェルフエニア？」

「私に振るのか……ハーレムには賛成するが、どちらが正妃かというのは結局のところモモンガ様の好みの問題だろうし、お前たちがここでいくら争っても仕方が無いだろう」

ヴェルフエニアの正論に二人は固まった。

アルベドとシャルティアの間で上下が定まろうと、選ぶのは支配者であるモモンガだというのは当然のことだ。

「まったくだね。ところでその発言からすると、君はフォーマルハウト様が複数の女性に寵愛を与えても気にしないのだね？」

「まあ、優れた男の周りに女が集まるのは当然のことだからな。それに好きな男のことを好きな女が多いと言うのは最初に愛し、寵愛を賜った女として誇らしいものだ」

「おおー、なんか大人って感じだね」

まさに大人の余裕というものだろう。あるいは正妻の余裕か。

女として格の違いを見せられたかのように錯覚したアルベドとシャルティアは、植え付けられた敗北感に肩を落とした。

「では、アルベド。落ち着いたようだし、命令をくれないかね？　これから色々と動かなければならないのだから」

デミウルゴスに促され、アルベドは俯いていた顔を上げる。

「え、ええ、そうね……命令しないとならなかったわね。シャルティア、ひとまずこの話は保留にしましょう」

「そ、そうでありんすね。ええ、異存ありんせん」

「よし、ではこれからの計画を立案します」

緩んでいた気を張り直し、アルベドは表情を守護者統括としてのものへと変化させる。同時に守護者たちは気を引き締めなおし、アルベドに対して頭を垂れて敬意を示す。

しかし、礼は見せるが跪きはしない。

守護者統括という地位にあるため敬意は当然示すが、それは絶対のものではない。至高の四十一人によって生み出された存在に大きな立場の違いはないのだ。しかしながら、守護者統括という地位をアルベドに与えたのもまた至高の四十一人だ。だからその地位に相応しいだけの敬意を示す。

そのことに対してアルベドも腹を立てたりなどはしない。それが最も正しい考えだと理解しているから。

彼らが跪くのは、偉大にして至高の四十一人以外にはあり得ない。

第四話 ブラツク企業ナザリック

胃がキリキリと締め付けられるような守護者たちとの会談を終えたフォーマルハウトは、自室でマジックアイテムの調査をするというモモンガと一度別れ、第九階層にある自室の前に来ていた。

ナザリック地下大墳墓の第九階層は白亜の城を思わせる煌びやかなロイヤルスイートだ。

凝り性のメンバーが総力を結集して作り上げたこの階層は居住区であり、それぞれが現実での欲求を満たすために設置された様々な部屋や施設が存在する。

ギルドメンバーの私室や客室は勿論、ギルド内会議によく用いられた円卓の間。NPCである一般メイドや戦闘メイドプレアデスの部屋。メイド達や使用人達が食事をするための大きな食堂。九種十七浴槽を持つスパリゾートをイメージして作られたスパリゾートナザリック。静かに酒を楽しむことが出来るショットバーなど、実用性のあるものからゲームであったユグドラシルには欠片ほども必要のないものまで多岐に渡る。かつては学園を作ろうなどという突拍子もない案が出たほどだ。

そんな意味のない施設群も、今では現実のものとなったために本来の用途で使われている。

「ここに来るのも久しぶりだな」

扉の前に佇み、腕を組んで呟く。

各ギルドメンバーには第九階層に一人一部屋ずつ自由な内装を施してよい自室が宛がわれている。そのためここも他の部屋の例に漏れず、フォーマルハウトの趣味が多分に盛り込まれた改造が施されており思い入れもあるのだが、ここに訪れるのは随分と久しぶりだ。

というのも、アインズ・ウール・ゴウンの仲間たちが次々と引退してしまっただけ金策に集中しなければならなくなったということが大きい。加えてこの部屋には余り価値が高い物を置いていないのだ。

価値があるアイテムやギルド共有のアイテムなどは専ら宝物殿に収められており、使う可能性が高い消耗品や有用なマジックアイテム

などは、フォーマルハウトの場合は基本的に持ち歩いている。貴重かつ個人所有のアイテムは最も安全な第八階層にあるヴェルフニアの家の倉庫に保管してある。

そのためここにあるアイテムと言えば、個人所有のアイテムの中でも価値が低くいつでも手に入れられるような素材やデータクリスタル、余った消耗品の類、料理の材料となる食材系アイテム、もしくはイベントなどで手に入れられるコレクター魂を刺激するが実用性に乏しい記念アイテムばかりだ。

内装にはそれなりに凝ったものの、普段は倉庫扱いしていたような部屋に用などあるはずもなく、滞在する場所と言えば殆どが虚無の湖岸。まして金策に必死であった時期に訪れなくなるのは当然と言える。

しかし、ユグドラシルから転移したことにより普段の生活空間が必要となった。第八階層に滞在しても良かったが、モモンガの発案によって許可が無い限りはヴェルフニア以外のNPCやシモベたちの第八階層への立ち入りが禁じられたため、NPCやシモベたちが自我を持ったのならばせつかくなのでコミュニケーションを取ってみたいと考えてたフォーマルハウトは第九階層へと滞在することにした。

「と言っても、そのためには掃除だよな。ずっと放置してたからどうなってるのか……いや、元々ゲームだったわけだし、汚れとか埃は無い……のかな？」

かくして閉ざされていた両開きの扉を開けたフォーマルハウトの目に飛び込んで来た光景は想定を大きく超えたものだった。

フォーマルハウトが改造を施す前はロイヤルスイートをイメージされた白や金、銀を基本として装飾された華美でありながらも見る者の目を決して疲れさせない計算が為された部屋であったが、今は元の部屋と比べて大分様変わりしている。

基本的な間取りは改造以前と変わらないものの、宇宙を思わせる黒と青の中間色の壁紙で囲まれた部屋の床に敷かれている絨毯は深いネイビーブルーをしている。縁には金の糸で装飾が施された芸術品

の如きものであり、そこに足を乗せるのを躊躇わせるほどの一級品だ。配置されたテーブルや椅子、調度品の数々はシックで物静かな雰囲気を感じ起こさせる品ばかりで、それら全てが実用性と芸術性を兼ね備えている。

入って右側には専属料理人——そんな設定がされた者は存在しない——が腕を振るうキッチンへ通じる扉がある。正面奥の壁には部屋の主であるフォーマルハウトを示す燃え上がる焔を象った紋章が刺繍された巨大な旗が飾られており、その左右に位置する扉はそれぞれ寝室とドレスルームへと繋がっている。

そんなフォーマルハウトの自室は足の踏み場もないくらい酷い有様だった。

リビング内にあった本棚に収められていたはずの本は床へと溢れ出るように零れ落ちており、中央にあるテーブルの上に綺麗に整列されていたはずのポーションの類は山のように積み上がっている。乗り切らなかつた分は床へと散乱しており、いくつかのポーション瓶が割れて中身が絨毯を汚してしまっていた。

ドレスルームや寝室の扉は内側から破裂したように開け放たれており、中からはコレクションとして保管していた使い道の無かつた装備やアクセサリ、素材やデータクリスタルが飛び出していた。

どれもこれも大した物ではないため破損していようと別に構わないのだが、捨てるのは勿体ない。しかし、まとめて捨ててしまわずにこの惨状を一人でどうにかするのは当然不可能だ。

そして一番の問題は、部屋がこんな状態になってしまっている理由に心当たりが無いことだ。

「……マジか」

絶望に肩を落としながら、とりあえずと照明を付けるが大して明るくはならなかつた。

それもそのはず、明るい場所よりは暗い場所の方が落ち着くと思っ
ているフォーマルハウトが自ら照明関係を光が弱い物へと変えたのだから。

そもそも異形種が参加条件であるアインズ・ウール・ゴウンに所属

している以上、フォーマルハウトもまた異形種である。異形種の多くは暗闇を見通すことが出来る能力を所有しており、フォーマルハウトもまたその例に漏れず暗闇を見通すことが出来る。この程度の暗闇であれば、本来なら照明すら必要ない。

それでも照明を付けたのは、現実世界での人間としての習慣がそうさせたのだろう。

「うーん……どうしたもんか……」

現実世界で一人暮らしであったフォーマルハウトには掃除や片付けの心得はなかった。そもそも給料の殆どをユグドラシルへとぶち込んでいたので家にある物が少なく、たまに埃を払って床を掃いてゴミを出すくらいは掃除しかやったことがなかった。

清掃専門業者でも時間を要するような惨状のこの部屋を掃除するというのは余りにも手に余る。

「フォーマルハウト様」

「うわっ!？」

途方に暮れていたフォーマルハウトに横合いから声が掛けられる。静かだが透き通ったような、抑揚の無い声だ。

突然声をかけられて思わず飛び上がりそうになったフォーマルハウトが振り返った先に立っていたのは、赤金の色をした腰まで届くロングストレートヘアのメイドだった。

非常に整った顔立ちだが何の表情も浮かべていないその顔は能面のような印象を与えるもので、冷たい輝きを宿したエメラルドのような瞳がじつとフォーマルハウトの事を見つめていた。

その瞳はひとつだけであり、左側の目はアイパッチで覆われている。首には都市迷彩色のマフラーを巻き、その小さくもヴェルフェニアよりは大きな体を包むメイド服は所々にマフラー同様の都市迷彩色だ。スカートの裾には一円と記載された小さなシールが貼られている。

もし値段が一円で売られていたのなら、間違いなく即座に購入を決めるだろう。

「シズ……だったか？」

「はい。プレアデスはシズ・デルタ。御身の前に」
名乗りを上げて跪いたのはCZ2128・シーゼットニイチニハチ△デルタ。シズ・デルタと呼ばれている、戦闘メイドプレアデスの一人だ。

人間のような外見をしているが、その種族は自動人形オートマトンと言う機械の体を持つ種族である。

「ああ、立ってくれ」

「……はい」

「それで、どうした？」

立ち上がった後も感情を感じさせないまま佇むシズへと問い掛ける。

「セバス様が、フォーマルハウト様の御傍に控えるようにと」

「傍に控える？」

「はい。何か御用がありましたら……何なりと」

「ふむ」

要するにメイドらしいことをしてくれるらしい。本物のメイドなど見たこともないので、それがどんなことをするのかフォーマルハウトは正しく理解していなかったが。

考える素振りを見せてから、酷い有様の部屋へと視線を向ける。

何の反応も示さないことから、どうやらシズの角度からは部屋の中は見えていないようだった。

ともあれ、一人で片付けても到底終わりが見えないのなら、せつかなので手伝ってもらおうのはどうか。そこまで考えて、この惨状を見せて大丈夫だろうかと思ひ直す。

間違い無く、一人で片付けも出来ないのかと呆れられる。これからナザリックでNPCたちと生活していくのだから、幻滅されて評価が下げられるというのは心情的に避けたいものだった。

しかし、片付けなければ寝泊まりする場所は第八階層になり、誰にも邪魔されずヴェルフニアと爛れた生活を送っていると陰口を言われるのも避けたかった。結局、背に腹は代えられないと意を決して口を開く。

「じゃあ、部屋の片付け手伝ってくれないか？」

「……畏まりました」

シズを連れて足元に転がるアイテムを足で蹴飛ばすようにどかしながら部屋に入ると、シズは中までは入らずに入り口で足を止める。「……応援が必要」

部屋の惨状を見てそう判断したのか、シズは抑揚の無い声で呟く。「確かにそうだな。いや、普段からこんなに汚いわけじゃないんだぞ？」

「……では、なぜですか？」

思わず言い訳が口をついて出た。

今更ただの言い訳だなど言えず、フォーマルハウトは理由を絞り出すために必死で頭を回転させる。

そもそもなぜ自室がこんな状態になってしまったのか。ユグドラシルで利用していた頃は床に直接アイテムを放置したり、乱雑に詰め込んで扉を無理矢理閉めたりなどしなかった。むしろフォーマルハウトはその辺りの整理整頓は拘るタイプであり、アイテムのカテゴリ毎に保管場所を分け、取り出し易く片付け易い状態を維持していた。

部屋に訪れなくなつてからは仕舞ったアイテムを弄る機会も無くなつていたので、第三者が部屋を荒さない限り物が散乱することなどあり得ないのだ。

ここまで考えて、フォーマルハウトはユグドラシルのアイテム周りの仕様を思い出す。

ユグドラシルでは同じ名称のアイテムは殆どスタック出来る仕様だった。例えば下級治癒薬マイナーヒーリングポーションであれば九十九個スタック出来る。つまり、アイテムボックスの枠一つで下級治癒薬九十九個を持ち歩くことが出来ていた。

しかし、ユグドラシルが現実となった今、アイテムのスタックなど出来るはずもない。保管されていたアイテムがスタックされていた数分だけ増えてしまい、結果として各保管場所に収まりきらなくなつて溢れ出しているのだと予想する。

(転移の弊害か……手持ちのアイテムは殆ど無限インフィニティ・ハヴァザックの背負い袋にぶち込

んでるし、そもそも持ち歩いてる数が少ないから大丈夫なはず……あとで確認しよう。モモンガさんがアイテムボックスもちやんと開けるって言うてたし」

フォーマルハウトは基本的にアイテムを余り持ち歩かない主義だ。水薬などの必需品やスクロールなどの必須と呼べるマジックアイテム、予備の装備品やアクセサリーなどを、総重量五百kgまでなら好きなだけアイテムを補完出来る無限の背負い袋インフイニティ・ハヴァザックに入れ、極力アイテムボックスの枠を使わないようにしてから冒険に出掛ける。

そして途中でゴミアイテムなどを拾えるだけ拾ってアイテムボックスを埋め尽くす。ついでにダミーの無限の背負い袋インフイニティ・ハヴァザックの中にまで、最大重量の五百kg分目一杯に。

これはPK中毒プレイヤーであったフォーマルハウトがPKを行う際に、デスペナルティ対策兼盗賊職を有するプレイヤー対策として行っていたことだ。

アイテムボックスをゴミとダミーの無限の背負い袋インフイニティ・ハヴァザックで埋め尽くすことにより、本命のアイテムが入った無限の背負い袋インフイニティ・ハヴァザックをデスペナルティでドロップしてしまったり、盗まれてしまう確率を減らすのだ。

「……フォーマルハウト様？」

「ああ、すまない。ナザリックがユグドラシルとは異なる世界に転移してしまっただってという話は聞いたか？」

「はい。アルベド様より、既に全シモベに通達されています」

アルベドの仕事の早さに驚く。

まだ守護者たちにナザリックが転移したことを伝えてから数十分しか経っていない。にも関わらず、数万に上るシモベの全てへ情報の伝達が済んでいるというのは、構築されている情報伝達システムが優秀な証拠だろう。

「そうか。まあ、転移の弊害みたいなものだな。こことユグドラシルでは世界の法則が違うらしくて、ユグドラシルではちゃんと保存出来ていた物が出来なくなってるみたいだ」

「……わかりました」

こくり、と頷いたシズ表情に変化は無い。

自動人形はそういう設定の種族だということは知っていたが、フォーマルハウトはどう対応したら良いのかわからずに暫くシズのことを見つめてしまう。

「……………」

暫く見つめていると、『何か?』と言いたげな風にシズが首を傾げた。

「ああ、いや、すまない。じゃあ、誰か手が空いてるやつを連れて来てくれるか?」

「畏まりました」

シズはぺこり、と軽く一礼してから踵を返して去っていった。

「……………さて、先に少しでもやっておくか」

腕捲りするような仕草の後、フォーマルハウトは屈んで手近なところへと手を伸ばし、部屋の片付けを開始した。

この行動が後にシズが連れて来た一般メイド達とひと悶着あるとも知らずに。

◆ ◆ ◆

第九階層、フォーマルハウトの自室では、シズを中心としてメイド服を着た美しい少女たち数人が忙しそうに部屋の中をぱたぱたと動き回っていた。

汚部屋と呼べる状態だった部屋がみるみるうちに綺麗に掃除され、散乱していたアイテムが整理整頓されてゆくあたり、彼女たちは皆優秀なメイドなのだろう。

そもそもこのナザリック地下大墳墓にいる一般メイドたちは皆、三人の創造主によってメイドとして完璧な技術を持って生み出されたNPCである。非戦闘要員でありレベルは一なので戦闘能力は皆無だが、全員がメイドとして家事を行う分には極めて優秀な能力を有している。

(へろへろさん、ク・ドウ・グラスさん、ホワイトブリムさん……………この光景見たら嬉しすぎて失神するんじゃないか?)

一般メイドたちを生み出した三人のギルドメンバーは全員が異様なほどに気合を入れて作成作業を行っていた。

特にメイド服はジャステイスを豪語して憚らないホワイトブリムに至っては、四十一人存在する一般メイド全員の原画を描いている。彼が作るメイド服のデザインは異常なほど巧緻な造りであり、常軌を逸した綿密な造り込みで外装担当のク・ドウ・グラーズを泣かせたほどだ。

片付け作業が開始して二時間ほど、フォーマルハウトは用意された簡素な椅子に座りながら動き回るメイドたちをぼうつと眺めていた。時折応援の意思を込めてひらひらと手を振ると、メイドたちはそれはそれは嬉しそうな笑顔を浮かべて作業速度を上昇させる。

フォーマルハウトがシズと別れた後、一人で作業を始めて数分後にシズは四人ほど一般メイドたちを連れて戻って来た。作業をしながらそれを迎え入れると、メイドたちは顔を青くしながらフォーマルハウトの傍へと跪いて、瞳を潤ませながら嘆願した。

「フォーマルハウト様、伏してお願ひ申し上げます！　どうか掃除などは私共メイドにお任せ下さい！　至高の御方々であらせられる御身にそのような雑事をさせたとあつてはメイドの名折れで御座います！」

「えっ、いや、この量だぞ？　俺も手伝った方が早く終わるだろう？」

「御身の御言葉に背く無礼をお許し下さい。このような事は私共メイドの仕事に御座います！　御身はどうか、掃除など私共に任せてお寛ぎ下さいませ！」

「寛ぐ……と言われても」

「わ、私共の忠誠はご迷惑でしょうか！」

涙を流しながらそんなことはどうか自分たちに任せて欲しいと嘆願する様子は、一般人であったフォーマルハウトから見るとはつきり言つて異常であった。

しかし、悲壮な表情を浮かべて跪いているメイドたちにそんなことを言う度胸も勇気も無く、助けを求めてシズの方へ視線を向けるとシズはこくりと黙つて頷いた。

何の領きだ、と叫びたくなつたがそうするわけにもいかず、助けが無いことを悟つて仕方なく仕事を任せることにするとメイドたちは

嬉々として大袈裟な礼を述べて部屋の片付けを開始した。

それから二時間、何もせずにつとメイドたちを眺めている。何かしようとすれば、近場にいるメイドの一人が『どうかなさいましたか？』と必ず問い掛けて来るのだ。

手持無沙汰なので片付けを手伝うと言えば再び最初の押し問答が再開され、それを二回繰り返したことでフォーマルハウトはようやく大人しく座っているしかないと学んだ。

彼女たちなりにメイドとしての矜持を持って尽くしてくれているというのには伝わってくるのだが、庶民的なフォーマルハウトにはそれほどに尽くされるという経験など無く、むしろ常時監視されているような気さえした。

しかし、自分のために働いてくれている者に文句など言えるはずもない。

（確か……この子はサクラメントだったな。俺が名前付けたんだよなあ。そういうのも知っていたりするのかな？）

ホワイトブリムたちが生み出したメイドは全部で四十一人いる。当初は名前もメイド担当の三人で考えていたが流石にそれだけの人数があると名前が思いつかず、名前が決まっていなかったメイドたちうちの三人ほどはフォーマルハウトが名前を付けたのだ。

そのうちの一人であるサクラメントは桜色のロングストレートヘアが目立つ美女だ。少女と言うには少しばかり大人びているが、大人というには少しばかり幼さを感じさせる容姿で、ロングスカートをひらひらと揺らしながら本棚の辺りを動き回っている。非常に整った顔立ちは可愛いよりも綺麗だと言った方が正しく、サファイアのような青い瞳は真剣な表情で抱えた本と本棚の間を往復している。

フォーマルハウトはふと彼女の胸元へと目を向ける。決してやましい感情からではないと自分に言い聞かせながら。

慎ましやかながらもしっかりと自己主張する大ききの胸を覆うメイド服の、左胸と左肩の間の辺りに見覚えのある刺繍を発見する。

（あれ、俺の紋章だよな？）

そこには自分の腕章にあるものと同じ、燃え上がる炎のような紋章

が小さく刺繍されていた。

(……無い)

他のメイドの同じ部分へと視線を向けるが、そこにフォーマルハウトの紋章は刺繍されていなかった。それどころか、他のギルドメンバーの誰の紋章も刺繍されてはいない。

「……なあ、サクラメント?」

「はい! 何か御座いましたか?」

バツと勢い良く振り向いたサクラメントは嬉しそうに微笑みを湛えていた。

「その、何でお前のメイド服には俺の紋章が付いてるんだ?」

「私の名は恐れ多くもフォーマルハウト様より授かった物であり、その証だと、ホワイトブリム様よりお伺いしております」

「ホワイトブリムさんが? なるほど……」

「ご、ご迷惑でしたでしょうか?」

サクラメントは怯えたような表情で、フォーマルハウトの様子を窺う。

サクラメントの心配は杞憂であり、迷惑などではない。むしろその逆で、フォーマルハウトは悪くない気分だった。かつての友人から小さなサプライズプレゼントを貰ったような感じだ。

そんなことは露知らずに表情を暗くしているサクラメントを見て、もしも迷惑だと言ったらどんな反応をするのだろうかという黒い興味が頭をもたげる。しかし、自分に尽くしてくれている者たちにそんなことは出来ないし、すぐさまその興味を掻き消して微笑む。

「いや、迷惑なんかじゃないよ。あの人も粋なことするなと思ってな」
「左様で御座いましたか」

あからさまにほっとした表情を浮かべて胸を撫で下ろすサクラメントを見て、不思議と笑いが漏れる。

「な、何か?」

「いいや、何でもない。さあ、仕事に戻ってくれ。ああ、いや、ずっと働いてくれているしそろそろ休憩したらどうだ? お前たちも疲れただらう?」

フォーマルハウトのその言葉は何気ない親切心からの言葉だった。メイドたちはすでに数時間という長い時間を片付けに費やしてきているし、サクラメントとの会話を経て休息も兼ねて一緒にお茶でもしながら話してみれば面白いことが聞けるかもしれないという考えもあつた。

しかし、サクラメントから返って来た言葉は予想とは真逆の言葉だ。

「そんな、休憩など！ 私共は皆、至高の御方々より維持する指輪を賜っております。ですので、休息は不要に御座います。どうかこのまま私共に奉仕させて頂きたく」

「そう、だったか。いや、でも休憩は挟んだ方がいいんじゃないか？ 肉体の疲労は無いだろうが精神的な方はあるだろう？」

「いいえ、御身の御厚意を無碍にするような無礼をお許しください。ですが至高の御方々に仕え、奉仕することこそが私共の無上の喜びに御座います」

サクラメントの言葉に同意するように真剣な表情で頷くメイドたちを見て、フォーマルハウトは嫌な予感を覚えた。

「……そうか、わかった、なら頼むよ。シズはちよつと来てくれ」
「はい」

引き攣った笑顔を浮かべながらメイドたちに仕事を託すと、嬉々とした表情で仕事を再開した。かその作業速度は上がっているように見えるのは、フォーマルハウトに『頼まれた』からだろう。

呼び寄せたシズは近くに來ると跪こうとしたので、フォーマルハウトはそれを手で制して立ち上がり、身振りで耳を貸せと伝える。

寄せられたシズの体の香りなのか石鹼の香りなのかはわからないが、ヴェルフェニアのものとは違った甘い香りがふわりと鼻腔を通り抜ける。いつまでも嗅いでいたいような匂いだったが、そんなことをすれば変態の烙印を押されることは間違いないので流石に自重した。

「シズ、メイドたちはみんなこういうのか？」

「……？」

要領を得ないのか、シズは首を傾げる。

「ああ、いや、質問を変えよう。お前たちはいつ休憩してるんだ？」

「……休憩、してません」

「……マジで？」

「マジ、です。維持リング・オブ・サステナンスの指輪のお陰で、疲れません。だから、毎日朝から夜までお仕えています」

「……それは、ここに居ないメイドたちやメイドでないシモベたちもか？」

「……はい。維持リング・オブ・サステナンスの指輪を持っていない者は休憩したり、寝たりします。ですが、疲労無効のスキルを持っている者はずっとお仕えています」

「………休みが欲しいとは思わないのか？」

「はい。きつき、サクラメントが言ったように、至高の御方々にずっとお仕えることを皆が望んでいます」

「……」

フォーマルハウトは絶句した。

シズの言葉が真実ならばメイドに限らずシモベたちは二十四時間三百六十五日常に働いているということになる。一体だれがその勤務スケジュールを考えたのかは知らないが、疲れることが無く、本人たちも望んでいるらしいとは言え余りにも異常だ。

しかし、フォーマルハウトとモモンガは知らないが、このナザリックにおいてはそれこそが正常であり、休みが欲しいなどと思う者がこそが異常なのだ。

彼女らの支配者への忠誠はもはや信仰の領域にある。しかもその強さは狂信者のそれだ。忠誠を捧げる至高の四十一人は絶対の存在であり、神にも等しい。それどころか事実彼女らにとっては神だ。神のためにその身を捧げることは最も尊いことであり、喜びであり、そして当然のこと。そのために自分たちは生まれてきたと疑わない。ナザリックに住まう者全員が信心深い敬虔な狂信者たちだ。

(……むう)

心の中で呻く。

どうしたらこの勤労意欲が異常な狂信者たちに休息を取らせられ

るのか、と。

強く命令すれば解決なのだろうが、先ほどまでのやり取りを考えると仕事を奪わないで欲しいと泣きだす可能性すらある。とはいえ、このまま放置してブラック企業も真っ青なほど働かせ続けるというのは、現実で会社に酷使されていたフォーマルハウトにとっては許し難いことだ。

まして相手はかつての友人たちの忘れ形見とも言えるNPCたち。単なるNPCだったユグドラシルの頃ならばともかく、彼女たちは今まさに生きているのだ。であれば良い関係を築きたいし、酷使させ過ぎて万が一にも体調を崩すようなことがあればギルドメンバーたちに顔向け出来ない。

「……フォーマルハウト様？」

「うえ？ あ、ああ、すまない。少し考え事をしてた。ありがとう、シズ」

礼を述べながら、目の前の少女の頭へと手を伸ばす。

シズの頭の上に手を乗せて軽く撫でつけると、さらさらとした髪の毛の感触が手の平を通してフォーマルハウトへと伝わる。

「フォ、フォーマルハウト様？」

「す、すまん。撫でやすい位置にあつたからつい。嫌だったか？」

フォーマルハウトの問いに、シズは頬を少しだけ染め上げながらふるふると何度か首を横に振った。能面のようだった表情には僅かな羞恥心と嬉しさが滲み出ていた。

その光景を目にしたメイドたちは驚きと羨望が同居したような表情を覗かせている。サクラメントに至っては無意識に小さな声で『ああ、羨ましい』と漏らしていた。

「嫌じゃ、ないです……」

「そうか。それならよかった」

そのまま少しの間撫で続け、手を離れた頃にはシズはオーバーヒートしてしまったのかというくらい顔を真っ赤に染めていた。

「さあ、仕事の続きを頼むぞ」

「……は、はい」

小さく頷いたシズは、ふらふらと覚束ない足取りで仕事へと戻る。
(しかし、どうしたもんかな)

仕事することが生き甲斐。それ自体は良いことだろう。敬愛する者に尽くすことが幸せだと言う生き方を否定することは誰にも出来ない。しかし、行き過ぎが良くないというのもまた事実だ。

何とか上手く言い包めて休息を取らせる方法を模索するが、結局シズたちが部屋の片付けを終えても妙案を思いつくことはなかった。

第五話 会議

「今後の方針を決めようと思います」

モモンガが打ち出した議題に対して、ぱちぱちぱちと広い部屋に疎らな拍手が響く。

その部屋には黒曜石の輝きを放つ巨大な円卓が鎮座し、その周囲を囲むように繊細な意匠が施された豪華な椅子が並んでいた。

ただ、全部で四十一ある椅子の殆どは空席であった。そこに座る人物が二人だけとなって久しく、最後に全ての椅子が主を乗せたのはいつのことだったか。

円卓の間。

ナザリツク地下大墳墓第十階層にあり、アインズ・ウール・ゴウンに所属するギルドメンバーがログインした際に最初に訪れる場所。ギルドの定例会議や雑談、緊急案件の相談などあらゆる話し合いがここで行われてきた。

フォーマルハウトはやる気のない拍手をしながらこの部屋が完成したばかりの頃を思い出し、小さく溜息を吐く。

かつてはこの部屋も賑わっていた。席の全てが埋まることは珍しくも無かったし、むしろ誰かが居ないほうが不思議なほどだった。しかし、もうこの部屋の席の全てが埋まることはないだろう。

(……ああ、良くないな、これは)

盛者必衰という言葉の意味を感じ取り、寂しさと悲しさに沈んで行く気持ちを奮い立てるため、努めて明るい声を出す。

「方針と言われても、俺そーいうの考えるの苦手ですよ」

「苦手なんじゃなくて面倒臭いんでしょう?」

「それを苦手って言うんですよ。分かってないなあ、モモンガさんは」「あれ、何で私が煽られてるんですか? ともかく状況が状況ですからフォーマルハウトさんもちゃんと考えて下さいね」

「うーうー」

フォーマルハウトはだらりと円卓の上に体を投げ出して気の無い返事を返す。普通ならば怒り出すか態度を咎めるかするところだが、

モモンガは一切気にも留めなかった。

これがいつも通り。

話し合いとなると途端にやる気を無くすフォーマルハウトから意見を聞いてモモンガが行動方針をまとめ、フォーマルハウトはその方針に従って行動する。アインズ・ウール・ゴウンがたった二人になつてしまつてからずっとそうやってきた。

NPCたちが意思を持って動き始めた以上、アルベドを始めとする守護者たちやセバス、プレアデスたちを参加させるという考えもあったが、今回は彼らに聞かせ辛い話もあるため二人だけでの会議となつた。

「とりあえず大方針として我々とNPCの生存、そしてナザリック地下大墳墓の存続を提案します」

「異議なし」

モモンガはきちんと考えるように頼んでいたが、こればかりは考える必要もないためフォーマルハウトは即答した。

自分と友人が生き延びるのは勿論、かつての友人たちと共に創り上げたナザリック地下大墳墓とそこに住まうNPCたちを失うことだけは絶対にあつてはならない。

「そのためにも情報収集を行う必要があると思います」

「具体的な方法は？」

「そうですね……基本的には影の悪魔辺りの隠密能力が高いシモベを周囲の偵察に出そうと考えています」

「ふむ……」

フォーマルハウトは顎に手を当てて、少しだけ眉間に皺を寄せながら考える素振りを見せた。

影の悪魔は影に溶け込み移動することが出来る隠密能力に優れたモンスターだ。その発見には手間がかかり、ユグドラシルの高レベルの上位プレイヤーでも時折見逃すこともある。NPCではなく召喚コストも安いため、万が一何らかの理由で失う形になっても痛くはない。とりあえずの偵察役としては適任だろう。

フォーマルハウトが眉間に皺を寄せた理由は、影の悪魔の隠密能

力に不満があつたわけではない。だが、その戦闘能力に難がある。

影の悪魔シャドウ・デーモンのレベルは三十レベル程度だ。その隠密能力は三十レベルの枠には収まらないが、その分戦闘能力は実際のレベルよりも少し低めだ。

セバスの報告ではこの世界にも生物が存在するようだった。確認できたのは戦闘能力の無い小動物と言う話だったが、ならば三十レベルでも安全だと断言は出来ない。たまたま確認出来なかっただけで、三十レベルなら簡単に狩り殺す現地生物がいてもおかしくはないのだから。

「影の悪魔シャドウ・デーモンで大丈夫ですか？ もう少し高レベルの方がいいんじゃない？ この世界の生物にレベルの概念があるのかはわかりませんが、三十レベル程度じゃ情報収集も何もなくちよつと強いやつが居たら即殺されるでしょ」

「八肢刀エイトエッジ・アサシンの暗殺蟲も考えましたが、ナザリックには数が少なかったと思います。数が多くて隠密能力が高くなると影の悪魔が適任だと思います。ただ殺され過ぎるとコスト的に問題なのは確かなんですけど……」

八肢刀エイトエッジ・アサシンの暗殺蟲は四十九レベルの昆虫型モンスターだ。人間大の大きさで忍者服に身を包んだ黒い蜘蛛の姿をしており、不可視状態で飛び掛かって八本の足についた鋭い刃で八回攻撃を行う。影の悪魔シャドウ・デーモンよりも戦闘能力に優れるため今回のフォーマルハウトの要求に適うモンスターではあるが、如何せんナザリックには数が少なかった。

偵察という任務の性質上、従事する者の数が大いに越した事は無い。その方がより広い範囲へと送り出すことが出来て、それだけ情報の確度も上がる。

「ふーむ……まあ、仕方ないですか」

「そもそもナザリックには隠密能力が高いモンスター自体が少ないですからね。まあ、拠点防衛用としては隠密能力って奇襲や伏兵以外ではあんまり役立ちませんから」

ユグドラシルでは配置したNPCやモンスターはナザリックの外へ出すことが出来なかった。

ゆえに外部の偵察などを行うモンスターを配置する必要性はなく、内部の防衛戦力として配置する分には隠密能力持ちよりも純粹な戦闘能力や厄介な特殊能力を持つているモンスターの方が便利だ。そのため、ユグドラシルでも随一と言える規模のナザリックでも隠密能力に優れたモンスターの数はそれほど多くない。

結局その後も代替案は出ず、影の悪魔を複数体偵察に向かわせることが決まった。

「これに加えて遠隔視の鏡も使おうと思います」

「……マジですか？ あれちよつと魔法で隠蔽されるだけで使い物にならないんじゃないですか」

遠隔視の鏡は指定したポイントを映し出すアイテムだ。

それだけなら便利なアイテムなのだが、ユグドラシルでは遠隔視の鏡やその他情報系魔法に対する対策が無数に存在し、その中でも遠隔視の鏡は弱い対策を施されただけで使い物にならなくなってしまう。映像が見えなくなるだけならばともかく、相手の情報系魔法に対して反撃を行うような対策が施されていた場合は、実害を被ることになってしまうのだ。

ゆえにその便利さとは相反して、ユグドラシルでは微妙系アイテムとして扱われていた。

「ナザリック内から使う分には反撃や逆探知されても問題はないでしょう。例の世界級アイテムがありますから」

ユグドラシルには無数のアイテムが存在した。それらはその性能によって等級が分かれており、下から最下級、下級、中級、上級、最上級と続き、さらに上に行く^{レガシー}と遺産級、聖遺物級、伝説級、神器級だ。最高クラスの神器級ともなれば非常に高価かつ高性能であり、上位プレイヤーでも全身を神器級装備で固めることはかなり難しい。しかし、その神器級を上回る等級のアイテムが存在する。

それが世界級アイテムと呼ばれる存在だ。

世界級アイテムはユグドラシル内に二百種類しか存在しない、全アイテムの頂点に君臨するアイテムだ。一つ一つがゲームバランスを崩壊させかねないほどの破格の効果を持ち、ユグドラシルにおいては

このアイテム群の効果に対抗することは不可能。同格である世界級アイテムを所持するか、最高峰の職業であるワールドチャンピオンのスキルをタイミング良く発動する以外に、その効果から逃れる方法はない。

アインズ・ウール・ゴウンはそんな世界級アイテムを十三個保有しており、ユグドラシルにおいて全ギルド中ダントツのトップだった。

そのうちの一つの存在によってナザリック地下大墳墓はあらゆる情報系魔法から完璧に守られている。そのため、ナザリック内から外へ向けて情報系魔法を使う分には絶対の安全が約束されていた。もし反撃や逆探知でもしようものなら、この世界級アイテムの効果によって逆に相手に対して凄まじい反撃が行われる。

そのアイテムの効果がこの世界でも有効な手段となり得るのかは定かではないが、逆に言えばこの効果が無効化されてナザリックの情報が抜かれるのであればどんな対策をしても無意味だ。

「……まあ、確かにそうですね」

「基本的に遠隔視の鏡でナザリック近辺の偵察と警備。影の悪魔で少し遠目の場所の偵察で行こうかと」

「うい、了解」

了解の意を示しながら、フォーマルハウトは暗澹とした気持ちになる。

何をするにも情報が不足し過ぎている。未知の状況である以上リスクを回避した行動を取りたいが、そのリスク回避のための情報すらない。これでは何がリスクになるのかが分からない。

かといってリスクを恐れて行動しなければ、何か起きた時に後手に回って取り返しのつかない状況になってしまう可能性もある。

前門の虎後門の狼。しかも虎と狼が本当に居るのか、何か居たとしてそれは虎と狼で済むのかも分からない。

「では次に行きますね。その前に何か質問はありますか？」

「無いですけど……次って何です？」

「命令系統に関してですね」

「命令系統？」

「はい。現時点ではナザリックの指導者は私とフォーマルハウトさんの二人です。もし私たちの指示に矛盾があった場合、NPCたちが困りますし、どこかで影響が出るとまずいですからね」

ナザリック地下大墳墓は至高の四十一人を絶対的な頂点とした大組織だ。部下であるNPCや部下たちは命を賭してその命令を遂行しようとするだろう。だからこそ、しっかりとした命令系統を構築しなければならぬ。

もし二人の命令が矛盾した時にどちらの命令が優先されるのかを明確にしなければ非常に面倒なことになるし、場合によっては死者が出る恐れもある。

「なるほど。ならそれはモモンガさんが優先ってことで」

モモンガの説明に納得したフォーマルハウトは特に考えることもなく答える。

「いいんですか?」

「良いも何も、モモンガさんがギルドマスターなんですから。NPCたちも俺たちのまとめ役だと思ってるみたいですから」

「……わかりました。自信はないけどやれるだけやるので、協力お願いします」

「もち。今までずっとそうやって来ましたしね」

深々と頭を下げたモモンガに対し、フォーマルハウトは笑みを浮かべながら快諾した。

「他に何かありますか?」

「後は我々のことですね」

「俺たちのこと……?」

何かあっただろうか、とフォーマルハウトは首を傾げる。

個人的に頼みたいことは二つほどあったが、二人に共通することになると思いつかなかった。

「NPCたちの態度、見ましたよね?」

モモンガの言葉を受けて、第六階層での守護者たちの態度や第九階層でのメイドたちとの会話を思い出して、フォーマルハウトは大きく溜息を吐いて脱力する。

数値化されていけばカンストを突破してバグの領域にまで達しているであろう忠誠心と、それに裏打ちされた狂信者の如き振る舞い。供を連れずに歩くことを咎められ、どこに行くにしても最低一人は供を付けなければ納得しないNPCたち。奉仕を断ろうものなら、泣きそうな顔をしながら必死に謝罪し、自分に至らない点があったのならば自害するとまで言い出す始末だ。

今もこの部屋の外にはそれぞれが供として連れていたセバスとシズが待機し、二人の会議が終わるのを待っている。いつ終わるとも知れない会議にも関わらず、直立不動で身動きもせず待機しているのだらう光景が簡単に想像出来た。

「……まるで神様扱いでしたね」

「それです。彼らにとって私たち……と言うよりアインズ・ウール・ゴウンのメンバーは神様みたいなものなのです。守護者たちからの評価は過大ってレベルじゃなく高いですし、他のNPCたちも同じみたいです。何が反乱の種になるかわからない以上、彼らに失望されることは避けなければなりません」

「反乱……ねえ。正直その辺りに関して俺は余り心配してませんよ？」

NPCたちは驚くほど自分たちに尽くしてくれている。まるで神様のように扱われて多少の窮屈さも感じはしたが、それらは善意からの行動であって基本的に皆いい子ばかりだ。確かに失望されたくはないが、仮に失望されたとして反乱になど繋がるだろうか。

少なくともフォーマルハウトはそうなるとは思えなかった。

「私も余り心配してはいません。ただ、あんなに慕ってくれていますから彼らのイメージを壊すのは避けたいって理由もあります」

「なるほど。確かにそれはそうですね。俺もあの子らに嫌われたくはないです」

「なので、彼らの前では基本的に支配者っぽく振る舞います。闘技場の時みたいな感じですかね。フォーマルハウトさんも、こう……なんか支配者っぽくお願いします」

「支配者っぽくですか？」

第六階層の闘技場で見たモモンガのように振る舞う自分を想像する。

思わず苦笑いをしてしまうほどに滑稽だった。

フォーマルハウトは装備一式が軍服だ。それを格好いいと思う程度には中二病を患っているのだが、モモンガのような振る舞いをして羞恥を感じないほどではない。

「……いや、無理無理。というか俺はもうフェニアたちに素を出しちゃってますから手遅れじゃないですかね」

「私一人で支配者ロールプレイをしろと……？」

「有体に言えば」

フォーマルハウトの突き放すような言葉にモモンガは絶望を表情に浮かべ——骸骨なので見た目に変化は無いが——頭を抱えた。

しかし、フォーマルハウトの言い分も理解出来るため、モモンガはそれ以上求めない。さつきまで普通に接していたフォーマルハウトが突然不自然な支配者ロールプレイを始めたらNPCたちはどう思うか。違和感しか感じないだろう。

「はあ……分かりました。フォーマルハウトさんからは何かありますか？」

「NPCたちに休みを与えましょう」

「休み、ですか？」

NPCたちの勤務スケジュールに休憩や休日が存在しないと知らないモモンガは、フォーマルハウトの言葉の意味を理解出来ずに無い眉を顰めた。

脳の入っていない頭を必死に動かして、自分なりにその意図を解釈する。

「臨時の休暇ってことですか？ 確かに転移したばかりで環境が変わって色々大変ですからね、わかりまし——」

しかし、その解釈は全て口にし終わる前に言葉を被せられた。

「違います。やっぱりモモンガさんも知らなかったんですね……」

まあ、知ってたらこんな状態が放置されてるわけも無いか……」

「……えっと、どういうことですか？」

その後語られた内容は、モモンガにとって驚くべき内容だった。愕然として言葉を失う。

休憩も休日も無い勤務スケジュール。こんな状態は組織として許されることではない。ようやく絞り出した声は余りのショックに擦れたような声だった。

「マジですか……?」

「マジです。誰が勤務スケジュール考えてるのは知りませんが「っ!」

モモンガは突然立ち上がり、部屋の出入り口へと向かった。

扉を開けて部屋から顔だけ出した状態でセバスとシズと二、三言葉を交わし、扉を静かに閉めて戻ってくる。

「……マジでした」

「マジでしょう?」

「早急に改善する必要があります。最優先です。仲間たちの子供とも言えるNPCたちを酷使するような真似は出来ません」

「同感です。言って素直に休むとはちよつと思えませんが……」

「それでもやるしかないですよ。まずは多少強引にでも休暇を導入して、徐々に慣らしていく感じで……とりあえずアルベドやデミウルゴスに相談してみます。突然導入して警備に穴が開くのは問題なので」
こうしてNPCたちに休暇を与えることが決定した。

後にメイドたちが全員揃ってモモンガの執務室を訪れ、仕事を奪わないで欲しい、毎日二十四時間働かせて欲しいと直談判が行われることになるのだが、この時の二人には知る由もない。

「あともう一ついいですか?」

「……何ですか?」

「PVPがしたいです」

半ば予想出来ていた答えに、モモンガは天を仰いだ。

フォーマルハウトはユグドラシルでは有名なプレイヤーだった。アインズ・ウール・ゴウン加入前から掲示板では毎日のように晒されていたし、本日のフォーマルハウト出現予報なるジョークコンテンツが情報サイトに掲載されていたほどだ。

その理由は偏にPK中毒と言えるほどPvPを好んでいたからだ。目の前にプレイヤーが現れれば相手が何人居ようとPvPを仕掛けて殺し尽くす。例えば相手がギルドランキング上位に入るギルドのメンバーであろうと、有名なプレイヤーであろうと関係ない。視界に入ったプレイヤーは性別や種族、職業、所属の一切関係無く殺しに掛かる。

数少ない例外は彼と親しい関係にあるか、異形種狩りに遭っている最中であるかだ。

異形種狩りに遭っている者を見つけた際、大抵の場合は被害者側の味方となって戦う。人間種同士や人間種と亜人種の戦いにおいては両方に対して攻撃を仕掛ける。

以前モモンガがなぜ無差別攻撃をせずに異形種の味方になるのかと聞いた時、フォーマルハウトは『大体は異形種の方が劣勢で、劣勢側の方が楽しい。それまで優勢側だった奴らが返り討ちにされて苛立ってるのを見るのも楽しい』と性格破綻者のような返答がなされた。

狩場でのPK以外にも個人間での模擬戦形式のPvPや公式PvPイベント、ユーザーイベントなどPvPが絡む行事の殆どに参加し、極めて高い成績を残して来た生粋のPvPプレイヤー。

それがフォーマルハウトだ。

アインズ・ウール・ゴウン加入後もその病気が治ることはなく、アインズ・ウール・ゴウンに敵対するプレイヤーが増える要因の一つにもなっていた。

そんな彼の性格をこの世界にいる誰よりも熟知していたモモンガは、いつこれを言い出すんだろうかと思っていた。むしろ良く今の今まで言い出さずに我慢して来たなとすら思っていた。

「……一応。一応です。理由を聞いても？」

きつとまともな理由が返ってくる。

そんなことはあり得ないと分かっていたが、それでもそう信じて念のため質問したモモンガの期待はやはり裏切られた。

「百レベルNPCと戦ってみたいです！」

その時のフォーマルハウトの顔は、それはそれは良い笑顔だったと後にモモンガは語る。

「却下です。状況分かっていますよね？今は未知の状況に対応するために警備レベルを引き上げている状態なんです。そんな時に模擬戦やって最大戦力である百レベルNPCと我々が消耗するようなことをやってどうするんですか」

モモンガの言葉は正論だ。

緊急事態と判断して警備を厚くしているにも関わらず、模擬戦を行って重要な防衛戦力を消耗するのは愚かな行為だ。

モモンガ個人としてはフォーマルハウトがどれほどPVPが好きか知っているのですがその気持ちが無碍にはしなくなかったが、それでも組織を預かる者として許可することは出来なかった。

（それにしても、ゲームじゃなくなってもPVP好きは治らないのか……。この人まさか現実でも喧嘩好きなのか？社員って言うだけど実はヤの付く職業の関連企業の会社とかなのか？）

モモンガのフォーマルハウトに対するイメージが急速に悪化してゆく。

「違うんですよ、モモンガさん！俺がそんな何も考えていない馬鹿に見えますか？」

「はい」

「即答!? いや、本当に違うんです。他にちゃんとした理由があるんです」

「……本音は？」

低い声で問い掛けられて、フォーマルハウトは骸骨から差し向けられる赤い眼光から目を逸らした。

「おい、暴虐の王」

「待ってください端倪すべからざる御方。聞いてください、重要なことです」

モモンガは無言のまま顎をしゃくって先を促す。

下らない理由だったら怒るぞと言う意味も込めて、向けている視線は外さない。

「モモンガさんも知っている通り、俺は職業分類的には魔法詠唱者です」

フォーマルハウトは後衛職に分類される、魔法による攻撃や支援を行う魔法詠唱者だ。

ユグドラシルにおいて精霊種は肉体を持たず、自然の力と魔力が融合して生まれた魔法生命体であり、魔法の扱いに高い適正を持つ代わりに物理攻撃力、物理防御力が低く、魔法生命体であり魔力の影響を受けやすいため魔法防御も低いという設定を持つ種族だ。そのため精霊種を選択したプレイヤーは余程酔狂な者でない限りは、種族の特性を活かしてかつ高い防御力を必要としない魔法詠唱者として様々な魔法を習得する。

特に自らが司る属性——炎属性の精霊であるフォーマルハウトならば炎属性の魔法を使用する際にボーナスが得られるため、特定属性に特化した魔法詠唱者を目指す職業構成——ビルドが最も種族としての力を活かせるとされていた。

フォーマルハウトもその特性を活かすため、炎属性に特化した魔法詠唱者系職業であるパイロマンサーやエレメンタリスト（フレイルム）などを取得したビルドとなっている。しかし、彼は酔狂な人間でもあった。

「でも、俺は前衛です。前衛として近接戦闘をしながら魔法詠唱者として魔法による攻撃も熟すオールラウンダーって言えばいいんですかね」

通常、ユグドラシルではある特定の一点を目指したビルドの方が強いとされていた。

前衛アタッカーであればファイター、モンクなどの前衛として戦える攻撃職を取得して行き、後衛アタッカー向けの職業である秘術師などは取得しないのが普通だ。取得したところで何か問題があるわけではないが、その分前衛としての能力が低下して結局どっちつかずの中途半端キャラクターで終わってしまうのが殆どだ。ゆえに強さを求めるのであれば、そんなビルドはしないのが常識であった。

しかし、アインズ・ウール・ゴウンは酔狂なプレイヤーの集まりだっ

た。

強さよりもロールプレイを重視し、俗にドリームビルドと呼ばれる奇妙なビルドが推奨されている。

例えばモモンガであれば死霊系魔法に特化した魔法詠唱者マジック・キャスターであり、それらが有効でない場面での強さは本職のプレイヤーに二歩も三歩も劣る。全員がそうというわけでは無かったが、アインズ・ウール・ゴウンはそんなプレイヤーが多数を占めていた。

フォーマルハウトもまたそちら側の人間であり、彼のビルドはとも歪だ。

何せ自分の種族の特性を活かすために取得した炎属性特化型の魔法詠唱者系職業に加えて、前衛アタッカー向けの職業であるファイターとストライカーも取得しているのだから。

「……改めて思いますけど、フォーマルハウトさんのビルドって意味わからないですよ。ウォーメイジとかそういう申し訳程度に前衛も熟せる後衛職ならともかく、純戦士系職業のファイターとか取ってるんですもん」

「ウォーメイジって装備制限激しいじゃないですか。ファイター取ると装備の幅がかなり広がりますから。まあ、殴り合いながら炎の魔法ぶっぱしたかったんです」

「それで種族が精霊エレメンタルってのもおかしいですけどね……まあでも、気持ちは分かります。自分が望むロールプレイに適したビルドってどうしても歪になりがちですよ〜」

「そういうことです。で、ここからが本題なんです」

緩みかけた空気を引き締めるように、フォーマルハウトは一拍間を置いた。

「ぶつちやけ自分の体がどう動くのか分からないのが不安なんです。ゲームであるユグドラシルではキャラクターを操作していましたが、でもこの世界では違います。実際に動かすんです。ゲームでは表現出来ない要素が必ず戦闘に関わって来ますから、それらに慣れておかないと万が一の時に何も出来ないなんてことが起こり得ます」

これは後衛であるモモンガには思い至らないことであつたので、思

わず感心したように頷いた。

ここはゲームではなく現実にある世界だ。人間としてゲームのキャラクターを動かしていたユグドラシルと、エレメンタル精霊として人間に擬態した自らの体を動かすこの世界。この差異は慣れておかなければ必ず戦闘に悪影響を及ぼすとフォーマルハウトは考えていたのだ。

僅か数ミリの動きの差異で致命傷かかすり傷かが変わるのが実戦だ。ユグドラシルの中で幾千を越えるほど動かした体ではあるが、だからと言って楽観視しては足元を掬われかねない。

「……現実とゲームの違いですか。凄いですね、フォーマルハウトさんは。私は言われるまで気づきませんでした……確かにそういう意味では私も模擬戦をした方がいいかもしれませんね」

「そうですね。ついでに言えばフレンドリイ・ファイアが解禁されますから、連携訓練もやった方がいいです。前衛が敵抑えてる間に魔法で纏めて吹き飛ばすとか出来ないですから」

「ああ、確かに……」

フレンドリイ・ファイアが無かったユグドラシルではその戦法はごく常識的なものだ。

味方を巻き込んでも影響が皆無なのだから遠慮することはない。しかし、フレンドリイ・ファイアが解禁されたこの世界では味方にも多大なダメージを与える結果になるだろう。

「と、言うことで許可してくれると有難いです」

一通りの理由を述べたフォーマルハウトは真剣な表情でモモンガを見つめた。これでモモンガを説得出来たらとうと確信して。

しかし、フォーマルハウトにはまだモモンガへ伝えていない理由が一つあった。

それは痛みだ。

ダメージを受けることによる痛み。それはユグドラシルには無い物だ。

剣で斬られ、魔法で炙られ、槍で突かれ、弓で射られる。そんな痛みを感じる要因が満載のゲームに痛覚など実装しようものなら、痛みのフィードバックによるショック死が多発してしまうだろう。ゆえ

にゲームであるユグドラシルには痛覚などは存在しなかった。

前衛として戦った時、確実に被害はフォーマルハウトに偏るだろう。そうなった時、攻撃されることによる痛み慣れに慣れなければ戦えなくなってしまう。剣で腕を切り落とされれば痛みに絶叫して膝を折るだろう。気絶してしまうことだってあり得る。ゆえに精^{エレメンタル}霊である体でダメージを受けたとき、どの程度の痛みを受けるのか。それが耐えられるものなのか、戦意を失わずにいられるのかを知る必要があった。

しかし、それを試すと言えばモモンガは必ず反対することが付き合いの長いフォーマルハウトには容易に想像出来た。友人が苦痛を受けるのを黙って見ていられるような男ではないのだ。だから言わない。自分がこの模擬戦でわざとダメージを負うつもりであっても。

「……分かりました。そう言うことであれば許可しますよ」

「よし！ じゃあ詳細詰めましょう！ 場所は第六階層の闘技場でいいですよ？ 対戦形式は——」

「待つて！ 気が早いですから、一度落ち着いてくださいよ。それは会議が終わってから決めましょう？」

「おお、そうですね。すいません」

急に元気になったフォーマルハウトを落ち着かせながら、モモンガは苦笑する。

そしてすぐに気を引き締め直し、真面目な声色でフォーマルハウトに問い掛ける。

「フォーマルハウトさん。私から個人的なこと、一ついいですか？」

「はい？」

モモンガが口に出そうと思っている質問は、本当ならば口に出したくないものだ。

答えが自分の望む物と違った時、どんな反応をするか自分でも検討が付かない。もしかしたら酷いことを言ってしまうのではないかと考えてしまうほどの。

目の前の、こんな異常事態に巻き込まれていてもけろりとしていて、変わらないままでいる友人ならば大丈夫だと期待しつつも楽観的

になれない。

それでもモモンガは意を決する。これは絶対に聞かなければならないことだ。今後の行動にも影響が出てくるほど重要なものだから。

「……元の世界に、戻りたいですか？」

「いや、全然？」

顎がカクンと落ちる。モモンガは唾然という言葉の正しい意味を身をもって理解した。

「えつと……即答ですか？」

「はい。え、モモンガさん戻りたいんですか？」

「私は……」

その時モモンガの脳裏に過ぎつたのは疲れ切った顔をした現実の自分だ。

家族も恋人も無く、ただ生きるために体を酷使して労働に勤しむ日々。朝起きて、会社へ行って、夜に帰って来る。ただそれだけの灰色の日常。今まではユグドラシルという唯一の楽しみもあったが、それも終わりを迎えてしまった灰色の世界。

「はは、ははは……」

「モ、モモンガさん？」

突然笑い出したモモンガに、今度はフォーマルハウトが唾然とする。

「フォーマルハウトさん。自分でもびっくりするぐらいあつちの世界に未練が無いです。つい笑っちゃいました」

「ああ、そういう……いや、納得出来ませんよ！ 急に笑い出すのやめて下さい、怖いですから！ 自分の顔思い出して下さいよ！ 骸骨が急に笑い出すのなんてホラーですよ、完全に」

「あはは、すみません」

軽口を叩き合う。

二人はアインズ・ウール・ゴウンのメンバーが多かったころを思い出していた。こうして誰かが話し始めると、どんどんその話に加わるメンバーが増えて最終的に全く別の話題へと変化してゆく。それがアインズ・ウール・ゴウンの日常だった。

懐かしさを覚え、会話がどんどん弾む。まるで在りし日のように。

「はははっ。いやあ、でも、そうか。元の世界がどうたらとか考えたことも無かったな。モモンガさんは色々考えて凄いですねえ」

「そんな大した物じゃないですよ。ただ心配性なだけですから」

「何でしたっけ、タブラさんが言ってたの。『モモンガさんは石橋を叩き壊してからその隣に鉄橋を作って、結局＜飛行＞で空中に浮いてから転移魔法で川を渡る人だ』でしたっけ？」

「うわあ、懐かしいなあ！ 私そんな人じゃないと思うんですけど、何でかみんなその通りだって言うんですよね」

「いやあ、良く表してると思いますよ」

「ええー、そうですかあ？」

懐かしさで張り詰めていた緊張の糸が緩んだのか、二人は異世界に来てから初めて心の底から笑い合った。

第六話 楽しみ

(……どうしてこうなった?)

薄暗い通路に立ち、壁に隠れて顔だけ少し覗かせて光溢れる空間を窺う。それはまるで巣穴から外を警戒する小動物のようであった。引き攣った笑みを浮かべ、フォーマルハウトは一際大きな溜息を吐いた。

そして、もう一度自問する。

(どうしてこうなった……?)

一度目よりも弱々しく、しかし疑問の色は強く。

フォーマルハウトが立っている場所は第六階層闘技場のアリーナへと続く通路だ。アリーナは剣技魔法の飛び交うユグドラシルでも観客席に被害が出ないよう十分な広さをしており、魔法で作られた照明らしき光球が中空から全体を照らしている。

観客席はその逆で、照明が当たるアリーナ部分をより強調するためか魔法によつて暗くされていた。完全な闇では無く、薄いカーテンが閉じられて僅かな月明かりが差し込む部屋くらいの暗さだろうか。

闘技場は普段からこういった装いなのではない。かつてユグドラシルにおいてナザリックへと侵入して来た侵入者たちを迎え撃つた際も、このような状態にはなかった。

ここは本来であれば闘技場とは名ばかりの劇場。或いは処刑場だ。幾層にも分かれた観客席にはゴレムたちが居並び、その更に上に設置された貴賓席には至高の四十一人たるアインズ・ウール・ゴウンのギルドメンバーたちが座る。

そして、見下ろすのだ。

ナザリックに侵入してきた哀れな侵入者どもを、処刑人として選ばれたギルドメンバーたちが蹂躪する様を。処刑と言う名の喜劇を。

しかし、今日この時だけは特別。特別な催しが開かれる。ゆえに処刑場は正しく円形劇場として、特別な装いを施されるのだ。
アシフィテートルム

観客席に並べられていたはずの無数のゴレムたちは消え失せ、代わりにナザリックに住まうシモベたちが期待に満ちた表情を浮かべ

ながらひしめき合っている。戦闘能力皆無なNPCである一般メイドたちから単なる防衛用に配置したに過ぎず、名前も存在しないモンスターたちまで様々だ。

さらにその上に位置する貴賓席には漆黒のローブを纏ったナザリック最高支配者たるモモンガと、それに付き従うように階層守護者たち、そして立場上は他の者たちに一步劣るヴェルフエニアが座っていた。

言うまでも無く、ヴェルフエニアがそこに座っているのは特別待遇によるものだ。

「……はあ」

再び、今度は短く溜息を吐く。

（確かに、確かに守護者と戦つてみたいとは言った。でもこんなに観客がいるなんて聞いてないですよ、モモンガさん！）

恨めしそうに貴賓室に座るモモンガへと視線を向ける。するとフォーマルハウトの呪詛が通じたのか、モモンガからの〈伝言〉が届いた。

《フォーマルハウトさん、そろそろ時間なので最終確認お願いしますね》

「待て腐れ骸骨。何でこんなに観客が集まつてるんですか」

観客席は満員御礼。このナザリック地下大墳墓が完成してからこれまでで最も多くの観客を動員している。

《あー……それは、すみません。警備に穴を開けるわけにはいかないのでアルベドに相談したんですよ。したら是非観戦したいと言い出しまして……他の者も誘いたいと言っていたので警備に穴が開かないなら、と許可しました》

「で、これ、と」

死んだような目で壁際から観客席を覗き込む。

観客席はかつてないほどの満員御礼。忠誠を捧ぐ至高の存在の戦いを見れるとあつては見学希望者も後を絶たず、アルベドとデミウルゴスがその規格外の知能を以て警備スケジュールを調整し、各階層必要最低限の者のみを残して殆どのシモベがこの場に詰め掛けている。

観客席にはNPCが優先的に入場を許され、入りきれなかったシモベたちはその空気だけでも味わおうと闘技場の外に集まっている。無論それだけではなく、闘技場外にいる者たちや警備の都合上第六階層へと訪れることが出来ない者たちへの救済措置として、マジックアイテムによる模擬戦の中継生放送が行われる。

《ここまで話が大きくなるとは思わなくて……すみません。でも、フォーマルハウトさん、公式PVP大会とかよく出てましたし、観戦ありでも大丈夫ですよね?》

「ここ、ゲームじゃないんですよ……現実なんですよ……それにユグドラシルでも緊張してなかったわけじゃないです。慣れてただけで」
《……えっと、頑張ってください。NPCたちもかなり期待しているみたいなので》

「プレッシャーかけんなあ!」

＜伝言＞を終了したフォーマルハウトはまたも溜息を吐いた。

「はあ……仕方ない。装備確認でもするか」

そう自分に言い聞かせて、フォーマルハウトは自分の体の各所を手と目で確認する。

フォーマルハウトの武装はユグドラシルでも極めて高い水準で纏められている。

まず全身が普通に入手出来る中では最高位である神器級アイテムだ。

身を包むコート状の黒い軍服は、現実世界での欧州アークロジール戦争が勃発した時に話題になったネオナチが纏っていた軍服を参考に作成され、ボタンやベルトなど細部に至るまで精巧に再現されている。

性能はと言うと、丈夫さと柔軟性、そして動きやすさを優先されているため防御力は神器級の希少金属製の鎧に一步劣るものの、身体能力——取り分け筋力を大きく増加させる効果と、通常ではあり得ないほどの武器破壊に対する高い耐性を秘めている。

艶のある皮で出来た軍靴はユグドラシルにおける超々希少金属である七色鉱の一つ、ヒヒイロカネで出来た合金板が埋め込まれたもの

で、その強度はもちろんのこと、移動速度増加や蹴り攻撃の威力増加などの効果が込められている。

真つ白な手袋の上から付けられた指輪も全てが神器級だ。これらはフォーマルハウトへと極めて高い能力上昇や状態異常に対する耐性などのパッシブ効果を与えている。前衛として戦うフォーマルハウトには無くてはならない効果を持つものばかりだ。

ただし、右薬指にはリング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンが装備され、左薬指には何も付けられていない。

全身の装備を揃えるのに一体どれほどのゲームマネーを使ったのか分からないほど高価な装備品ばかりだが、最も特筆すべきはその両手を覆う真つ白な手袋だ。

見る者が見れば、全身一級品で固められた装備の中でも一際凄まじい存在感を放っていることがわかる。

世界級アイテム、焰王の慟哭。

ユグドラシルにおいて最初に生ける炎となったフォーマルハウトに運営から贈呈された、専用世界級アイテムだ。その能力はフォーマルハウト専用にかスタマイズされており、フォーマルハウトが使うことよって百パーセントの能力を発揮出来る。

それは悍ましいとすら称される能力を秘めており、手の甲部分には灰色の糸でその悍ましさを象徴するかの如き形容し難い奇妙な紋章が刺繍されている。

見た目だけなら手袋のように見えるが、これはユグドラシルの分類上はガントレットに属する武器だ。防具や装飾品の類ではない。

手の平を見つめながら幾度か手を開閉して感触を確かめ、笑う。

手は僅かに震えていた。手だけではない、全身が小刻みに震えている。しかし、寒いわけではない。肉体を持たず、炎の化身である生ける炎は寒さを感じない。そしてこれは恐怖からによる震えでもない。

戦いの前にはいつもこうだった。ユグドラシルから変わらない。自分是不変ならない。それを自覚して静かに笑みを浮かべる。

「すう……はあ……。さて、楽しみだ」

武者震いする体を深呼吸で落ち着けながら、フォーマルハウトは笑顔を浮かべる。

緊張し、友人へ文句を垂れていた青年はもういない。

そこにいたのは、これから訪れるはずの戦いを楽しみにする一人の男だった。

◆ ◆ ◆

ひしめき合う観客たちの熱気と期待が渦巻く観客席の更に上にある貴賓席では、階層守護者たちとヴェルフエニアがその時を今か今かと待ち続けていた。

本来であれば彼らはこの貴賓席に座る権利を持つてはいない。領域守護者であり、階層守護者と比べて立場が劣るヴェルフエニアは特にそうだ。ここは至高の四十一人のみが座ることを許された席なのだから。

しかし、それでも彼らが座っているのはモモンガの提案によるものだからだ。

モモンガとしては想定していたよりも大事になってしまったのはフォーマルハウトには申し訳なかった。だが、もう修正は不可能と判断した結果、どうせなら守護者たちと楽しく観戦しようと開き直った。

守護者たちを誘わなければ四十一人座れる十分な広さを持つ貴賓席にたった一人で座って寂しい思いをしなくてはならず、それでは楽しめるものも楽しめない。だから、アルベドを始めとする階層守護者たちと、主役であるフォーマルハウトが創造したヴェルフエニアを貴賓席へと誘ったのだ。

守護者たちもヴェルフエニアも最初は固辞したが、やはり嬉しいのか今は自らの創造主たちが使っていた席に嬉々として着席している。アルベドだけはタブラ・スマラグデイナの席では無く、モモンガの隣に座っているが。

この場に居ない階層守護者は二人。アウラとコキュートス。付け加えるならば階層守護者ではないが、セバスもだ。

アウラは第六階層守護者として司会として準備をしている。

コキュートスは武器戦闘に長け、至高の存在に対しても武人として加減無く戦えるという理由と、本人の強い希望により模擬戦相手として抜擢された。

セバスは一般メイドやプレアデスたちも観戦に出払ってしまう中、自分も観戦に向かつて第九階層に誰もいないなどという状況は作れないと言って観戦自体を固辞した。

「シャルティア。守護者最強である君はどちらが勝つと考えるかね？」

デミウルゴスが眼鏡のブリッジを持ち上げながらシャルティアに問い掛ける。

シャルティアはガチビルドNPCとして生み出され、単体で物理攻撃、魔法攻撃、補助、治癒、回避が可能であり、索敵を除くあらゆることを一人で行うことが可能だ。その全てが高水準で噛み合っており、ナザリツクに存在する百レベルNPCの中でも序列一位、総合力最強と言われている。

「……そうでありんすねえ。心情的にはフォーマルハウト様の圧勝と言いたいところでありんすが、フォーマルハウト様は前衛でありながら魔法詠唱者マジック・キャスターと聞くでありんす。そうなるとステータスの差でコキュートスの方が有利だと思ひんすが」

「なるほど」

「で、でも、フォーマルハウト様はコキュートスさんの弱点の炎属性に特化してる御方ですよ？　だ、だから、フォーマルハウト様の方が有利なんじゃないんですか？」

「コキュートスも炎属性に対する完全耐性を持つているはずでありんす。至高の御方でありんすから耐性を貫通してダメージを与えてもおかしくはないでありんすが、ゼロが百になるとは考えられんせん。それに対してコキュートスは武器攻撃でありんすし、様々な武器を使うであります。前衛としての戦いに特化し、相手の魔法に対策した戦士と前衛として魔法も交えながら戦う魔法詠唱者マジック・キャスターでは魔法の効きが悪い魔法詠唱者の方が不利だと思ひんす」

マーレの考えは正しい。

コキュートスは炎属性を弱点としている。生半可な炎であればその体から放出される冷気で無効化出来るだろうが、相手はその扱いに特化しているフォーマルハウトだ、属性的に言えばフォーマルハウトの方が相性が有利だ。

しかし、シャルティアの考えもまた正しかった。

コキュートスは炎属性に対してアイテムなどにより耐性を獲得しているため、炎属性攻撃は軽減或いは無効化されてしまう。それに加えて二十一種類の様々な武器を有しており、それらを状況に応じて使い分ける高い対応力も持つ武器戦闘に特化した武人だ。

話を聞いていたアルベドは驚愕の表情を浮かべていた。

「シャ、シャルティアがまともなことを言うなんて……モモンガ様、天変地異の前触れかも知れませんが、ご注意を」

「どういう意味でありんすか!」

「まともなこと、という事は君も同じ意見なのかね、アルベド?」

「……ええ、そうよ。ただ、フォーマルハウト様の実力ははっきり言って未知数だわ。魔法詠唱者である以上筋力は戦士であるコキュートスと比べて低いはずだから、常識に当て嵌めれば概ねシャルティアが正しいと思うわ。特に今回フォーマルハウト様は御一人だから、援護も望めないわけだし」

「ふむ、私も同意見だね。君はどう思うね、ヴェルフニア?」

このナザリックにおいて、唯一フォーマルハウトに創造された存在であるヴェルフニアへと話が回って来たのは当然のことだろう。恐らくこの地でフォーマルハウトのことに最も詳しいシモベは、彼の被造物であるヴェルフニアだ。

「……さて、どうだろうな。概ね私も同意見だ。感情的に言えばフォーマルハウトに勝って欲しいがコキュートスが万全な対策を施しているのならコキュートスが有利だろう」

「あなたもそう思うでありんすか? てつきり私たちが知らない御力を知っていて、自信満々にフォーマルハウト様が勝つと思うと思つたでありんすが」

「私は第八階層から出たことがないからな。あれが遊びに来ることは

あっても、第八階層で他の御方々と模擬戦をすることはなかった。実のところ、私はフォーマルハウトの力についてお前たちよりほんの少し知っている程度なんだ」

「なるほど、そうでしたか。では、モモンガ様はどう思われますか？」
満を持して、といった雰囲気だ。他の守護者たちからの期待の視線がモモンガの背中へと突き刺さる。

普段であれば、期待の込められた視線に晒されて沈静化などを起こしてもおかしくはなかったのだが、今のモモンガはとてもしラックスしていた。モモンガにとっては答えの知れている質問だったからだ。
「ははは」

愉快そうなモモンガの笑い声を聞いて、守護者たちは戦慄した。それが嘲笑の類だと思ったからだ。

考えてみれば、自分たちはなんと不敬な発言をしていたのだろうか。あくまで勝負事であるから公平な目線での勝敗予想だった。しかし、それでも至高の四十一人の勝利を疑った。なんとという不忠か。それを聞いて、呆れ果てた最高支配者は愚かな自分たちを嘲笑しているのだ。

そう後悔した守護者たちの背筋を冷や汗が伝う。

もし失望され、モモンガが他の者たち同様にナザリックを去つたら。もしかしたらフォーマルハウトまでも一緒に去ってしまうのではないか。それはまさしくこの場にいる全員にとっては悪夢以外の何物でもない。

「も、申し訳ありません、モモンガ様！」

アルベドが青い顔をしながらモモンガに対して頭を下げる。それに倣うように守護者たちも椅子から床へと跪き、頭を下げる。

その突然の豹変ぶりにリラックスしていたはずのモモンガは虚を突かれ、びくりと身を竦める。

幸いにもその挙動は頭を下げていた守護者たちからは見えなかったようだ。

（えっ!? 何で突然謝ってるの!? 謝るようなことなんてしたか!?)

守護者たちが沈痛な面持ちで俯く中、モモンガの先ほどまでの余裕

は吹き飛んで沈静化が発生する。しかし、何とか声を絞り出せたのはギルドマスターとしての矜持からだろう。

「う、うむ。気にする必要はない」

沈静化が引き起こされて冷静になった頭でも結局守護者たちが蒼褪めている理由は分からなかったが、とりあえず鷹揚に領いて許しを述べておく。

「し、しかし、不敬にもフォーマルハウト様の勝利を疑うかのような発言。至高の御方々にお仕えするシモベとして許されるものでは……」（ああ！ そういうことか！ 俺が『何言ってるんだこいつら馬鹿か』的な感じで笑ったと思っただな！ それで失望されたと勘違いして謝ってるのか！ 忠誠心高すぎるんだよなあ。それ自体は嬉しいんだけど行き過ぎているというか……少し震えてるし）

顔を蒼褪めさせながら恐怖に震えている守護者たちを安心させるように、モモンガはなるべく優しく諭すようにして話す。

「良い、良いのだ。それと、笑ったのはただ愉快だったからだ」

「ゆ、愉快で御座いますか？」

「そうだ。いや、誇らしくもあつたからか。今この場にいる者でフォーマルハウトさんの力を知っているのが私だけだという優越感、と言えばいいか。ふふ、まるで子供の様だな」

楽しそうに喋るモモンガを見て、守護者たちはほつと胸を撫で下ろした。

「お前たちの予想は正しい。私とて何も知らなければお前たちと同じ考えをしていただろう。いや、そういう意味ではむしろお前たちはフォーマルハウトさんを過大評価していると言えるだろう」

「ど、どういうことですか、モモンガ様？」

「マーレよ、ユグドラシルの常識に当て嵌めればにおいて彼はとても歪な存在なのだ。魔法詠唱者として高い能力を持つ精霊^{エレメンタル}であるにも関わらず、戦士系職業の基本職であるファイターを取得し、パイロマンサーなどの魔法詠唱者系の職業も取得している。そして前衛として戦う戦闘スタイルだ。通常であれば、そんなことをしていると中途半端になりがちなのだ。だから常識に当て嵌めて考えるのならば、中

途半端な彼ではコキユートスに対して勝率が極めて低くなるだろう」
モモンガは得意気に語る。

無二の仲間たちであるアインズ・ウール・ゴウンのメンバーたちのことを語るのはとても気分の良いことだ。聞き手であるナザリックの者たちも興味津々と言った様子で瞳を輝かせながら聞いてくれる。

普段は余り饒舌とは言えないが、この時ばかりはすらすらと言葉が口から滑り出していた。

「だが、彼は歪なのだ。ユグドラシルの常識に当て嵌められないほどに。異常と言ってもいいだろう」

「では、モモンガ様は知られており、私共では知らない力をフォーマルハウト様は有しておられる、ということでしょうか？」

「そうだ」

フォーマルハウトが本気を見せるのは専らナザリック外でのことだ。

ナザリックでギルドメンバー同士の模擬戦などを行うこともあるが、それは身内同士の訓練のようなものであって本気で相手を殺そうとしているわけではない。だからフォーマルハウトがナザリック内で本気で戦う場面はとても少なく、例外があるとすれば侵入者迎撃の時のみだ。

それにユグドラシルでは守護者たちは単なるNPCという認識であり、わざわざ模擬戦や迎撃戦を見せようとは思わなかったし、当然だが本人たちが観戦を希望する声を上げることもなかった。

守護者たちNPCが創造主たちの力を知る機会があるとすれば、運良くギルドメンバー同士の会話を耳にするか、偶然に模擬戦や迎撃戦を目にするか以外はない。

「では、モモンガ——様はフォーマルハウトが勝つ、と？」

「……ふむ。それは難しい質問だな、ヴェルフニアよ」

ユグドラシルであればフォーマルハウトが勝つと即答していただろう。

ゲーム内では単なるNPCであったコキユートスは設定されたAIに従って動くだけの存在だ。臨機応変に行動し、AIの穴を突くこ

とが出来るフォーマルハウトが勝つのは間違いない。しかし、ここはゲームではなく現実の世界だ。

ゆえに曖昧な返事を返したモモンガだったが、実際はどうしてもフォーマルハウトが負ける光景が想像出来なかった。

「まあ、見ているがいい。もうすぐ始まるのだから、正解はその目で確かめよ。そして、どのような結果になろうとも自らの糧とするのだ」
『はっー！』

声を綺麗に揃えた守護者たちはそれぞれの席へと着席し直し、引き締まった表情でアリーナを見つめる。

これからここで行われるのは敬愛する至高の四十一人の一人、フォーマルハウトの戦いだ。滅多に訪れない貴重な機会を無為にするつもりは元よりなかったが、最高支配者たるモモンガに命じられ、より一層気を引き締めた。



『さあ、時間となりましたので始めさせて頂きます！ ナザリック地下大墳墓が支配者！ 至高の四十一人が一人！ 偉大にして至高なる暴虐の王！ フォーマルハウト様の御入場です！』

マイクの形をした拡声用マジックアイテムでアウラが催しの開始を告げる。

通路でその時を待っていたフォーマルハウトは最後にもう一度だけ深呼吸をして、光が溢れているアリーナへと歩を進めた。そして、フォーマルハウトがアリーナへと姿を現した途端に闘技場が歓声で包まれた。

（暴虐の王は確定なのか……もっとう、格好いいの無いのか？ 赫灼とか使ってほしいな、響きも字面も格好いい。というか、警戒態勢中なのにこれは大丈夫なのか？ せっかく隠蔽しようとしているのに外に音が漏れてたりしないだろうな）

シモベたちの状態はもはや一種の狂乱状態にあった。

今か今かと待ち侘びていたところに姿を現した支配者の堂々たる風格に、シモベたちは喉が張り裂けんばかりの歓声を上げている。その音量はナザリック全体が揺れているのではないかと錯覚するほど

の大音量だ。

事実フォーマルハウトはそれによって引き起こされた空気の振動を肌で感じ取っている。

少しだけ未知の世界に対する心配をしながらも、その意識はすぐにアリーナの中央部分で佇んでいる大きな人影に向けられた。

白銀のハルバードを携えた、二・五メートルはありそうな巨大な影。ライトブルーの鎧のような外骨格に身を包んだ二足歩行の人型昆虫。周囲に広がる霧のような白い靄はパキパキと凍てつくような音を立て、上空の特別照明を反射して煌めく。

第五階層守護者、凍河の支配者コキユートスだ。

その四本の腕には煌びやかな手甲を付け、足には白銀の足輪が装備されている。首からは黄金色の巨大な円盤型のネックレスが下げられていた。

これらはコキユートスが本気で戦う際に装備するアクセサリ類だ。

フォーマルハウトの入場を確認すると同時に、興奮を抑えきれぬ様子でブシユウと大顎の奥にある口腔から冷気を放出し、コキユートスは跪く。

「……」

フォーマルハウトがコキユートスの下に辿り着く。しかし、何も起こらない。

（……え、あれ？ これ、俺が何か言うの？ 何も聞いてないんだけど？）

現実ではただの会社員であったフォーマルハウトに咄嗟にこんな状況に対応出来る能力などあるはずもなく、混乱して硬直する。

目の前で跪いているのは部下だ。部下とスポーツを楽しむようにして試合会場に訪れたら相手が跪いて待っていたのだ。そんな経験がある人間は極めて稀有な存在だろう。

混乱しているフォーマルハウトに対し、コキユートスは身動きもしない。目の前に立つのは至高の四十一人であり、自らが敬愛し、忠誠を誓う主の一人だ。許しが無い限りは頭を上げるべきではないし、口を開くべきでもない。そもそもそうするつもりもない。しかし、内心

では焦っていた。

自らの前に立ち、じつと静かな視線を向けつつも口を開かぬ主の様子に、何か失態をしただろうかという自責の念が押し寄せる。

目の前にいて視線を注いでいるのだから、自分の存在に気付いていないはずはない。跪いて頭を垂れているためにその表情は窺えないが、自らがの創造主によって与えられたスキルによって向けられている視線を感じ取ることは出来た。しかし、主がその口を開くことは無い。

その原因に心当たりはなかった。少なくとも臣下として、完璧な礼節を見せたと自負している。

(……マサカ)

必死に思考を巡らせ、ようやく一つの仮説に辿り着く。

(私が浮カレテイルコトニオ気付キニナラレ、咎メテオラレルノカ……?)

まさしくコキュートスは浮かれていた。

いつかは至高の存在と手合わせをしたいと常々思っていた。その考えは一介のシモベに過ぎない身でありながら不敬であると自認していたが、それでも武人として生み出された者の性として密かに願っていた。そして、それが今日叶ったのだ。

真剣勝負では無く模擬戦という形ではあるが、そんなことは些末なことだった。ただコキュートスにとって重要なのは二点、至高の四十一人の一人と手合わせ出来るということ。そして、模擬戦相手という榮譽を賜ったからには満足させるに足らなければならないということだけだ。

しかし、目の前の主はそれが気に入らなかったのだろうと思いついた。では何が正解なのだろうか、それはコキュートスにはさっぱりだった。

「コキュートス、顔を上げろ」

「ハッー」

コキュートスが再び思考の渦に飲み込まれそうになったところで、フォーマルハウトは口を開いた。

(危なかつた……モモンガさんから＜伝言＞^{メッセージ}がなかつたらあのまま立ちっぱなしだったな)

コキユートスが様々なことを考えている間に、フォーマルハウトはモモンガからの＜伝言＞^{メッセージ}を受けてようやく膠着状態から脱する手を得た。

モモンガ曰く、こちらから何かアクションを起こさなければダメ。そう言われてシモベたちの狂信的なまでの忠誠心を未だ舐めていたことに思い至って、心の中で面倒臭いなど叫びながら口を開いたのだ。

しかし、コキユートスは再び混乱していた。自らが気付くまで終わりが無いと思っていた状況が突如として動いたのだ。そして恐怖する。待てども問題に辿り着けない自分に呆れてしまったのではないかと。

恐怖に肝を冷やしながらも、主の命令に逆らうことは出来ない。何が失態なのかすら仮説である状況ではあるが、これ以上失望されるわけにはいかないのだから。

「コキユートス、まずは忙しい中でこうして模擬戦の相手を名乗り出してくれたことに感謝しよう」

「ハッ！ シカシ、感謝ナドオ止メ下サイ。私ハ至高ノ御方々ノ忠実ナルシモベ。フォーマルハウト様ニゴ満足頂ケルヨウ、全身全霊ヲ以テオ相手ヲ務メサセテ頂キマス」

「……ふむ。少し緊張してるか？ コキユートス、一つ聞こう。お前は何か？ お前はどのような存在だ？」

「ハッ、私ハ一振りノ剣デアリ、ソシテ一人ノ武人デ御座イマス」
コキユートスは自らを一振りの剣と見做している。

主の命に従い、その邪魔をする者の悉くを斬り伏せる一振りの剣。それこそが創造主である武人建御雷に武人として生み出された己の存在意義。

一点の曇りも無く告げられたこの答えに、フォーマルハウトは愉快そうな笑顔を浮かべた。

「なら余計なことは考えるな。武人なんだろう？ 剣なんだろう？」

だったら余計なことは考えず、今は目の前にある戦いだけを想えば良い。そして楽しめ。建御雷さんはいつもそうしていたぞ?」

その言葉に、コキュートスは言葉を失った。そして同時に気付く。これだ、と。

武人建御雷に創造された武人として、剣として、誰かを楽しませるなんてことは考えずに、ただ目の前に迫っている戦いだけを想え。妙なことは気にせずに敬愛する創造主のように、戦士としての輝きを見せてみる。そう言いたいのだと。

コキュートスの身が歓喜に震える。自分の正しい在り方を再認識し、それを主に示して貰えたという喜び。相手を楽しませるなど何と無粋なことだろうか。

(ソナ事ハ道化か吟遊詩人ニデモ任せテオケバ良イ。ナラバ私ガスベキ事ハ、至高ノ御方ト剣ヲ交エル喜ビヲ嚙ミ締メナガラ、タダ全力デ剣ヲ振ルウ事ノミ)

己の無粋さと、武人であれと創造されたにも関わらずそうあれなかったコキュートスは自らを恥じたが、それ以上に晴れやかな気持ちだった。

「ハッ! 申し訳アリマセン、余計ナ事ヲ考エテオリマシタ!」

「謝る必要はない。さあ、俺は模擬戦を希望しただけで今回のルールとかは何も聞いてないんだ。だから何かルールでもあるのなら教えてくれるか?」

「畏マリマシタ。基本的ニハ相手ヲ死ニ至ラシメルヨウナ事ヤ観客ヲ巻キ込ムヨウナ事ヲシナケレバ良イトモモンガ様ヨリ伺ツテオリマス」

「なるほど、まあ当然だ。他には?」

「ハイ、世界級アイテムノ効果ヲ使用スルノハ禁止トノコトデス。装備スルダケナラバ問題ハナイト仰ツテオラレマシタ」

「分かった。もう無いか?」

「ハッ」

モモンガが今回の模擬戦に関して決めたルールは三つだ。

まずは当然のこととして相手を殺してはいけない。

NPCであるコキュートスはユグドラシルの仕様に基づくならばデスペナルティ無しで容易に蘇生可能だが、それがこの異世界でも可能という保証はない。さらに言えばNPCの蘇生にはユグドラシルにおける金貨が必要だが、それがこの世界でも手に入るとは限らない。手に入る当てがない限り気軽に消耗するわけにはいかないだろう。

そしてプレイヤーであるフォーマルハウトの場合はもっと問題だ。デスペナルティはあるのか。蘇生魔法の仕様にユグドラシルとの違いはあるのか。そもそもプレイヤーが蘇生出来るのか。調べなければならぬことが山積みの状態で死人を出すのは余りにもリスクが高すぎるとモモンガは判断したのだ。

観客も同様だ。そして二人よりも死亡する可能性が極めて高い。

何せ観客のほぼ全てがフォーマルハウト、コキュートスよりもレベルが低い。一般メイドに至っては一レベルだ。ユグドラシルではレベル差が十あれば、生じるステータス差によってほぼ絶対に勝てないと言われている。もしも百レベルの攻撃に一レベルの一般メイドが巻き込まれれば、痛みを感じる間もなく消滅してしまうだろう。

そして、ワールド世界級アイテムだ。

ワールド世界級アイテムは文字通り世界に匹敵するアイテムだ。物によっては運営に対し、ユグドラシルの仕様変更を要求することが出来るほどの壊れアイテム。それを異世界で使って何か起きてからでは取り返しが付かない。

モモンガもフォーマルハウトも現在装備中であり、装備する分には問題無いことは確認できているため、効果の起動さえしなければ良いと結論を出した。

「では始めようか。開始の合図は？」

「アウラガ合図スル事ニナツテオリマス」

「よし、では楽しもうか」

「ハッ！ 楽シマセテ頂キマス！」

会話を終え、二人は距離を取った。

互いの距離を五メートルほど離れたところで立ち止まり、戦闘開始

の合図に備える。

コキユートスは虚空から取り出した武器を四本あるそれぞれの腕に持った。

上側にある二本の腕はそれぞれ白銀のハルバードを一本ずつ構える。それは本来ならば両手で扱う巨大な武器であるはずなのに、大きな体を持つコキユートスが構えると片手で扱うことが普通であるかのように小さく見えた。

下側の右腕には赤黒い片刃のロングソードを持っている。刃幅の広いサーベルのような形状をした剣は黒が血を吸って赤く染まったような禍々しい色をしている。左腕には反りの浅い見事な鋭利さを持つ刀だ。一見何の変哲もないように見える刀だが、柄も鏝も見事な造りであり、光りを反射して輝く刃を見ればそれが普通の物でないということが分かる。

フォーマルハウトはそれを見ても何もしなかった。構えるようなこともしなければ、腰を落とすことすらなく、あくまで優雅に佇んでいる。その顔は薄く笑みを浮かべており、傍目から見ればコキユートスを侮っているようにも見えた。

しかし、コキユートスもアウラもそれに疑問を感じない。至高の存在がそうしているのであればそれが正しいのだ。

『フォーマルハウト様、準備は宜しいですか？』

「ああ」

『コキユートスは？』

「問題ナイ」

『両者準備が整ったようなので、そろそろ試合を開始したいと思います！ あたしがこのベルを鳴らしたと同時に試合開始です！』

ざわついていた観客席が静まり返る。否、静寂に包まれるのはナザテムによる中継映像を固唾を飲んで見守る。

音が消えた世界で、フォーマルハウトは瞳を閉じた。

(……この感じ、懐かしいな)

戦闘開始前、観客たちが固唾を飲んで見守る僅かな静寂。参加者へ

と向けられる観客たちの視線。緊張に胸は高鳴り、武者震いで体は僅かに震えている。

静寂は心地良く、視線は不快なものではなく、鼓動はこれから始まる戦いへのカウントダウンだ。

結局最後まで慣れはしなかったが、ユグドラシルで幾度も味わったこの感覚が嫌いではなかった。

NPCたちも期待している。そうモモンガは言っていた。その言葉はプレッシャーにもなったが、もはやそれすらも心地良い。

『試合……開始！』

アウラの手の中にあつたベルが発した。

刹那、コキユートスは凄まじい速度で距離を詰めた。

フォーマルハウトとコキユートスの間には五メートルの距離があつたが、百レベル同士の戦いではそんな距離は無いに等しい。瞬きする間に詰めることも出来る。即ち、フォーマルハウトの立ち位置は既にコキユートスの間合いにあつた。

近接戦を得意としているとは言え、魔法詠唱者でありながら本職である戦士に距離を詰められても反応を見せないフォーマルハウトを訝しく思いながらも、コキユートスはその迷いを断ち切るかの如く二本のハルバードを上段から同時に振り下ろす。並の相手ならば盾ごと粉碎する威力を持つコキユートスの攻撃を見ても尚、フォーマルハウトは動かない。

白銀のハルバードの刃がフォーマルハウトへと触れる刹那――

「!？」

コキユートスは驚愕する。

目の前の敵手がようやく示した反応を見て、驚愕し、背筋を悪寒が駆け上る。刹那にも満たない時間の間にゾワリと背筋が振るえ上がる。

嗤った。

フォーマルハウトが示した反応はコキユートスの踏み込みの速度に驚愕で目を見開くでもなく、迫る暴力に恐れに慄くでもなく、ただ嗤う。まるで三日月のように口元を歪めながら、愉悦に満ちた表情で

嗤って見せた。

人外の一撃が目の前に迫る状況でこれほど歪んだ笑みを浮かべる主を見て、コキユートスは僅かに恐怖を感じた。

装備によって外的要因から来る恐怖という精神作用に対する耐性を持つ自分が恐怖を感じた事に驚愕しながら、その恐れを打ち砕かんと振り下ろすハルバードに更なる力を乗せた。

このままフォーマルハウトへと刃が触ればその肌を切り裂き、肉を抉り、骨を断つだろう。狙っているのは肩であるため死にはしないが、戦闘不能は免れない。

フォーマルハウトはその一撃を目で追いつつ、愉悦の笑みを浮かべながらその一撃を受け入れる。

爆発音と言えるほどの轟音と共にコキユートスのハルバードが大地を打ち砕き、粉碎された地面が巻き上がって二人を覆い尽くした。

第七話 暴虐の王

「フォーマルハウト！」

悲鳴にも近い声で叫んだのはヴェルフエニアだ。椅子を蹴倒すように立ち上がり、血の気の失せた顔で貴賓席から身を乗り出している。

その叫びに応える声は無い。ある者は目を見開き、ある者は目端に涙を浮かべながら、あり得ない事実と言葉を失っていた。

至高の存在であり、最高レベルである階層守護者すら遙かに上回る至高の四十一人が何の反応も見せずにコキュートスの攻撃を受けたのだ。

人外の破壊力を持つ攻撃によって粉碎された大地の破片が飛び散る光景を目の当たりにして、誰もがその破壊力を無防備に受けたであろうフォーマルハウトの身を祈るように案じる。

あの一撃を無防備に受け、ただで済むはずがない。

殺さないのがルールとして定められているとはいえ、あそこまで無防備に攻撃を受けることはコキュートスとて想定していなかっただろう。迎撃される、防がれる、避けられる、そういう前提で武器を振ったはずだ。だが結果、フォーマルハウトは攻撃を無防備に受けた。

なぜ、と言う疑問が観客たちの頭の中を駆け回る。

反応出来なかったはずがない。至高の存在であるのだから、そう考えることすら不敬だ。何か理由があるはずだ。だから無事なはずだ。

誰もがフォーマルハウトの死という想定される最悪の状況から目を逸らした。

ただ一人を除いて。

「素晴らしい一撃だな、流石はコキュートスと言ったところか」

守護者たちはその称賛を耳にして愕然とする。

視線を向けられたモモンガは反応を返すこともなく、眼窩の奥にある赤い炎のような瞳を楽しそうに揺らめかせた。

「モ、モモンガ様？」

喘ぐように名を呼んだのは誰だろうか。その声には、友と呼ぶ存在

があれだけの攻撃を受けて平然としてるモモンガに対しての驚愕と畏れが込められていた。

しかし、当のモモンガからすればそれは的外れな反応だった。

「みな落ち着くのだ。フォーマルハウトさんがあの程度の攻撃……と言うのは適切ではないが、死ぬわけがない」

「し、しかし……」

「ふふ、まあ見ている。しかし、あの人らしいな」

笑いながらモモンガがそう言ったのと、巻き上がった土煙の中からコキュートスが弾き飛ばされるようにして飛び出したのは同時のことだった。

◆ ◆ ◆

コキュートスは自分の目に映ったフォーマルハウトの動きが信じられなかった。

空中で体勢を整え、地面に赤黒い剣を突き立てて威力を殺しながら着地する。

ハルバードを振り下ろした瞬間、フォーマルハウトはそつと迫る刃の腹を押し退けたのだ。優しく、撫でるように。それだけでハルバードは大きく軌道を逸らされてフォーマルハウトの横を素通りし、地面に叩きつけられた。そのすぐ後に腹部に尋常ではない衝撃を受けて吹き飛ばされていた。

(……マサカアレダケノコトデ私ノ攻撃ヲ逸ラストハ。ソシテ、何ダ、コノ反撃ノ重サハ?)

コキュートスの体を覆う外皮鎧の硬度は伝説級の全身鎧を超える。ゴツ神器級にまでは至らないものの、生半可な攻撃ならばダメージを受けることは無い。加えてコキュートス自身の耐久力も最大級を誇っている。

いくらファイターやストライカーを習得しているとはいえ、魔法詠唱者に分類され、筋力に乏しい精霊種であるフォーマルハウトの物理攻撃では大きなダメージを受けないはずだった。

しかし、現にコキュートスは外皮鎧の防御力を上回る攻撃を受け、それなりのダメージを負っていた。さらに吹き飛ばされて着地した

位置はフォーマルハウトの立つ位置から十メートルも離れている。

フォーマルハウトがどのようなようにしてこれほどの打撃を放ったのか、コキュートスには全く分からない。神器級ゴッズアイテムの効果によって身体能力が引き上げられているとはいえ、一級の戦士と比べても遜色が無いというのは異常だ。

「はははははは」

「ツーン」

土煙の中から楽しそうな笑い声が響き、コキュートスはすぐさま立ち上がって武器を構える。ダメージを負いはしたが問題は無い、まだ十分に戦えるだけの力をコキュートスは持っていた。

「いや、楽しいな。本当に楽しいぞ、コキュートス。そうか、これが実戦か……素晴らしいな。確かにユグドラシルとは違う。本物の殺気。迫り来る武器に対して湧き上がる恐怖。他者を殴った時の感触。全てがリアルだ。ああ、本当に楽しいぞ！」

やがて土煙が晴れ、姿を現したフォーマルハウトは全くの無傷だ。フォーマルハウトは攻撃を受ける瞬間、真直ぐに進んでくるハルバードに対して真横から正確に力を与えて押し出した。それによって力の方向を変えられたハルバードは軌道を逸らされ、地面を大きく穿つだけに留まったのだ。

言葉にすると簡単ではあるが、それを実際にやるのは極めて難しい。超速で動く物体に真横から正確な位置に対して適切な力を与えなければ、あれほど小さな動きだけでそれを成すことは出来ないのだから。

別にフォーマルハウトが格闘技に関する天才というわけでは無い。ただユグドラシルにおける前衛としての膨大な戦闘経験と、百レベルの身体能力がそれを可能にしたのだ。

特大の攻撃を受けてもその場から全く動いていないように見え、無傷で楽しそうな笑顔を浮かべている事実には、先ほどまで狼狽していた観客たちは驚愕し、歓喜する。

歓喜は歓声となり、再び地鳴りを引き起こすような大音量となってナザリツク中へと響き渡った。

「ソレハ、ヨウ御座イマシタ」

言葉を返しながら、コキュートスは武器を握り直す。

「次はこちらの番だ。行くぞ、コキュートス」

フオーマルハウトが足に力を込め、地面を蹴った。蹴られた場所が爆発したような轟音を上げて飛散する。

瞬時に十メートルの距離を詰めて懐に潜り込んだフオーマルハウトを迎撃しようと、コキュートスが左下から右上へと切り上げるようにして刀を振るうが、その刃がフオーマルハウトを捉えることはなかった。

刃が到達するよりも早くフオーマルハウトの腕が伸びた。

辛うじてコキュートスがその目に捉えたフオーマルハウトの手は拳として握られてはおらず開かれており、腹部へと押し当てられた手の平が再び衝撃を生み出す。

まるで金属同士がぶつかる様な音を響かせながらコキュートスは、体勢こそ崩さなかったものの押し出されるようにして数メートル後退させられた。

「ムウ……い」

短い呻き声を漏らしながら、コキュートスはそれが掌底による打撃だと理解した。

攻撃を受けた腹部の外皮鎧は損傷こそしていなかったものの、その内部には未だ衝撃が響いており、ジンジンと痺れるような感覚が残っている。

マジック・キャスター魔法詠唱者が放ったとは思えない攻撃力に驚愕し、畏敬の念を抱く。

しかし、そこでフオーマルハウトの追撃が緩むことは無い。

打撃により開いた数メートルの距離を一足で詰めて肉薄し、さらにコキュートスの体へと薙ぎ払うように腕を振るう。獣が鉤爪で引き裂くかのような力任せの一撃だ。

だが、コキュートスとて素直に追撃を受けるほど甘くはなかった。赤黒い剣の腹で迫り来る手を受け止め、上下からハルバードと刀で挟むように斬撃を繰り出す。

「チッ！」

短く舌打ちしたフォーマルハウトは素早く後方へと飛び退る。僅かに頭部に触れた二本の刃が空を切りながら髪を断ち切った。

目の前にハラハラと散る髪を視界の端に映しながら体勢を整えて、もしも今の斬撃をまともに受けていたらどうなっていたらだろうかと思像する。上下から真つ二つにされていたらだろうか。回避した恐ろしい未来を思い描いて、訪れた悪寒にゾクリと背筋を震わせる。

だが湧き上がってきた感情は恐怖とはまるで別の物だった。

その感情が何なのか理解して、フォーマルハウトは嗤う。ギシリと擬音が聞こえてきそうなほどに歪む唇は三日月のような形を描いていた。

「ははははははははははははははっ！」

自らの異常性を認識して心の底から激しく嗤う。

（ああ、ああ！　なんて楽しいんだ！　ゲームじゃない実戦が！　命を落とすかもしれない戦いが楽しいなんて！）

果たして転移の前、人間であつた頃から実はこうであつたのか。それとも転移した結果にこうなったのかは本人にも分からなかった。

もはやそれすらもどうでもいいと思いを捨てて、ただただ楽しそうに笑い声を上げ続ける。

「行くぞ、コキュートス？　少しだけ本気を見せよう。死ぬなよ」

その言葉が終わった瞬間、コキュートスは熱波に包まれた。同時にフォーマルハウトの体から赤と黒の何かが噴き上がる。

「ヌウ!?」

コキュートスは自らの体力が急速に減っていくのを感じた。ジリジリと焼け付くような熱波に押し包まれ、外皮鎧が焦げたような臭いを発して煙を上げている。まるで溶岩地帯である第七階層に、対策無しでいきなり放り込まれたかのような状態だ。すぐさま対抗して冷気を発するが、その熱を相殺しきることは叶わない。

放たれる熱波の原因と思しき存在へと視線を向ける。

熱波の中心に立つフォーマルハウトは肘から先と膝より下の部分は漆黒と真紅の炎に包まれており、目を背けたくなるほどの凄まじい

熱量を有している。足元の地面はその熱を受けてドロドロに融け出し、その範囲はゆっくりと広がっている。そのままの速度で広がれば、十五分ほどでアリーナのほぼ全域が融けた溶岩へと変わるだろう。

炎に手足を包まれているフォーマルハウトは未だ歪んだ笑みを浮かべており、その炎ではダメージを受けていないことが分かる。

その様子を見たコキュートスが最初に思い浮かべたのは炎を纏うオーラ系のスキルだ。

デミウルゴスの配下にいるイビルロード・ラリス憤怒の魔将が使うスキルであり、炎を纏う事で周囲の存在へと炎属性ダメージを継続的に与える効果を持つオーラを発生させる。

ただ、あれが発生させる炎は赤の一色のみだし、地面を融解させるほどの熱量は発さなかつたはずだ。

相手の発動した能力の正体が分からずに険しい表情を浮かべるコキュートスへと答えを示したのは、他ならぬフォーマルハウトだった。

「憤怒の魔将が使う炎のオーラだけじゃない。加えて俺のスキル、赫灼の衣と紅炎の装威による三重の炎属性継続ダメージだ」

フォーマルハウトの種族である生ける炎クックツグアの固有スキルである赫灼の衣と、特殊職業であるプロミネンスマスターの固有スキル紅炎の装威Ⅲ。

赫灼の衣は炎のオーラの上位版とも言えるスキルで、黒い炎を纏って周囲の存在へと継続的に強力な継続ダメージを与え続ける。

このスキルを習得した時は赫灼と名が付いているのに炎は黒いのかよと突っ込みもしたが、それはそれとして強力なスキルなので重宝していた。

紅炎の装威は武器や防具に一時的な炎属性を付与するスキルだが、最大出力であるⅢでは炎を纏い、炎のオーラと同様に継続ダメージを与えるスキルへと変化する。

これに炎のオーラを加えた三つのスキルに、炎属性の扱いに特化したフォーマルハウトのビルドがダメージを最大限に伸ばすシナジー

を発生させた結果、百レベルであり炎属性に対する対策を行っていたコキュートスに対しても多大な炎属性の継続ダメージを発生させていた。

（マサカ、コレホドトハ……流石ハ至高ノ御方。タダソコニイルダケデ全テヲ焼キ尽クス凄マジキ熱ノ奔流……マサシク、暴虐ノ王）

己では届かない遥かな頂きを見せられたかのような気がして、コキュートスは思わず武器を取り落として平伏しそうになるが、すぐさま首を振ってその思いを掻き消した。それは武人の行いではない。

萎縮しかけた気持ちを奮い立てて、コキュートスは真直ぐにフォーマルハウトを尊敬と畏怖の籠った視線で睨み付ける。

「往キマス」

「それはこちらの台詞だな、コキュートス！」

両者が同時に踏み込む。

コキュートスは武器を振りかぶりながら姿勢を崩さず、地面を踏み碎きながら突進する。対してフォーマルハウトは獣が疾走するような低い姿勢で地面を融解させながら疾走した。

肉薄すると同時、コキュートスは四本の武器を常人には捉えられないほどの速度で幾度も振るい、斬撃を繰り返した。一つ一つが奥義と呼べる領域にある斬撃の嵐は瞬時に十二の斬撃となってフォーマルハウトへと襲い掛かる。

フォーマルハウトはそのうち八の斬撃を見切り、最低限の動きで躲して残る四つの斬撃は炎を纏う腕で弾き飛ばした。さらに跳躍し、空中で体を捻るようにしてコキュートスの顔面へと蹴りを放つ。

眼前まで迫り来る炎を纏ったフォーマルハウトの脚を、コキュートスの尾が迎撃する。

無数のスパイクが飛び出す強靱な尾はコキュートスの顔を守るように振るわれ、蹴りの威力を相殺しようとする。しかし、それでフォーマルハウトの脚が止まることはなかった。

触れた瞬間に先ほどまでとは比べるのも愚かしいほどの熱量がコキュートスの尾を焼き、殺しきれなかった勢いのままに尾ごと顔面へと叩きつけられる。

ぐらりとコキュートスの巨体が揺れる。

「——オオオオオッ！」

コキュートスは雄叫びを上げながら、崩れた体勢のまま黒い剣を斜め下から切り上げた。

両断せしめんと振るわれた黒き剣を回避するため、更なる追撃をしようとしていたフォーマルハウトは後退を余儀なくされる。コキュートスへと押し当てた脚を軸に、曲芸染みた動きで飛び退る。

その動きは魔法詠唱者マジック・キャスターとは思えない。

（ふう……さて、楽しんでばかりじゃダメだ。色々試さなきゃな。体の動きは問題無いどころかユグドラシルの頃より動かしやすい。なら次は……）

この模擬戦は実験的意味合いも含む。であれば、事前に考えていた検証もしていかなければならない。

次は魔法だ。

モモンガの検証によって攻撃魔法も問題無く使えるというのは判明しているが、フォーマルハウト自身は実際に使ったことが無い。

本来ユグドラシルではコンソールとインジケータが表示され、浮かび上がるアイコンをクリックすれば狙った場所へ使いたい魔法が発動された。しかし、当然のことだがユグドラシルで無くなった今はコンソールもインジケータも存在しない。

自分が狙った場所にきちんと魔法を発動させられるのかどうかは、実際に使ってみなければ分からないのだ。

頭の中に無数に浮かび上がる魔法のうちのひとつ、ユグドラシルでもよく使っていた手頃な攻撃魔法を選択し、発動する。

「＜魔法強化・爆炎騎士槍＞」

爆炎騎士槍は第六位階の魔法だ。

炎の槍を放ち、敵に当たると爆発による範囲攻撃が発生する。さらに貫通という、鎧を纏っていない相手に対するダメージが上昇するという効果も持つ。代わりに鎧を着用しているとダメージを減衰されてしまうが、そこそこの威力と攻撃範囲に消費するMPも低めで使いやすい魔法だ。

本来第六位階の魔法は百レベルプレイヤーが適正狩場で使うには弱すぎるとされる魔法だが、フオーマルハウトにとってはそうではない。

炎属性攻撃であれば、フオーマルハウトが持つスキルの効果によつてかなりのダメージボーナスが発生する。そのため、例え第一位階であろうとも炎属性でさえあればある程度は実用的だ。もちろん炎耐性を持つ今のコキュートス相手では第一位階では傷一つ与えられないが、第六位階に魔法強化スキルまで併用すれば耐性を有していてもダメージを与えることが出来る。

「ッ！<穿ピアッシング・アイシクルつ 氷弾>！」

フオーマルハウトの手から放たれた巨大な炎の槍が、コキュートスが迎撃のために放った無数の氷弾を容易く飲み込んだ。

コキュートスは冷気を操る能力を持つが、職業的には純粋な戦士だ。いくつかの魔法を習得してはいるものの、その威力はそれほど高くない。戦士職ゆえに魔法強化系のスキルを習得出来ず、攻撃系のステータスが筋力に偏っていて魔力は六十レベル程度の魔法詠唱者マジック・キャスターにすら劣るからだ。

それに対してフオーマルハウトは精エレメンタル霊という魔法の扱いを得意とする種族に加え、職業も魔法詠唱者として高い能力を発揮出来る構成にしてあるため、十二分な魔力を有している。両者の魔法がぶつかればコキュートスの魔法が押し負けるのは自明の理だ。

「<氷アイス・ピラー柱>！」

コキュートスもそれを予期していたのか、次なる魔法を発動させる。

繰り返される魔法に従ってコキュートスとフオーマルハウトの間に地面から三本の氷柱が突き出し、飛来する炎の槍を受け止める。

氷柱は全て砕け散ったが炎の槍も威力を殺され、コキュートスへと到達する前に霧散していた。

「風斬！」

魔法二種、四回で何とか炎槍を相殺しきつたコキュートスは、間髪入れずにスキルを発動する。遠距離に対して斬撃を飛ばし、相手を切

り裂くスキルだ。

飛ばされた巨大な斬撃が地面を抉りながらフォーマルハウトへと向かう。

「ふっー！」

短い呼吸と共にフォーマルハウトは手刀を放つ。その手刀は飛来する斬撃ごと地面を叩き割り、融かして溶岩へと変えながら埋没してゆく。

そしてすぐさまコキュートスの追撃を防ぐため、即座に自由な左手から魔法を放つ。

「＜魔法三重化・烈火の矢＞」

「グッー！」

煌々と輝く炎で出来た三本の矢が発射される。これらは大した威力は持たないが着弾と同時に爆発を起こし、広範囲へのノックバックと閃光による目眩ましを発生させる。

放たれた矢はコキュートスの足元へと着弾し、爆発する。閃光による目眩ましはコキュートスが装備しているアイテムの効果によって意味を成さないが、発生したノックバックがコキュートスの姿勢を崩して手刀の硬直への追撃を妨害する。

（追撃ハ間ニ合ワンカ。シカシ、魔法詠唱者デアリナガラアレホドノカフドウヤツテ……イヤ、考エテイル暇ナドナイナ）

繰り返すが、フォーマルハウトは魔法詠唱者だ。

その常識に当て嵌めれば、体力や筋力のステータス成長率が低い魔法詠唱者ではコキュートスと近接戦で渡り合うことは出来ない。

しかし、現実はこちらだ。

十分な距離は野生の獣染みた疾走で容易に詰められ、斬撃はほぼ全て躲されるか迎撃されて意味を成さない。蹴りを受ければ迎撃した尾ごと押し込まれて体勢を崩され、反撃とばかりに斬撃を飛ばせば手刀で叩き割られる。

魔法詠唱者であるとは信じられないほどの身体能力だ。

百レベルの戦士に匹敵する身体能力を、精霊にして魔法詠唱者のフォーマルハウトがどのようにして手に入れたのか、コキュートスに

はまったく見当が付かない。

しかし、それを今考えている暇はない。こうしている間にも三重に発動されたオーラスキルで継続ダメージを受け続けており、放たれた熱によって溶岩化された地面は拡大の一途を辿っているのだから。

無為に時間をかければどんどん不利になっていくのはコキユートスだ。何とかして状況を覆さなければならぬ。

そう判断したコキユートスは虚空へとハルバードを押し込み、新たに剣を取り出した。

剣は深い青の水晶で出来たロングソードであり、鋭く尖った切っ先は返しのような形状をしていた。刺突や斬撃で返しを引っ掛け、相手の肉をより深く抉るための形状だ。

その悍ましい形状とは裏腹に、その刀身を形作る水晶は海を思わせる美しい海色をしている。武器というよりも芸術品と言えるような剣の表面は泡立ち、刃から水が滴っていた。

「チツ……」

剣を睨み付けて舌打ちするフォーマルハウトの顔は、憎々し気に歪められていた。

コキユートスの持つ二十一の武器の一つであり、属性攻撃に特化した剣だ。等級は伝説級レジェンドに属し、定められたその属性は見た目から分かる通り水だ。

この武器は斬り付けた相手に対して、物理ダメージと水属性ダメージを同時に与える。この水属性ダメージは魔法攻撃扱いであり、かつ威力は所有者のステータスに依らずに固定だ。

(厄介な……)

例外も存在するが、エレメンタル精霊は基本的に特定の属性に特化する種族だ。

ある属性に特化した精霊エレメンタルはその属性ダメージに関しては無効化や吸収などのボーナスを得ることが出来るが、逆にその対となる属性には多大なペナルティを背負うことになる。

それが対属性脆弱というパッシブスキルだ。

ユグドラシルでは対となる属性によって受けるダメージがおよそ

二倍になるデメリットスキルであり、エレメンタル精霊を選択したプレイヤーが大いに悩ませたスキルでもある。さらに単なる被ダメージ増加だけではなく、対属性に対する耐性値が最低となり、如何なる方法でも耐性を上昇させることは出来ないという効果まで付いている。

常にメリットとデメリットが共存するユグドラシルの例に漏れず、この凶悪なまでのデメリットを補って余りあるメリットも存在するが、それでもこのスキルは余りにもプレイヤーへ与えるストレスが大きいきいと言える。

そして炎属性に特化しているフォーマルハウトの対属性は水だ。

魔法防御力と水属性耐性が最低であるフォーマルハウトに対し、対策不可能な弱点属性の魔法ダメージを与えるこの武器は、まさしく特効武器と言つてもいいだろう。

「メンツ！」

雄叫びと共に一瞬でコキュートスは距離を詰め、水晶剣を振り上げる。同時に剣から水が溢れ出し、フォーマルハウトが纏う炎と衝突して辺り一面を真っ白に染めるほどの水蒸気が発生する。

蒸気に覆われた視界の中で、フォーマルハウトは正確に振り下ろされたコキュートスの腕を迎撃してみせた。彼にとつて危険なダメージを発生させる刃には触れず、あえて一步踏み込んで剣を握るコキュートスの腕へと掌底をぶつける。

衝突と共に鈍い音が響く。

「ぐっ……っ……らあっ！」

追撃が来る前に空いている左腕でコキュートスの腹部へと掌底を放つ。しかし、コキュートスはそれを読んでいた。

それまで握っていた赤黒い剣を捨て、フォーマルハウトの掌底を手の平で受け止る。そのまま三本の太い指で握り締めた。纏われた炎がライトブルーの甲殻を焼いて焦げ臭い臭いが漂うが、それを意に介する様子はない。

「オ許シヲ、腕ノ一本——貰イ受ケマス」

コキュートスが残った二本の腕を振るう。

上からは白銀のハルバードが、下からは鋭い刀が挟み込むように

フォーマルハウトの左腕へと襲い掛かる。

「舐めるなあああああつ！ <核爆発>！」
ニユークリアフラスト

絶叫するように叫び、魔法を発動させる。

「ナン——ッ!?!」

発動と同時に視界が光に包まれ、凄まじい衝撃と熱が二人を襲う。強烈な爆風によって握り締められていたフォーマルハウトの腕は解放され、互いに吹き飛ばされて地面を転がった。

超広範囲に対して炎属性と殴打属性の複合ダメージを与える爆発を起こす第九位階魔法。

威力は同位階の中では弱い方だが、その攻撃範囲と強いノックバツク、毒や盲目など複数のバッドステータスを与えられる魔法だ。ただし、その攻撃範囲は使用した本人も効果範囲に入ってしまうほど広いため、自爆前提の魔法とも言える。

フォーマルハウトはそれをコキュートスを中心ではなく、自分とコキュートスの間を中心として発動した。

「がつ、ぐつ——糞！」

地面に幾度も叩きつけられて、ようやく体勢を整える。

吐き捨てたフォーマルハウトは多少土で汚れている程度でダメージが無いように見えたが、実のところ多大なダメージを負っていた。傷を負っていないように見えるのは、肉体を持たない精霊エレメンタルには外傷が残らないためだ。

炎属性特化型の精霊エレメンタルであるフォーマルハウトは属性吸収というスキルによって炎属性ダメージを吸収することが出来るため、<核爆発>の炎属性ダメージは問題にならず、むしろ回復すること出来る。バッドステータスに関しても耐性スキルを保有しているため被害を受けることはない。

しかし、殴打属性によるダメージは回復量を遥かに上回るダメージを負っていた。

いくら全身が神器級装備で固められているとはいえ、元々が極めて脆弱な精霊エレメンタルのフォーマルハウトには比較的威力が低い<核爆発>の殴打ダメージでも致命的だ。

(にしても、痛みは一瞬で消えるんだな……想定外のタイミングだが痛みに関する実験は出来たか)

模擬戦の目的を一つ果たしたとはいえ、受けた痛みへの苛立ちは収まらない。

腕を切り落とされるほどのダメージを受けるよりは絶対にマシではあったが、そもそもそんな状況に陥ってしまったことに腹が立ち、小さく舌打ちする。

フォーマルハウトはフェイントも混ぜずに腹部を狙い過ぎた。

これまでいくつかの攻撃を繰り返したが、その多くは腹部への攻撃。同じ箇所を狙い続けることでダメージを蓄積させていく算段だったが、余りにも単調過ぎた。

思っていた以上に戦いが楽しくて油断した結果をコキュートスに狙われた。腕を一本持つていかれていた場合、敗北は必至だっただろう。

(反省会は後だ。コキュートスは……あそこか)

視線の先には倒れ伏した状態からもぞりと起き上がるライトブルーの巨躯があった。

立ち上がったコキュートスの体は黒い焦げ付きが目立つようになっていた。三重のオーラススキルによる継続ダメージを受けて傷付いた体は限界に近いことを訴えており、遠目からでは分かり辛いが僅かにふらついていた。

追い詰められつつあるコキュートスは心を落ち着かせるように大きく息を吸い込み、吐き出した。肺の中に入った熱を持つ空気が極寒の体内で瞬時に冷やされ、白い冷気となって放出される。

(ナントイウ御方ダ……マサカアレホド躊躇無ク自爆ヲ選ブトハ)

もちろん自爆によって腕を切り落とされることを回避するという行為を予測していなかったわけではない。フォーマルハウトが自爆を選んだとして、それでも尚切り落とせるだけの速度で武器を振ったつもりだった。

普通は自爆を選ぶとしても多少は躊躇する。自爆への恐怖による躊躇でなくとも、他に何かもつとスマートな選択肢が無いかという希

望的観測により判断が遅れるということもあっただろう。しかし、フォーマルハウトは欠片ほどの躊躇も見せずに即座に自爆を選択したのだ。

コキュートスはその見事な胆力に驚嘆しつつ、頭を悩ませていた。想定通りであればあのまま腕を切り落とし、水晶剣の水属性攻撃を中心とした攻めで一気に畳みかけるつもりだった。

(耐性ニヨリ<核^{ニユークリアフラスト}爆発>ノバッドステータスハ無効化出来テイル。シカシ、炎ダメージガ……耐性ヲ持ツテイルトイウノニコレホドノダメージ、体力的ニハ……勝負ヲ掛ケルシカ無イカ)

コキュートスが戦えるのは恐らくあと数分だろう。まだ数度しか直接攻撃を受けていないにも関わらずだ。

継続的に叩きつけられる熱波はそれほどにコキュートスの体力を蝕んでいた。

「フロスト・オーラー！」

コキュートスは意を決して踏み込む。スキルを全力解放し、極寒の冷気を体中から噴出させて炎ダメージを可能な限り軽減しながら駆ける。融解した地面にも躊躇なく足を突っ込み、纏わりつく溶岩を力づくで振り払いながらフォーマルハウトへと一直線に。

「不動明王撃アツ！」^{アチャラナーダ}

駆けながら自身が持つ最高位攻撃スキルの発動準備を行う。

それに伴ってコキュートスの背後に不動明王が出現した。その像容は空中に胡坐を組んだ異常な巨軀を持つ筋骨隆々の大男であり、左手には竜が巻き付いている降魔の三鈷剣、右手には悪を縛り上げて人々を煩惱より吊り上げて救い出すとされる羅索を持っている。

かつての仲間である武人建御雷が得意としたスキルの発動を見て、フォーマルハウトは目を輝かせる。そこに仲間の威容を見た気がして。

「面白い！」

この瞬間、フォーマルハウトは真正面からコキュートスの攻撃を受けけることを決める。

既にコキュートスはかなりダメージを負っており、痛みと熱に

よって動きも普段よりは多少鈍くなっている。その差は誤差の範囲であったが、フォーマルハウトにとって躲すのは然程難しい事ではない。

しかし、彼の矜持がその選択肢を捨てさせた。

（モモンガさんが態度で上位者を示すというなら、俺もそうしよう。回避に徹して時間をかけてコキュートスを苦しめる趣味も無い。何よりここで逃げたらフェニアに笑われるな！）

今のコキュートスが放てる最大の一撃を真正面から受け、叩き潰す。そう覚悟を決めて右手を握り締める。

「コレド・オブ・コルヴァズ
「コルヴァズの剣！」

スキルの発動と同時に握られた右手が漆黒の炎に包まれる。噴出した炎は棒状へと形を変え、広がり、狭まり、伸び、縮み、様々な形容し難い形を経てようやく剣を形作る。

炎属性特化の精^{エレメンタル}、霊系最上位種、生ける炎たるフォー^{クトウゲア}マルハウトが誇る、二つある最高の固有スキルの一つ。一日に一度しか使えず、さらに剣が顕現出来る時間は三十分しかない。

噴き上がる黒き炎で形作られた剣は、鏢の無い片刃の剣だ。フォーマルハウトが手足に纏っている炎を遥かに上回る圧倒的な熱量を、普通の剣と同じ程度の小さな身に有している。

地を融かし、天を焦がし、星々を灼き尽くすと言われるコルヴァズの剣の能力は単純だがそれゆえ絶大だ。

その効果は刃に触れた相手に耐性を無視する多大な魔法攻撃扱いの炎属性ダメージを与え、さらに一定時間炎属性耐性を大幅に減少させるデバフを与えるというもの。僅かでも刃が触れさえすれば、展開されている三種類のオーラススキルによって瞬時に致命的ダメージを負うことになる。

その黒炎の剣を見たことがないコキュートスにとっては得体の知れないスキルだ。しかし、コキュートスは恐れない。

（私ノ覚悟ニ応エテ下サツタカー！）

あるのは歓喜だ。最大の一撃を避けようとせず、防ごうともせず、真正面から迎え撃ってくれる相手の行いに対する歓喜と感謝の念の

み。

恐らくは黒炎の刃に触れば戦闘不能へ追い込まれることは確かだろうと確信しながらも、その足を止めることなく距離を詰める。

フォーマルハウトを射程内に収めた瞬間、スキルを発動した。

顕現していた不動明王が巨大な右腕を振り上げる。

不動明王撃の一つ、俱利伽羅剣。その効果は対象の性格値——カルマ値が悪に偏るほどにダメージを与える。相手のカルマ値が最低値であるマイナス五百にまで達していれば、その威力は想像を絶するものとなる。

フォーマルハウトが習得した種族、ク トウ グア生ける炎は隠し種族だ。

その習得条件はいくつかあるが、そのうち一つがカルマ値に関することである。

その条件とは——カルマ値が最低値であること。

クトウルフ神話の中で邪神の石柱とされる生ける炎には、欠片ほどの善意も必要ない。

フォーマルハウトに特効的な効果を齎す攻撃が、放たれる。

「三毒ヲ斬り払エ、俱利伽羅剣！」

「らあああああつー！」

不動明王によって振り下ろされた三鉈剣と、雄叫びと共に振るわれたコルヴァズの剣が交錯する。

その巨大さゆえに先に相手へと届いたのは三鉈剣だ。魔を払い、悪を打ち砕く剣が袈裟懸けに肉を抉る。

その瞬間にフォーマルハウトの体を襲うのは激痛。

単に斬られたことによる痛みだけでなく、カルマ値が低い者に対する追加効果が耐え難い痛みを発生させる。

人間の体に擬態しているのみであり、肉体を持たない精^{エレメンタル}霊であるがゆえに血が噴き出るようなことはなく、斬られた側から元の形へと戻ってゆく。しかし、体に食い込む剣によって発せられるその激痛はフォーマルハウトを苛み、視界を明滅させた。

「ぎいいいいいいいっあああああああああああつー！」

悲鳴にも似た雄叫びを上げ、手放しそうになる意識を必死に手繰り

寄せながら振り下ろす腕に更なる力を込める。その力に呼応するようにコルヴアズの剣は黒炎を噴き上げ、フォーマルハウトの体を抉る三鉦剣を飲み込み、灼き尽くす。黒炎は勢いそのままにコキュートスへと襲い掛かる。

そして、炎がコキュートスの体へと触れた。

「ムツ、グオアアアアアアアッ!」

コキュートスの体を激痛が押し包んだ。

身を感じていた熱波はもはや激痛へと変わり、己の人生で恐らく初めての絶叫を上げる。全力で冷気を噴出しても欠片ほどもダメージを軽減出来ず、痛みに武器を取り落としそうになる。ライトブルーの外皮鎧は既に大部分が黒く焦げ付いており、尋常ではないダメージが僅かに残った炎耐性を貫通して襲い掛かった。

それでも戦意を失わぬ六つのサファイアのような複眼が捉えたのは、自らを包む黒い炎の向こう側に立つフォーマルハウト。これまでの人生で手合わせした中で間違いなく最強と呼べる至高の存在は、王者の風格を漂わせコキュートスを見下ろしている。

そこで初めて、コキュートスは己が地に倒れ伏していることに気付く。そして悟った。

(アア……私ノ、負ケカ……流石ハ……至高ノ御方……)

その思いを汲み取ったかのように黒い炎が掻き消える。同時に体を焼く熱波も消え失せ、後に残ったのは高熱の残滓と地面に倒れ伏すコキュートス、そして戦いの緊張から解放されて息を切らせながら笑みを浮かべてそれを見下ろすフォーマルハウトだ。

誰の目から見ても明らかな勝敗に、これまで観戦に徹していたアラが叫ぶ。

『しよ、勝者ー・フォーマルハウト様!』

一瞬の静寂の後、拍手と共に歓声が湧き上がる。感極まって涙を流しながら雄叫びを上げるシモベまでおり、これまでの歓声よりも一回り大きな歓声が空気をビリビリと振動させる。

心地良い騒音に身を包まれながら、フォーマルハウトは瞳を瞑りながら天を仰いだ。

「はあ……楽し、かった……」

満足気に呟いて、フォーマルハウトは意識を手放した。

◆ ◆ ◆
グレイター・テレポーション
「ツ！ < 上位 転移 >」

ヴェルフエニアが青い顔をして転移魔法を使い、瞬時に仰向けに倒れているフォーマルハウトの傍へと移動する。

「……ふむ、ヴェルフエニアが騒がないところを見るとすぐに問題がある怪我をしているわけでもなさそうだな」

「モモンガ様、念のためペストーニヤにフォーマルハウト様とコキュートスの治癒を命じておきます」

「ああ、頼むぞアルベド」

「はっ」

アルベドがく伝言メッセージでペストーニヤへと指示を出すために一度モモンガの元を離れる。

ペストーニヤ・シヨートケーキS・ワンコはナザリック地下大墳墓のメイド長であり、守護者に続く高レベルを誇る神官だ。犬の頭部を持ち、顔の中央には傷跡のような一本に線が縦に走っており、それを縫い合わせたような痕跡がある。その恐ろしい見た目とは裏腹にとっても優しい性格をしており、ナザリックでは数少ない善の存在である。

高位の治癒魔法を使いこなすペストーニヤならば、負傷したフォーマルハウトやコキュートスの治癒を行うのに最適な人員だ。

「で、でも、凄い戦いでしたね。コ、コキュートスさんも凄かったですけど、フォーマルハウト様の炎がとっても凄くて……えっと、上手く言えないんですけど、す、凄かったです！」

「ほんにその通りでありんすねえ。あれが至高の御方の御力……まったく、惚れ惚れするでありんす」

「全くですね。フォーマルハウト様が不利だと考えていた過去の自分を殴り飛ばしたい気分ですよ。……しかし、どうにも分かりません。モモンガ様、非才なる我が身にお教え頂きたいのですが、魔法詠唱者マジック・キャスターであらせられるフォーマルハウト様は一体どのようなにしてあれほどの身体能力を？ 戦士系の職業と比較しても遜色が無い様に思いま

したが……」

デミウルゴスと同様の疑問を持つていたようで、口々にフォーマルハウトを称賛していた守護者たちもモモンガの方へと顔を向ける。

(……ふむ、教えていいのか？ いや、構わないか)

その疑問はかつてフォーマルハウトと行動を共にするようになった頃のモモンガも抱いていたものだった。

ユグドラシルにおいて知識と情報とは力であると考えているモモンガは、無闇に聞き出そうとするのは悪いと思って軽く聞いてみただけだったのだが、フォーマルハウトは隠す様子も嫌がる様子も無く、快く自分の秘密を伝えてくれた。

曰く、聞かれなければ言わないけれど、隠すようなことでもない。

そうして語られたフォーマルハウトの強さの秘密は、当時その話を聞いたメンバーたち全員が口を揃えて『糞運営が、バランス考えろ！』と叫ぶような内容だった。

たっち・みーだけはお前が言うなどメンバー総出で突っ込まれたが。

「フォーマルハウトさんの種族と職業によるものだ。フォーマルハウトさんは生ける炎クトゥグア以外にも炎の魔精霊イフリトという特殊な種族でもある」

「炎の魔精霊イフリト、で御座いますか？」

「そうだ。炎の魔精霊は精霊種エレメンタルの中でも極めて特殊かつ攻撃的な種族でな。他の精霊エレメンタル同様に防御力は並以下だが、魔力だけでなく筋力まで成長しやすい種族なのだ」

ユグドラシルにおいて隠し種族の一つであった炎の魔精霊イフリトは防御系以外の全てのステータスが成長しやすいという特徴を持った種族だった。

その取得条件は極めて厳しい。

前提となる炎属性特化の精霊種エレメンタルを習得し、職業も炎属性に特化しかつカルマ値が悪寄りの状態にのみ発生する隠しクエストをクリアすることで炎の魔精霊イフリトになることが出来るという、条件を知っていなければ辿り着けないような代物だ。

この隠しクエストは発見が非常に困難であり、クリアには運も絡ん

でくるのでユグドラシルでも炎の魔精霊を習得出来たプレイヤーは少ない。

「さらに職業、グレート・オールド・ワンのパッシブスキルにより条件を満たしていればステータスに補正が掛かる。このためフォーマルハウトさんは魔法詠唱者でありながら戦士職に匹敵する身体能力を得ているというわけだ」

グレート・オールド・ワンは隠し職業の一つだ。

その習得条件は内部パラメータでグレート・オールド・ワンと定められている種族を習得することだ。その際に自動的に習得される。フォーマルハウトの場合は生ける炎の習得と同時にグレート・オールド・ワンとなった。

そのグレート・オールド・ワンのスキルの一つに旧支配者というパッシブスキルが存在する。

これはカルマ値が低いほどに全てのステータスが上昇するという効果を持っており、カルマ値が最低であるフォーマルハウトは炎の魔精霊の優れたステータス成長率と併せて、戦士職と比べても遜色の無いステータスを誇っていた。

ユグドラシルを始めた頃の頃、炎の魔法を撃ちまくりながら近接戦闘がしたいと切望したフォーマルハウトは、中途半端なネタビルドとして同レベル帯のプレイヤーの中ではかなり弱い方にいた。しかし、奇跡的に炎の魔精霊と生ける炎の取得条件を満たした結果、一気にオールラウンダーとして開花し、開始当初の夢を叶えたのだ。

「なるほど、それであればほどの身体能力を……」

モモンガの言葉に、おお、と守護者たちが感嘆の吐息を漏らす。

「流石は至高の御方。まさに万能の存在であるとは」

「何度驚いても驚き足りないでありますねえ」

「そ、そうですよね！ かっこよかったです！」

再び始まる称賛の嵐は、ペストーニヤに指示を出して戻って来たアルベドが加わってさらに強くなる。

ただ、守護者たちはフォーマルハウトの高い能力を口々に称賛しているが、実際にはフォーマルハウトは万能という言葉とは程遠い。

どれだけ種族の能力や職業固有のパッシブスキルによってステータスが全体的に上昇するとはいえ、元々は防御力に乏しい精霊種^{エレメンタル}だ。さらにフォーマルハウトは回避主体の戦闘スタイルであるため基本的に攻撃を食らうことを考えておらず、装備や習得スキル、魔法などは多くが攻撃に特化したもの。そのため前衛で戦うにも関わらず、その防御能力は並の魔法詠唱者^{マジック・キャスター}よりも低い。

加えて、純粋な戦士職ならば習得出来る前衛向けのスキルが習得出来ないのも、単純な力比べをすれば敗北は免れない。習得している前衛向け職業とさえもファイターとストライカーという基本職だけであり、さらに上位の種族や職業を習得していないのだから当たり前だ。

フォーマルハウトの強さは膨大なPVP経験からくる卓越したプレイヤースキルによる回避能力に支えられていると言っても過言ではない。

そういう意味では、今回コキュートスの攻撃を真正面から受け止めたのは愚策と言う他ない。たった一撃で戦闘不能になりかねないダメージを受けたのだから。

(やっぱり真正面から不動明王撃を受けるのは流石にやり過ぎですよ。大した事なさそうでした……)

そんなモモンガの心配も知らず、ヴェルフエニアに付き添われてシモベたちに運ばれて行くフォーマルハウトは、気を失っていないながらも満足そうな笑みを浮かべていた。

第八話 食事

「ん……」

半覚醒した意識で最初に感じたのは心地良さだった。

体を包むフワフワとした柔らかく温かな布らしきもの。強すぎず弱すぎない絶妙な弾力で背中を押し返してくるスプリングの存在を感じ取り、そこがベッドの中だということに悟る。しかし、なぜ自分がベッドの中にいるのかは頭に霧がかかったように思い出せない。

微睡から脱しようとする意識すら湧き起らない心地良さに、惰眠を貪ろうと手触りの良い毛布を深く被る。

「……い……きろ」

途切れ途切れの聞き慣れた声が聞こえる。声は吐息と共に優しく耳を撫でた。ふわりと甘い香りが漂い、鼻腔を通り抜ける香りが更なる眠気を誘う。

幾度か同じように耳元で囁かれ、ゆさゆさと体を揺すらると徐々に意識が覚醒させられて行く。

「おい、起きろ。何時まで寝ている、フォーマルハウト」

「……んあ？」

目を開くと、目の前には青い瞳と闇に浮かぶ金の瞳のオッドアイ。自らの理想を詰め込んだヴェルフエニアの顔がそこにあつた。

顔だけ動かして横へと視線を向けると見覚えのある光景が見えて、そこが自分の寝室であることを理解する。

リビングルームへと続く扉の横にはシズが直立不動の姿勢で立ち、視線だけをフォーマルハウトへと向けていた。

「おおう……寝てたのか、俺？」

「寝てたというか、気を失っていたな。まったく、勝ったと思ったらすそのまま倒れたから流石に驚いたぞ」

そう言って安堵の表情を浮かべるヴェルフエニアを可愛らしく思ったフォーマルハウトは、自然と手を伸ばす。長い金髪を梳くように優しく撫でると、ヴェルフエニアは驚いたような表情を浮かべた。

「な、何だ、急に」

「可愛いなと思って」

「……そ、そうか、いや……そうか……」

ヴェルフエニアはか細い声で答え、頬を赤く染めて嬉しそうな笑顔を浮かべる。

「それで、どのくらい寝てた?」

「ほぼ丸一日だな。お前が気を失った後はそのまま解散した。今は警備体制も元に戻して、偵察結果待ちの状態だな。治癒はペストーニヤがやってくれた」

「一日か……看病ありがとな。ペストーニヤには後で礼を言わないといけないな」

そう言つて、フォーマルハウトはゆっくりと体を起こした。

ベッドに座つた体勢のまま腰を捻り、肩を回し、体の動きに支障が無いかを確かめる。

問題が無い事を確認すると今度はベッドから降りて立ち上がる。ここでようやくフォーマルハウトは自分が寝間着姿であることに気付いた。

「……誰が着替えさせてくれたんだ?」

「私と」

「……私です。頑張りました」

そう言つたシズの頬はほんのりと紅潮していた。

着替えさせる過程でフォーマルハウトのフォーマルハウトをばつちりと目にしてしまったのだから仕方が無い。

年頃の少女の反応としては、むしろ平然としているヴェルフエニアの方がおかしい。

「ごほん……そうか、ありがとう。さて、俺は何をすればいいんだ?」

モモンガさんから何か聞いてないか?」

「いや、私は何も聞いていないな」

「……私も、聞いてないです」

ナザリックは現在警戒態勢に入っている。

異世界という未知の状況に突然放り込まれ、現在周辺の偵察を行っている段階だ。どのような生物が生息しているか分からない以上、人

員を遊ばせている余裕はないはずだった。そんな中でも警備スケジュールを調整し、模擬戦にあれだけの観客を集めることを可能にしてしまったアルベドとデミウルゴスの頭脳は驚愕の一言に尽きる。

ともあれナザリックにおける最大戦力の一角を担う百レベルプレイヤーを遊ばせておく余裕などないとフォーマルハウトは考えているのだが、現実にはなんの指示も与えられていなかった。

「ふむ……まあ、何も言われてないなら別にいいか」

考えることを放棄する。もはやお家芸のような行為となっているが、考えても答えが出ないであろう問題のことを考えるのはフォーマルハウトにとっては無意味なことに思っている。自分以外に考えてくれる者がいるならば猶更だ。

何も指示が無いのならば好きに過ごしていればいい。勝手にナザリック外に出たりしなければ咎められることもないだろうと判断するが、唐突に出来た暇な時間を潰す妙案は思いつかなかった。

現実世界では纏まった暇な時間などなかった。朝起きてすぐに準備をして早朝に出勤し、夜まで働いて帰宅。帰宅したらすぐさまチューブ型の合成食糧で夕食を済ませてユグドラシルにログインする。

ユグドラシルではログインからログアウトまでの時間のほぼ全てをキャラクター育成かPK行為に費やしていたし、アインズ・ウール・ゴウンに加入してからはギルド活動や気の置けない仲間たちとの交流を楽しんだ。休日には食事も忘れて朝から晩まで遊び続けたことだって珍しくはない。

(……食事?)

思いついた疑問は食事に関する疑問だった。

ナザリックには凝り性のギルドメンバーたちが創った様々な施設がある。その一つが食堂だ。料理関係のキャラクターに特化して生み出され、ナザリックの料理長と設定されたNPCが副料理長や料理スキルを持つ男性使用人らと共に切り盛りする施設だ。

食堂は基本的に第九、第十階層で働くシモベたちが利用するという設定を持つ場所で、食事時には一般メイドたちで賑わうとされてい

る。

ここでフォーマルハウトが気になったのは、料理の味だ。

ユグドラシルでは食材や料理がアイテムとして存在した。料理スキルを使用して作られた料理を食べると様々なバフ効果を得ることが出来るため、モンスタースター狩りの前などによく使われた。しかし、電脳法によって制限されたユグドラシルには味覚と嗅覚が遮断されていたのだ。

現実世界^{リアル}では味気なく食感ものど越しも悪い、ただ栄養だけ摂取出来ればいいと言わんばかりの粗悪な合成食糧が基本で、たまに口に出るものといえば粗悪品として払い下げられた糞が付くほど不味いものばかりだ。

まともな食材などは裕福な上流階級くらいしか食べられない高級品なのだ。

ユグドラシルで見られる料理アイテムに何度憧れたか分からない。何度味覚と嗅覚が制限されていなければと考えたか分からない。

しかし、今は違う。味覚があるのは第八階層で飲んだヴェルフエニアの紅茶で確認済みだ。

フォーマルハウトは口の中から涎が溢れて来るのを感じる。食べたこともない料理の味を想像し、生唾を飲んだ。

「食事だ」

「食事？ 精霊であるお前は肉体を持たないから、食事の必要はないだろう？」

ヴェルフエニアの言う通り、精霊は肉体を持たないため食事を必要としない。種族由来の能力として飲食のみならず、睡眠無効や疲労無効の能力も持っている。しかし、権利であって義務ではなく、飲食不要のスキルを持っていても飲食自体は可能なはずだ。少なくとも紅茶は飲めることが確認出来ている。

「必要はない。が、出来ないわけじゃない、はず。シズ、食堂まで案内してくれるか？」

「はい。でも、こちらまでお持ち出来ます」

「いや、せっかくだから食堂で食べよう。一般メイドたちもいるんだ

ろ？ 仲良くなりたいしな。フェニアも来い」

「当然だ、頼まれずとも行くぞ」

「畏まりました」

ぺこりと頭を下げたシズに案内を頼み、フォーマルハウトはまだ見ぬ料理へと思いを馳せながら三人で食堂に向かった。



ナザリック地下大墳墓には膨大な数のシモベが存在している。NPCだけでなく召喚モンスターや自動沸きモンスターまで合わせれば万を優に超えるだろう。だが、そのうち食事を必要とするシモベは少ない。

これはナザリックの維持費用を安く抑えるためだ。飲食が必要なシモベを配置すればそれだけ維持費用も膨れ上がるため、各階層に配置されているシモベたちの殆どが飲食を不要とする種族とされている。

しかし、第九、第十階層は数少ない例外だ。

第九、第十階層は至高の四十一人のうちの三人が協力して生み出した一般メイド四十一人が業務に携わっている。これら一般メイドは人間のように見えるが、その実人間ではなく、ホムンクルスと呼ばれる異形種だ。

ホムンクルス 人造人間という種族は寿命が存在せず、全体的に人間を僅かに上回る身体能力を持つ。同じ条件で人間と人造人間が戦えば、六割ほどの確率で人造人間側が勝つくらいの差だ。しかし、同時に異形種であるがゆえのペナルティも持っていた。それが食事である。

ホムンクルス 人造人間は生命維持に大量の食糧を必要とするペナルティを背負っている。

このペナルティは食事不要のアイテムを装備しても無効に出来ず、ホムンクルス 人造人間の種族レベルが低い程に大きくなる。そして、一般メイドのレベルは全員が一レベルだ。大食漢の一般メイド四十一人に加え、男性使用人やプレアデスなど食事を必要とする者たちを合わせると、第九、第十階層のシモベたちにおける食費は他の階層と比べて飛びぬけていた。

まして異世界へと転移した今は緊急事態として各階層から警備のためのシモベたちが送られて来ており、僅かながら食事を必要としているシモベたちも増えていた。

そんな第九、第十階層で働くシモベたちの食事情を一手に引き受けるのが、フォーマルハウトたちが訪れた食堂だ。

白を基調とした無味乾燥な広々とした食堂には女たちの騒がしくも明るい声が広がる。マナーを弁えているようで、一人一人の音量はそれほどでもなかったが会話の数が多く、それに食器の音加われば中々に騒がしい。

しかし、その姦しさもフォーマルハウトが食堂へ足を踏み入れた途端に鳴りを潜める。

最初にフォーマルハウトの存在に気付いたのは、入り口に最も近い位置で食事をしていたメイドたちだ。至高の存在の姿を認めると、それまで浮かべていた笑顔は大層驚いたような顔に変わり、食事を中断して椅子を蹴倒す勢いで立ち上がりフォーマルハウトへと勢い良く、しかし上品さを損なわないように頭を下げる。

その騒がしさに何事かと視線を向けたメイドたちも驚き飛び上がり、次々と立ち上がって頭を下げる様子は波か何かのようにも見えた。騒ぎに気付いた厨房で働く料理長らも手を止めて、慌てた様子でコック帽を外して頭を下げている。

その慌ただしさを目にしたフォーマルハウトの胸中に、居心地の悪さと悪い事をしたかなという小さな罪悪感が湧き上がる。

「ああ、頭を下げる必要はない。気にせず食事を楽しむと良い」

罪悪感を感じても、頭を下げればメイドたちはもつと恐縮するだろう。むしろ自分たちが悪いと謝り始めるかもしれない。それが分かっていたフォーマルハウトは頭を下げず、苦笑を浮かべながらメイドたちへと食事を続けるように促す。

メイドたちは少しだけ困ったような表情を浮かべながら顔を見合わせてから食事へと戻った。程なくして元の喧噪が戻り始める。

目の前に広がる現実世界とは全く違う食事の様子にフォーマルハウトはどれほど現実世界の食事というものが味気なかったのかを思

い知らされる。

専ら料理らしき味が付いた固形と液体の中間と言える食感をした合成食糧で済まされていた現実世界リアルの食事で笑顔など浮かべられるわけもなく、天涯孤独であったフォーマルハウトは食事をしながらの談笑など殆どしたことがない。唯一あつたとすれば、ユグドラシルのオフ会——居酒屋などでアインズ・ウール・ゴウンのメンバーたちと奮発した食事をする時くらいだった。

食堂の入り口に立っているだけで食欲をそそられる料理の匂いに何とも言えない感動を覚えていると、厨房の方からコック帽を脇に抱えた料理長が小走りで姿を現した。

「これはこれはフォーマルハウト様、態々食堂までお越しとは。ようこそおいで下さいました。それに領域守護者のヴェルフニア殿とプレアデスのシズ殿も。一体何なさいましたか」

「食堂へ来たらすることは一つだろう、料理長？」

その言葉に、料理長の目が光る。

「おお！ もしやお食事を？ しかし、料理を御所望であれば部屋までお持ち致しますが……」

「部屋で一人二人で食うつてのものな。精霊だから今まで気にしたことはないが、食事は大勢で食べたほうが美味いだろうか？」

「はっ！ まさしく仰る通りかと。して、どのような料理にいたしましょうか。和洋中全て揃ってお出し出来ますが……」

どんな料理と言われても、自分には縁のない物だからと知識すら殆ど集めなかったフォーマルハウトは何を頼めばいいのかすら分からなかった。

ならば分からないものは分かるものに任せればいい。

「ふむ……任せる。お前のおすすめで頼むよ。フェニアとシズはどうする？」

「私はフォーマルハウトと同じもので良い」

「私は、専用のドリンク、あります」

「だそうだ」

「ははあ！ 畏まりました！ お好きな席に座って今しばらくお待ち

下さいますようお願いいたします！ ナザリツクの厨房を預かる料理長として、必ずや皆様方が満足するに足る料理をお出しすることを誓います！」

やたらと気合の入った声で宣言し、料理長は瞳を爛々と輝かせながら厨房へと戻って行った。

料理長に気合が入るのは当然のことだった。彼が忠誠を誓い、今もこの地に残る二人の支配者はどちらも生存に食事を必要としない。ユグドラシルではバフ効果を得るために料理アイテムを使用することもあつたが、それらのアイテムは料理スキルを持つギルドメンバーによって供給されるものが殆どであり、料理長がその忠義を捧げる機会は無かつた。

だが、ついにその機会が訪れた。

出来ることなら入念に準備し、コース料理の内容を吟味して最高の料理を提供したかつたが、もはや是非も無い。

主が食事を所望とあらば、態々自分の元へと赴いてくれた慈悲に報いねばならないのだ。

料理長は使命感に燃え、歓喜に満ちている。ようやく、崇敬の念を抱く主の一人にその忠義を捧ぐ事が出来るのだから。

「さて、座って待つか」

「どこへ座るんだ？」

「そうだな……どこでもいいな。メイドたちと話が出来ればいい」

フォーマルハウトの言葉を聞いたメイドたちの肩が僅かに揺れる。

至高の御方とテーブルを囲み、食事をする。それだけで夢のような状況であるのに、そこに一般メイドにとってはアイドル的存在である戦闘メイドプレアデスの中でも、さらに一番人気であるシズまで付いてくるのだ。

誰もが手を挙げて自分の近くへと誘いたい衝動に駆られるが、メイドでありながら主を気安く誘うなどという不敬な真似は出来ないと思ひ留まる。

降って湧いた幸運と、それに手を伸ばすことが許さない自分たちの矜持に苦悩する。

「フォーマルハウト様、あそこ、空いてます」

そんなメイドたちの苦悩を断ち切ったのはシズだ。

シズが指を向けた先にはいくつかの空席があった。テーブルを挟んで一人と二人に別れて座れば一人の方が左右をメイドたちに挟まれるような位置で、フォーマルハウトの一般メイドたちとコミュニケーションが取りたいという要望を叶えるには持つてこいの席だ。

シズの出来た気遣いに感心する。

だが、実際はシズの気遣いだけではない。

フォーマルハウトが食堂を訪れるまでは、その席にはメイドたちが座っていた。しかし、フォーマルハウトがメイドたちと話が出来ればいいと言った瞬間にそこに座っていたメイドたちは一計を案じたのだ。

至高の主人を気安く誘うことなど出来ない。しかし、主人の方から選んでももらえればどうか。そう考えたメイドたちはさり気無く席を移動して態々自分たちの間に空席を作り、三人が気付いてくれることを祈った。

そしてシズが空席に気付いてフォーマルハウトを促し、メイドたちの計画は見事に成功を収めた。

ある意味で自らの主人を誑かしたと言えなくもない行為だったが、微かな罪悪感よりも敬愛するフォーマルハウトとその妻とされるヴェルフニア、そしてアイドル的存在のシズと食事を楽しめるという幸福感が圧倒的に勝っていた。

「……私とシズはこちらに座ろう。お前はそちらだ、フォーマルハウト」

「ああ。隣、座らせてもらおうぞ」

「は、はいー」

返事と共にメイドはサツと立ち上がり、頭を下げながらごく自然な動作で椅子を引いてフォーマルハウトが座りやすい位置へと動かしただ。その動きは非常に洗練されており、ナザリックのメイドの一人として恥じることのない完璧な技能を所持していることを物語っていた。

淑やかな微笑みを浮かべながら頭を下げているのは一般メイドの一人、ルミナリスだ。

天井の照明を反射して煌めく色素が薄いプラチナブロンドの髪は腰より下まで伸びており、毛先から十センチほどが軽いウェーブを描いている。スレンダーな体型は細身でありながらも女性らしい柔らかさを感じさせ、慎ましやかな胸の左上にはフォーマルハウトの紋章が刺繍されていた。

サクラメントと並び、フォーマルハウトが名付け親となった一般メイド三人のうちの一人である。

「ルミナリス……だったな、ありがとう」

「いえ、感謝など私如きには勿体ない！」

「そうか？ まあいい、座ってくれ。そして普段お前たちがしているように雑談でもして欲しいな」

「はいー」

元気良く返事をしてフォーマルハウトの隣に座ったルミナリスの前には、美味そうな料理が山のようになんもりと盛られていた。

トレイの中央に据えられたメインとなる大皿には断面からこぼれるチーズや海老がたっぷりに入ったフワフワトロトロの大きなオムレツが三つ、カリカリのベーコンが二枚にソーセージが三本載せられている。別のお椀状の皿にはレタスやトマトなど彩り豊かな野菜の上からシーザードレッシングが掛けられたサラダが盛られ、スープはコーンポタージュだ。また別皿には山盛りのフライドポテトとクロワッサンやバターロールなど彼女の好みのパンが幾つか載っている。その食事量に驚いたフォーマルハウトは他のメイドたちの方へも視線を向けるが、食事を楽しんでいる一般メイドの全員が料理の内容は違えど量は似たようなものだった。おかわりをしに立ち上がったいる者までいる。

「お前たちは随分と食べるんだな」

「えっ？ あ、はい、私たちは人造人間で御座いますので」

「そう……だな、うん。知ってはいいたんだが、想像以上だったというか」

きよとんとした表情のルミナリスを見やる。

低レベル人造人間ホームクルスの食事量増加ペナルティは知っていたが、想像していたよりも凄惨な光景に思わず目を疑う。

この細い体の一体どこにこれほどの量が収まるのか、色々と考えてみても答えは出なかった。

「そういえば料理長に頼んでしまったが、ビュッフェスタイル……っというやつだったのか。悪い事をしたな」

「いいえ、料理長もフォーマルハウト様のお役に立てて嬉しそうでしたし、構わないかと。それに至高の御方であられるフォーマルハウト様が御自分で料理を皿に盛ると言うのは……」

苦笑しながらそう告げたのは、ルミナリスとは反対側に座るメイドのフォスだ。

「あー……はは、そうか。そうだな。しかし美味そうだ、料理が来るのが楽しみになる」

「あの料理長の気合の入りようからしてコース料理だろうな」

ヴェルフエニアの予測を聞いたフォーマルハウトの動きが固まる。

「それは……楽しみだけど、マズいな。食事のマナーなんぞ分からんぞ」

「自分が任せると言ったんだろう？ 格好いいところを見せてくれ

よ、旦那様」

「無茶を言わないでくれ……」

当然だが、フォーマルハウトはテーブルマナーなどは全くと言っていいほど知らない。

強いて言うならばフォークとナイフは外側から使う、スープを飲むときは音を立ててはいけないなど誰でも知っているような知識くらいだ。

現実世界リアルでは知っていたとしても実践する場所などあるはずもなく、そんな無意味なものを覚えるくらいならばユグドラシルのレアモンスターが湧く場所やPVPで有用なデータを覚えたほうが、限られた記憶容量を活用出来ると考えていた。

「……大丈夫です。私も分らない」

「シズはいい子だなあ！」

「いや、シズは専用ドリンクだから今は関係ないだろう。マナーも何もあるものか」

実のところシズはテーブルマナーを完璧に身に付けている。

彼女は戦闘要員として生み出されてはいるが、ナザリックのメイドとして完璧な作法を身に付けてもいる。にも関わらずマナーが分からないと言ったのは、フォーマルハウトだけに恥を掻かせないためだ。これもまたメイドとしての作法と言える。

ヴェルフエニアの突っ込みで台無しではあったが。

「ん？ シズ、それが専用ドリンクか？」

「はい」

いつの間にかシズの手には大きなグラスが握られていた。

蓋が付いた透明な容器の中にはピンク色のドロドロとした液体が入っている。中の液体は傾けても動きが非常にゆっくりしており、刺してあるストローでは吸い上げるのに随分な力が必要そうなほどに粘液質だ。しかし、シズはそれを特に苦勞する様子も無く吸い上げていく。

「美味しいのか？」

「……美味しいです。ストロベリー味。カロリーたっぷり」

「どのくらいなんだ？」

「二千キロカロリーです」

内包された驚きのカロリー量に女性陣が顔を顰める。

体を動かす大人の男が一日他に何も食べなくても済むカロリー量は、流石に思うところがあつたらしい。尤も、一般メイドたちはそれ以上の量を三食規則正しく食べているのだが。

「味は気になるが、私が食べると太りそうだな」

「え、フェニアお前太るのか？ というかお前たちって体型変わったりするののか？」

フォーマルハウトの質問に、ヴェルフエニアもメイドたちも顔を見合わせ、可愛らしく首を傾げた。

だがそれも当然だ。元々はユグドラシルのデータであって生物で

は無かったのだから、彼女たちがいくらか記憶の中を探ろうとも自然に体型が変化した記憶は無いはずだ。

（太るのなら成長するってことだよな？ その逆もしかり……身体計測とか健康診断もした方がいい、のか？ 今度モモンガさんに相談してみよう）

ゲームであれば変化するはずもないが、現実となった今では何がどんな影響を与えるか分からない。特に一般メイドたちは明らかに見た目の許容量以上の食事を摂取しているため、少しばかり心配だった。

そんな心配を余所に、ルミナリスを始めとするメイドたちは談笑しながらも美しい所作で行儀良く食事を楽しんでいる。異常なのは食べる量と速度だけだ。

まるで掃除機が吸い込んでいるかの如き速さで次から次へと料理を口へと運んでいるが、決してハムスターのように頬が膨らむことはない。では咀嚼が早いのかと言われれば口の動きは至って普通であり、噛まずに飲み込んでいる様子は無い。

メイドたちは腹の中も口の中も謎だらけだった。

「フォーマルハウト様」

「ん？」

背後から声を掛けられて振り返ると、そこには副料理長と共に黒い目出し帽を被った男性使用人の姿があった。同じ料理を頼んだヴェルフエニアの方には男性使用人が二人だ。

男性使用人は銀色のワゴンを押しており、その上にはナイフやフォークなどの食器と共にクープ型のシャンパングラス、そして銀色のクロツシュが被せられた皿が一つ載っていた。

副料理長はゆっくりと人間で言えば腰に当たる部分を折ってお辞儀をする。

副料理長は茸生物マイコニドと呼ばれる種族に属している。

頭部は茸の傘のようになっており、そこには弾力のある赤紫色をした大きな水滴のようなものが無数に付いている。顔を歪めたりして感情表現をすることが出来るが、茸なので目や鼻、口が無く、その顔

から感情を読み取るのは難しい。

ワイシャツにベストを着用したダンディな服装に包まれた体は、茸ゆえに寸胴体型であり腰が無い。しかし、茸らしからぬ人間のような肩や手があり、その歪な形をした両手でシャンパンの瓶を抱えていた。

「大変お待たせ致しました。給仕は私が勤めさせて頂きたく思います」

「あ、ああ、頼もう」

「はっ、有難う御座います」

その言葉と共に男性使用人がキビキビとした動作でフォーマルハウトたちの前に食器やナプキンを綺麗に並べ、食事の準備を済ませる。

「それではまずはこちら、食前酒としてスヴァルトアールヴヘイム産の葡萄を使用して製造致しましたシャンパンで御座います」

副料理長の手でシャンパンの瓶からキュポンと小気味良い音を立てて栓が抜かれる。続いて二人のグラスにシャンパンが注がれると炭酸が弾ける音と共にふわりと芳醇な香りが立ち込めた。

生まれて初めて嗅ぐシャンパンの香りに、フォーマルハウトはまだ料理が見えていないというのに食欲が湧き立つのを感じる。

「それと一皿目オードブルとしましてヴァナヘイム産ペネトレイトクラブとアルフヘイム産エッセンスプラムのサラダで御座います」

次にクロツシュが被せられた大皿が目の前に置かれた。

クロツシュが取り去られて目に飛び込んで来たのは、良い意味で食べ物とは思えないような料理だ。

量に対して不釣り合いなほどに大きい皿は料理長の手による盛り付けにより見事な調和を生み出し、まるで初めからこの料理のために作られた皿であるかのような錯覚を受ける。フォーマルハウトの知識に無い白いソースで描かれた美しい模様は芸術品の如きものであり、食べて壊してしまうのが躊躇われるほどだ。

目の前に並べられた料理を自分などが食べても良いのかという考えがフォーマルハウトの脳裏を過ぎつつが、意を決してまずはシャン

パンを口に含む。

シユワシユワとした炭酸が口の中で弾けるたびにシャンパンの豊かな香りにフォーマルハウトは感動する。もうこれだけでもいいかなと思えてしまうほどの満足感だ。しかし、シャンパンの香りは食欲を刺激し、満足感はいつの間にか食欲へと姿を変えていた。

食欲に背を押されるままにナイフとフォークを手に取って、映画か何かで見た記憶を頼りにナイフとフォークを操る。大きくぷりつとしたペネトレイトクラブの身を一口大の大きさに切り分けて、エッセンスプラムと共に口へと運ぶ。

瞬間、フォーマルハウトの体を電流が走り回るような衝撃が襲った。

美味しい。それ以上の言葉が見つからない。フォーマルハウトはこの美味しさを形容する言葉を持ち合わせていなかった。

口に含んだ蟹の身は柔らかかではあるがしつかりとした弾力で歯を押し返し、共に口に含んだエッセンスプラムの瑞々しい食感がアクセントとなつて蟹の弾力と旨味がさらに際立たせられる。噛む度に染み出してくるずっと味わっていたくなるような旨味が掛けられている白いソースと混ざり合い、完璧だと思われる味をさらに一段階上へと押し上げていた。

(ああ……食べ物ってこんなに美味かったんだな……)

口の中の料理を味わい噛み締めながら、心の中でしみじみと呟く。

「ど、どうした、フォーマルハウト？」

「……えっ？」

感動に身を震わせていたところに声を掛けられたフォーマルハウトが我に返ると、食事の手を止めたヴェルフェニアやルミナリスたちがぎよつとしたような顔をしていた。殆ど表情を動かすことが無いシズですら、誰の目からも分かるほど驚いたように目を見開いていた。

「い、如何なさいましたか？　もしや何かお嫌いなものでも……」

「な、何？　いや、そんなことは——」

ない、そう言おうとしてようやく気付く。自分の頬を涙が伝ってい

ることを。

本物の食べ物を食べた感動。その味の美味さ。自分が今まで食べていた合成食糧など食べ物ではなかったんだという悲しみ。それら以外にも色々な感情が緋交ぜになってフォーマルハウトの心の許容量を超え、涙を流させた。

瞳から零れて頬を伝い、顎からテーブルの上へと落ちた涙の雫がテーブルクロスを湿らせる。

「あ、ああ、これは……そう、あんまり美味くてな」

今まで碌なものを食べてこなかったから、などとは言えなかった。ユグドラシルでは味覚も嗅覚も制限されていたため味も匂いも分からなかったが、バフ効果を得るために料理アイテム自体は何度も使ってきた。それは見た目だけなら高級料理であり、それで碌なものを食べて来なかったとはどういうことなのかと訝しまれてしまうからだ。

感動に声を震わせながら紡がれた言葉に、ヴェルフエニアたちは安堵したように胸を撫で下ろす。

「まったく、人騒がせな男だな」

「あー、それはすまないな」

フォーマルハウトは苦笑しながら軽く頭を下げて謝罪したが、その後も新しい料理が運ばれてくる度に涙を流すことになった。魚料理^{ポワソン}、スープ、肉料理^{アントレ}とどれもフォーマルハウトが体験したことのない味の素晴らしい料理ばかりであり、特にアースガルズに生息する雄鶏、グリンカムビの肉を使ったという肉料理^{アントレ}を食べた時は、余りの感動に軽く嗚咽を漏らしてしまうほどだった。

一通りのコース料理を拙いマナーで楽しんだフォーマルハウトは食後に運ばれてきたコーヒーを味わい、未だ感動に打ち震える心を落ち着かせる。

(はあ……美味かったなあ……)

ほうと息を吐いて背もたれに体を預けながら、転移した幸運を噛み締める。

正面には理想の嫁。左右には可愛らしく美しいメイドたち。住ま

う家には忠誠を誓い、慕ってくれる部下たち。そして親友とも呼べる友人、モモンガ。

最後を除き、どれもフォーマルハウトが現実世界で手に入れられなかったものだ。少しばかり忠誠心が重いと感じてはいたが、今ではそれもそれでいいかと適応し始めていた。

「次は何を食べようか……」

異世界転移という異常事態に巻き込まれているとは思えないほどに暢気な発言だった。

第九話 偵察、そして出撃

ナザリツク地下大墳墓第九階層にあるモモンガの執務室は豪華ではあるが、フォーマルハウトの私室と比べるとシンプルな造りだ。

白基調の壁に囲まれた部屋に飾られた調度品の数々には細やかな意匠と装飾が施されており、その高価さと希少性を感じさせる。床には真紅の毛足が長いふわふわとした絨毯が敷き詰められており、余程激しく歩かない限り足音が響くようなことは無い。

しかし、それだけだ。

フォーマルハウトのように壁紙の色を変えたり、自分好みの装飾品で部屋を飾っているわけでもない。あくまでロイヤルスイートと呼ばれる第九階層の雰囲気に対応しい内装の部屋だ。

これはかつてのギルドメンバーの一人が準備したデフォルト内装のまま弄り直すことをせず、他のギルドメンバーのように趣味全開の魔改造を施さなかったことが原因だ。

そんな執務室にある黒檀の執務机。そして総黒革の椅子にはこの部屋の主であるモモンガが座していた。モモンガの斜め後ろには執事であるセバスが立ったまま控えている。

さらにはモモンガの隣、セバスとは反対側には新たな椅子が用意され、フォーマルハウトが座っていた。その後ろから甘えるように覆い被さって密着しているのはヴェルフエニアで、大きく開かれたマントからは白磁の肌がちらちらと見え隠れしていた。さらにその後ろにはセバスのように直立不動の姿勢でシズが控える。

モモンガの前には直径一メートルほどの大きさをした楕円形の鏡が宙に固定されるように置かれており、それを三人で覗き込むような体勢だ。

鏡に映るのは覗き込む三人の顔ではなく、森林だ。空から見下ろすような視点で、鬱蒼と生い茂る緑の木々が映し出されている。

これは静止画ではなく、遠隔視^{ミニ・オフ・リモートビューイング}の鏡によって映し出されている中継映像だ。その証拠に、映し出されている木々の葉が風にそよいでゆらゆらと揺れている。

映し出されているのはナザリックのある山岳地帯から南下した場所に広がっている森林地帯だ。

偵察に出した影の悪魔たちからの報告では、北部、西部、東部には代わり映えのしない山岳が延々と広がっており、南部に広がる山の麓には森林が広がり、森を抜けた先にはいくつかの農村らしき集落が発見出来たらしい。さらに村の中には人間種と思われる生物が生活しているとのことだった。

そこで、潜入による無用なリスクを避けるために影の悪魔たちを撤退させ、遠隔視の鏡による偵察行動に切り替えたのだ。

だが、ここで問題が発生した。
ユグドラシルでは遠隔視の鏡の操作を行うにはコンソールを弄り回せばいいだけだった。しかし、転移してからはコンソールなど存在せず、モモンガには操作方法が全く分からなかった。

そこで急遽フォーマルハウトが呼び出され、付いて来たヴェルフニアを含めた三人で操作方法を模索することになったのだ。

「ダメだ、全く分からないな」

試行錯誤を始めてから二時間。フォーマルハウトたちを呼び出してからさらに二時間。アンデッドであるため肉体の疲労は無いが、モモンガは精神的疲労から溜息を吐く。

「腕振り回して謎の動きをしてる骸骨の絵面は結構シニールですよ、モモンガさん」

「仕方ないでしょうが！ だったらフォーマルハウトさんがやって下さいよ、ホラー！」

モモンガの手によって鏡がフォーマルハウトの正面に移動する。大きな鏡ではあるが宙にふわふわと浮いているので移動させるのは容易だ。

余計な発言をしたことを後悔しながら適当に手を動かしてみよう。知りたいたいののは視点の拡大、縮小なのだが、鏡の中で起きる変化は視点の移動や九十度回転などで望んだ変化は生じなかった。

「ほら、フォーマルハウトさん、奥さんも見てるんですから頑張ってください」

「くつくつく、フォーマルハウト、格好良いところを見せてくれよ」
「他人事だと思って……」

背中からヴェルフェニアの応援を受けながら鏡の前で腕を動かして続ける。それから一時間もしないうちに精神の限界が訪れる。

忠誠心に厚く、至高の四十一人の役に立てるのなら己の死すら喜んで受け入れるようなシモベたちならば何十時間だろうと調査を続けるだろうが、生憎とフォーマルハウトは元人間の一般人だ。彼の精神はそんなに強靱ではない。

むしろこれに関してモモンガの根気が強すぎる。流石に都合四時間も望む結果が得られない調査を休息も無しに続ける気にはなれない。

「……ダメだ」

呟いて、お手上げ状態を体现するように両手を大きく広げる。

それと同時に画面が拡大される。

「えっ」

呟きと共にモモンガの顎骨がカクンと落ち、啞然としたように口が開かれる。

広げていた手を鏡の中心へ寄せるように動かすと画面が縮小さされ、広げると再び拡大される。どうやら両手を翳して中央から広げるか中央に寄せるかで拡大、縮小が行われているようだ。

「……ドヤア」

「うわっ、この赤毛野郎腹立つなあ！」

「どうした骸骨君、嫉妬かな？」

「……流石は私の創造主だ、フォーマルハウト」

ヴェルフェニアが微妙な顔でフォーマルハウトを称賛していた。

「ともかくモモンガさん、俺は村の詳しい座標とか分からないんでお願いします」

「はあ、分かりました」

モモンガが鏡を操り始める。

視点の移動、回転、拡大、縮小。基本的な操作の全てが判明したことで、モモンガの手の動きは加速する。

操作に合わせて目まぐるしく変わる景色を眺めていると、ようやく目的の農村が映った。かなり高い位置から見ていたため動き回る村人と思しき影は豆粒のようだったが、モモンガが手を広げるように動かすと人影や家屋が拡大されて鮮明に映し出される。

映し出された村はとても小さな村だった。村全体が小さな柵で囲まれ、みすばらしい木造のボロ屋と表現するのが最も正しい家屋が二十軒ほど疎らに建てられている。家と家の間には大きな畑がいくつも見られた。

村の中心らしい広場では鬼ごっこでもしているのか、子供たちが走り回っている。広場の真ん中辺りには井戸があり、その周辺では水汲みに来たであろう主婦たちが歓談している様子も見られた。

少し離れた場所にある広々とした畑には麦と思われる黄金色の植物が植えられ、それを手入れする農夫たちが忙しなく動き回っている。

フォーマルハウトは牧歌的な雰囲気を見せる村を眺めながら、様々な場所へと目を向ける。

建物の造りや村人が来ている衣服、生活様式。

そこからいくつかの答えが導き出される。

「何と云うか、中世つて言うんですか？ そんな感じの生活ですね。水の確保に井戸ですよ？」

フォーマルハウトは現実世界で目にした百年ほど前に流行っていたらしいライトノベルを思い出す。

そこで描かれていた生活様式はまさしく目の前に映る映像のような生活であり、大気汚染が進んだ現実世界ではまさしくフィクションとしか思えないようなものだった。それが今日の前で繰り広げられていて興味をそそられる。

「文明レベルはそれほど高くないみたいですね」

「どころか畑仕事に牛使ってるみたいですよ。村全体で二頭は家畜にしては数が少なすぎます」

「村で共用なんですかね……」

その後も視点を動かしながら村の中を見て回ったが、映るのは走り

回る子供たちや畑仕事をする農夫ばかりだ。

ひとまず文明レベルはフィクションの中でよく見る中世レベルだということとは分かった。また、魔法の使用が確認されなかったため、魔法が存在するのかは分からない。

(と言っても、俺たちが魔法を使える以上あってもおかしくはないと思っただけだな)

さらに偵察段階では森の中にゴブリンなど低レベルのモンスターも確認出来ている。

村には剣や弓、或いは銃のような武装が一切見受けられないため、一般人と呼べるような村人でも魔法かそれに準ずる能力が使えると見てもいい。でなければ村の防衛が成り立たない。

まさかモンスターが棲息している森の近くに村を構えて、何の防衛能力も無いなどということもないだろう。

「しかし、どうみても低レベルにしか見えないな……」

「確かに……フェニアはどう思う？」

「ふむ」

フォーマルハウトの肩越しに鏡を覗くヴェルフニアの瞳に映るのは、畑の手入れを行っている農夫だ。

長年の畑仕事で丸まった背中をさらに丸くして屈み、鍔が目立つ鎌で畑に生えた雑草を刈っている。

その所作は熟練の農夫のそれだったが、それ以外に目立った点は無い。魔法やこの世界特有の能力などを使っている様子も見られず、高レベル特有の身体能力を有している様子もない。

どこからどうみてもただの農夫だ。

「……私には探知系能力は殆どないから何とも言えないが、レベル一桁ではないか？ これではゴブリンにも対抗できまい」

「だよなあ」

「ではこの世界特有の何かがあると考えるべきか……」

フォーマルハウトはぶつぶつと呟きながら考え始めたモモンガを無視して、鏡を自分の前へと動かす。

考えることはモモンガに任せ、資料やフィクションでしか見たこと

がない農村の暮らしとやらを観察することにした。

「お前も考えなくていいのか？」

「頭脳労働は俺の担当じゃないからな」

適当に鏡を操って村の中を上空から見て回る。

殆どの自然が死に絶えたと言つてもいい現実世界において、自然に囲まれた暮らしなどは皆無だ。

深刻な大気汚染の中で生存するには人工心肺が不可欠。それでも尚外出にはガスマスクが必要。その汚染は土壌までもを汚染し、植物などは当然殆ど育たず、農作業や畜産業は一部のアーコロジー内で細々と行われていた。

ゆえにフォーマルハウトは農作業など資料やフィクションの中でしか見たことが無い。そもそも生まれてから転移するまで土に触れたことすらないのだ。

自然を愛したブルー・プラネットほどではないが、大なり小なりみんなが自然への憧れを持っている。それはフォーマルハウトも同じで、鏡に映し出されている光景には興味が尽きない。

出来ることならあの場へ行つて農業体験でもしてみたいくらいだった。

（農業か……第六階層でも出来るか？）

第六階層はジャングルだが、全域がそうというわけでは無い。もちろん大半は鬱蒼と生い茂る密林だ。しかし、闘技場や遺跡を模した建築物、小さな湖、大穴など多彩な地形で構成されており、小さな集落程度なら作れそうな広場もある。

小さな畑くらいなら問題無く作れるだろう。

加えて第六階層守護者のマールは森祭司だ。植物の扱いに長ける森祭司の魔法や助言を受けることも出来る。

（……うん、そういう生活も中々いいんじゃないか？）

自給自足。既に現実世界では使われなくなって久しい言葉だが、憧れる言葉だ。

ヴェルフニアと二人きり、田舎の農村で農作業をしながら牧歌的な暮らしをする風景を夢想し、自然と口元がにやける。

その様子を間近で見ていたヴェルフエニアが怪訝そうな表情で口を開く。

「どうした、急ににやけて。……ああ、こういう娘も好みなのか？」
「は？」

娘『が』ではなく『も』と言うのは自分がフォーマルハウトの好みと合致しているという自負からだ。

妄想の世界から戻ったフォーマルハウトの目に飛び込んで来たのは、他の子供たちと共に楽しそうに走り回っている、恋愛対象として見るには少し幼すぎる少女の姿だ。

妄想しながら適当に操作をしていたら、妙なところで視点が固定されてしまったらしい。

「いや、違——」

「ふむ、少々田舎臭い気もするが……お前が好みだと言うのならいいのではないか？」

『は？』

今度はモモンガも一緒に間抜けな声を漏らす。

「？ モモンガ様まで、どうしたのですか？」

「いや、どうしたじゃなくて……ごほん！ ヴェルフエニア、お前はフォーマルハウトさんが、あー……他の女性を気に掛けていても何とも思わないのか？」

「はい、特には何も。むしろフォーマルハウトはハーレムを作るべきだと思っています」

『ハーレム!?!』

再び二人の声が重なる。

「優れた男の周りに女が集まるのは当然のこと。であれば、私のフォーマルハウトの周りに女が集まるのも当然です」

「そ、そう……なのか？」

「それに、夫を慕う者が多いのは妻として誇らしくもあります」

とんでもないことを言い始めたヴェルフエニアに二人は困惑する。

モモンガから『何て設定をしたんだ』という抗議の視線が送られてくるが、フォーマルハウトからすれば知ったことではない。こんな設

定は施していないのだ。

「だからフォーマルハウト、ハーレムを作ると良い。ああ、もちろん正妻は私だぞ、そこは譲らん」

笑みすら浮かべながらそう言うヴェルフエニアを見て微妙な表情を浮かべる。

ただ、予想外の振る舞いに混乱の極みに到達して沈静化された精神で冷静に考えると、困惑とは別の感情が生まれてくる。

(……あれ、アリなんじゃないか？ ハーレム)

まずナザリックにいる女性陣はほぼ全員が可愛らしい。それぞれタイプは違えど、守備範囲が広くて悪く言えば節操の無いフォーマルハウトには全員がストライクゾーンと言ってもいい。

もちろん本人の同意無しで手を出すなどはしないが、ヴェルフエニアという正妻の存在も後から側室が増えることも全てひつくるめて同意してくれるのなら、男としてとても素晴らしいことなのではないだろうか。

正妻もそうしろと言っている。何を躊躇うことがある。

結局のところ、ハーレムという男のロマンの誘惑に抗えていないだけなのだが。

「……うん、アリだな」

「だろう」

「いやいやいやいや！ 何納得してるんですかフォーマルハウトさん！」

モモンガが掴み掛らん勢いでフォーマルハウトへと詰め寄る。

「落ち着いて下さいモモンガさん。俺、思ったんですよ、ハーレムは男のロマンだって」

「何でそんなこと思ってしまったんですか……」

「安心して下さいモモンガさん、全員必ず幸せにしますから」

「そういう問題じゃないですからね!? そもそも女性と付き合ったことあるんですか?」

「モモンガさんと同じですが」

「経験ゼロじゃねーか！ ハッ!?!」

叫び、モモンガは周囲にセバスたちが控えていることを思い出す。恐る恐るとセバスの方を見やるが、当のセバスは何の感情も表に出していない。主の恥を聞かなかったことにしてくれたのだろう。そう判断し、モモンガは出ない息を大きく吐いて心を落ち着かせる。セバスもまた、モモンガの期待に応えるかのようにこの場での話は全て聞かなかったことにするつもりだ。まさしくナザリックの執事に相応しい心意気だと言える。そしてシズも同様に、メイドとしての矜持があった。

なお、二人の気遣い虚しく、後日この時の会話はヴェルフエニアによってアルベドとシャルティアへと渡り、ナザリック全体へと広まることになった。

そんな未来を知る由もないモモンガは一度咳払いをして、真剣な目でフォーマルハウトを見つめながら口を開く。

「ごほん……本気ですか？」

「本気です。半分ほどは」

「……はあー」

モモンガがこれ見よがしに大きな溜息を吐く。

肺の無い体で吐き出した息は一体どこから出ているのか。

「条件があります」

「……お裾分けはしませんよっ」

「いりませんよー！」

モモンガが出した条件は三つだ。

一つはナザリック内の者には同意無しで手を出さないこと。無いということは分かっているが、親友が親友の子供たちを強引に手を掛けることはモモンガには受け入れ難いことだからだ。

もちろんフォーマルハウトもそうするつもりはない。

二つ目はナザリック外の者を迎える場合、ナザリック内へは入れずに外で養うことだ。ナザリックには人間種を見下し、嫌悪する者たちが大半を占める。そのシモベたちに無用なストレスを与えないようにするための措置だ。

また、フォーマルハウトが自分の感性で引き入れただけの存在をナ

ザリックの者として迎えることは出来ないという考えもあった。

この養うための費用などは全てフォーマルハウト本人が自費で支払う。自分のペットは自分で世話をしろということだ。

そして最後が処分について。

裏切った場合やフォーマルハウトが飽きた場合、何らかの失態によつてナザリックに対して多大な不利益を見舞った場合には、フォーマルハウト自身が責任を持って処分するという決まりだ。

「うん、おけおけ」

「そんな軽く……まあいいです。ヴェルフエニアもそれで良いな？」

ナザリックの者たちにはくれぐれも迷惑を掛けないように」

「はい、畏まりました。ご安心下さい、私が責任を持ってフォーマルハウトに相応しいハーレムを築きます」

女としては妙に間違っているように思えるヴェルフエニアの言葉を聞き流しながら、フォーマルハウトは未来へと思いを馳せる。

ナザリックのNPCたちは美人だ。NPCだけでなくシャルティアヴァンパイア・ブライド配下の吸血鬼の花嫁もそうだし、デミウルゴス配下の嫉妬の魔将イビルロード・エンウイも色気があつて良い。

流石にギルドの活動としてエロモンスター狩りに行こうと言い始めるペロロンチーノほどではないが、フォーマルハウトもそれなりにエロモンスターが好きだ。ペロロンチーノや一部のギルドメンバーと共に、女性陣には内緒でエロモンスターのスクリーンショットコレクションを集めていた時期もあった。

ナザリック外に期待出来るかは分からないが、フォーマルハウトはそれほど悲観していなかった。

モモンガが気付いているかは分からないが、村の中を見て回る過程で映った女は大体が整った容姿をしていた。シワやたるみが目立ち始める壮年期の女ですら、そういう対象に見ることは出来ないまでも嫌悪感や忌避感を抱くようなことはない。

整った容姿であるのは男たちも同じであり、現実世界で散々自分の顔を見て来たフォーマルハウトからすれば腹立たしいことこの上ない。ユグドラシルで作った、美形のアバターの姿をしていなければ理

不尽さに嘆いていただろう。

この村だけが特別美男美女が多いということは無いだろうから、世界全体における容姿の水準が高いのかもしれない。単なる予想ではあるが、確信に近い予感を持つていたために自然と顔がにやける。

（まったく、現実世界とは大違いだな。まあ見た目だけで選ぶつもりはないけど……いや、まず俺がモテるのかどうかからか。ナザリックだとモモンガさん以外みんなちやほやしてくれるからな……ん？）

視界の端に収めていた鏡の映像に妙な動きがあった。

既に少女のアップ映像から通常の俯瞰視点に切り替わっていた鏡の中では、村人たちが慌ただしく動き始めた。手に持っていた農具を打ち捨て、自らで手入れをしていた麦畑を踏み荒らすことも厭わずに走り出す。

「……何だ？」

「どうした、フォーマルハウト」

背中に感じるヴェルフニアの感触を意識の外へ追いやって、食い入るように鏡の映像を見る。先ほどまでハーレムがどうこう言っていた者と同一人物とは思えない表情だ。その雰囲気の変化を感じ取ったモモンガも鏡の中へと目を向ける。

鏡の中では村人たちが一目散に東側へと走っていく様子が映し出されていた。その後少しして、村の西側から多数の何かが映り込む。

それは人のような二足歩行の生物であったが、人間ではない。かといって森妖精のような近親種の姿でもない。

擦り切れた腰布しか身に付けていないその体は大の大人よりも一回り大きい、決して贅肉に塗れているわけではない。無駄な贅肉が削ぎ落とされた引き締まった筋肉質の肉体は剛毛とも呼ぶべき毛むくじやらの毛皮で覆われ、頭部は獅子や虎のような肉食獣を思わせる。

強靱な手足の指先には太く鋭い鉤爪が備わっていて、脆弱な人間程度の肉体ならば簡単に引き裂いてしまえそうだ。

そんな存在が十体ほど、村を囲んでいた小さな柵を破壊し、次々と村の中へと雪崩れ込んで行く。

「ビーストマン……？ ユグドラシルの種族もいるのか」

「団体旅行って感じでもないですね。祭りか？」

怪訝な表情で鏡を見つめていた二人の目に飛び込んで来たのは、虐殺だった。

ビーストマンは逃げ惑う村人に、その肉体から生じられる瞬発力で瞬時に追いついて飛び掛かるように牙を突き立てる。苦痛と重さにバランスを崩した村人が倒れ込んで地面を転がるが、その男が解放されることはない。

涙を流して何とかビーストマンから逃れようともがく男に、ビーストマンは爪を突き立てる。殺すのではなく痛めつけるのが目的らしく、確実に急所を外して腕や肩などを突き刺し、潰し、抉る。

溢れ出た血の匂いに呼応するかのように他のビーストマンたちも次々と獲物へと飛び掛かる。

瞬時に追いついて殺す者。わざと時間をかけてゆっくりと追い回し、絶望と恐怖を煽る者。捕まえた人間を力尽くで持ち上げて壁や地面に叩き付け、玩具のように遊ぶ者。それら方法は様々であったが、最後にビーストマンたちが行ったのは同じ行為だった。

食事だ。

彼らは村人たちを食らったのだ。

人型であるのに、獣のように事切れた村人たちを押しさえつけ、その腹や腕に顔をつまむようにして食らう。鋭い牙で噛み千切り、時に爪や強靱な腕で一口サイズに解体してから腹の中へと収めてゆく。中にはまだ生きている村人から臓物を引きずり出して、その悲鳴と絶叫を聞いて愉悦に顔を歪めながら食事を行う者もいた。

そうして他の村人を犠牲にして何とか村から出た村人たちを待っていたのは更なる絶望だ。

別動隊らしきビーストマン十体ほどが目の前に現れ、村人たちの退路を塞ぐ。前方にはビーストマンという自らを上回る暴力、後方にはかつての隣人や家族たちの悲鳴やすすり泣く声が響く地獄絵図。逃げられるという僅かな希望から一転、絶望へと追い落とされた村人たちはついに恐慌状態に陥る。

打ち捨てられた農具を広い直し、武器として構える者。手近な家中に逃げ込み、戸や窓を閉め切つて震える者。狂気に身を落とし、笑い始める者もいた。

「ちっー」

不快さを隠すことも無く舌打ちし、画面を別の場所へと切り替えようとしたフォーマルハウトは気付く。

自分が余りにも冷静すぎるということに。

虐殺を見せられて感じたのは不快さと苛立ちだ。それは虐殺に対してのものではなく、自分とヴェルフニアの二時間に渡る鏡との悪戦苦闘の成果を邪魔されたような感覚を受けたからだ。

長い時間をかけて成し遂げたことに対して、最後の最後で取るに足らないケチがついた。

それだけしか感じなかった自分に対して、フォーマルハウトは僅かな恐怖を抱く。

精霊である自分は、既に人間を同族として認識していない。そんなはずはないと頭の中で否定しても、冷静な別の自分がそれは当たり前だと囁いてくる。

誰よりも良く知っているはずの自分が、まったく別の何かに変質してしまっている感覚。だがそれすらも受け入れ始めている自分が恐ろしい。その恐ろしさも、どんどん薄まってゆくのを感ずる。一体どうすればいいのか。

ふわりと、柔らかくて温かな何かフォーマルハウトの頬に触れた。

「大丈夫だ。お前が何を恐れているのかは知らないが、ここには私がいるのだから。何も恐れることなどない」

フォーマルハウトにだけ聞こえるように小さく、そして優しく諭すように囁かれた声は、フォーマルハウトの心を恐怖から救い上げた。感じていた恐怖は安らぎへと変わり、気付かないうちに荒くなっていた息が自然に整う。

「……格好悪いところを見せたな」

「ふふ、気にするな」

慈愛に満ちた笑みを浮かべるヴェルフエニアを見て、確信する。
きつと自分がまた自分を見失いかけてしまっても、ヴェルフエニア
さえいれば大丈夫だと。

隣に座り頭を抑えるようにして険しい視線を鏡へと向けているモ
モンガを見やる。

恐らく自分と同じように悩んでいるのだろう。長年の付き合いか
らモモンガの胸中を読み取ったフォーマルハウトは、モモンガの肩へ
手を置いて立ち上がる。

「行きますよ、モモンガさん」

「え？」

驚いた様子のモモンガを見て笑い、そしてセバスへと視線を向け
る。

「誰かが困っていたら、助けるのは当たり前。なあ、セバス？」

「！ はっ！」

それはセバスの創造主であるたち・みーの口癖だ。

フォーマルハウトもモモンガも、その言葉と共にたち・みーに助
けられたことは数え切れないほどある。

だから、その言葉でモモンガもまた決意する。

(……どちらにせよ、この世界で自分たちの力がどれだけ通じるのか、
試さなければならぬわけだしな)

妙な気恥ずかしさを打算的な考えで振り払い、モモンガは立ち上げ
る。

「セバス、お前とフォーマルハウトさんが前衛。私とヴェルフエニア
が後衛だ。シズはナザリックの警備レベルを最大限引き上げるよう
各所へ通達。それとアルベドには完全武装で来るように伝える。次
に後詰の準備だ。この村に隠密能力に長けるか透明化能力を持つシ
モベを複数送り込め」

「畏まりました」

「モモンガさん、急いで。間に合わなくなります」

急かすフォーマルハウトの視界に映る鏡の中では場面が代わり、先
ほどフォーマルハウトが映していた少女が村の外に広がる草原へと

逃げ込む様子が映されていた。その背後を三体のビーストマンが
ゆっくりと追いかける。

モモンガはすぐさまアイテムボックスを開き、そこからスタッフ・
オブ・アインズ・ウール・ゴウンを取り出す。

その間に転んだ少女へとビーストマンの手が伸びる。もはや時間
が無い。モモンガの口から言葉が滑り落ちる。

「ゲート転移門」

第十話 ヴェンデ村

峻厳な山脈の麓に広がる森を抜けると、いくつかの村がある。

その一つであるヴェンデ村での暮らしは意外と忙しい。そもそも農村での暮らし自体が牧歌的で穏やかと思われがちだが、案外忙しいものだ。それも田舎であればあるほどに。

朝は早く起きて、井戸から水を汲まなければならぬ。

まず起き抜けのこの労働からしてかなりの重労働だ。井戸から汲み上げた水の入った木桶を抱え、家にある水瓶が一杯になるまで何往復かしなければならぬ。

水汲みが終わって朝食を済ませれば、畑仕事や家畜の世話だ。

家畜と言っても畑を耕すためのもので、食肉用ではない村の共有財産として牛が二頭いるだけだ。

その牛に餌と水を与え、広い畑を耕し、種や苗を植えて、雑草や害虫の駆除を行う。屈んでの仕事が多いので多くの者はよく腰や膝を痛めるが、それで音を上げるわけにはいかない。何の特産品もない村ではそれだけが貴重な収入源となり得るのだから。

畑仕事の無い者や女子供は森に入って狩りや採取だ。

農作業にも使う貴重な家畜を潰して肉にするわけにもいかないため、狩りが出来る者は森の奥に入って兎や鹿、猪などを狩る。狩りの技術を持つ者自体がそれほど多くないため肉は貴重だ。複数頭仕留めた時など軽いお祭りのような騒ぎになる。

狩りの技術を持たない者や女子供は、村に近い安全な森の入り口辺りで様々な物を採取する。食べられる木の実や野草であったり、^{ポーション}水薬の材料となる薬草などだ。特に薬草は街に行けば高値で売れるため、これも疎かにしてはいけない。

夜になればしっかりと食事を摂り、さっさと寝る。起きていると火を灯さなければならぬが、そのためには油を使う。次の日も早く起きなければならぬし、そんな無駄遣いをしている余裕もない。

ヴェンデ村の住民の一人であるミリア・トーレムもまた、そんな日常を送る農民の一人だ。

くすんだ色の金髪を邪魔にならないように、かつ女性らしさを失くしてしまわないようにセミロングにカットし、左右の髪を一部残して後ろで一つに纏めて縛っている。

年の頃は十五、六歳ほどだろうか。まだ僅かに幼さを残す顔立ちには綺麗というよりは可愛らしく愛嬌があり、もう少し成長すれば美人になるだろうという将来性を感じさせるものだ。

動きやすさと丈夫さだけが優先された飾り気のない服は所々に土や埃が付着し、少しだけみすぼらしさ助長していた。そんな衣服に包まれた体は控えめなスタイルであり発展途上であることを思い起こさせるが、成長するかどうかはこれからの彼女の努力次第だろう。

そんなミリアはごく普通の人間の夫婦の間に生まれたごく普通の村娘だ。

早朝に起き出して母に代わって井戸に水を汲みに行き、朝食が終われば父と共に畑に出て仕事を手伝う。最近ではもういい年頃なのだからと嫁入りのために母から家事を教わることも増えたとし、森へ採取に向かうことも多くなつた。

いつもの光景。いつもの日常。

だが、その日だけはいつもと違った。

今日のミリアの仕事は父と共に畑仕事だ。

風に揺れる麦を踏み荒らしてしまわないように注意して畑に入り、屈んで雑草や害虫を駆除する。長く続けていると腰が痛くなってくるが、休憩は挟んでも放り出すわけにはいかない。

「ふう、この辺りも終わり……と」

どのくらいそうしていただろうか。額に滲んだ汗を拭って立ち上がり、ぐつと背伸びをしながら呟く。

既に日は高く上り、真上から照り付ける太陽の日差しが眩しい。夏も終わって本格的な暑さは去ったが、汗ばむ陽気は去ってはくれない。

ミリアは気分転換をするように辺りを見渡す。風に揺れる小麦畑と村の住人が住まう家々が建ち並ぶ代わり映えのない景色だが、座り込んで土ばかり見ていて疲れた目には丁度良い。

目に入る麦は黄金色で、穂にはたくさんの実が生っている。もうすぐ収穫の季節、今年は気候にも恵まれたので収穫量には期待出来るそうだ。

収穫量が上がれば収入も増える。収入が増えれば小遣いが貰えるかもしれない。せつかく土と埃と汗に塗れて頑張っているのだから、少しくらい報われてもいいはずだ。

最後に小遣いを貰ったのはいつ頃だろうかと記憶を探りながら、ミリアは麦を踏み潰さないように畑の中を歩く。まだまだ手入れをしなければならぬ場所はあるのだ。

「……何の音？」

まだ手入れされていないらしい場所を見つけて屈もうとした時、ミリアは余り聞くことのない音を耳にした。

木が折れるような乾いた音だ。それがいくつも遠く——村の西に広がる森の方で鳴っている。続いて地を踏み締めるような足音がいくつも鳴り響き、ようやく他の村人たちも異変を感じ取って立ち上がる。

それからすぐに何人もの村人たちが音の鳴るほうから息も絶え絶えに走り出してくる。青い顔をして転びそうになりながら、何かから逃げるように必死に走っている。

「ビ、ビーストマンだ！」

逃げて来た村人の一人が叫ぶ。

それは亜人の名だ。恐怖の名だ。

人間の十倍もの身体能力を持ち、人を食らう化け物たちの名だ。森に棲む猪や熊、モンスターであるゴブリンすらも歯が立たない捕食者だ。

茶色の影が叫んだ村人へと襲い掛かった。

毛むくじやらの毛皮に覆われた茶色の影は村人よりも一回り大きく、虎のような頭をしていた。深々とその牙を村人の肩へ突き立て、太い腕と足でしがみつくように捕まえる。

ミリアはビーストマンを見たことがなかった。しかし、その姿と恐ろしさを両親や村の大人たちから語られて知っている。だから目の

前の毛むくじやらの存在がビーストマンだと確信するのにそう時間はかからなかった。

「走れ、ミリアー！」

離れた場所にいた父の叫びを聞いて、弾かれるようにミリアは走り出す。

麦を踏まないようにしている余裕などない。育って収穫を待つばかりだった麦を踏み荒らしながら、ビーストマンが出て来た方とは反対の方へと走る。途中であの恐ろしい影が迫っていないか気になって、肩越しに後ろへと視線を向ける。

「ひっ！」

短く息を呑んだミリアが目にしたのは地獄だ。既に村人が何人か、あの忌まわしくも恐ろしい影に捕まっている。

村人たちは牙で食い千切られ、爪で引き裂かれ、その常識外の膂力で地面や壁に叩きつけられている。生きたまま臓物を引きずり出されていたのはミリアも良く知る隣人だ。気さくで人当たりの良い男だったが、その顔はいつも浮かべていた笑顔ではなく恐怖と絶望に染め上げられたまま絶命していた。

目尻から零れる涙を拭って、必死になって走る。

父と母は無事だろうか。あんな酷い目に遭っていないだろうか。大丈夫なはずだと根拠のない希望を捨てずに足を動かす。

「生まれ、ミリア」

突然目の前を手で制されて急停止する。聞こえた声は父の声だ。

生きていた、良かったと安堵する間もなく、真剣な表情を浮かべた父がミリアの耳元へと口を寄せる。

「ミリア、南へ走りなさい。東側もダメだ、さっきビーストマンの影が見えた」

「お、お父さんは？」

震える声で問い掛けるミリアに答えた父は、笑顔を浮かべていた。引き攣ったような、諦めたような酷い笑顔だ。

「大丈夫だ。これでも子供の頃は村で一番足が速かったんだぞ？ 私は母さんを連れて後から行くから、な？」

ミリアはすぐにそれが嘘だと確信する。

肩に置かれた父の手は小刻みに震えていたし、笑顔の目尻には涙が浮かんでいた。それでもミリアは無理をして笑顔を浮かべ、頷いてから南へ走り出す。

家と家の間を抜けて、なるべくビーストマンに見つかってしまわないように。

生き延びて、生き延びて、近くの街まで行かなければならない。そうして助けを呼んで、父を、母を、同じ村に住む村人たちを助けなければ。

縦えそれが無理な願いだと分かっている、それだけを想って足を動かす。

獣のような鳴き声が背後から聞こえたのは、ちょうど村の出口へ辿り着いた頃だった。

「そんない」

思わず背後へ目を向けたミリアが目にしたのは、三体のビーストマンだった。

見つかってしまったという絶望がミリアの頭を埋め尽くす。

絶望に押し潰されそうになりながらどれだけ必死に足を動かしても、ビーストマンたちの足音は消えて無くならない。肩越しに後ろを見ても間に有った空間は狭まりも広がりもせず、一定の距離を保ったまま追いかけてきている。

絶望と恐怖に混じり、ミリアの心に憤怒が沸き上がる。

ビーストマンたちは遊んでいた。どれだけ必死に足を動かしても簡単に追いつけるミリアを野兎か何かに見立てて、ゆっくりと追い詰めて心が折れるのを待っているのだ。

ミリアは心の中で叫ぶ。

自分が何をした。父と母が何をしたと。

田舎に生まれた村娘なりに、真つ当に暮らしてきたつもりだ。父と母の言うことをよく聞き、文句も言わずに畑仕事や家事の手伝いだった。敬虔な信徒というわけではなかったが、毎日食事の前には神に祈りだつて捧げてきた。

罪を犯さず、懸命に慎ましく生きてきたはずだ。

(何で！ どうして！ 神様！ 私の何がいけなかったんですか！)

お父さんとお母さんの何がダメだったんですか!?)

少女の呼び掛けに答える声は無い。

涙と疲労で顔を歪めながらひた走る。もうすでに足の感覚は無く、呼吸をする度に胸が痛む。全てを諦めて投げ出してしまえたらどんなに楽だろうか。

そんな思いが頭を過ぎると、ミリアが足を纏れさせたのは同時だった。

「あつ……ぐうっ！ げほっ、げほっ！」

空中に投げ出された体が強かに打ち据えられる。頭から地面へ突っ込んで、胸を地面にぶつける。肺から押し出された空気が短い悲鳴となって響き、衝撃に咳き込んだ。盛大に地面に擦り付けた顔や腕の皮が剥がれて酷い有様になっていたが、そんな痛みすらも気にしている余裕がない。

体を起こしたミリアの目に飛び込んで来たのは三つの大きな影だ。

初めて間近で見えるビーストマンの凶悪な姿に息を呑む。心臓の鼓動が早鐘のように鳴り響き、恐怖に体の自由が奪われる。村で見た凄惨な光景が頭の中に浮かび、吐き気が込み上げる。

「いや……」

ガチガチとうるさい程小刻みに震える歯の間から漏れたのは拒絶の言葉だ。同時に終わりを感じ取って、堰を切ったように涙が溢れ出す。恐怖と疲労で力の入らなくなった足を動かすが、立ち上がることも後退することも出来ずに土を蹴る。

ミリアは願う。

もしもいるのならば、これからの自らの全てと引き換えに助けて欲しいと。父と母を救ってほしいと。

これ以上ないほどに見開かれた目が映すのは、毛むくじやらの腕だ。それは決して神の救いの腕などではない。

少女の願いは悪意に満ちた笑みを浮かべる獣たちに踏みにじられる。

この日、少女の神は死んだ。

◆ ◆ ◆
最初に異変に気付いたのは、中央に立って少女に手を伸ばしていたビーストマンだ。その異変を目にしたビーストマンは動きを止めて、呆けたような表情を浮かべる。両脇に立っていたビーストマンたちも、それに続くように動きを止める。

ビーストマンたちの視線の先にあったのは闇だ。暗く、深く、どこまでも続いているかのような闇。得体の知れない現象に恐怖し、凍り付いたように動けなくなる。

闇が地面から噴き上がり、少女の背後で楕円形を形作った。

「……………え？」

突然動きが止まったビーストマンたちを見て、未だ異変に気付かぬ少女は呆けたような声を漏らす。

「うらあああああつ!!」

それとほぼ同時に獣のような咆哮が響き渡り、闇の中から何かが飛び出した。

目が追いつかないほどの速度で飛び出した赤と黒のそれは、勢いそのままに少女へと手を伸ばしていたビーストマンの一体へと接触する。

その瞬間、たったそれだけのことでビーストマンの上半身が消滅する。消し飛ばされた上半身は辺りに肉片を撒き散らし、下半身だけがそこに立っていた。やがてそれは思い出したかのようにぐらりと動き、地面へと倒れ伏す。

その光景を見ていた生き残りのビーストマン二人と少女は言葉を失い、それまで抱いていた全ての感情が思考と共に抜け落ちた。

「ええ……………」

呆ける三者を前に、その現象を引き起こした張本人である赤と黒の塊——フォーマルハウトは啞然とした表情を浮かべる。

開かれたく転移門>から見えたのは、酷い怪我をした少女へ手を伸ばすビーストマンと、今まさに襲われようとしていた少女だった。

モモンガやヴェルフェニアの制止を無視してナザリツクから飛び

出し、出会い頭に威圧を込めて叫びながら掌底を放った。ガードされても衝撃で押し飛ばし、相手が警戒して距離を取ってくればいいな程度の気持ちで撃った攻撃だ。

だが結果、相手はガードどころか何の反応も示さず胸に掌底を受け、上半身が爆散。夥しい量の血とペースト状になった肉や骨だった何かを撒き散らしながら絶命してしまった。その場に形を保って残ったのは下半身だけだ。

フォーマルハウトは思わず自分の手に視線を向けてしまうが、そこにはいつも通り自分の手の平があるだけだ。コキュートスと戦った時のように炎を纏ってすらいない。

(スキルも魔法も使わずにぶん殴っただけなんだけどな……)

フォーマルハウトが放った掌底は、言ってしまったえば通常攻撃だ。縦えステータスが戦士職と比べても遜色が無いとはいえ、スキルも魔法も併用していない打撃では大した威力は無い。

「フォーマルハウト！」

未だ広がつていたく転移門^{ゲート}の中からヴェルフエニアが姿を現す。

「お、フェニ——」

「何をしているこの馬鹿！ 勝手に先行して、何かあったらどうするつもりだ！」

「あ、はい……」

「まったく……私を未亡人にするような真似はよしてくれ、本当に」

震える声で訴えるヴェルフエニアの言葉に、フォーマルハウトは罪悪感に押し潰されそうになった。

ついユグドラシルの癖で何も考えず真っ先に突撃したが、相手の実力が全く分からない状態では間違いなく悪手だ。一歩間違えば返り討ちにあつて、上半身が消し飛んでいたのは自分だったかもしれない。

慎重に動かなければならないと分かっていたのにこの体たらく。ユグドラシル気分が未だに抜けていないことを自覚したフォーマルハウトは、心の中で溜息を吐きながらヴェルフエニアへと頭を下げる。

「その……すまん」

「ああ、もう気にするな。だが同じことはしないでくれ」

「ああ、分かってるよ」

ヴェルフエニアの頭に手を乗せ、ぽふぽふと撫でる。

驚いたような顔の後に抗議の視線が向けられるが、やめるつもりはない。小さなヴェルフエニアの頭はとも撫でやすい位置にあるのだ。

「ヴェルフエニアよ、余り期待はしない方が良いでしょう。私やたちさんが言っても治らなかつた悪癖だからな」

聞き慣れた声が闇の中から響き渡ると、順番に三つの影が姿を現した。

初めに姿を現したのはいつも通りの黒い執事服に身を包んだ白髪に立派な白い髭を蓄えたセバスだ。フォーマルハウトに一礼してから速やかにゲート移動の脇へと移動し、跪く。

次に闇の中から現れたのは戦士だ。その服装はセバスとは対照的にフルプレートに全身鎧に包まれている。

棘の生えた漆黒の鎧に全身を隙間無く覆われた戦士は肌の露出が一切無い。腕には鎧と同じ漆黒のカイトシールドが装備され、鉤爪のようなスパイクが付いたガントレットを嵌めた手は、空間を切り抜いたような空虚さを醸し出す、無が形を成したかのような黒々とした巨大な斧を軽々と所持している。たなびくマントは鮮血に染まったような赤で、身に纏うサーコートもまた血の色だ。

まるで処刑人のような出で立ちであつたが、その黒い鎧はフォーマルハウトには見覚えのある懐かしいものだ。そして、角の生えた面頬付き兜の隙間から向けられた金色の視線が戦士の正体を確信させる。

（あの斧は真なる無の武器形態か。それにヘルメス・トリスメギストス……ということはアルベドか）

アルベドが持つ斧——真なる無は世界級アイテムの一つだ。

その能力は物体に対する極めて強力かつ広範囲への破壊能力。その破壊は広範囲に渡り、堅固な城砦ですらも一瞬で粉微塵に打ち砕

く。

普段は杖の形状をしているが、武器形態として斧の形状で扱うことも出来る。この場合、対物体への破壊に特化している都合上それほど高い攻撃力は持たず、対生物に特化した神器級ゴッズに劣る。しかしながら、それでも強力な武器となることに変わりはない。

そしてヘルメス・トリスメギストス。

それはアルベドに与えられた専用の神器級ゴッズアイテムだ。

アルベドは暗黒騎士ダークナイトを代表とした防御能力に長けた職業ばかりを取得しており、その防御力はナザリック内の全百レベルNPC中トップを誇る。

その防御力を十全に活かすために与えられたヘルメス・トリスメギストスは三重装甲フルプレートの全身鎧で、物理的な強固さを優先されている。その他の力は皆無ではあるが、アルベドが持つスキルに加え鎧の強固さが相まって、その防御力はまさしく鉄壁と呼ぶに相応しいものだ。

ゆえに彼女はナザリックに数いる百レベルNPCの中でも最硬——ナザリック最強の盾の異名を持つ。

アルベドはゆつくりとフォーマルハウトへ向けて一礼してから、先に現れたセバスと同じように<転移門>へ向かって跪いた。

「ひい——」

それが姿を現した時、かすれたような悲鳴を漏らしたのは誰だろうか。最もその近くにいた少女かもしれないし、その悍ましい視線を向けられたビーストマンかもしれない。

闇の中から姿を現したのは闇を切り抜いたような漆黒のローブを纏い、宝玉を啜えた七匹の蛇が絡み付いたて出来たような黄金の杖を手に持った骸骨だった。

その空虚な眼窩に浮かぶ瞳は血のような真紅であり、炎のように揺らめいて、まるで生者に対する憎しみを滲みださせているかのよう淡く光っていた。身に纏う漆黒のローブは胸元が大きく開かれており、そこからは白い肋骨が露出している。腹部には肋骨に守られるように浮かび、吸い込まれるような赤の大きな宝玉が存在を主張していた。

死を体現した何か——死の支配者がそこには立っていた。

闇から現れた死の化身を前に、少女とビーストマンたちは恐怖に囚われる。逃げなければと頭の中でうるさいくらいに警鐘が鳴り響くが、彼女たちは指一本すら動かすことが敵わなかった。

平静を保っていられたのは、彼に与する者たちだけだ。

(モモンガさんやつべえ、怖すぎるわ……)

(ふむ、中々格好の良い登場の仕方だ。流石は我らが最高支配者。まあフォーマルハウトの方が格好良いが)

(流石はモモンガ様。凛々しい御姿に御座います！)

(くふう——っ!!!)

一人冷静では無かった。

「<心臓掌握>」

差し伸ばされた皮も肉も無いモモンガの手が、眩きと共に何かを握り潰す。

たったそれだけのことで、呆然としていたビーストマンの一体が地に倒れ伏した。

目の前の未知の脅威に対してモモンガを選んだのは、モモンガが得意とする死霊系魔法

の中でも第九位階という高位に属する即死魔法だ。

初手にこの魔法を選んだのは死霊系統を得意としているということと以外にも、即死効果に抵抗されたとしても相手を朦朧状態とする追加効果があるためだ。

もしも抵抗されたら、モモンガはこの場の全員を連れて<転移門>へ飛び込んで逃げるつもりだった。

フォーマルハウトの攻撃でビーストマンが爆散していた様子を見ていたために杞憂だとは分かっていたが、それでも未知の相手への警戒は怠らない。

「ふむ……」

倒れ伏したビーストマンを冷たい視線で見下ろしながら、モモンガは自分が完全に人間を止め、肉体だけでなく精神までもアンデッドへと変貌してしまったことを悟る。

人間ではないとはいえ、人型の生物を殺しても何も感じない。これが人間であつた頃ならば、多少なりとも心が動いていたはずだ。

「さて、フォーマルハウトさん。そのビーストマンは軽い実験に付き合ってもらいたいので私が貰ってもいいですか？」

「ああ、分かりました。好きにして下さい。ちよつと失礼するぞ……よつと」

「えつ、きやあー！」

フォーマルハウトはモモンガの提案を受け入れて、固まっていた少女を横抱きに抱え上げる。俗に言うお姫様抱つこの形だ。

驚いたような視線を向けて来るヴェルフニアの視線を無視して、モモンガの邪魔にならないようにビーストマンから離れた位置へ悠々と移動する。

「な、何なんだお前らは！　おい、赤髪の男！　お前がこのアンデッドを使役しているのか！」

最後のビーストマンの獅子を思わせる口から捲し立てられた声は聞き取り辛い、低く擦れたような声だった。取り乱したように唾を吐き散らしながら喚き立てている。

「この下等生物が！　至高の御方に向かってその口の利き方！　万死に値する！」

激昂したアルベドがバルディッシュを振り上げるが、モモンガはそれを手で制しつつ一歩前に出て口を開く。

「良い、アルベド。所詮は獣人だ、構うな。さて、ビーストマン、君には少し実験に付き合ってもらうぞ。なに、軽い実験だとも、すぐに終わるかどおかは君次第だが……まあ一瞬で終わるだろうな」

「な、何——」

「<雷撃>」

翳された骨の指先から一条の閃光が宙を走る。

放たれた青白い稲妻は弾けるような音を立ててビーストマンを撃ち貫いて、悲鳴を上げさせる間も無くその体を物言わぬ消し炭へと変えた。

モモンガが使った<雷撃>は第三位階という非常に低レベルの

魔法だ。ユグドラシルでは初心者や初級プレイヤーが使う魔法で、正面に稲妻を放ち直線状の敵を攻撃する。

低位の魔法としては使いやすい部類ではあるが、百レベルであるモモンガたちからすればゴミのような魔法だ。フォーマルハウトほどに属性特化していれば牽制として使えなくもないが、普通であれば使う意味すらない。むしろ僅かとはいえ魔力を消耗するので、使うだけ無駄だ。

ならばそんな魔法の一撃で消し炭になったビーストマンは、一体どれほど弱いのか。

警戒は怠らないつもりであったが、流石に拍子抜けとばかりにモモンガは肩を竦める。

「まさか第三位階の魔法で即死とは……弱すぎる。ではこれに殺されていた村人たちはこれよりも弱いというのか……」

いや、と首を振って緩みかけた気を引き締める。

ここにいた三体のビーストマンが特別弱いだけという可能性もある。もしくは攻撃に特化していて、防御力はそれこそフォーマルハウト以下という可能性も捨て切れない。

それでも失った緊張感を取り戻すことは難しく、モモンガは代わりに警戒心を強めた。油断したせいで死んでしまうのは余りにも愚かすぎる。

「中位アンデッド作成、デス・ナイト死の騎士」

ゆえにモモンガは壁となる使い捨てのモンスターを召喚することに決める。

それはモモンガが持つスキルの一つであり、アンデッドを召喚するというものだ。

このスキルは、ユグドラシルでは使用と同時に空中から滲み出るようにアンデッドが召喚されるというものだった。しかし、この世界ではモモンガが予想していなかった挙動を示す。

宙に生み出された黒い靄が死んだビーストマンに覆い被さる。

死体に纏わりついた靄は沸き立つように膨張し、ビーストマンの体内へと溶け込んでゆく。やがて靄に完全に包まれたビーストマンは、

糸で吊るされた人形のようなギクシヤクとした動きで立ち上がった。ゴポリという音と共に、今度はビーストマンの口から黒い粘液が溢れ出す。

溢れ出した粘液はビーストマンの体を覆い尽くし、膨張と収縮を繰り返しながら巨大な影を形作った。

数秒ほどでビーストマンを覆っていた粘液が崩れ落ちる。中から姿を現したのは死の支配者オーバードが使役するに相応しい死霊の騎士を思わせるものだ。

それは元となったビーストマンの姿からはかけ離れており、身長も体の厚みも爆発的に増している。左手には体を覆い隠す巨大なタワーシールドと、右手には本来両手で持つはずの一・三メートルを超える大剣、フランベルジュ。波打つ刀身には悍ましい赤黒いオーラが纏わりついて、心臓の鼓動のように蠢いている。

見上げるほどに大きな巨体を隠すのは黒い金属で出来て、鋭い棘が無数に生えた全身フルプレートだ。血管を思わせる赤い紋様が全身に走っており、禍々しさを醸し出している。兜は悪魔を思わせる巨大な一対の角が生え、顔の部分が開いている。

そこから覗く顔は薄い皮膚の張り付いた、腐りかけの人のそれ。あはるはずのものが無い眼窩の中では、生者への憎しみと殺戮への期待が込められた瞳が煌々と赤く灯っていた。

「この村を襲っているビーストマンを殺せ」

「オアアアアアア——ツ！」

主からの命令を受け、死の騎士デス・ナイトは嬉々として村の方角へと走り去っていった。

そこに残されたのは走り去った死の騎士デス・ナイトへと手を伸ばし、呆然としている死の支配者オーバードの滑稽な姿だった。

「勝手に走って行っちゃいましたね」

「ええ、やっぱりユグドラシルとは違いますね……」

ユグドラシルでは特殊な召喚以外は基本的に召喚主に追従して行動する。これは死の騎士デス・ナイトもそうであったのだが、この世界ではその限りではないようだ。

「俺も何か召喚してみます。中位火精霊召喚、フレイム・エレメンタル炎精霊」

スキルの発動に従って、空中に小さな火が灯る。火はやがて炎へと成長し、風に逆巻くように炎の渦を作り出した。

モモンガのスキルと同様に数秒かけて、渦は辺りに火の粉を撒き散らしながらさらに巨大なものへと成長し、やがて一つの形を持つに至る。

それは煌々と燃ゆる焰の化身。死の騎士にも匹敵する巨体は何もその身に纏ってはいないが、その体は激しく燃え盛る炎で出来ている。その姿は筋骨隆々の大男を思い起こさせる逆三角。その中からは下半身は存在せず、先細りするように細くなった体がゆらゆらと陽炎のように揺れていた。

半球型と言える頭部には目と思われるつぶらな窪みが二つあり、その中からは真っ白な光りが漏れ出している。口は頬まで裂けているようなほど大きく、人間の子供くらいならば丸呑みしてしまえそうだ。

「綺麗……」

賛辞の言葉は少女の小さな口から漏れた。

少女は体中に付いた傷の痛みも、目の前に佇む骸骨の恐怖も忘れていた。煌々と燃え上がる赫灼の炎の化身だけが彼女の心を動かす。肌を感じる熱波すらも神々しく感じるほどに、炎の虜となっていた。

こんな人知を超えた美しい存在を生み出し、恐怖を振り撒く恐ろしいアンデッドとも親し気に語り合う、異国の黒い服に身を包んだ赤髪の青年は何者なのか、少女はすぐに思い至る。

（神様……炎の神様と死の神様だ……）

少女は自然と祈りを捧げるような姿勢を取っていた。

今日、少女の神は死んだ。敬虔とは言わないまでも、日々の糧の感謝を捧げていた神は死んだのだ。ならば少女が祈りを捧げるのは何に対してか。

彼らだ。

彼らこそが、少女が信仰を捧げる新たな神に他ならない。少女の神は変わったのだ。目の前で佇む青年と骸骨へと。

そんなことなど露ほども知らないフォーマルハウトは、少女の呟きを耳にして満足そうに頷いて召喚した炎フレイム・エレメンタル精フレイム・エレメンタル霊フレイム・エレメンタルに指示を出す。

「炎フレイム・エレメンタル精フレイム・エレメンタル、死の騎士と共に村にいるビーストマン共を殺せ。ただし村に被害は出さな」

指示を受けた炎フレイム・エレメンタル精フレイム・エレメンタル霊フレイム・エレメンタルは死の騎士とは対照的に、咆哮などは上げず空中を滑るように村の方へと飛び去って行く。何も言わずに去っていったのは、精霊であるがゆえに声を出す器官が無いからだ。

その身を作る炎で辺りを無意味に焼き尽くしていない所を見ても、死の騎士より幾分か落ち着きがあるらしい。

「おー、本当に行っちゃいましたね」

「まあ指示したのは私たちなんで……さて、と？」

ようやく少女へと視線を向けたモモンガとフォーマルハウトは目を丸くした。

そこに居たのは血と土に塗れた怯える少女ではない。膝立ちで胸の前で手を組み、頭を垂れて二人へ向かって祈りを捧げている様は、その酷い状態にさえ目を瞑れば聖職者のようにも見える。

「……フェニア、何した？」

「なぜ私を疑う……お前が炎フレイム・エレメンタル精フレイム・エレメンタル霊フレイム・エレメンタルを召喚した辺りで自分からこうしていたぞ」

「ええ……」

開いた口が塞がらないとはこのことだった。

危ないところを助けたのだ、礼を言われるくらいならば分かる。しかし、なぜ祈りを捧げられているのか。泣きながら命乞いをされる方がまだ理解が及ぶというものだ。

「あー……とりあえずこれを飲め、治癒の水薬だ」ポーション

フォーマルハウトは懐から下級治癒薬マイナーヒーリングポーションを一つ取り出して、少女に手渡す。

少女は妙に恭しくそれを受け取り、やたらと仰々しい礼の言葉を述べてから水薬ポーションを一息に飲み込んだ。

すると、先ほどまでの怪我が夢であったかのように少女の怪我が消え失せた。痛みも無く、痕すらも残っていない。

(凄い……やっぱり神様だ……)

意図せず少女の信仰心を稼いでいたフォーマルハウトは、驚きと納得の二つの感情を抱きながら少女を観察していた。

与えたのは下級治癒薬だ。マイナーヒーリングポーションそれはユグドラシルにおいて最下級の治癒水薬ポーションであり、HPを五十ポイント回復するというものだ。精々第二位階の治癒魔法相当で、フォーマルハウトから見れば大した回復量ではない。

しかし、少女のそれなりに大きな怪我は完治した。

これは恐らく、少女の最大HPが少ないからだろう。

つまりは想定通り、村人たちのレベルは低いと言う事だ。この少女だけ低レベルという可能性も無くは無いが、ただ殴っただけで消し飛んだビーストマン共に虐殺されていた村人が高レベルというのは考えにくい。

「よし、治ったな。……ふむ、近くで見ると結構可愛いな」

小さく呟いた瞬間、自分は何を言ったのだと口を押える。

今までの自分ではあり得ない発言だ。面と向かって異性にこんなことを言えるほど、女性慣れはしていなかった。

しかし、好意を全開にして伝えて来るヴェルフエニアと接し始めて、急速に女性慣れしていつているようだった。

「え？」

幸いにもその言葉は少女の耳へと届いてはいないようだった。

百レベルであるモモンガやヴェルフエニアたちは、その驚異的な身体能力によってしっかりと耳にしていたが。

「あ、いや、何でもない。名前は？」

「ミリア、です。ミリア・トーレムと言います」

「そうか。ミリア、何でお前は俺たちに向かって祈ってたんだ？」

「はい。それは、お二人が神様だからです」

『……は？』

モモンガとフォーマルハウトの声が綺麗に重なった。

「貴方、下等生物にしては見る目があるようね」

(アルベドさ——ん!?)

モモンガとフォーマルハウトは心の声までもが綺麗に重なった。
フォーマルハウトは助けを求めるようにヴェルフエニアへと視線を向ける。

「……ふむ、まあ当然の反応だな」

(フェニアもダメだ！ セバスは!?)

最後の望みを懸けてセバスへと視線を向けるも、老執事は無言のまま感慨深く頷いていた。

「ごほん！ あー、ミリアよ。私は神ではないのだ」

「そう……なのですか?」

「うむ。この我が友フォーマルハウトさんもそうだ。人間ではないが、神でもない。分かったな?」

「は、はい」

モモンガの有無を言わせぬ圧力を受けたミリアは頷いたが、心の中ではモモンガの言葉を素直に受け入れるようなことはしていなかった。

炎に魅せられた彼女にとって、彼らは紛れもなく目の前に降臨した神であった。ゆえに彼女はフォーマルハウトたちを神ではないとするのではなく、何らかの理由で神である身分を偽っているのだと考える。

そうに違いない。お付きの黒い鎧を着た女性も、黒いマントに身を包んだ少女も二人が神であることを肯定するようなことを言っていたのだから。

そんなミリアの考えを知らないモモンガは、彼女が納得して勘違いを正せたものだと思いついで話を進めてしまった。

その小さな瞳に宿る場違いなほどに巨大な信仰心は、未だ消えていなかったというのに。

「よろしい。＜生命拒否の繭＞＜矢守り の 障壁＞」
鷹揚に頷くと、二つの魔法を発動する。

どちらも防御魔法であり、前者は生物の侵入を防ぐ領域を作り出し、後者は弓などによる遠隔攻撃を弱める魔法だ。

「そこにいれば大抵は安全だ。それと、これをくれてやろう」

モモンガは懐から取り出したみすばらしい二つの角笛をミリアの元へ放り投げる。

「それは小鬼^{ゴブリン}將軍の角笛というアイテムで、吹けば小鬼^{ゴブリン}たちがお前に従うべく姿を現すだろう。身を守るためにでも使え」

それだけ言うと、モモンガは身を翻して少女から一步離れる。

それと入れ替わるようにして前に出たフォーマルハウトが口を開いた。

「んじや俺も何か渡しとくか。あー……あつたあつた、これでいいか」
そう言つて取り出したものを、モモンガのように少女へと投げ渡す。

慌てて少女が受け止めたの物はメダルのような物だ。

手の平大のそれは漆黒の何かで出来ていた。石で出来ているようであり、金属で出来ているようでもある。ざらざらともつるつるとも言えない手触りをしている。

表面には真ん中に一本、横向きの線が引かれ、その上に光り輝く球体が描かれている。まるで日の出を表現しているかのようだ。

裏面には一目で森と分かるような精巧な彫刻が施されていて、その森は燃え盛る炎に晒されていた。

「何かあつた時は『いあ！ いあ！ くとうぐあー！』と叫んでそれを叩き割るんだ。ただし、そっちの角笛と違って呼び出したものは敵を攻撃してお前を守ることしかない。だから何でもない時に呼び出してはダメだぞ」

「は、はい！ あの、助けて下さつて、ありがとうございます！」

「ああ、気にするな」

「あ、あの、それと、図々しいかもしれませんがお願いします！ どうかお父さんとお母さんを助けて下さい！」

「分かった、生きていれば助けよう」

フォーマルハウトが軽い調子で即答すると、少女は涙を溢れさせた。

「あ、ありがとうございます！ そ、それと、お、お名、お名前を教

えて頂けませんでしょうか！」

フォーマルハウトはモモンガの方を向いた。名乗ってもいいのだろうか判断を仰ぐように。

モモンガは別に構わないかと判断し、先に口を開いた。

「私の名はモモンガ。我こそが——アインズ・ウール・ゴウンの長、モモンガである」

モモンガの名を聞いたミリアの顔がフォーマルハウトへと向けられる。

（名前、名前か……アルベドたちもいるし、暴虐の王を改めさせるチャンスじゃないのか？俺が自分で名乗っていたと聞けば改めざるを得ないだろ。何か格好いい感じの……赫灼は使いたい……炎、いや、焰……よし）

モモンガに倣い、フォーマルハウトも名乗るべく口を開く。

ばさりとコート状の軍服を翻し、高らかに。

「我が名はフォーマルハウト！ 栄光あるアインズ・ウール・ゴウンが誇りし赫灼の焰王、フォーマルハウトだ！」

フォーマルハウトのどこかの役者アクター染みた振る舞いに、モモンガは頭を抱えて膝から崩れ落ちた。

第十一話 束の間の平穏

フォーマルハウトたちはヴェンデ村の遙か上空に立っていた。

空中に足場があるわけではなく、<飛行>の魔法による飛行だ。何も無い空中で佇むように眼下の光景へと視線を向けている。

結論から言えば村人たちはまだそこその数が生きていた。生き延びさせられていたというのが正しいだろうが。

ビーストマンたちは村人に比べて数が少なく、三分の一ほどの数しかいなかった。それでも蹂躪出来るほど容易い相手だったために楽しくなったのか、殆どの者が村人たちをわざと逃がしては追い立て、逃がしては追い立ててを繰り返していたようだ。

その遊ばれていた村人たちの中にミリアの両親がいるのかは定かではないが、ひとまず村人が全滅などということになっておらず、フォーマルハウトは安堵に胸を撫で下ろした。

助けに来たのに全員死んでましたでは流石に寝覚めが悪い。と言っても、すぐに助け出すつもりはないのだが。

フォーマルハウトたちはヴェンデ村へと生み出したシモベを送り込んだ後、自分たちも村へ入るようなことはしなかった。

まずは様子見として、死の騎士と炎精霊を捨て駒にして相手の力を見る算段だ。

死の騎士は三十五レベル、炎精霊は三十八レベルと大して強くはないが、それぞれが持つスキルの効果により相手の実力を測るのに丁度良い的となる。

死の騎士は敵の攻撃を完全に引き付けるスキルと、どんな攻撃を受けても一度だけHP一で耐えるというスキルを持っているため、相手の攻撃を受けさせるという意味では最適だ。

一方で、炎精霊は物理透過というスキルを持つ。中位以上の一部の精霊が持つスキルで、自分よりも二十レベル以上低い相手からのデータ量の低い——この世界では込められた魔力量の低い——武器による物理攻撃を完全無効化するスキルだ。もちろんフォーマルハウトも習得している。

フォーマルハウトの場合は百レベルなので、八十レベル以下からの魔力を伴わない物理攻撃を完全無効化出来る。これだけ聞くとかなりのぶっ壊れスキルに聞こえるのだが、ユグドラシルにおいて、判定の基準となる一定以上のデータ量が組み込まれた武器での攻撃など珍しくも何ともない。

プレイヤーが使う武器は言わずもがな、高レベルモンスターの攻撃は普通にこのスキルを無視してダメージを与えて来るものばかりだった。

役立つ場面といえば遥か格下のモンスターを狩る時くらいの産廃スキルだ。

ともあれ、このスキルにより敵のレベルが十八レベル以下なのかどうか、その攻撃には魔力が伴っているのが判明する。さらに攻撃を受けたならば、炎^{フレイム}・精^{エレメンタル}・霊が受けたダメージ量で相手の攻撃力がある程度把握することが出来る。

もしも二体の召喚モンスターが一瞬で殺された場合、さらに少し強いモンスターを召喚して送り込み、ビーストマンたちの強さをより詳しく調べるつもりだ。

だが、この計画は想定外の事態によって破棄することになった。

「何ということだ……」

呟いたのはモモンガだ。風にローブをたなびかせながら、頭を抑える仕草を見せる。その顔は、泣いたような怒ったような表情が彫り込まれた南国風の仮面で覆われていた。

嫉妬する者たちのマスク。

クリスマスイブに特定の時間帯に一定時間以上ログインすると入手することが出来る何の効果も持たないイベントアイテムだ。このアイテムが実装された時はユグドラシル関連の掲示板が大いに盛り上がった。運営狂ったか、と。

当然現実世界^{リアル}で独り身であったフォーマルハウトも持っているのだが、装備してはいない。それは彼が人間の姿に擬態出来るためだ。

ビーストマンの発言からアンデッドは通常使役されるものであって、一般的にそこら辺を人間と一緒に歩いているものではないと察し

た。ユグドラシルでは大して珍しい種族でもなかったのだが、この世界では——少なくともこの辺りではどうやら違うらしい。

そのため、モモンガはアンデッドであることを隠すことにした。普段は開かれているローブの胸元もきっちり閉められ、骨だけの腕や脚は籠手や脚甲で包み込まれている。一瞬見ただけではアンデッドであることなど分からない姿だ。

既に骸骨の姿を見られてしまっているミリアは後で記憶操作の魔法を使い、初めから仮面を被っていたことにする予定だ。

その状態で放たれた声は仮面に遮られて普段よりも聞き取り辛かったが、明らかな虚脱感が感じられた。

理由は遥か下方で繰り広げられている光景にあった。

「弱すぎる……アルベド、セバス、お前たちの目から見て、あのビーストマンたちは何レベルに見える」

「ハッ、恐らくですが……レベルは二桁にようやく届く程度かと思われます」

「私も同意見です。ですが、私たちは野伏^{レンジャー}などの探知スキルを有する職業を習得しておりませんので、正確な数値までは……」

「構わん。お前たちの勘を信じよう。しかし、そうか、十レベル前後か……何というか、弱い者いじめをしている気分になってくるな」

だろうな、とフォーマルハウトは心の中で同意した。

召喚したモンスターたちには与えた命令を変更し、逃げようとする者を殺し、向かってきた者は一撃受けてから殺さない程度に痛めつけろという新たな命令を与えてある。

生かさず、殺さず。この際なので徹底的に実験に付き合ってもらおうというわけだ。

そのためビーストマンたちの数はそれほど減っておらず、死んだのは最初に逃げ出そうとした数匹だけだ。数匹殺されて逃げれば殺されると学んだようで、数の有利は未だビーストマン側にある。

しかし、必死に戦っているように見えるビーストマンたちの攻撃は^{デス・ナイト}死の騎士の堅固な鎧には傷一つ付けられていない。モモンガが言うには、既に幾度か爪や拳で攻撃されているにも関わらず、未だ

死の騎士のHPは満タンからほんの僅かに減っている程度だ。

デス・ナイト
フレイム・エレメンタル
炎 精 霊への攻撃に至っては物理透過がしつかりと発動し、体を素通りしている。

そして、どちらの反撃を受けてもただの一撃で行動不能になっていた。

巨大なタワーシールドで殴り飛ばされて地面に叩き付けられ、手足を炎に炙られる。その光景はルーチンワークを眺めているような退屈さすら感じさせるものだ。

デス・ナイト フレイム・エレメンタル
死の騎士と炎 精 霊程度に蹂躪され、しかも物理透過が効果を発揮しているということは、レベルが十八以下。

警戒して様子見しているのが馬鹿らしくなるくらいの弱さだった。

「モモンガさん、もういいんじゃない？ 正直同情するレベルです」

「……そうですね。ちよつと予想外に弱すぎてタイミング逃がしちやいましたよ」

「ではモモンガ様、生き残りのビーストマン共は如何なさいますか？」
「そうだな……」

アルベドの問い掛けに、モモンガは思考を巡らせる。

現状で何が最もナザリックの利益になるのかを。

このまま逃がす選択だけは無い。

まず、こちらの情報が何処に漏れるか分からない。このビーストマンたちは言うなれば実行部隊であり、下っ端も下っ端で上にはナザリックを脅かすほどの強者が居る可能性が無いとも言いきれないのだから。

では殺すか。それも少し勿体無いとモモンガは思った。

この世界の情報を持ち、かつ消えても問題の無い集団だ。情報源としての利用価値が高いのだから、安易に殺すよりは情報を抜き出した方がいいだろう。

「……生き残っているビーストマン共は全て捕縛してナザリックへと運び、情報を絞り出す。この場は我々で制圧し、運搬は後詰の部隊に任せる。行くぞ、あれらは雑魚だが強者が潜んでいないとも限らん。決して油断するな」

「はっ！」

アルベドとセバスは気合の籠った返事を返し、モモンガの左右を固めて守るようにならながら共に降下してゆく。

「俺たちも行くか」

「……ああ」

「……どうした、何か不機嫌じゃないか？」

「別に不機嫌ではない」

そう言いながらも、ヴェルフエニアはマントの下で腕を組み、ぷいと顔を逸らした。青と金の瞳だけが、じつと恨みがましそうにフォーマルハウトの方を向いている。

あからさまに不機嫌なヴェルフエニアの視線を受けて、フォーマルハウトは記憶を探る。何か彼女を不機嫌にするようなことはあつただろうかと。

悩みながらも言葉が出ない様子を見て、痺れを切らしたヴェルフエニアは苛立つている様子を隠さずに叫んだ。

「お姫様抱っこだ！」

「突然何を——」

言い出すんだと続けそうになって、ミリアをお姫様抱っこで運んだことを思い出した。

十分程度しか経っていないとはいえ、意識してやったことではないので完全に忘れていたのだ。

「お前……妬いてるのか？」

「……フォーマルハウト、お姫様抱っこなんて他人にしたことはあつたか？」

そんな経験はフォーマルハウトの記憶には無い。

そもそも現実世界では女の影も形も無かったのだから当然だ。男同士でやるはずもない。

「いや、無——」

「だろう？ 私ほな、フォーマルハウト。お前の一番でなくては嫌なんだ。駄目なんだ。たとえ相手が取るに足らない村娘であつても——いや、だからこそ嫌なんだ。二番目や三番目はいくらだつて他人に

やる。だが一番だけは誰かに譲るのは嫌だ」

「……」

「私は、お前の初めてが全部欲しいんだ。手を繋ぐのも、お姫様抱っこも、添い寝も、デートも、キスもその先も何もかもが」

必死に訴えかけるように捲し立てられたフォーマルハウトは、顔が熱くなって体温が上昇するのを感じた。

その顔は真っ赤に染まっている。

フォーマルハウトは想像してしまった。真剣なヴェルフエニアには悪いと思っただが、聞き流せない言葉が出てきてそれを無視出来なかった。

キスとその先。それをヴェルフエニアとすることを想像してしまった。

腕を組んだり抱き着いたり。そういったヴェルフエニアの過剰なスキンシップには慣れた。時折マントの隙間から肌がちらりと見えるのも慣れてきている。しかし、そこまで直接的な方面にはまだ慣れていなかった。

「その……すまない」

何と言えば良いのか分からず、消え入りそうな声で謝罪する。

「……っこだ」

「え？」

「お姫様だっこをしろ。あの小娘を上書きする」

「あ、ああっ」

軽い放心状態にあつたフォーマルハウトは促されるままに慌ててヴェルフエニアを抱え上げる。ふわりとヴェルフエニアの体から良い香りが漂った。抱き着かれた時や腕を絡められた時に感じるものと同じものだ。

ヴェルフエニアは不機嫌から一転、その表情は嬉しそうな微笑みへと変わった。ご満悦な表情を浮かべながらフォーマルハウトの胸板に頭を擦り付けている。

（うわあつ、恥ずかしい！ もう慣れたと思ったのに意識して普段と違うことすると凄いな！ ……ああ、でも何かこう、これだけ幸せそ

うな顔見せられると恥ずかしさとかどうでもいいな。もう少しフェニアに気を遣って行動するか)

そう心に決めた後、そういえばとモモンガたちが降りていった方へ目を向けると、ヴェルフエニア越しに三つの視線がこちらに注がれていた。

特にモモンガの仮面越しの視線は、彼が今抱いている心情を正しく表している。

フォーマルハウトは優越感に満ちたまま、心の中で軽くモモンガへ向けて頭を下げる。抜け駆けしてリア充になってすまんなど。

それが伝わったのかどうかは定かでは無かったが、モモンガから向けられる視線が強くなったように感じたのは気のせいではないだろう。

「……さ、そろそろ行くぞ」

「ではこのまま行くぞ」

「……マジで？」

「マジだ。何か問題があるか？」

「アツハイ」

先ほどの負い目があったフォーマルハウトは気圧されるように頷いて、ヴェルフエニアを抱えたままモモンガたちと合流した。

その後しばらくモモンガからの当たりが強くなったのは言うまでもない。

アルベドがモモンガに同じことを強請ったのも言うまでもない。



本当に些細な問題もあったが、村の救出は概ね上手くいった。

ビーストマンたちは必死に戦っても傷一つ付けられない炎フレイム・エレメンタル 精 霊

たちに心が折れかかっていたのか、その主であるフォーマルハウトたちが姿を現したと同時に絶望の表情で膝を折った。

降伏勧告を出すまでもなく震える声で命乞いをし、地面にへたり込んで両手を挙げ、抵抗の意思が無いことを言葉だけでなく態度でも示してきたので、今は死の騎士と炎デス・ナイト フレイム・エレメンタル 精 霊に見張りを任せて空き家に纏めて放り込んである。

命は助けてやるので指示に従えと命令したが、そんなつもりは毛頭ない。

後詰の部隊が到着後、村人たちに怪しまれないような手順を踏んでまとめてナザリツクへと運び、拷問を含むあらゆる方法で情報を絞り出す。最後には肉食系のシモベたちがこの世界の生物を食べても問題ないかの実験、ユグドラシルとは違う挙動を示したアンデッド作成スキルに関する実験などに使う予定だ。

生き残ったビーストマンたちは十体ほど。どれだけの情報が絞り取れるかは分からないが、現状ではこの世界の貴重な情報源だ。一体とて無駄に逃がすつもりはない。

貴重な情報源という意味では村人たちもそうだが、こちらはビーストマンのように手荒に扱うつもりはない。

助けた村人たちからは最初は恐怖を抱かれていた。自分たちを蹂躪していたビーストマンを蹂躪した存在の主であり、その目的も分からないともなれば当然だろう。

そこでモモンガが機転を利かせ、報酬目当てで助けたということにした。

するとようやく村人たちは安堵の表情を浮かべ、快く命の恩人としてフォーマルハウトたちを村へと迎え入れた。

モモンガは今回の件の報酬と、ビーストマンの生き残りを確保するための話し合いをするべく、アルベドを護衛として伴って村長の家に行っている。

正直なところ、報酬としての金銭は必要ない。こちらが求めているのは情報だ。

恐らく村長は金銭で支払おうとするだろうが、これを上手く誘導して情報を貰えるように仕向けなければならぬ。

その上で怪しまれないように話を誘導し、ビーストマンたちを確保する。

そんな繊細なことはフォーマルハウトには出来ない。そのため、話し合いにはモモンガが一人で臨むことになった。

ではフォーマルハウトはというと、初めに村外れの草原で待たせて

いたミリアにヴェルフエニアの記憶操作魔法を施し、村へ送り届けた。

村に連れてきた時は幾人もの村人たちの無事な様子を見て安堵の笑みすら浮かべていたが、その中に自分の両親の姿が見えないことに気付き、浮かべられていた笑みは愕然とした表情へ変わる。

生き残った村人によると、ミリアの父親はビーストマンに襲われていた妻を救うべく、農具を持ってビーストマンに立ち向かったそうだ。

果敢に立ち向かったものの、ただの農民であつた彼では妻を助けることなど叶はずもなく、腕の一薙ぎで壁に叩き付けられ、その後はよく分からないという。恐らくはそのまま食い殺されたのだろう。

両親の最期を聞いて、ミリアは泣き崩れた。

目の前で泣き崩れる少女を見て、生きていれば助けると約束していたフォーマルハウトは居心地の悪さを感じ取る。約束は破っていないかつたが掛ける言葉が見つからない。

蘇生魔法の存在が脳裏を過ぎるが、村人全員が暗い顔を浮かべているということは一般的でないか、或いはこの世界には存在しないのかもしれないとすぐに思い至る。もしもそうであれば安易にそれを行うわけにはいかない。

死を与える者と死から救い上げる者。どちらがより面倒毎に巻き込まれるかは想像に難くない。

結局その場で出来ることなく、ミリアのことは村人に任せて立ち去った。

そして今は、ヴェルフエニアを傍に置きながら村の復興作業の様子を眺めている。

(前にもあつたな、こんなの……)

ぼうつと復興の様子を眺めながら、第九階層で働くメイドたちのことを思い出す。

労働を嫌がったわけでもサボっているわけでもない。

ただ周囲がそれを許さなかった。

ミリアが悲しむ様子を見て、せめて復興作業の手伝いでもしようと

したのだが、まずセバスがそれを止める。

「フォーマルハウト様の御慈悲には感服致します。しかし、主君に働かせるのは執事の恥。私めが代わりに働きますのでどうか座してお待ち下さい」

そのやり取りを聞いていた村人の一人が続けて口を開いた。

「命の恩人である皆様に働かせることなど出来ません。粗末ですが椅子を用意しますので、どうぞ座って寛いで下さい」

その言葉に頷いて同意を示した村人たちの目は感謝と尊敬の念、そして命の恩人にこれ以上迷惑は掛けられないという彼らなりの意地が込められていて、フォーマルハウトは口を開くことも出来ずに用意された椅子に座らされた。

虐殺に遭ったばかりの村の中でどう寛げと言うのかと叫びたくなる衝動を抑え込んで、せめてセバスにくらいは手伝わせて欲しいと村人たちに頼み、セバスだけは何とか手伝いとして送り込んだ。

初めは村人たちも恩人の一人であるセバスにも遠慮していた。しかし、百レベルの戦士職であるセバスが馬鹿げた力で山のような瓦礫を苦も無く運んでいく様子を見て、そんな遠慮は無用だと気づいたらしく、今ではセバスの周りには人だかりが出来ている。

それを断りもせずになこやかな顔を浮かべて対応するセバスの人柄もあってか、村人たちには順調に受け入れられているようだった。

(暇だな……)

まだ作業が始まって三十分ほどしか経っていなかったが、何もしていない時の時間の進み方は酷く遅く感じるものだ。

「……近場の散策にでも行くか」

「うん？ 構わないが……ふむ、軽いデートだな」

「デ、デート？ いや、言えなくもないが……まあ、行くか。適当に村の中を見て回ろう」

フォーマルハウトが椅子から立ち上がると、ヴェルフニアが慣れた動作で隣に立って腕を絡める。

この世界に転移してから既に何度も繰り返された動作であり、絡まれる側のフォーマルハウトもヴェルフニアがそうしやすいように、

腕と体の間に自然と小さなスペースを作り出していた。

「フォーマルハウト様」

歩き出そうとしたところで背後から声を掛けられる。

そこには瓦礫の撤去をしていたはずのセバスが恭しく頭を下げながら立っていた。

主の前に立つからか、それとも一流の執事としての嗜みか、その執事服には埃の一つもついていない。本当に重労働を熟していたのか怪しい程に綺麗なままだった。

「セバス、どうした？」

「はっ、フォーマルハウト様がお立ちになられるのが見えましたので……どちらへ？」

「ずっと座って眺めるだけっていうのもな。その辺の散策にでも行ってくるよ」

「畏まりました。それではお供させて頂きます」

セバスはそう言って頭を下げたが、近くを散策する程度でお供など必要だろうかとフォーマルハウトは首を傾げた。

はつきり言って護衛の必要は無い。

モモンガは未だ警戒しているが、フォーマルハウトはその必要は薄いと感じていた。というより物事を深く考えないフォーマルハウトに警戒心を抱かせ続けるには、今回の敵——ビーストマンたちは余りにも弱すぎた。

それに、フォーマルハウトは思い切り自然に触れてみたかった。

ミラー・オブ・リモートビューイング
遠隔視の鏡越しに見ていた光景が、今は目の前、手に届く距離にある。ならば手を伸ばし、草に触れ、土に触れ、風を肌で感じた。大地に寝転がってみるのもいいだろう。

（ヴェルフエニアの膝枕で……？ うん、いいな。してくれると嬉しいんだけど）

だが、そんな素晴らしい体験も、恐らくセバスが居ては台無しになってしまうとフォーマルハウトは確信している。

セバスを邪魔に思うわけでは無いが、今までの様子を見る限りでは土に触れようとすれば手が汚れると止めるだろうし、森の中を歩いて

みたいと言えば通り道を自然を全く感じられないほど美しく剪定するだろう。大地に寝転がると言えば、多分ベッドが準備される。

それではダメだ。意味がまるでない。

ありのままの自然に触れられなければ意味がない。それを許してくれるのは、対等であれと創造されたヴェルフエニアだけだとフォーマルハウトは思っている。

加えてこれはヴェルフエニアが言っていた通り軽いデートのようなもので、出来ることなら二人きりで楽しみたいという気持ちもあった。

かと言って邪魔だとストレートに言えば絶対にセバスは傷付く。何とかしてセバスを傷付けずに遠ざける方法はないだろうかと考える。

しかし、セバスに苦言を呈したのはフォーマルハウトでは無くヴェルフエニアだった。

「お前は村の復興の手伝いをしろとフォーマルハウトに命じられただろう」

「その通りで御座います。しかし——」

ヴェルフエニアもまた、フォーマルハウトとのせつかくのデートを邪魔されたくなかったために、セバスの言葉を遮って口を開く。

ナザリックではどこかに必ず誰かしらが存在する。だからヴェルフエニアにとっても、二人きりで第八階層以外の場所で過ごすというのは貴重な時間だった。

「セバス、これは軽いデートだ。だというのにお前はついてくるつもりか？ 別に何をするわけでもないが、私とフォーマルハウトを二人きりにさせてくれてもいいだろう？」

「こ、これは……デートとは、そこまで気が回らず……フォーマルハウト様、差し出がましいことをしてしまいました、申し訳御座いませぬ」
深々と下げられたセバスの頭を見たフォーマルハウトの胸中に、友人の子供に極個人的な理由が原因で頭を下げさせているのだという罪悪感が生まれる。

頭を下げなければならぬのはむしろフォーマルハウトだ。

いくら安全だと思っても、戦いがあつたばかりの場所で周辺警戒の配置すらしていないのに、暢気に嫁と二人きりで散策に出ようとしているのだから。

もしもセバスの生みの親であるたち・みーがここにいて、この光景を目にしたら。そんな恐ろしい光景を想起したフォーマルハウトは僅かに身を震わせる。

「い、いや、気にするな」

「ありがとうございます。しかし、至高の御方であらせられるフォーマルハウト様ならば問題は無いと信じておりますが、十分にご注意下さいますよう」

セバスは再び深々と頭を下げながら、今度はヴェルフエニアへと体を向ける。

「ヴェルフエニア様、フォーマルハウト様の護衛、くれぐれもよろしくお願い致します。何かあればすぐに^{メッセージ}＜を＞」

「分かっている。どちらにせよ私たちが戦えばかなり派手なことになる、お前もすぐに気付くだろう。さあ行こう、フォーマルハウト」

「ああ。行つて来るよ、セバス」

「はっ！ 行ってらっしゃいませ、フォーマルハウト様」

ヴェルフエニアに腕を引かれながら、頭を下げて見送るセバスに背を向けて歩き出す。

少しばかりセバスには悪いと思つたが、それも一瞬のことだ。フォーマルハウトの意識は既に村の東側に広がる森林に向けられていた。

◆ ◆ ◆
ヴェンデ村の東、歩いてすぐに辿り着く距離には巨大な森林が広がっている。

その深く薄暗い森の入り口辺りにフォーマルハウトは立っていた。「おお……」

フォーマルハウトは呆けた様な表情で感嘆の声を漏らす。

目の前に広がる大自然の威容は、まだほんの入口と言つていい程度しかその本来の姿を見せてはいないものの、自然という言葉が死に絶

えたような現実世界リアリティで生きていたフォーマルハウトにとって、それは圧倒されるほどのものに感じられた。

大きく息を吸い込めば、土と草の混ざり合った青臭い匂いが鼻腔を通り抜ける。初めて嗅ぐその匂いは、それがユグドラシルとは違う本物の自然であるということフォーマルハウトに強烈に印象付けた。

「見ろ、フェニア！ 土だ！」

「ああ、土だな」

「草だ！」

「ああ、草だな」

「木だ！」

「ああ、木だな」

興奮に我を忘れていたフォーマルハウトは感情が振り切れて沈静化されても尚はしやぎ回っている。

突然しやがみ込んで土を弄り始めたと思えば何かを思い出したかのように立ち上がり、手近なところに生えていた雑草をむしって匂いを嗅ぐ。それが思っていたよりも強い匂いだったのか顔を顰めながらも、次の瞬間には馬鹿げた跳躍力で自分の何倍もの高さを誇る樹々の枝へと飛び乗って、辺りを見渡して瞳を輝かせている。

まるで初めて家の外へ出た幼子のように、フォーマルハウトには何もかもが輝いて見えた。

「凄いな！ いやっほーうっ！」

降り積もった落ち葉を態々かき集めて木の葉のベッドを作り、そこにダイブする様はまさしく子供だ。

すぐそこにヴェルフニアがいるということすら意識から抜け落ちていたため、ヴェルフニアからはしやぐ子供を見るような微笑みを向けられていることにすらフォーマルハウトは気付けなかった。

木の葉の山に寝転がったままのフォーマルハウトの横に、ヴェルフニアが腰を下ろす。

淑やかな少女がそうするように、正座から足を横に崩した横座りだ。

「随分はしやいでいるな？」

「そうだなー。こういう森を見るのは初めてだからな」
「初めて？」

ヴェルフェニアはこてんと可愛らしく首を傾げた。

「これよりも凄い森が第六階層にあるだろう」

「うーん……」

そのヴェルフェニアの質問に答えるのは難しい。

フォーマルハウトにとって、第六階層の森は言わば模造品だ。

自然を愛した男、ブルー・プラネットを始めとするギルドメンバーが心血を注いで創り上げた至高の贋作。今日の前に広がる真作に劣るとは思わないが、やはりこちらの方が輝いて見えた。

しかし、ヴェルフェニアにとっては違う。

第六階層の森もこの森も、彼女にとってはどちらも森は森だ。同じ森ならば、至高の存在たちが心血を注いで創り出した第六階層の森のほうが圧倒的に価値で勝る。ゆえに彼女はフォーマルハウトの言葉の意味が理解出来ない。

「こう、何というか……第六階層はブルー・プラネットさんたちが創ったものだろう？ でも、ここは違う。どっちも森は森なんだが……まあ、気分の問題というか、口にするのは少し難しいな」

「ふむ……良く分からんが、お前が言うのならばそうなのだろう」

「ははは」

上機嫌に笑い返しながら、落ち葉を何枚か握り締めてみる。

くしやりとした感触が手に心地良く、未だ村長の家で話し合いをしているだろうモモンガの姿を思い浮かべる。

（今度はモモンガさんも連れて来るか。その時は流石に護衛がいるだろうから、ここまで寛げないだろうけど……）

護衛がつくならせめて不可視化や隠密能力に長けたシモベがいい。そして口が堅くて、柔軟な頭を持っている者がベストだ。

「フォーマルハウト、少しいいか？」

「んー？」

一言断ったヴェルフェニアは、体を弛緩させたまま生返事を返すフォーマルハウトの頭を持ち上げ、その下に自らの膝を差し込んだ。

髪越しの後頭部から柔らかな感触が伝わる。

「どうだ、膝枕と言うんだらう？」

目の前には見慣れたヴェルフエニアの微笑みがあった。小さく細い繊手がフォーマルハウトの髪を撫でつける。

それはまさしく、先ほどフォーマルハウトが妄想した光景そのものであった。

「……控えめに言って、最高」

自分の状況を認識したフォーマルハウトは眩き、僅かに残っていた体の力を完全に抜いてヴェルフエニアに身を預ける。

目を空へ向ければ吸い込まれるような青空が広がっていた。さあつと通り抜けたそよ風が体を撫で、はしやぎ回って火照った体をゆっくりと冷ましてゆく。

「しかし……緊急で仕方なかったとはいえ、外に出すなら着替えさせるべきだったか」

「ん？ 何故だ？」

「何故ってお前……恥ずかしかったりしないのか？ あと、お前が変な目で見られるのは少し嫌だ」

「……そうか、嫌か。ふふふ、そうか、そうか。他の男に変な目で見られるのが嫌か。ふふ、はははは」

フォーマルハウトの独占欲から出たとも言える言葉が嬉しかったのか、その喜びを表現するかのようにヴェルフエニアの笑みが深まる。

「ああ、別に恥ずかしくはないぞ。お前がそうあれと定めて私を生み出したのだからな。それに、どうしようもないと言うのはお前も知っているだらう？」

「……今度何とかする方法を考えよう」

「そうしたいのならばそうしてくれ、旦那様」
愉快そうにヴェルフエニアは笑った。

二人きりで微笑み、時折言葉を交わしながら穏やかな時間を過ごす。

どれだけの時間そうしていたのだろうか。

理想の少女に膝枕をされて頭を撫でられながら談笑し、空を眺めながら何をするでもなく時間を浪費する。なんと贅沢な時間の使い方か。

やがて会話も尽き、沈黙が訪れる。しかし、それは両者にとって忌避すべき沈黙などではなく、むしろ心地の良いものだ。

結局、二人が村へと戻ったのは、いつまでも帰って来ない二人に痺れを切らしたモモンガがく伝言^{メッセージ}で帰還命令を出してからだった。



燦然と輝く星空の下、ヴェンデ村を後にしたフォーマルハウトたちは散歩がてら談笑しながらナザリックへの帰路を歩いていた。

周囲には後詰の部隊として到着したアウラとマーレを指揮官とした八^{エイト}肢^{エッジ}刀^{アサシン}の暗殺蟲の部隊が伏せられ、二人の近くは百レベル三名が守っている。警備体制は万全だ。

そんな物々しい警備の中、フォーマルハウトはモモンガと共に満天の星空を飛び回っていた。

「はははははっ！ 凄い！ 凄いですよモモンガさん！ 月の明かりだけでもが見えます！ 星だっってこんなに！」

「ええ！ 凄いですね！」

「ブルー・プラネットさんが居たら泣いて喜びながら飛び出して行きそうですよね！」

「はははは、確かに！」

笑い合いながら、まるで舞い踊るように夜空を自由に飛び回る。

その姿は先ほど森で見せたような、初めて家の外に出る子供染みたものだ。あれほど支配者としての威厳に気を遣っていたモモンガもまた、同じ様に紅い瞳を輝かせながら空を舞っている。

支配者の威厳も何もない振る舞いに、アルベドを始めとする守護者たちは失望することはない。むしろ微笑みすら浮かべて飛び回る二人を見守っていた。

「まるで子供の様……普段のモモンガ様の凛々しい御姿からは想像も出来ないわ」

「だが良いものだろうか？ 私はフォーマルハウトの似たような姿をつ

いさつき見たところだが、あれはあれでこう……母性というのか？
それが刺激される」

「そうね。ええ、確かに。それにとても楽しそうにしていらっしやるわ。ああ、モモンガ様……なんてお可愛らしい」

頬を紅く染めながら愛しい男たちを見つめる乙女の横で、セバスは
独り冷静な面持ちで周囲を警戒しつつ、主たちが喜びを露わにして飛
び回る夜空を見上げている。

その胸中にあるのは喜びだ。

二人の主が楽しそうに笑顔を浮かべている様子を、これほど間近で
見ていられることに対する喜び。主の喜びは、配下の者の喜びでもあ
るのだ。

配下からそんな慈しむような視線を向けられているとも知らずに、
フォーマルハウトたちはようやく落ち着きを取り戻して中空に佇ん
でいた。

「はあー……最高。ブルー・プラネットさんじゃないけど、自然ってい
いですね」

「そうですね。月まで手が届きそうだ」

「もつと高く昇ってみましょうよ。雲の上まで」

「いいですね、行きましょう！」

二人は楽しそうに笑い合い、さらに高くへと飛び上がる。

「モ、モモンガ様、フォーマルハウト様！ 余り離れられては！

くっ、ヴェルフエニア、私とセバスに＜飛行＞を！」

「世話の焼ける夫だ……＜全体飛行＞」

ヴェルフエニアはアルベドの指示に従い、複数人へ一度に＜飛行＞
の効果を付与する＜全体飛行＞を発動する。

ふわりと体が宙に浮くと、アルベドたちは大慌てで既に豆粒ほどの
大きさになっていた主たちの後を追う。

興奮の余り、後を追って来ている護衛の存在など完全に頭から抜け
落ちていたフォーマルハウトは、モモンガと共に振り返ること無く雲
の上まで辿り着く。

「おお……」

月明かりに照らされた夜空から見える景色は最高のものだった。
現実世界は疎か、ユグドラシルでも味わったことの無い感動に、
フォーマルハウトは自分の体が打ち震えるのを感じる。

「素晴らしい夜空だ……」

「まさしく、モモンガ様の仰る通りかと」

呟いたモモンガの後ろにはいつの間にか追いついたアルベドが
立っていた。その少し後ろにはセバスも立っている。

ヴェルフニアの姿が見えないことに違和感を覚えたフォーマル
ハウトが視線を巡らせると、不意に左手に何かが触れるような感覚が
生じた。もはや慣れ親しんだと言っても過言ではない、小さくも柔ら
かく、温かな感触に笑みを零す。

「二人で星を見るなど、モモンガ様でなく私とやって欲しいものだな」
「はは、すまないな」

左腕を抱き締めるように密着したヴェルフニアに苦笑を返して、
再び星々へと目を向ける。

「本当に美しい世界だ、まるで宝石箱のような……」

目の前に広がる幻想的な雰囲気当てられたのだろうか。モモン
ガが呟いた言葉は、普段の彼ならば絶対に口にしない言葉だ。

しかし、それを聞いたフォーマルハウトも不思議とそれを茶化すつ
もりにはならなかった。

「モモンガ様、お望みとあらばナザリック全軍を以てこの宝石箱を手
に入れて参ります」

アルベドから告げられた言葉に、モモンガは静かに笑う。

「ふふふ、世界征服か……」

愉快そうに呟きながら、かつて『ユグドラシルの世界の一つぐらい
征服しようぜ』、そう冗談で言い合っていた四人のギルドメンバーの
姿を思い浮かべる。

ウルベルト・アレイン・オードル。ばりあぶる・たりすまん。るし
★ふぁー。ベルリバー。

四人の仲間たちの姿を思い浮かべたモモンガは、そうしてみるのも
面白そうだと感じた。

「それも、面白いかもしれないな……」

もちろんモモンガだって、本気で言っているわけではない。

ただかつての仲間たちがそう言っていたのを思い出したのと、雰囲気酔っ払って口が滑った程度のことだ。

それは同じく雰囲気酔っていたフォーマルハウトも理解していた。だからこそ、つい自分の考えの赴くままに口を開いてしまう。

頭の良いヴェルフニアたちならば、ただ雰囲気酔っ払って吐いた戯言と思ってくれると信じて。

「ははは、ウルさんたちみたいですね。いいかもしれません」

「征服したらどうしましょうか。理想郷でも作りますか？ 人間も亜人も異形も、種族に関係無く笑っていられる理想郷を」

「いいですね。あの糞つたれな現実世界リアリティとは真逆の世界にしてやりましょう。アインズ・ウール・ゴウンの名の下に理想郷を！」

気分が高揚した二人は笑い合いながら、その妄想を加速させてゆく。

もちろん冗談だ。いつもユグドラシルでしていたような軽い冗談の言い合いだ。

しかし、彼らのすぐ傍で佇む者たちはそうは思っていない。

ヴェルフニアも、アルベドも、セバスも……そして後にここでの二人の会話を知らされることになるナザリツクの全てのシモベたちが誓う。

「畏まりました、いと高く、いと尊き我らが至高の御方々。正統なる支配者たる御身らに、必ずやこの宝石箱を」

呟かれたアルベドの言葉は二人の耳に届くことはなく、夜空へと溶けて消えた。

第十二話 情報と今後

フォーマルハウトたちがヴェンデ村から帰還した翌日、モモンガの執務室にはいくつかの姿があった。

一つはこの部屋の主たるモモンガだ。数枚の紙束を片手に総黒革の椅子に座っている。

モモンガ以外の者の数は九。執務室の中央にあるローテーブルを挟むように並べられたソファに鎮座し、モモンガ同様に紙の束を手に持っている。

モモンガから見て右側のソファに座るのはフォーマルハウトとヴェルフエニア、そしてその隣にはシャルティアとコキュートスが座っている。本来ならばあと一人は座れる大きなソファであったが、体の大きなコキュートスが二人分のスペースを占有していた。

左側のソファにはアルベドとデミウルゴスが座り、続くようにしてアウラとマーレ、そしてセバスが着席している。こちらは逆に体の小さなアウラとマーレが詰めて座ることで、四人掛けのソファにも関わらず五人が座っていた。

そこに座る者は全員がナザリックでも特別な役職に就く者であり、ナザリック最高戦力の一角と言える百レベルの者たちだ。これから行われる会議の内容がナザリックの今後に関わる重要な内容だということが想像出来る。

玉座の間ではないのは、長時間に渡り守護者たちを跪かせて自分たちだけ椅子に座ったまま会議を行うのをフォーマルハウトたちが嫌ったからだ。

「資料は全員に行き渡ったな？ ではこれより入手した情報の共有と、ナザリックの今後の行動方針を決める」

モモンガが威厳ある声で会議の開始を告げる。

「初めに、この場にいる全員が発言権を持つことを宣言しておこう。まずは今回の件で入手した情報の共有からだ」

『はっ！』

「よろしい。ではまず初めに、私がヴェンデ村の村長から入手した情

報を説明する。詳しいことは資料に記載されているが、齟齬があつては困るからな」

モモンガは手元の資料を見ながら、ヴェンデ村の村長から聞き出した情報を語り出す。

まず、ヴェンデ村の所属する国は、ドラウディロン・オーリウクルスという名の女王が続べる竜王国と呼ばれる人間の国だ。かつてフライング・ドラゴンロードの七彩の竜王と呼ばれるドラゴンが建国し、今もその血が王家に流れているという伝説が残る。

この国は西を巨大な湖、それ以外の方角の殆どを山脈に囲まれた国であり、人間の生活圏の最東端に当たる位置にある。人間の国だけでなく、ビーストマンやミノタウロスなどの亜人の国が周辺に存在し、特にビーストマンの国からは頻繁に攻撃を受けているようだった。

「ビーストマンから頻繁に攻撃を受けているのに、村の防備があんなだったのか……」

「フォーマルハウトさん、村長が言うには村までビーストマンが来たのは初めてだったそうですよ。何でもビーストマンの国との国境辺りには砦があるとか」

竜王国とビーストマンの国との間には砦があり、その砦ではビーストマンが国内に入り込んでしまわないように常に目を光らせている。そのため、その砦よりも奥に位置する街や村ではそこまでの対策は施されていない。

特にヴェンデ村は竜王国の北東部、ビーストマンの国から見て他の村落や都市よりは内側にあり、知識としてビーストマンのことを知っていても、実際に目の前に現れたのは今回が初めてだったようだ。

「なるほど……」

フォーマルハウトが納得したのを確認してから、モモンガは説明を再開した。

北の巨大な山脈を越えた先にはバハルス帝国と呼ばれる人間の国がある。

この国は絶対的と言っていい権力を持つ皇帝によって栄えており、竜王国を含む周辺の間人国家の中では最も繁栄しているようだ。

バハルス帝国の西にあるアゼルリシア山脈やトブの大森林を挟んだ先にはリ・エステイーズ王国という人間の国家がある。周辺国家にとっては貿易の要所である城塞都市エ・ランテルを有しているとか。このバハルス帝国とリ・エステイーズ王国は仲が悪く、ここ数年は毎年のように争っているらしい。

最後に両国の南、竜王国から見て西の巨大な湖を挟んだ先にあるスレイン法国。

村長も詳しくは知らないが、六大神という神々を信仰する宗教国家であり、国として亜人や異形のモンスターを嫌っているようだ。

その軍事力は不明だが、ビーストマンという亜人に襲われている竜王国への物資援助や義勇兵派兵など、何らかの支援が行われている可能性もあるだろうとモモンガは推測している。

「大雑把にも程がある情報だが、周辺国家については以上だ。他にも国はあるらしいが、村長は知らないようだ……次は、モンスターと冒険者とかいう職業の者についてだな」

冒険者。

その単語を聞いたフォーマルハウトの瞳が輝く。

未知を既知とすべく、様々な地へと足を踏み入れる者たち。時に鬱蒼と生い茂るジャングルを抜け、吹雪が吹き荒ぶ雪原を越え、灼熱の溶岩が流れる火山を登る。そうした過酷な環境の先に未知という名の浪漫を追い求める職業。それが冒険者だ。

PKばかりしていたフォーマルハウトもまた、ユグドラシルでそれに魅せられた者の一人だ。

初めからそうであったわけではない。アインズ・ウール・ゴウンへと加入し、仲間となった者たちに誘われたのが始まり。仲間たちと協力して未知のマップやダンジョンを探検し、未知の素材やモンスターに出会う。

まだ確認されたことのない素材を見つけ、仲間たちと喜び小躍りしたこともあった。見たこともないようなモンスターに出会い、その能力の理不尽さに運営への呪詛を垂れ流したこともあった。

その全てが素晴らしい思い出であり、今なお色褪せない。

もしもこの世界で——全てが現実となったこの世界で同じことが出来るのなら、それはきつととても楽しいことだろう。

モモンガやヴェルフェニア、守護者たちナザリックの者と共に様々な場所へ足を踏み入れる光景を思い浮かべ、自然と表情が明るくなる。

しかし、次のモモンガ説明で明るかったはずのフォーマルハウトの表情が翳る。

「まず冒険者というのは冒険者組合を通して依頼を請け負い、モンスターと戦う職業のことだ。この冒険者組合という組織は最寄りの都市であるオランジエにあるそうだ」

モモンガが語った冒険者は、言ってしまうえば対モンスター専門の傭兵、或いは退治屋だ。

各国の都市にある冒険者組合に登録することで重犯罪者でもない限りは誰でもなることが出来、受けた依頼を達成することでその難易度に応じた報酬を受け取ることが出来る。

薬草採取や馬車の護衛などの依頼もあるが、所属する組合がある街の周辺に出没するモンスターを討伐して生計を立てるのが基本だ。

それぞれの実力や実績を基にいくつかのランクに分けられ管理されていて、そのランクに応じて受けられる依頼の難易度も変わるようだ。

突き付けられた冒険者の実態は、フォーマルハウトが想像していたものからは大きく掛け離れていた。

期待を裏切られて不満そうな心を露わにしているフォーマルハウトを無視して、モモンガの説明はモンスターの話へと変わってゆく。

この世界にも小鬼ゴブリンや人食い大鬼オーガのような低位のモンスターたちが棲息しており、それらは山脈の麓に広がる森にも住み着いていて、人間の生活圏を脅かしている。こういったモンスターたちが冒険者の討伐対象となるようだ。

モンスターに関する話はその程度で終わった。

その他にも細々とした一般常識に関する情報がいくつか付け加えられて、モモンガの説明が終了する。

守護者たち——特に優れた頭脳を持つアルベドとデミウルゴスは僅かに眉を顰める。

それもそのはずで、村長から齎された情報は有益ではあったが曖昧なものも多く、詳細なことまでは分からなかった。そういった情報も現時点では大切だが、こちらが本場に知りたいのは周辺国家にナザリックを脅かす存在がいるのか、国家であればその国力はどの程度なのかという情報なのだ。

とはいえ、単なる農村の村長にそこまでの期待をするのは酷と言うものだろう。

「以上が私が入手した情報だ。それと、これは村長からの情報ではなく私が発見したものだ。どうも私のアンデッド作成スキルによる召喚は死体を媒介にすることで召喚モンスターが時間経過により消滅せず、この世に留まるようになったようだ」

その言葉にフォーマルハウトは、ほうと小さな感嘆の声を上げて僅かに身を乗り出す。

通常であれば、スキルや魔法によって召喚されたモンスターは特別なケースを除けば一定時間が経過すると消滅する。モモンガのアンデッド作成スキルもその例に漏れず、一定時間が経過すれば召喚モンスターが消滅するはずだった。

しかし、ヴェンデ村でモモンガが召喚した死の騎士^{デス・ナイト}は消滅すること無く、未だにナザリック内に存在している。明らかにユグドラシルでの召喚可能時間を超過して存在していて、後から死体を利用せず普通に召喚された死の騎士^{デス・ナイト}の方が先に消滅してしまった。

このことから、死体を利用すれば制限時間の存在しないアンデッドを召喚出来るのではないかとモモンガは結論付けた。

「死の騎士^{デス・ナイト}以外のアンデッドも可能か、ビーストマン以外の死体でも可能かどうかなどは調べていないが……ナザリックの戦力強化には使えるだろう」

「それでは、例の村を襲って死体を確保致しますか？」

優雅な微笑みを浮かべたまま提案したのはアルベドだ。その内容は先日助けた村に対する仕打ちとは思えないほど冷酷なものであつ

たが。

アルベドの提案は魅力的なものだ。

ユグドラシルとは挙動や仕様が大きく変わった一部の魔法やスキルの実験材料が多く手に入る。自分たちの力を正しく知るという意味では、実験材料はいくらあっても足りない状況だ。

ただ、既にヴェンデ村の処遇は会議前に二人で相談して決まっている。

フォーマルハウトたちの中に残った、現地の人間への僅かな同族意識とも言える感情がアルベドの提案を否定する。

「……ヴェンデ村は現時点では友好関係の構築に成功した唯一の村であり、この世界での大切な足掛かりだ。不仲になるようなことは極力避け、監視に留めよ」

「畏まりました」

「まあ、これに関しては追々実験するでしょう。次に、デミウルゴス」
「はっー」

モモンガに名を呼ばれたデミウルゴスが立ち上がる。

「捕縛したビーストマンから絞り出した情報は纏めてあるな？」

「はっ、勿論で御座います。ただ、大変申し訳御座いません。興味深い情報も御座いましたが、然程量が多くありません。どうやら捕えたビーストマン共は記憶力なども並以下のようでした……」

「ならばそれを全員に説明せよ。可能な限り分かり易くな、ここにはアウラやマールのような子供もいるのだから」

モモンガがこういった命令を出すのには理由がある。

アルベドもそうだが、デミウルゴスは余りにも頭が良すぎた。

ナザリツク最高の知者であると生み出されたからか、デミウルゴスの知能の高さは小卒のモモンガやフォーマルハウトと比べて天と地ほどの差がある。二人で知恵を合わせても、デミウルゴスが仕事の片手間で考えた方が良い考えが浮かぶだろう。

それほどの知能の差があるために、時折モモンガはデミウルゴスの言っていることが理解出来ないことがあった。

しかし、ナザリツクのシモベたちは第六階層でデミウルゴスが言っ

たように、モモンガのことを深謀遠慮に優れた叡智溢れる存在だと思っている。

フォーマルハウトのように素で接するのではなく、慕ってくれているNPCたちのイメージを壊さずナザリックの絶対的な支配者を演じる。そう自ら決めたモモンガがNPCたちの期待を裏切り、『理解出来ないから猿でも分かるように話して?』などと頼める訳も無い。

だから、ボロを出さないためにアウラやマールのような子供をダシにして、可能な限り分かり易い説明をさせるようにしたのだ。

「畏まりました」

捕縛したビーストマンから情報を絞り出すのはデミウルゴスに任せた。

カルマ値マイナス五百の悪魔であるデミウルゴスならば、幅広い手段——具体的に言えば、フォーマルハウトたちも知らないようなえげつない拷問方法で、確実に情報を手に入れることが出来ると考えたためだ。

また、デミウルゴスの持つスキル、支配の呪言を使用することで、四十レベル以下の相手を自在に操ることが出来る。このスキルを利用すれば低レベルのビーストマンたちから情報を絞ったり、生きたまま強引に実験に付き合わせることも容易だろう。

「では、ご説明させて頂きます」

まず、村長からは情報が得られなかった亜人の国について色々聞いたが、捕縛したビーストマンは末端も末端で地理的情報以上のものは何も得られなかった。

彼らが住むビーストマンの国の北方にはミノタウロスの王国やトロールたちの国があり、西側にもいくつかの亜人の国があるという程度の情報だ。

余りにも中身の薄い情報であったため、デミウルゴスの説明はすぐに竜王国との争いに関する話へと移った。

竜王国とビーストマンの国との戦いだが、これは何年も前から続いていて、ビーストマン側が優勢だ。ビーストマンからすれば竜王国は、少しばかり抵抗してくる餌が群れている狩場という認識ですらあ

る。

それでも滅ぼさないと、弱く数が多く、そして肉質も良いと三拍子揃っていて狩場として優秀だからだ。

この時点で既にフォーマルハウトは、あんなに弱いビーストマンたちがそれだけ言うほどに優勢なのかと啞然としたが、デミウルゴスの説明がまだ続いているため口には出さない。

今回捕まえた者たちは、探知系能力に長けたシモベを使って調べたところそのレベルはアルベドたちの見立て通り十レベル前後。部隊を率いていたらしいリーダー格の者でも十二、三レベル程度だ。

捕縛したビーストマンたちが特別弱いわけではなく、これがビーストマンの国における一般的な戦闘要員の強さであり、人間の冒険者が相手でもない限りは十分に蹂躪出来るようだ。

ならば冒険者はこのビーストマンを容易く屠れるのかというと、これまたそういうわけでもなく、冒険者であつても一対一で対等に渡り合えるのはそれほど多くはない。それでも複数体で押し込めば討ち取れる。時折束になつても敵わないような冒険者もいるが、そういった存在はたまに見る程度で少数しかいないとのことだ。

つまりは大方の冒険者もまた十レベル前後かそれ以下ということになる。

「疑っているわけではありませんが、本当にビーストマンはそんなに弱いのでありんすか？」

「弱いね。試しにナザリック・オールドガーダーと戦わせてみたが、相手にならなかつたよ」

ナザリック・オールドガーダーはナザリック地下大墳墓固有の自動湧きするモンスターだ。

レベルは十八で魔法の胸当てプレスト・プレートを装備し、逆三角形の形状をした魔法のカイトシールドと様々な効果が付与された魔法の武器を持つている。背中には矢筒と合成コンボジットロングボウ長弓を背負って、近接戦闘のみならず中遠距離戦闘にまで対応する。

さらに幾つかの戦闘系のスキルまで覚えるため、ナザリック内に自動湧きするモンスターの中では優秀な警備兵だ。

しかし、優秀とはいえ所詮は十八レベル。フォーマルハウトやモモンガ、階層守護者どころか三十五レベルの死の騎士デス・ナイトですら圧倒するこ
とが出来る程度の強さしか持たない。

そのナザリック・オールドガーダーに歯が立たないという事実
にシャルティアは嘲笑と苦笑が混じり合った笑みを浮かべる。

「さて、説明を続けさせて頂きます。捕えたビーストマンたちの話
によりますと、武技と呼ばれる我々の知らない、スキルのようなこの世
界特有の能力があるようです」

「武技？」

聞いた事のない単語に今度はフォーマルハウトが疑問を零す。

「はっ。これは人間や亜人、異形など種族の区別無く、主に戦士系の職
業の者たちが習得出来るようでした、攻撃の威力増加や防御力の増加
などが行えます」

「それは……魔法やスキルとはどう違うんだ？」

「申し訳ありません、フォーマルハウト様。ビーストマンたちも詳し
い事までは……。ただリーダー格の者が武技を使えるようでしたの
で幾つか検証しましたところ、スキルのように一定時間内の使用回数
制限が存在せず、代わりにHPともMPとも別のものを消費して発動
するようです。検証を行ったビーストマンの様子を見るに、集中力を
消費するとも言いますか」

酷く曖昧なものを消費するらしいという言葉に、フォーマルハウト
少しだけ眉を顰めたが、デミウルゴスを責めることは出来ない。むし
ろ、未知の能力を発見して軽い検証まで済ませていることを褒めるべ
きだろう。

武技というユグドラシルには存在しなかったこの世界特有の能力。
フォーマルハウトはそれに警戒心を抱くと同時に、期待のようなも
のも抱いていた。

未知の能力がどれだけ危険なものであるかはユグドラシルで学ん
でいるし、転移してからもそういう未知を警戒して慎重な行動を行っ
てきている。

だが、もしもその武技が自分も習得出来たとしたら。

フォーマルハウトは百レベルであり、これ以上レベルが上がらない。実際に、百レベルの九十九パーセントまで経験値が溜まっている状態でビーストマンを殺してもレベルは上がらなかった。つまりはこれ以上ステータスが上がることはない。

しかし、それはユグドラシルのルール内での話だ。

ユグドラシルという世界から逸脱した武技という能力。これがレベルに関係無く習得出来るとすれば、百レベルの存在でもさらに強くなれるということだ。

未知の能力を警戒するという意味でも、自分たちがさらに強くなるという意味でも、詳しく調べる必要があるとフォーマルハウトは心のメモに書き留める。

「以上が私がビーストマンから絞り出した情報となります。少々少ないですが、先ほども申しました通りビーストマンたちは記憶力などが並以下のものでして、これ以上の情報を得るには彼らが死ぬ可能性が高くなる手法を用いなければなりませんので……」

「分かった。現時点では大切な情報源兼実験材料だ、簡単に殺してしまつては勿体無いからな。デミウルゴス、ご苦労だった」

「はっ！ 勿体無いお言葉、有難う御座います！」

主たるモモンガからの労いの言葉を受け、デミウルゴスが感動に身を震わせながら感謝を述べた。

その様子に守護者たちの瞳が燃える。

それは嫉妬だ。主たる至高の存在に仕事を任され、その成果を捧げ、さらには労つてまでもらえたデミウルゴスに対する嫉妬。そして、次は自分だという強い願望にも似た決意の炎でもある。

「さて、今回手に入った情報はこの程度だ。ではこの情報を基に今後の方針を決めようと思うが……いくつか問題が起きている。いずれも現状では軽微な問題ではあるが無視は出来ないものだ」

「問題？」

「……フォーマルハウトさん、我々は収入がありません」

問い掛けたフォーマルハウトの背筋に電流が走った。

知者であるアルベド、デミウルゴス、そして二人ほどではないが頭

が良いヴェルフニアの三人以外は事の重大さが理解出来ていないのか、その何が問題なのかといったように不思議そうな顔をしている。

だが、これは由々しき事態だ。

収入が無いということはギルドの維持費が支払えなくなるということに他ならない。

今は問題が無い。かつて仲間たちがいた時に大量に溜め込んだ財宝があるし、モモンガとフォーマルハウトが個人資産を切り崩せば当分の間はギルドの維持が出来るだろう。

しかし、収入が無いということはいずれ終わりを迎えるということ。

ナザリックが、アインズ・ウール・ゴウンが消滅してしまわないように空いた時間の殆どをモモンガと共に金策に使っていたフォーマルハウトには、到底看過出来る問題ではなかった。

「どうしよう、モモンガさん……」

余りに大きな悲壮感を漂わせるフォーマルハウトの呟きで、ようやく事の大きさを理解した守護者たちが顔を強張らせる。

「資金だけじゃありません。水薬ポーションや巻物スクロールの素材も入手先がありません……」

消耗品を補充する当てが無ければ減っていくばかり。

唐突に判明した大問題に頭を悩ませたフォーマルハウトは苦い顔で眉間を抑える。

「ともかく、この問題を解消するためにも当面は情報収集を行いたいと考えている」

「では影シャドウ・デーモンの悪魔を再び放ちますか？」

アルベドの提案にモモンガは頷きを返しつつも、それだけでは無いと言葉を繋ぐ。

「それも行うが、幸い我々の力もこの世界の一般的な水準からすれば十分通用するレベルにあるようだ。もう少し調査の規模を大きくしたいと考えている。無論、我々の存在は隠したままな」

「素晴らしいお考えかと。それでは、如何いたしましょう」

「うむ……」

モモンガは頷いてから、顎に手を当てて考える。

「……まずはアウラ、お前はナザリック周辺の山岳地帯と森林地帯の地図を作れ。その際、どのような生物が生息しているかを記録し、我々の脅威となりうる存在やこの世界固有のモンスターなどを発見した場合は報告せよ」

「畏まりました！」

アウラの元気の良い返事を聞いて満足そうに頷き、次はデミウルゴスへと目を向ける。

「次にデミウルゴス、お前には巻物の素材となる羊皮紙の候補を探してもらいたい。水薬ポーションに関しては必要ではあるが、ナザリック内では余り用途が多くないので後回しだ」

「はっ！ 必ずやご満足頂ける結果を出して参ります」

モモンガは続いてセバスへと顔を向ける。

「セバス」

「はっ！」

「お前には少し遠出をしてもらう。この場にはいないが、ソリュシヤンを連れて帝国へ向かえ。その際は竜王国から旅行に来た金持ちの娘とその執事として振る舞い、上流階級や商人などから情報を得るのだ。この辺りの人間の国では一番栄えているらしいからな。栄えているということは情報もそれだけ集まるはずだ。お前は他の者たちと違ってある程度姿を表に出すことになるが、人間に近い見た目をしているので大丈夫だろう」

「畏まりました。ソリュシヤンと共に全身全霊を以て当たらせて頂きます」

「よし、では残りの守護者たち——シャルティア、コキュートス、マーレはナザリックの警備に就いてもらう」

『はっ！』

守護者たちの声が綺麗に重なる。

しかし、その声は二種類、歓喜と嫉妬が僅かに見え隠れするものに分かれていた。

歓喜は忠誠を捧ぐ主より勅命を賜ったことによるものだ。自らの身命を賭してでもその命を遂行すべく、凄まじい気合の入り方をして、いることが見て取れる。

嫉妬の感情を僅かに見せているのは、今回勅命を賜れなかった者たち——シャルティア、コキュートス、マーレの三人だ。

厳密にはナザリックの警備として侵入者を迎え撃つという大役ではあるのだが、肝心の侵入者がいなければその成果を主に捧げることが出来ない。かといって侵入者を願うのも不敬であるし、自らの力によつて忠誠を捧げられる仕事を与えられた者たちが羨ましいのだ。

「それと、私は冒険者として帝国に潜入しようと考えている」

「えっ、モモンガさん外出るんですか？」

モモンガの意外な言葉にフォーマルハウトが食い付く。

「出ますよ。村長との会話で自分がどれだけこの世界の一般常識を知らないのかを痛感しましたからね。手っ取り早くそれを学ぶなら、都市かどこかで生活してみるのがいいでしょう」

「確かに……」

これからこの世界で目立たないよう情報を収集しなければならぬ以上、一般常識——例えば貨幣価値や文化の特色を知らないようでは余りにも目立つだろう。

それを手っ取り早く学ぶのであれば、それが常識である場所で生活すればいい。

例えば他言語を覚えるにしても、その言語が公用語の国で暮らせばいい。そうすれば必要に迫られて最低限は覚えるものだ。

「先ほど言ったギルドの維持費の問題もある。この世界の通貨がギルドの維持費などに使えるのか定かではないが、外貨の獲得も行っておいた方がいいだろう。幸い、冒険者は誰でもなれるようだからな」

「モモンガ様の御懸念、理解致しました。でしたらこのアルベドが供を務めさせて頂きます」

「……ん？ いや待てアルベド、供の必要は無い。お前にはナザリックに残ってもらうつもりだ」

モモンガから出た否定の言葉に、アルベドはきよとした表情を

浮かべる。そして数秒かけて言葉の意味を理解したのか、はしたないくらいに大きな音を立てながら身を乗り出した。

「そ、そんな！ 何故なのですか!? 護衛という点から見れば守護者最硬である私が適任のはず!？」

「た、確かにそうだが……お前には私が居ない間のナザリックを管理してもらわなければならない。フォーマルハウトさんは組織管理が得意ではないし、デミウルゴスも外に出す以上お前でなければ務まるまい?」

アルベドの勢いに気圧されて身を仰け反らせながらモモンガが述べたのは、これ以上ない正論だった。

さしものアルベドもこの正論には言葉を詰まらせる。

ナザリックの管理という点において、彼女以上の適任者は存在しない。たとえ比較対象がデミウルゴスであつてもだ。

彼女は守護者統括というナザリック全域を管理する地位を至高の存在によって与えられているし、創造主たるタブラ・スマラグディナがそうあれと生み出したために内務能力に極めて長けている。

その能力の高さは、ナザリック全階層に住まう万を優に超えるシモベたちをたった一人で完璧に管理することが出来るほどだ。

「つ……で、でしたら護衛の部隊を編成致します。それと警備に就けている守護者から最低一名をお連れ下さいます。それが叶わぬのであれば、私をお連れ下さい」

悔しそうな声で絞り出したアルベドの提案に、モモンガは無い眉を顰めた。

「アルベドよ、私は人間の国に潜入して情報収集を行いに行くのだ。護衛の部隊なぞ連れて歩けるわけもないし、お前も含めてナザリックの警備に残す守護者たちは人間とは外見が離れているため潜入には向かない。シャルティアならば見た目は人間と言えが、彼女は守護者最強であり、転移魔法も使える。有事の際には遊撃として動いてもらう場合を考えると、ナザリックに残して置きたい戦力だ」

「でしたら、全身鎧であるヘルメス・トリスメギストスを装備すれば外見上の問題は御座いませぬ！ これならば……」

「街中でも常に着用しているつもりか？ 私も今回は全身鎧フルプレートを着用して魔法詠唱者では無く戦士として振る舞い、可能な限り正体を隠すつもりだ。二人とも街中で兜を外さないというのは余りにも不自然だろう」

「ならばこの角と翼を切り落とします！」

「よせ！ やめろ！ お前が心配しているのは分かるし、嬉しいが……」

何度も似たようなやり取りが繰り返される。普段であれば主人の命令に対して食い下がるアルベドを窘めるはずの守護者たちだが、今回は何も言わずに複雑な表情で二人のやり取りを見守っている。

言葉には出さないが、守護者たちは皆アルベドと同じ考えを抱いていたからだ。

護衛の任に誰が就くかは別として、主の身が己の命よりも大切なシモベたちはモモンガの単独での潜入行動など看過出来ない。

更に追加で幾度か同じやり取りが繰り返された末に、モモンガの視線が助けを求めるように動く。

その先にいたのはフォーマルハウトだ。視線に気付いたフォーマルハウトは、向けられているモモンガの血のように紅い瞳からその考えを読み取るべく思考を巡らせる。

表情の変化が起きず、感情表現はエモートで行うしかなかったユグドラシルにおいてもアイコンタクトで様々なやり取りを行って来たのだ。全く問題はない。

そう、何一つとして問題はない。

長年の付き合いから僅か数秒でモモンガが求めているものに辿り着いたフォーマルハウトは、食い下がるアルベドへ向けて口を開く。

「落ち着けアルベド」

「っ！ フォ、フォーマルハウト様……しかし、いくら至高の御方の御命令とはいえ……」

「いいから、耳を貸せ」

洩々といった様子を隠さずに顔を寄せたアルベドに耳打ちする。

「モモンガさんはな、愛するお前には家を守ってもらいたいと考えて

るんだ。良妻は家を守って、夫の帰りを待つものだろうか？」

「!?」

「モモンガさんだつて皆の前でそれを言うのは恥ずかしいだろうか、察してやってくれ」

「……は、はっ！ モモンガ様、大変失礼致しました。モモンガ様の真意を見抜けぬ愚かな私をお許し下さいませ！」

アルベドの突然の豹変ぶりに驚愕したモモンガは、変な事を言っていないだろうなという抗議の視線をフォーマルハウトへと向けたが、一仕事終えた満足感に浸っていたフォーマルハウトはこれに気付かなかった。

そして、モモンガもまた特大の爆弾が埋め込まれたことに気付いていない。

あるのは自らの提案が通りそうだという安堵と達成感、場を収めてくれた友人に対する感謝、そしてその友人がアルベドに告げた言葉に対する極々僅かな心配だ。

「う、うむ。いや、気にするな。では、私は冒険者として身分を偽って帝国へ潜入し、情報収集と外貨の獲得を主目的として行動する。単独というのはお前たちも看過し難いだろうし、アルベドの意を汲んで人間に近い外見の者を一人供として連れて行こうと思うが、それで良いか？」

「許可など求めずとも御命令下さいませ。それと、私の我儘を聞いて頂き感謝の言葉も御座いませぬ。ナザリツクのことはこのアルベドに任せて、いつてらっしゃいませ」

その金色の瞳を不気味さすら感じさせるほど爛々と輝かせ、自分の名前の部分を妙に強調しながら告げたアルベドに、モモンガは奇妙な違和感を覚えた。しかし、それを気のせいだろうと切り捨てる。

その違和感を覚えた次の瞬間には、いつものような慈愛を湛えた微笑みを浮かべていたためだ。

「それと、外へ出る守護者クラスの者たちには世界級アイテムを貸し出そうと思う。構いませんか、フォーマルハウトさん」

「構いませんよ?」

「……いいんですか？ 流石に世界級アイテムは渋られると思つてたんですが」

「俺が渋つても納得させられるだけの理由があるんでしよう？ それにまあ、モモンガさんが必要だつて考えたなら必要なんでしよう。ちよつと考えましたが、嫌がる理由の方がありませんし。まあ、一応理由は聞かせてもらいましょう」

モモンガは一度咳払いをしてからその理由を語り出す。

「他のプレイヤーの存在です。ユグドラシルから転移したのが我々だけというのは考えづらいですからね」

「はー……なるほど。相手の世界級アイテム対策ですか」

「そういうことです」

一人納得した様子を見せるフォーマルハウトとは対照的に、守護者たちはその顔に疑問の色が浮かんでいた。

「お前たちは知らないのか？ 世界級アイテムの効果は同格のアイテム——つまり世界級アイテムを持っていれば無効化出来るんだよ」

「そ、そうなのですか？」

「ああ、モモンガさんがお前たちに世界級アイテムを持たせようとしてるのは、他のプレイヤーが持ち込んだ世界級アイテムを警戒しているからだな。俺の焰王の慟哭やアルベドの真なる無もそうだけど、かなりえげつない効果ばかりだから……」

世界級アイテムはその名の通り、世界一つに匹敵する力を持つ。

フォーマルハウトの持つ焰王の慟哭然り、アルベドの持つ真なる無しかりだ。

例えばアインズ・ウール・ゴウンが持つ山河社稷図。

使用者を含む相手やそのエリア全体を全百種類ある異空間のうちの一つへと問答無用で引き込んで閉じ込め、隔離する効果を持つ。相手が誰だろうと場所がどこだろうと、自分の有利な状況へと引きずり込むことが出来るのだ。

尤も、この山河社稷図はランダム四十種類の中から一つ選択される方法で異空間から脱出されると、所持権限が相手に移るというデメリットもあるため、比較的弱い方と言えるだろう。

世界一つを塗り替える力が弱い方。その時点で世界級アイテムが
どれだけ破格の効果を持つかが窺える。

(もしも聖者殺しの槍……『二十』なんて持つてこられたら大変なこと
になるからな)

強力な効果を持つ世界級アイテムの中でも使い切りであるがゆえ
に特別凶悪な力を持つ二十種類のアイテム。それが『二十』だ。

例えば聖者殺しの槍であれば、使用者を完全に抹消することで相手
も完全に抹消することが出来る。この抹消はユグドラシルでは蘇生
魔法でも課金アイテムでも蘇生させることが出来ない、完全なるデー
タの抹消を意味する。

これを復活させるには同等の力を持つ『二十』の一つを使うしか方
法が無い。

この世界ではその抹消がどういった扱いになるのかは不明だが、一
レベルの村人一人を犠牲に百レベルの守護者を永遠に帰らぬ存在と
することが可能だ。

それだけは絶対に避けなければならない。

「ゆえに、お前たちには世界級アイテムを預ける。後ほど私が宝物殿
より持ち出して渡そう。言うまでも無く、世界級アイテムは切り札
だ。場合によってはお前たちの命よりも大切なものだということ
を忘れるな」

『はっ!』

「よし、では私からはここまでだ。何か質問などがあれば発言せよ」

「モモンガ様」

いち早く声を上げたのは、先ほどから一言も喋らずフォーマルハウ
トの隣に座っていたヴェルフエニアだ。

「どうした、ヴェルフエニア」

「はい。私とフォーマルハウトに竜王国へ潜入する許可を頂けません
か?」

「何?」

モモンガの紅い瞳が、驚きにその光を強くする。

その瞳は続いてフォーマルハウトへと向けられたが、フォーマルハウ

ウトは首を横に振る。ヴェルフエニアの発言は自分が促したわけではないと。

「ふむ、理由を聞いても良いか？ 私としては、スレイン法国と竜王国が何らかの繋がりがある可能性を否定出来ない以上、竜王国へ積極的に触れるつもりはないのだ。なぜなら人間種のプレイヤーが我々と同じように転移していたならば、スレイン法国へと身を寄せる可能性が高いからだ」

実際には、人間種かどうかに限らずスレイン法国へと接触を試みるだろう。

どんな姿をしているかに関わらず、プレイヤーは日本人であり、人間だ。

人類繁栄のためという正義を掲げているスレイン法国のことを知れば、そこへ集まるのはごく自然な流れと言える。或いは、日本人の国民的気質として纏まろうと行動し、他のプレイヤーの存在を求めてスレイン法国へと向かう可能性もあるだろう。

もしもこれらのプレイヤーが敵対していた場合はどうなるか。

無いとは思えるが、あり得ないとは言えない。だからこそフォーマルハウトたちは世界級アイテムによる攻撃を警戒し、守護者クラスの人たちに対策を与えることにした。

アインズ・ウール・ゴウンは悪のロールプレイを是としたギルド。ユグドラシル一嫌われていたギルドと言っても過言ではないのだから。

「だからこそ、です。私とフォーマルハウトは人間とそう変わらない外見を持っていますし、我々にとつて危険な国と繋がりがある可能性を持つ国を放置というのも……。世界級アイテムも持っていますので、冒険者として身分を偽り潜入するという意味では問題無いかと」
そう言つて、ヴェルフエニアは自らの右足首を指し示す。

そこにあるのは足輪だ。黒紫の水晶が二つの帯となり、絡まり合つて出来たような奇妙な形状を持つ足輪。

世界級アイテム、メビウスの輪。

かつてフォーマルハウトがソ口時代に偶然手に入れた世界級アイ

テムだ。

ソロ時代に入手したアイテムであるためギルドに加入した後でも共有資産とはならず、フォーマルハウト個人での所有や使用が認められている。

「それに、フォーマルハウトと小旅行とでも洒落込んでみたいのです」
「……それが本音っぽいな……まあ、お前の言い分は分かった。
シャドウ・デーモン影の悪魔を送り込んで軽い情報収集のみに留めるつもりだったが、お前たちの潜入によるメリットもある。フォーマルハウトさん、頼んでもいいですか？」

「旅行、行きたいです」

何も考えていないような能天気な返答を受けたモモンガは軽く頭痛を覚える。

しかし、モモンガはめげない。フォーマルハウトとは長い付き合いなのだ。

「じゃあ、もう一つフォーマルハウトさんに質問します」

「はい、どうぞ」

気を取り直したモモンガは、ヴェルフエニアの頭の先から足元までを失礼にならない程度に見つめる。

そこに座っているのは、裾がボロボロに解れた黒いマントに身を包み、その下には服は疎か下着すらも身に付けてない少女だ。

言葉を飾らずに言えば、痴女だ。

友人の業の深い趣味に心の中で嘆息しながらモモンガは恐る恐る問い掛ける。

「……ヴェルフエニアはこの格好のまま連れて行くつもりですか？」

フォーマルハウトもまた、隣に座る少女を見た。

同時にフォーマルハウトがヴェルフエニアへと抱いていた独占欲が鎌首を擡げる。

もしもヴェルフエニアが他の男から変な目で見られたら。もしも風か何かでマントが捲れ、その裸体が衆目に晒されたら。

そんな光景を想像してしまったフォーマルハウトが感じたのは、狂おしいほどの怒りだ。それを態度に出すようなことはしまいと努め

たが、それでも自然と眉を顰めてしまう。

半ば家族のようなものと言えるナザリック内では気にならない。しかし、外の男にそういう目で見られるのは我慢ならなかった。

「どうするフォーマルハウト、私は構わないが……」

「ダメだ。本当にダメだ。そんな格好のお前を外の男共に見せられるか」

「ならどうするんですか？ 確かメビウスの輪はデメリットで装備を着けられなかったはずですよ」

「……何か世界級アイテム貸してください。そうすれば他の装備を着けられますから」

ヴェルフエニアが持つメビウスの輪は魔法詠唱者にとっては強力無比な効果を持っているが、同時に多大なデメリットがいくつか存在する。

その一つが、メビウスの輪以外のステータス上昇効果を持つ装備が着れなくなるという効果だ。

たとえそれが神器級であろうと最下級であろうと装備は不可能。このデメリット効果のために、ヴェルフエニアは防具類を着用出来ないのだ。何の効果も持たない、見た目だけを変更するためのファッションアイテムならば装備出来るが、そういった類の物をフォーマルハウトは極少数しか持っていないかった。

具体的に言えば、ヴェルフエニアが普段身に着けている黒マントと、イベントなどで偶々入手した物が幾つかのみで、マントと嫉妬マスク以外は男性用だ。

ともかく、モモンガが提案した外に出る守護者クラスには世界級アイテムを持たせるという条件を満たすには、メビウスの輪の代わりとなる世界級アイテムを用意しなければならぬ。でなければヴェルフエニアはこの格好のまま外に出ることになる。

「でも、ヴェルフエニアはメビウスの輪を使う前提のビルドでしたよね？」

「それは……そうだ、ならアイスの棒を使います。メビウスの輪はナザリックに置いていって、アイスの棒使った時に貸してもらった

ワールド
世界級アイテムと入れ替わるようにすればどうでしょう」

アイスの棒とは通称であり、正式名称ではない。

まさしくアイスの棒のようなみずばらしい小さな木の棒なのだが、これは課金して購入出来る消費アイテムだ。使用すると事前に登録した装備を別の場所から呼び寄せて、一瞬で装備することが出来るため、ユグドラシルでは緊急時の装備交換用アイテムとして重宝されていた。

これを利用すれば、普段は貸し与えられたワールド世界級アイテムを装備して過ごし、戦闘に必要であればメビウスの輪を即座に装備することが出来る。

「アイスの棒ですか。確かにそれなら……分かりました。それで、肝心の装備はどうするんです？ 何かあるんですか？ 必要なら貸し出しますが」

モモンガの記憶にある限り、ヴェルフエニアは創り出された瞬間からこの格好で、それ以外の格好をしているところを見たことが無い。

このモモンガの疑問には、ヴェルフエニアが答えた。

「モモンガ様、それでしたら問題ありません。コスプレ用にフォーマルハウトから装備を受け取っています。戦闘に使っても問題の無いレジェンド伝説級アイテムも幾つかあつたはずですよ。流星に神器級はありませんが……」

モモンガの冷たい視線がフォーマルハウトを突き刺す。その視線には『この変態リア充が！』という罵倒が強く込められていた。

一方で、主の一人であるフォーマルハウトの性癖を聞かされても守護者たちは微動だにしない。それどころか、ヴェルフエニアを羨ましいとすら思っていた。

貰った物がどんな物であれ、至高の存在から頂けた物であれば、彼らにとってはどんな財宝よりも価値がある。

ましてヴェルフエニアが授かった物は、創造主から愛でられるための物。被造物である身にはこれ以上無い宝だ。

「……そうか、分かった。ならばヴェルフエニアよ、お前には強欲と無欲を貸し出す。冒険者として潜入するのならば、一番戦闘を行う機会

が多いはずだ。無理に戦う必要は無いが、ついでにこの世界のモンス
ターでも経験値を溜めることが出来るかを調べてもらおう。それと、
フォーマルハウトさんが言った通りメビウスの輪は持ち出さず、ナザ
リック内に置いていくように」

「畏まりました。それと、私の我儘を聞いて頂き有難う御座います」

ヴェルフニアは一度ソファから立ち上がり、モモンガへと跪いて
感謝を示す。

それに頷きを返して感謝を受け取ったモモンガは、これ以上質問や
意見がないかを守護者たちに問い掛ける。

ソファに腰掛ける守護者たちへと順に視線を向けて何も無いこと
を確認すると、一度だけ大きく頷いてから会議の終了を告げた。

「よし、では此度の会議はこれまでとする。各自休息を取った後、出撃
予定がある者はその準備をせよ」

幕間 ヴェルフニア・セレンルーナのとおある一日

「……ん」

カーテンの隙間から差し込む陽の光で、私——ヴェルフニア・セレンルーナは目を覚ます。

気怠さが残る体をゆっくりと起こすと、それに合わせて私の体を包んでいた毛布がするりと滑り落ちた。

私は惜し気も無く肌を晒す。恥ずかしがることはない。ここには私以外の誰も居ないし、私はそうあれと創り出されたのだから。

それに、偉大にして至高なる創造主にして我が夫、フォーマルハウトに与えられたこの肉体に恥じる場所など微塵も無い。こんなに素晴らしい体を与えてくれたのだと喧伝したいくらいだ。

もちろん実際にそんなことはしない。最近分かったことだが、あれは実は独占欲が強いらしい。私の裸体が他の男に見られるのが嫌だと言ってくれた旦那様はそれを望まないだろう。

そういえば、何故ナザリックの男はいいのに外の男は駄目なのだろうか。後で聞いてみることにしよう。

「ふぁ……」

寝ぼけ眼を擦りながら欠伸をして、ぐつと体を仰け反らせるように背伸びをする。

それから再びベッドに身を投げ出して、未だに消え去らない眠気を追い出すように、枕を抱えてごろごろと転がりながらゆっくりと意識を覚醒させてゆく。

どれくらい転がっただろうか、ようやく眠気が消え去る。未だ体は気怠さを残していたが、惰眠を貪り続けるのは健康的ではない。人でない私がそういう生活をして体調を崩すのは分からないが。

私は人間のような姿をしているが、人間ではない。かといって亜人種でも異形種でも無く、このナザリックには珍しい人間種だ。アウラやマーレの種族である闇妖精ダークエルフのような、人間の近親種と言えば分かり易いだろう。

魔に傾倒し、魔法を極めんとしたがために人間を止め、魔道に堕ち

た者、魔人だ。

ゆえにその身体構造は人間に極めて近いものの、寿命は無く、所持している種族由来のスキルによって食事や睡眠も必要としない。人間種にしては珍しいスキルを持つていると言えるだろう。

フォーマルハウトは私の種族について課金種族とか言っていたが、課金という言葉の意味はよく分からない。課金アイテムや課金職業という言葉も聞いた事があるし、何か特別なことを意味する単語なのだろう。

睡眠の必要が無いにも関わらず、何故寝ていたのかと問われれば、必要が無くても眠ることが出来るからと答える他ない。

食事の必要が無くとも定期的になにかを食べたいという食欲はあるし、睡眠の必要が無くとも夜になれば眠りたいという睡眠欲はある。同じく食事不要や睡眠不要のスキルを持つ他の種族のことは知らないが、少なくとも私——魔人はそうだ。

元々が人間であったから、そういう慣習が残っている種族だとフォーマルハウトは言っていた。

「ふう……さて、起きるか……」

態々声を出して、はつきりとした意思決定を行ってから体を起す。

起きて私が最初にするのは、枕元に大切に畳んであるマントを身に着けることだ。

私が生まれた日に与えられた、大きな黒いマント。生まれて初めて与えられた、創造主からの最初のプレゼント。

これは何の効果も持っていないし、裾はボロボロに解れている。見た目よりは丈夫で、丈が膝下まであって全身をすっぽりと覆えることくらいしか優れた部分が無く、プレゼントと言うには笑ってしまうくらいに酷い物だ。

だが、それでもこれは私の宝物だ。あれが最初に私のために用意してくれた、大切な宝物。

残念ながらこれも、数日後にはここへ置いて行くことになるが。

首元の紐を縛ってマントを纏った私はベッドから降りて、閉めたま

まだったカーテンを開け放つ。窓から射し込む陽光が部屋を照らし、私はその眩しさに目を細める。しばらくして光に慣れると、目に飛び込んでくるのは色彩豊かな花畑と、陽光を反射して煌めく湖だ。

ここは第八階層にして、私の守護領域たる虚無の湖岸。

第八階層は荒野だ。

罅割れた大地の上を常に冷たい風が吹き続け、土埃が舞う死の世界。樹々や草は枯れ果てたものが疎らに生えているだけで、あとは所々に岩があるだけの階層。

そんな場所にあつて、虚無の湖岸だけはまさしく別世界だ。

常に薄暗い荒野の一角にあつて、この場所だけは昼夜が存在している。と言つても、第六階層のような星空は見えないが。

そして、ある場所を境に色彩豊かな花畑が広がり、その下の土も植物の生育に適した豊富な栄養を保有している。領域の真ん中には直径百メートルほどの湖があり、その湖には生き物こそいないが驚くほどに透き通っている。

そんな美しい湖の湖岸にあるのが、私が普段寝泊まりしている家だ。

木造二階建ての小屋。

栄えあるナザリツクの領域守護者が寝泊まりする場所としてはみすばらしさすら感じるかもしれないが、ここがフォーマルハウトから私に暮らす場所として与えられた家だ。ゆえに不満は全く無い。

「んっ……はあ……」

太陽の光を体中に浴びながらも一度背伸びをして、私は大きな姿見の前へと移動する。

次にするのは髪の手入れだ。

私の髪は腰どころか床につきそうなほど長いので、手入れが中々に大変だ。毎朝起きた時と入浴後の一日二回、こうして姿見の前で髪を梳く。

フォーマルハウトが与えてくれた魔法が込められた大き目の櫛を使って、丁寧に髪を梳かしてゆく。

鏡を見ながら細部まで確認し、最後に全体の形を整えてもう一度確

認する。寝癖やいつもと違う部分が残っていないければそれでようやく完了だ。特別酷い日でもない限りは三十分ほどで整え終わる。

「次は食事だな……何を食べようか」

私は朝食に食べる物を考えながら寝室を出て、一階へと向かう。階段を降りてすぐに右へ曲がればリビングだ。奥にはキッチンスペースがあり、そこで料理が出来るようになっていた。まあ、私は料理が出来ないし、紅茶を淹れる時くらいしか使わないので余り縁は無い。

ここでの食事は出来合いの物が殆どだ。

私は魔法の竈のすぐ横に置いてある、石とも木とも金属とも異なる滑らかな手触りの素材で作られた箱を開く。箱の中には無数の料理が保管されていた。

この箱は、至高の御方々が食糧庫と呼んでいるアイテムだ。正式名称は教えられていない。

当たり前だが、大半の食材や料理は長く放置すれば食べられなくなってしまう。

それを防ぐには^{ブリザベーション}保^ンの魔法を施さなければならないのだが、この食糧庫の中には^{ブリザベーション}保^ンの効果を与えてくれる優れ物だ。

私は食糧庫の中から一品の料理を取り出し、料理を包んでいるラップを素早く剥がす。食糧庫から取り出した瞬間から^{ブリザベーション}保^ンの効果が切れるため、手早く食べなければならぬ。すぐに腐ると思わないが、気分の問題だ。

引き出しからナイフとフォークを取り出して、料理と共にテーブルへと持っていく。

少し歪な形をした四人掛けのテーブルで淡々と料理を口へ運ぶ。

私は最近、こうして一人で食事をする時間が少し嫌いになった。

以前はそんなことはなかった。領域守護者である以上この地を離れることは出来ないし、与えられた数少ないシモベたちも食事を必要としない者だったので、フォーマルハウトがそのタイミングで現れない限り、一人で食事をするのは当たり前のことだった。

しかし、なぜだろうか。今は少し嫌だ。知ってしまったからだ、私は思う。

ナザリツクがユグドラシルからこの世界へと転移して、フォーマルハウトは私と共に居てくれるようになった。第八階層から出入りする許可も出たので、こちらから会いにだって行ける。

フォーマルハウトと行動を共にしていれば、必然的に食事も一人ではなくなる。半ばフォーマルハウトの専属メイドと化しているシズや一般メイドたちと食卓を囲むことも多く、ここ数日でいつの間にかそれが当たり前となっていた。

だから、そう。きつと寂しいんだ。一人で食事するのを味気無く感じてしまうほどに。

今度は朝から第九階層の食堂に行ってみるのも良いかもしれない。

「……………」

朝食を食べ終えて、短く息を吐く。

僅かな間食事の余韻に浸ってから立ち上がり、手早く食器を片付けてからリビングを後にする。向かうのは外だ。

私はこの虚無の湖岸の領域守護者たるヴェルフニア・セレンルーナ。ならば自らの守護領域が正常かどうか、定期的に確認しなければならぬ。

今日は偶々、その確認日だった。

裸足のまま家の外に出る。三段ほどの小さな階段を降りると足が多少土で汚れるが、特に気にはしない。流星に他の階層などに入る場合は気にするが、それでもく清潔クリーンの魔法を使えばいいだけの話だ。

花畑を突っ切って、湖の畔へと腰かける。湖の中へと入れた足先から伝わる水の冷たさが心地良い。

私はその冷たさにぶるりと体を一度震わせてから、指を打ち鳴らした。ぱちんつと小気味良い音が鳴り響くと、音に呼応するかのよう湖がうねり始める。風いでいたはずの湖面は波立ち、湖の中央には小さな渦のようなものが出来ていた。

渦は五秒ほどの時間をかけて徐々に大きくなる。やがて湖の水全てを巻き込むほど巨大な渦となると、それらは巻き上がるように空中

へと踊り出して激しく流動する球体へと形を変えてゆく。

幾度も見ているはずのその光景はやはり見惚れてしまう程に美しく、空中で舞う大量の水が撒き散らす飛沫が陽光を反射して煌めき、まるで宝石のように輝いている。

しばしの後、巨大な水球がいくつかの二つの小さな水球へと分かれた。

私は激流がそのまま球体となったかのように激しく脈動する水球へと呼び掛ける。

「姿を現せ、シモベたち」

私の言葉に従って、二つの水球が弾ける。

一際大量の水飛沫を辺りへと撒き散らしながら、水球はゆっくりと人型を模る。フォーマルハウトが召喚していた炎フレイム・エレメンタル精 靈のように下半身が無く、上半身しか存在しない。

その体は水で出来ていて、筋骨隆々の偉丈夫といった姿をしていた炎フレイム・エレメンタル精 靈とは真逆の、頼りないほどに細身の体だ。しかし、その体は驚くほど大きく、私の十倍を優に超える巨体を誇る。内包している力の大きさもまた体の巨大さに見合ったものであり、中位精 靈エレメンタル程度とは比較にもならない。

深淵デプス・ウオーター・エレメンタルの水精 靈。これこそがフォーマルハウトから与えられた、私の数少ないシモベだ。

そのレベルは九十と極めて高く、階層守護者に次ぐほどの高レベルを誇る。水と冷気の扱いに長けた後衛型モンスターであり、その戦闘能力は極めて高い。この領域の警備戦力だ。

とはいえ、この者たちが実戦で使われたことはただ一度しかない。この階層にまで愚か者共が足を踏み入れた、あの忌まわしき大戦。千五百もの人間種がナザリックへと押し寄せ、その全てが至高の御方々によって駆逐され尽した喜劇。

ああ、あの時のフォーマルハウトは本当に格好良かった。貴重なマジックアイテムを湯水のように使い、敵の攻撃に晒された私を何度も救ってくれた。私を狙う敵に怒りを露わにしながら立ち向かってゆくフォーマルハウトの雄姿は今なお鮮明に思い出せる。

「……ごほん！」

トリップしかけていた頭を振って正気を取り戻し、目の前に佇む深淵の水精霊デプス・ウォーター・エレメンタルの奥へと視線を向ける。

透き通るような水で満ちていた湖は見る影も無く、そこにはぼっかりとしたどこまでも続いていそうな暗闇が満ちていた。この暗闇の底には汚水が停滞して淀みきったような悍ましい色をした空間が広がっており、そこに入った者は無数のデバフに加えてく飛行フライや転移魔法を封じられ、さらに大量の継続ダメージを受けて緩やかな死を迎えるとフォーマルハウトが言っていた。

実際に、あの戦いの時もここに落とされて戻って来た者は皆無だった。ゆえにこの湖は帰る者の無き虚無へ至る湖と呼ばれ、この領域は虚無の湖岸という名が付けられている。

ただ、この虚無の湖の底に広がる空間はナザリックの者に対しても無差別にその効果を及ぼすため、深淵の水精霊デプス・ウォーター・エレメンタルたちは平時にはナザリックの者たちが誤って落ちてしまわないよう、湖にその体で蓋をする役割を与えられていた。

「何か問題は？」

私が深淵の水精霊デプス・ウォーター・エレメンタルへ問い掛けると、肯定を示すように巨大な体を折り曲げるようにして恭しく頭を下げた。

これらは言葉こそ話せないが、言語を理解することは出来る。そして、その意思を酷く臆気な思念によってある程度伝えることも出来る。初めはその思念を理解するのに少し苦労したが、今では慣れたものだ。

問題は起きていないという思念が届いたため、私が領き返してから元の場所へ戻るように指示を出すと、精霊エレメンタルたちが了解の意を告げる。それまでの人型から激しく流動する球体へと姿を変えて、先ほど出現した際の動きを逆再生しているかのような動きを見せて湖へと戻ってゆく。

数秒経つ頃には大穴が開いていた湖はすっかりと水で満たされ、今朝方そうであったような美しい姿へと変貌している。

花畑の中央に開いた底の見えない大穴もそれはそれで魅力的だが、

やはり綺麗な湖の方が良く似合う。

私は満足気に頷いてから立ち上がり、次の場所へと向かう。一度に全てを確認出来ないのは少々面倒だが、私のシモベは少ないし、領域自体も広くは無いので大した手間ではない。

聞けば私と同じ領域守護者のグラントなどは複数階層に領域を持つているため、管理も中々に手間がかかるようだ。

私は水で濡れた花畑の外周を歩き、景色を楽しみながら次の場所へと向かう。

辿り着いたのは何の変哲もない、少し開けた場所。私とフォーマルハウトの家とは湖を挟んで反対側に位置する場所。

トントンと踵で地面をノックをすると、少し経ってから大地が揺れ、私の目の前の地面が花を巻き込みながら盛り上がってゆく。土塊は深淵デプス・ウオーター・エレメンタルの水精霊と同じ程度の大きさまで膨らむと、ゆっくりとその形を変える。

目の前の土塊は人を象った姿となり、やはりと言うべきか下半身はない。ただ、その下半身は他の精霊エレメンタルのように宙に浮いているわけではなく、大地と同化している。

その姿は寸胴型の体に太い丸太のような腕が生えた無骨なもので、フレイム・エレメンタル炎精霊のような炎の輝きも深淵デプス・ウオーター・エレメンタルの水精霊のような水の煌きも無く、飾り気がまるでない。唯一それらしい物と言えば、姿を現す時に巻き込んだ色取り取りの花くらいだが、それはこいつの体の一部では無いのでノーカウントだ。

彼女もまた私のシモベであり、マザー・アース・エレメンタル母なる大地の精霊という。

レベルは九十二レベルで、攻撃能力は同レベル帯のモンスターと比べると低めだが、エレメンタル精霊にしては珍しく防御能力が高めでHPも豊富だ。また、高位の森祭司ドルイドの力を有しているため、治癒魔法や補助魔法、自然に関する魔法を扱える。

平時ではその森祭司ドルイドの力を活かして花畑が枯れてしまわないように環境を管理し、戦闘時にはその防御力と多彩な魔法を活かした壁兼治癒、補助役となる優秀な存在だ。

ちなみに精神は一応女のように、男扱いすると怒って抗議してく

る。

「問題は無いな？」

私の問いかけにその寸胴の体の上に乗っている、体の割には小さな頭をこくりと縦に振りつつ、思念で問題が無いことを伝えてくる。

「では持ち場に戻れ。ああ、お前が壊した場所はきちんと直しておけよ」

再び頭と思念で了解の意を示した母なる大地の精霊マザー・アース・エレメンタルが地面に体を埋めるのを見送って、私はく飛行フライの魔法を発動する。

これで私の領域内の確認は終わりだ。

これが階層守護者や、グラントのように広大な領域の守護者であったり部下が多かったりすれば、中々に大変な仕事になるだろう。しかし、幸いと言うべきか、私の領域は小さい。

私に与えられたシモベは先ほどの三体のみ。それらにこの小さな領域の危険地帯と環境を管理させているので、そいつらに問題が無いかどうかを聞くだけで済む。

「さて、今日はどうするか」

家に着いた私は階段に腰を下ろして一人呟く。

いつもならばフォーマルハウトのところへと向かうが、今日はそうしない。

どうやら竜王国への潜入を行う時の装備で悩んでいるようなので、邪魔をしては悪い。

後から判明したことだが、人間たちの装備は私たちの装備と比較して脆弱なようだった。その等級がどの程度なのかまでは不明だが、私たちが普段使っている伝説級レジェンドや神器級ゴッズの装備を持ち込むと、良い意味でも悪い意味でも目立ちすぎる可能性がある。

目立つのにはメリットとデメリットがあるが、正体を隠して潜入しての情報収集という観点から見てデメリットの方が大きいと判断し、倉庫をひっくり返して聖遺物級レリック辺りの装備でちょうどいい物を探すとフォーマルハウトは言っていた。

私はフォーマルハウトほど所持品が多くないので、既に装備の選出は終わっている。見た目も可愛らしく、鏡とにらめっこをして自分に

似合う物を選んだつもりだ。きっとあれも気に入ってくれる。

だから手伝いに行くのも悪くないが、四六時中一緒にいるよりは適度なタイミングで別行動する方が良い。

ここ最近毎日決まった時間にフォーマルハウトの下を訪ねていた。だが、今日は行かない。それによつて、フォーマルハウトは今日は何故私来ないんだと違和感を覚えるだろう。

普段あるはずのものが無い。それがその者によつて悪いものであれば、感じるのは安堵だろうが、良いものであれば、感じるのはいらないことに対する様々な余り長くは感じていたくない感情だ。

私はフォーマルハウトによつて良いものはず。ならば、その時フォーマルハウトが次に感じるのはきっと寂寥や不安——私が居なくて寂しい、切ないという感情。

その感情はあれを揺さぶるだろう。その心の揺れが大きければ大きいほど、次に会った時に私がいることへの安堵も大きくなる。同時にフォーマルハウトによつての私という存在も大きくなる。

そして、私によつてのフォーマルハウトという存在も。

夫婦円満の秘訣は適度に距離感を調節することにあると、私は信じている。

「……ん？ ふふ、やはり来たか」

〈伝言〉メッセージを受けた時特有の電子音が頭の中に鳴り響く。

相手は声を聞かずともわかる。きっと私は今、だらしない笑みを浮かべているのだろうか。

「どうした、フォーマルハウト？」

《あ、ああ、いや、お前が来ないからどうかしたのかと思つてな。いつもこのくらいの時間には来てるだろ？》

私は上機嫌に笑みを浮かべる。もはや予想では無く、私が浮かべているのは間違いなくだらしない笑みだ。フォーマルハウトには決して見せられない。

「どうした、寂しいのか？」

《……いや、そんなことは……無い》

嘘だ。若干の間と声音からそれが分かる。

分かり易い男だ。

「ふふ、そうか、残念だ。今日は装備を選ぶんだろう？ 私がいれば邪魔をしてしまうかもしれない」

《邪魔にはならないと思うんだが……》

「素直に寂しいと言ってはどうか？」

《だ、だからそんなんじゃないや……ごほん！ 分かった、今日は来ないんだな？》

「くつくつく……ああ、今日はやめておこう。せつかくだ、他の階層でも見てみようと思っっている」

そんな予定は無かったが、ふと思いついたことを口に出す。

すまん、フォーマルハウト。これも円満な夫婦生活のためなんだ。

だが、実際他の階層のことには興味がある。私が第八階層から出たのはつい最近だし、フォーマルハウトと共にいることが多いから第九階層にいることが多く、それ以外では第十階層の玉座の間と第六階層の闘技場くらいしか行つたことが無い。

《分かった。それじゃ、また明日な》

「……ふふ、ああ、また明日。……愛しているよ、フォーマルハウト」

《っ！ お前——》

私は返事も聞かずに^{メッセージ}伝言を終了する。

ああ、愉快だ。きつと今頃は顔を真っ赤にして固まっているのだろう。最近では私が色々としているからか慣れてきているが、存外初心な男のようだしな。

「さて、では……そうだな、上から順に、今日はシャルティアのところにでも行くか」

突然押し掛ける形になってしまいが、シャルティアは特別な命令を受けていかなかったし問題は無いだろう。都合が悪いようなら出直せばいい。

私は再び^{フライ}飛行を発動して、第七階層への転移門へと向かった。目指すはシャルティアの玄室がある第二階層だ。



第二階層にあるシャルティアの住居、屍蠟玄室の前に到着した私は緊張から解放されてほつと安堵の息を吐く。

第一から第三階層は墳墓であり、そこかしこを様々な種類のアンデッド系モンスターが徘徊している。それだけならば全く問題は無いのだが、この階層は驚くほどに罠が多い。

例えば落とし穴や、負のエネルギーによるダメージを与え続ける効果を持つエリア。果てはナザリック内のどこかへ転移させられてしまう転移の罠まで。

普段この階層で暮らしているシャルティアやナザリックの罠を全て把握しているシズならば問題は無いのだろうが、初めてここへ訪れた私にとっては危険地帯だ。

罠の位置を把握していないため、闇雲に進むと凶悪な罠に引っかけたってしまう可能性がある。特にあの領域へと転移させられる罠にだけは引っかけたりたくない。あれは数ある罠のなかでも凶悪に過ぎる。

私はある領域守護者を思い出すと同時に、背筋にぞわぞわとした嫌な怖気を覚えて身震いする。

「いかん、駄目だ。止めよう」

私は頭を振って、思い浮かべた領域守護者の姿を思考の中から追いつ出す。

同じナザリックに住まう仲間なので嫌うのは悪いが、あの姿と奴の眷属たちはどうしても受け入れ難い。直接会ったことは無いが、伝え聞く姿を想像しただけでも本能的に嫌悪感を覚えるほどに。

流星は至高の御方。私にすら恐怖を与えるような存在を創り出すとは。

咳払いをして気持ちを新たにしつつ、私は目の前にある墳墓には不似合いなほど豪華な扉をノックする。

ノックの後、少しして中から顔を覗かせたのは、シャルティア直属の配下である吸血鬼の花嫁だ。
ヴァンパイア・ブライド

その姿は妙齡の美女。すらりとした長身で、バランス良く発達したスタイルの良い体をしている。肌は白蠟のように血の気が失せた白

で、瞳は鮮血の真紅。赤い唇からは吸血鬼ヴァンパイアであることを示す、鋭い犬歯が僅かにその姿を見せていた。

服装は胸元が大きく開いた薄絹の扇情的な白いドレスに、黄金に輝く装身具を身に着けて、靴はハイヒールを履いている。

基本的に同種であれば同じか極めて似た姿をしているモンスターが多いが、吸血鬼の花嫁ヴァンパイア・ブライドは違う。その違いは髪型だ。ロングストリートやポニーテール、ボブカットなど、モンスターの癖に意外と個性が豊かだ。

私の応対に出てきたのはロングストレートの個体だ。

「これは、ヴェルフエニア様、ようこそいらっしゃいました」

私の姿を認めた吸血鬼ヴァンパイア・ブライドの花嫁は扉の陰から姿を現し、丁寧な礼を見せる。どうやらシャルティアによく躰けられているようだ。

「私を知っているのだな？」

「はい。既にアルベド様より階層守護者様を通して全シモベへと通達がなされております。第八階層虚無の湖岸の領域守護者であり、フォーマルハウト様の奥方様にあらせられる、と」

「式はまだ挙げていないがな」

私は上機嫌に答えながら、もう一度深く腰を折った吸血鬼ヴァンパイア・ブライドの花嫁を見やる。

胸元が大きく開いたドレスから覗くのは、白蠟の如き白い肌とアルベドほどではないが豊かな双丘だ。頭を上げた後に髪をかきあげる仕草もどこか男の劣情を誘う妖艶さを醸し出すもので、私が男か同性でもいける口だったなら手を出していたかもしれない。

フォーマルハウトはこういうのも好むだろうか。

見た目は問題無く美しいし、私とは違うタイプの体つきをしている。命令には従順で、万が一フォーマルハウトに危害を加えようとしても、これ程度のレベルでは閨事の最中でだって傷一つ付けることは出来ない。

さらにはあの変態ペロロンチーノ様が創り出した変態シャルティア直属のシモベだ。夜の行為についての知識も豊富と見て良いはずだ。

ハーレム候補としては良さそうだし、一体貰えないかシャルティア

に聞いてみよう。

「それで、ヴェルフエニア様。本日はどのようなご用件でしょうか？」
「暇が出来たのでな。シャルティアと茶でも飲みながら雑談しようと思つて来た。そちらの都合が良ければだが……」

「畏まりました。それでは、シャルティア様にお伝えしますので、中でお待ち下さい」

「そうさせてもらおう」

ヴァンパイア・ブライド
吸血鬼の花嫁の案内に従つて扉を潜る。

中に入つてまず感じたのは外とはまるで違つた淫靡な空気だ。部屋中に漂う甘つたるい香りは生者に対してバッドステータスを与えらるものだと聞いている。たとえそうでなくとも、思わず鼻を覆いたくなるほどにその香りは濃密だ。

部屋の造りは第九階層に匹敵するほど煌びやかな装飾が施されており、配置されている家具もまたその部屋に相応しい物が並んでいる。

私はその内の椅子の一つに腰掛ける。

「ただいまお飲み物をお持ち致します」

案内してくれた^{ヴァンパイア・ブライド}吸血鬼の花嫁が部屋の奥へと続く扉から姿を消すと、すぐにその向こう側からぱたぱたと忙しなく走り回る音が聞こえた。シャルティア様をお呼びしてだとか、湯浴みの最中だとか、お飲み物の準備をだとか言う声も一緒に。

急に押し掛けたせいで随分と慌てさせてしまつていようだ。私は罪悪感から、心の中で少しだけ頭を下げる。

程なくして私の前に紅茶と茶菓子^{ヴァンパイア・ブライド}が準備され、その味を楽しんでいるうちにシャルティアが姿を現した。

「待たせてしまったでありんすね」

^{ヴァンパイア・ブライド}吸血鬼の花嫁に扉を開かせて現れたシャルティアはいつもの漆黒のボールガウンでは無く、ゆつたりとした薄桃色のネグリジェを身に纏っている。生地はとても薄く、^{ヴァンパイア・ブライド}吸血鬼の花嫁同様の血の気が失せた白蟻の如き肌がうつすらと見えていた。

普段は纏めている長い銀色の髪も下ろされており、完全には乾き

きつていないのか、しつとりと湿っている。

「いや、それほど待つてはいない。それよりもすまないな、急に押し掛けてしまった」

「構いんせん。個人的に聞いてみたいこともあったことでありんすし」

「聞いてみたいこと？」

シャルティアは私の前に用意されていた椅子に座り、紅茶を一口飲んでから真摯な表情で口を開いた。

「フォーマルハウト様から色々なコスプレ用の装備を授かったと言っていたでありんすが、どんな物を持っているでありんすか？」

浮かべている表情と会話の内容が合っていない。

もつと面倒なことを聞かれると思っていたが、拍子抜けだ。

「そんなことか……」

「そんなこととは失礼でありんすね。わた……わらわもペロロンチーノ様より様々な服を与えられているでありんす。チビスケもぶくぶく茶釜さまより与えられているのに、全然そういう方面の話をしたがらないからお洒落に関して話す相手がいないのでありんすよ」

「ふむ……」

要するに同好の士が欲しいようだ。

とはいえ、私だつて衣装を持っていても着回したことはない。フォーマルハウトを悦ばせるという意味で興味は無くもないが、話せることなどアウラやマーレと同レベルだろう。

「そういう話をするのは各かではないが、余り得意ではないぞ？ 生まれてこの方、フォーマルハウトに命じられない限りはこの格好しかしたことがない。私よりも統括殿はどうなんだ？」

「アルベドは駄目でありんす。あれはあのドレス以外の服は二、三着しか持つていないようでありんすから。興味も知識もあるようでありんすが、想像の域を超えんせん。タブラ・スマラグディナ様がそれほど服を下さらなかったようでありんすね」

「そうか。それで私か……しかし、今言った通り余り得意ではない。フォーマルハウトが他の御方々と話していた着こなし方くらいしか

知らんぞ」

「他の至高の御方々？ 是非教えてくんままし！ モモンガ様のお好み分かるかも知りんせん！」

急に身を乗り出して食いついて来たシャルティアの勢いに、私は体を仰け反らせる。

しかし、モモンガ様の好みか。

前にデミウルゴスたちに言った通り、私はあの頃に至高の御方々がしていた会話の内容で覚えていることはそう多くない。

記憶力は悪い方ではなく、むしろ良い方だと思うのだが、私は特に必要の無い記憶はすぐに忘れていく質らしい。その証拠に、その時の会話でもフォーマルハウトに関係した部分は今でも覚えている。

それに関連付けて思い出せば、何と言っていたか臆気には思い出せるかもしれない。

「あー……そうだな。確かモモンガ様はそういった話は余りされなかったはずだが……確か、好みは清楚系がどの話をしていたような気がするな」

「清楚でありんすか……ならば問題ありんせんね！」

どこが？

そう思っても口には出さない。

「そ、そうか……そうだな。まあ後はペロロンチーノ様はフォーマルハウトと同じく多趣味だな。ナース服とかスク水セーラー服とか色々フォーマルハウトと意見を交わしていた。その過程で私に与えられた服も何着がある」

「ふむふむ」

「武人建御雷様は和服美人が好きだと言っていたな」

「和服でありんすか？ わたしは持っていませんね……ヴェルフェニアは持っているでありんすか？」

「一着だけな」

私が持っているのは紺色の生地に椿という花が刺繍された物だ。

着付けなどが中々手間らしく、着たことは無い。

「それはそれは、是非着てみたいでありんすね」

「私もまだ着ていないから、貸すならばその後だな。他の御方々の好みは……ウルベルト・アレイン・オードル様は悪の女幹部風、たっちみー様は魔法少女だったか？　へっへっ様はメイド服だな。式式炎雷様はくノ一で、死獣天朱雀様はセーラー服にルーズソックスと言っていたような……」

「好みが色々と分かれていますね……でも和服以外は全て持っているでありますから、仮にモモンガ様がお求めになられても問題はありせんね。ああ、モモンガ様、ダメであります……そんなところはあ……」

「……妄想もいいが、まずモモンガ様を落とすところからだろう」

私の言葉にシャルティアは妄想の世界から戻ってくる。

ぐわつと擬音が聞こえてきそうなほどの勢いで身を乗り出したシャルティアの勢いに押し負け、私は再び体を仰け反らせる。

急に大きな反応を見せるから中々心臓に悪い。

「そうでありんす！　ヴェルフニア、至高の御方であられるフォーマルハウト様の妻であるあなたのアドバイスが欲しいであります。どうやったらモモンガ様を落とせるでありますでしょうか。アルベドには負けられせん」

「アドバイスカ……」

そう言われても、正直困る。

私は別に私自身の魅力や手練手管でフォーマルハウトを落とす訳ではなく、フォーマルハウトが理想として生み出したのが私なのだ。ゆえに、私がフォーマルハウトに愛されることは必然であり、他者にアドバイス出来るようなことはない。

強いて言うならばフォーマルハウトに失望されず、愛され続けるようにしていることくらいだろうか。髪をよく手入れしたり、フォーマルハウトが喜びそうな仕草を見せてみたり。

膝枕はとも喜んでくれたし、モモンガ様も喜ぶだろうか。

「外にでも誘って膝枕を試みたらどうだ？　フォーマルハウトはかなり喜んでいただぞ」

「外？　ナザリック内の方がいいのではなくて？」

「尤もな疑問だ。確かにナザリツクを超える物などこの世には存在しない。しかし、物珍しさというものがある」

「物珍しさ……?」

きよとんと首を傾げたシャルティアに、私は自信をもって告げる。

「そうだ。フォーマルハウトもモモンガ様も、星空を見てまるで子供の様にはしやぎ回っていた。どうもフォーマルハウトに言わせると、第六階層のものとは趣が違うらしい。それに至高の御方々はユグドラシルの様々な場所を旅していたから、物珍しい物を見るとはしゃいでしまうようだぞ」

「……なるほど、至高の御方々にしか分かりんせん何かがあるわけでありんすね。良い事を聞きんした。それに、星空を見ながら膝枕だなんてロマンチックでありんすし憧れるでありんすねえ」

感心したように言って、シャルティアは再び妄想の翼を広げてゆく。浮かべている表情からして、恐らくアウラやマーレには言えないような内容なのだろうな。

それから数分ほど妄想の世界に浸ったシャルティアは、急に思い出したかのように我に返る。

「そういえば、フォーマルハウト様がハーレムをお作りになられるとか?」

「ああ、作ることになっている。とはいえ、あれは余り深く考えずに好みの女を囲うくらいにしか思っていないだろうが」

「あら、それでいいのではなくて? 至高の御方がそうと望まれるのなら、それが正しいのでありんすから」

「それはそうだが、それでは外部の女が不満を溜めるだろう。形式的にでもいいから平等にせねばな」

「外部……えっ!? ナザリツクの外からも女を迎え入れるのでありんすか!?!」

「そのつもりだが?」

それほど驚くことだろうか。

どこの女であろうと、重要なことはただ一つ。フォーマルハウトが気に入るかどうかだ。あとはナザリツクや至高の御方々に対して無

礼を働かなければそれで良い。

もちろんナザリック内の者の方が立場的に上であるようにするにはするが、そもそも内部の者と外部の者とは会うこと自体が少ないだろう。

モモンガ様に付けられた、些か面倒な条件。当然と言えば当然だが、ナザリック外の者をフォーマルハウトの感性のみでナザリックへと迎え入れることは許されなかった。

つまり、外のどこかに屋敷でも建ててかして、そこで生活させなければならぬ。そうなるならば、ナザリックで暮らす者たちと会う機会など無いはずだ。

「ちよつと驚きました。てつきりナザリックの外の女など近づかせるかとか言うかと思いましたが」

「私はそこまで狭量ではないさ」

「ふうん……それで、フォーマルハウト様があなたよりも外の女に惚れ込んでしまっても？」

シャルティアは意地の悪い笑みを浮かべる。

トウルヴァアンパイア

真 祖だからか、そうあれと創られたからか……いや、その両方か。どうやら酷いサディストの様だ。

私はその笑みに微笑みを返す。その程度では動じない。

「あり得ないな。内でも外でも、フォーマルハウトが私よりも惚れ込む女など存在しないさ」

そう、あり得ない。

私はフォーマルハウトの理想として——その寵愛を最も受ける存在として生み出されたのだから。

寵愛。寵愛か。

いつもナザリックでは二人きりになる機会は少ない。あれは第八階層には来てくれないし、フォーマルハウトの寝室だって、夜でも部屋のすぐ外にはシズが控えているのだ。初めてくらは誰にも邪魔されないようにしたい。

しかし、今度は二人きりで出掛けるのだ。ならば、竜王国の宿屋辺りでそういった段階へと進んでもいいのかもしれない。私たちは夫婦なのだから。

あれは初心だから、誘うのはきつと私からだ。でも、一線を越えることを決意したフォーマルハウトは私をベッドに押し倒す。その後は互いの体を気遣って愛を確かめ合いながら、初めての時を迎えるんだ。

二回目以降はきつともつと凄い。一度籬が外れたフォーマルハウトは事あるごとに私の体を要求し、既に抱かれる快楽に目覚めてしまった私は強引に唇を奪われて、口を塞がれて快楽に喘ぐことも出来ない状態のまま獣に蹂躪されるが如く、一日中許されることなく滅茶苦茶に――

「……ヴェルフニア？ どうしたでありんすか？」

「……はっ!? ごほんっ！ いや、何でもない。何でもないぞ。本当に何でもない」

危なかった。これではシャルティアのことを変態とは呼べないな。

「そ、そう？ それにしても、大した自信でありんすねえ……羨ましい。モモンガ様はハーレムなどをお作りにはなりんせんでありんしょうか」

「さて、どうだろうな。フォーマルハウトとそういう話をした時は否定的な印象を持っていたようだが……」

「ということは、側室は持たない？」

「かもしれないな」

少しだけ考え込んだシャルティアは、にやりと邪悪な笑みを浮かべる。嗜虐心と優越感に満ちた笑みだ。

多分、自分が正妃になればアルベドを悔しがらせることが出来ると考えているのだろう。

「ふふ……ははは！ わたしが正妃に収まればアルベドは……いい気味でありんすねえ！ 清楚さという観点で見ればわたしの方が圧倒的に上！ この勝負はもらったでありんす！」

……一度、清楚という言葉の意味を教えた方がいいだろうか。

第十三話 城塞都市オランジェ

竜王国の中央部からやや東にある都市オランジェは城塞都市だ。

しかし、城塞都市と言ってもそれほど立派なものではない。苔むした石造りの城壁はあるが、所々罅割れていてそれが補修される様子もないし、侵入者を拒む鉄格子の門は錆び付いて脆くなっており、野生動物や小鬼程度ならばどうとでもなるだろうが、宿敵たるビーストマンの大群の侵入を防ぐには心許ない強度だ。

城塞都市の名を冠するというのにこのような有様なものには理由がある。

一つは、単純に予算不足。

毎年ビーストマン対策として多額の軍事費を費やしていてもなお足りず、ここ最近では城塞として使われていない前線への中継的役割しかない都市の補修費用など捻出出来ないこと。

今のところビーストマンたちを国境付近へ押し込めておくことには成功しているものの、定期的に攻めて来るビーストマンに対抗するための砦の修繕費や武器、水薬ポーションの調達費用、冒険者へ支払う報酬など、最前線では金がいくらあっても足りない状況だ。

二つ目は今まさに語った、街道上の単なる中継的役割しかない都市と成り下がっているからという理由。

オランジェよりも東、最も警戒すべきビーストマンの国との国境付近には、もつと巨大で立派で防備も整えられた巨大砦ライズムが存在する。このライズム砦が出来てからビーストマンの迎撃などは専らそちらで行われているため、オランジェが最後に本来の用途で使われたのは何年も前のことだ。

ゆえに、オランジェはライズム砦へと補給物資や人員を運ぶための中継都市として使われるばかりとなり、それに伴い国から割り当てられる予算なども縮小されていた。

こんな中継都市よりも、最前線である砦の修繕や強化などに金を掛けた方が合理的なのは子供でも分かることだ。

しかし、予算が無いから、戦略上重要視されていないからと言って、

この都市が寂れているという訳ではない。

この都市は前線であるライズム砦へ向かう竜王国軍の兵士や輸送物資、ビーストマン討伐で一攫千金を夢見る冒険者、逆に任期を終えて前線から故郷や王都へ帰還する者たちなどが多く通る。いずれもビーストマンとの戦いに赴く者か、ひとまずの戦いを終えて帰還する傷付いた者たちだ。

そのため武具や食料、巻物スクロールや水薬ポーションなどの需要は計り知れず、それらを扱う商人たちがオランジエへ群がることは想像に難くない。そしてその多くの商人たちが齎す恩恵を求め、地方からは多くの者がこの都市を訪れる。

人が集まれば商人が動き、商人が集まれば金が動く。金が動けばさなる人が……そうしてオランジエは王都と前線との中継的役割しか無い都市にも関わらず、大きく発展してきたのだ。

ゆえにオランジエは都市の大きさに対して、国中から多くの人々が集まる都市として知られている。

そんなオランジエの都市中央にある広大な広場に行き交う人々は様々だ。

年のいった婦人や雑踏の合間を縫うようにして駆け回る子供たち。都市で働く年若い青年に、統一された武具に身を包む竜王国軍の兵士や様々な装備を身に着けた冒険者と思しき性別も年齢もバラバラのグループ。

それら行き交う人々に腹の底から大声を出して注目を集めるのは商売上手の商人たちだ。広場の脇には彼らが営む露店が建ち並び、新鮮な野菜や穀物、調理済みの食料などが商品として並べられている。

時刻は昼の少し前。家庭を持つある主婦は商人と熾烈な値切り交渉を繰り返して目当ての商品を手に入れ、腹を空かせたある青年は肉の焼ける匂いにつられて串焼き肉を買っていた。既に目当ての物を買った者たちは広場の端や適当な座れる場所に腰掛けて、気心の知れた友人や仲間たちと共に談笑しながら食事を楽しんでいる。

そんな熱気渦巻く喧噪は昼飯時が過ぎ去るまでは絶えることなく続くだろうと思われたが、ある二人組が広場に姿を現したることによつ

て鳴りを潜めた。

二人組はただそこに現れただけで、広場で彼らの姿を視界に入れた老若男女全ての視線を釘付けにする。

二人組のうちの一人は龍の頭を模した白い杖を携えた女。

それもまだ年端もいかないうような風貌の少女だ。

その少女は深窓の令嬢を彷彿とさせる高級感溢れるゴシック調のドレスと、最高位の魔法詠唱者^{マジック・キャスター}が纏うに値する力に満ちたローブが融合したかのような、驚くほどに美しい衣装を細い体に纏っている。肩から掛けられたストールの下に隠れた衣服は幾重にも重ねられた黒の薄布で出来ており、露出は抑えられているにも関わらず、見る者には扇情的な雰囲気すら感じさせた。

触れることも躊躇われるような漆黒の生地には金の煌く糸で複雑かつ優雅な紋様が描かれ、細いリボンやフリルが多く使われた装飾は、派手ながらも見る者に決して不快感を与えない洗練されたものだ。

袖口は非常に大きく、不用意に腕を持ち上げれば隙間から脇の辺りまで見えてしまいそうなほどゆったりとしている。胸元には大きなルビーと思しき真紅の宝石があしらわれたペンダントが下げられ、円錐状に大きく広がった膝丈のチュールスカートから覗く細い足は、黒のストッキングで包まれていた。

しかし、そんな美麗な衣装の中でも特筆すべきは、その織手を包むガントレット籠手だ。

少女が身に纏う繊細な衣装の中で武装らしい武装は白い杖とガントレット籠手だけであり、特に籠手は異質な存在感を放っている。

左手は黒く、悪魔のような邪悪極まりない生物からもぎ取ったような禍々しい形状をしており、所々からは捻じれた棘が突出し、指先は鋭利に尖っていた。金属であるはずなのに、装甲の隙間から漏れ出した真紅の光は生物のように脈動しているようにも見える。

左手が悪魔ならば、対となる右手は天使の翼を思わせる神々しい純白だ。すらりとした飾りの少ない形状をしており、全体に施された奇妙な金の紋様以外の装飾は全く無い。しかし、装飾こそ少ないもの

の、溢れ出るその美しさと存在感は一目見るだけで目が離せなくなってしまうほどのものだ。

ではそれらを身に纏う少女はどのような姿をしているのか。

痩せた体を覆うドレスから僅かに晒されているのは顔だけだ。その肌は透き通るように白く、肌理細やかな陶磁器を思わせるほど滑らかで美しい。

太陽の光を反射して煌めく長い金髪は頭の後ろで一纏めにして垂らされた後、中ほどで一度折り畳んだところを煌びやかな装飾が付いたバレツタで留めてから、再び垂らされている。横から見ると、後頭部に髪で出来た『ひ』の文字がくっついたような状態だ。

瞳は丹念に磨かれた宝石を思わせるサファイアブルー。全てのパーツが黄金比とも言うべきその整った顔立ちを一言で表すのならば、絶世の美少女だろう。異性だけでなく、同性までもを魅了するような美しさに溢れている。

それだけの美貌を持った少女が微笑みを向けているのは、隣を歩く青年だ。

青年もまた、少女に劣らぬほどの容姿をしている。

体格こそ大きくも小さくもなく、特別に鍛えられているわけでもない、しかし太っているわけでもない適度に引き締まった肉体であったが、その顔立ちには平凡なものではない。

目を見張るほどに鮮やかな色合いをした髪は、まるで燃え上がる焔の如き真紅。切れ長の瞳もまた血で染め上げられたような真紅であるが、奥底では小さな無数の光の粒子が縦横無尽に駆け巡り、神秘的な美しさを演出する。

異様なほどに整った顔立ちに浮かべられた表情は笑顔だ。その真紅の瞳はまるで何もかもを初めて目にする子供のようにキラキラと輝いていた。

無論、少女に劣らぬのは容姿だけではなく、その身に纏う装備もだ。青年の装備は少女の芸術品のような装飾が施された装備とは違い、華美な装飾は少ない。

引き締まった体は黒色を主体とした動きやすく丈夫そうな衣服に

包まれ、上下共に顔以外の部分は晒されていない。その身を覆う金属は、光沢の少ない鈍色の胸プレスト・プレート当てと装甲靴サブトンだけだ。

これらは装飾が少なく地味ですらあるが、衣服も含めて少女の物に勝るとも劣らないほどに高価な品であることが素人目にも分かる。無駄が無く、大きさも必要最小限に留められていることから、青年は見た目よりも実用性を、防御よりも身軽さを重視しているのだろう。

暗色で整えられた装備の中で衆目を集めて止まないのは、その手を覆う手袋。貴族でも手に入れるには苦勞するであろうほどに高価なはずの他の装備とは一線を画すほどの一品だ。

身に纏う漆黒の衣服とは正反対の純白の糸で丁寧に編んで作られた、遠目から見ても分かるほどに滑らかな布地で出来たそれは芸術品の如き完成度であり、国宝として数えられてもおかしくはないほどだ。手の甲に当たる部分には灰色の糸で形容し難く、余り長く直視してはいたくはないと思ってしまう奇妙な紋章が刺繍されている。

英雄が使うような装備を身に纏う護衛と、何処かの大国の大貴族の令嬢。或いは御伽噺の中から飛び出してきた、美男美女のカップル。

それが、彼らを目にした広場の人々が心に抱いた感想だった。

「セレーネ、次はあれを食べてみよう。美味そうだ」

「ふふ、そうだな。しかしフェラン、私たちには向かう場所があるだろう。後にしたらどうだ？」

赤髪の青年フェラン——フォーマルハウトが寄り道をしようとして、黒いドレスの少女セレーネ——ヴェルフニアが窘める。

彼らがこの都市に入ってから、既に何度も繰り返された遣り取りだ。

「買い食いくらい良いだろう？」

「先に目的を果たしてからゆっくりと回ればいいだろう？　というか、資金にも限りがあるんだぞ。路銀が尽きそうだから冒険者になると言うのに浪費してどうする」

「……そうだな。うん、路銀……そうだな」

フォーマルハウトはそういうえばそんな設定だったな、と自らに課せられた冒険者としての設定を思い出す。

フォーマルハウトとヴェルフニアは北の山脈の向こう、遙か遠い地よりやって来た旅人であり、路銀が底を尽きそうになったので冒険者となって資金調達を行いつつ、次の旅先を決めるための情報収集を行っている。という設定だ。

正体を隠すためにフェランとセレーネという偽名を名乗り、更にヴェルフニアは悪目立ちを避けるために魔法でオッドアイを隠している。装備も普段使っている神器級装備からランクを落として、聖遺物級装備で統一されていた。

「しかし、思った以上に目立っているな」
「ああ」

しかし、それだけの偽装を施したにも関わらず、衆目は未だ二人へと注がれており、間違いなくこの街において今最も他者の視線を集めている存在となってしまうている。

当然だが、フォーマルハウトたちは正体を知られるわけにはいかない。将来的には人間ではないことやユグドラシルプレイヤーであることを公表する可能性もあるが、今はそうするわけにはいかない。

相手の情報が無い状態でこちらの情報を流出させる訳にはいかないのだ。

だからこそ偽名を使い、目立たないように装備の等級も下げた。

聖遺物級装備というのは、ユグドラシルでは精々中級者から上級者になりたてのプレイヤーが使うレベルの装備だ。それまでのアイテムと比較すれば中々の能力を保有しているが、上級者が使う伝説級や神器級と比べれば遥かに劣る。

ビーストマンから手に入れた情報を基に、聖遺物級ならば必要最低限の防御能力を確保しつつ潜入行動が出来るかと判断したのだが、人間たちの装備水準はフォーマルハウトたちが思っていた以上に低い物だった。

ちらり、とフォーマルハウトは横目で兵士や冒険者らしき者たちを盗み見る。

それらが身に纏っているのは、鑑定スキルや魔法を持たないフォーマルハウトでも分かるほど弱い装備だ。

鎧や盾の表面は傷付き、槍の穂先は小さな凹みがあり、少々刃が欠けている物もある。野伏らしき男が背負っている弓からは何の力も感じられず、魔法詠唱者らしき女が手に持っている杖は櫛の木から削り出しただけの棒きれだ。

全員がそこまで酷いというわけではないが、ユグドラシルで言えば最下級から良い物でも中級程度。これでは聖遺物級程度でも目立つてしまうのは当然であった。

フォーマルハウトは声を潜め、自らの失態を苦々しげに呟く。

「聖遺物級は失敗だったか……というか、聖遺物級でも馬鹿みたいに目立つ装備水準ってどういうことだ」

「ビーストマンどもは私たちが思っている以上に記憶力が無かったかな。人間たちが使っている装備の細かな情報が手に入れば良かったのだが……もう少し地味な装備にすべきだったか？」

「かも知れないな……お前の場合には装備の質だけじゃなくて見た目でも目立つてるような気がする。ユグドラシルじゃ当たり前前だったんだがな……常識のズレが酷い」

ビーストマンから得られた人間の装備に関する情報は、情報と呼ぶことすら出来ないものだった。

それもそのはずで、彼らが気にするのは人間の性能や見た目ではなく、自分たちの牙や爪が通り、殺すことが出来るかどうかだ。余程強力な装備や目立つ装備でも無い限りはビーストマンたちの小さな脳に刻まれることはない。

「まあもう手遅れだし、気にしても仕方ない。この都市にいる間は念のため注意しながら過ごそう。探知防御の魔法は問題無いな？」

「ああ、複数個常時展開している。反撃型ではなく阻害型と逆探型だが」

「それで構わない。万全を期すなら探索役も欲しいか……ああ、面倒臭いな。考えるのはもういいか。今はさっさと登録済ませて、宿決め……それで終わりか？」

「とりあえずはな」

注目を浴びながら小声で会話をして、フォーマルハウトたちは人で

溢れた広場を突き進む。歩みに合わせて人垣が割れていく光景は、モーセの奇跡を見ているかのようだ。

串焼き肉や即席料理の匂いにつられて寄り道をしようとして、そのたびにヴェルフエニアに窘められながらフォーマルハウトが辿り着いたのは、広場に面する建物の中でも一際大きな建物だ。

その建物は二階建てであり、壁が白の塗料で染められた石造りだ。入口らしき両開きの扉は建物の大きさに相応しい大きさを誇り、扉の横には剣が交差した紋章があらわれた旗が掲げられている。

「フェラン、ここが冒険者組合か？」

「多分な、衛兵から聞いた特徴と一致する」

ヴェルフエニアに頷き返ししながら、フォーマルハウトは木で出来た扉を開け放つ。

開かれた扉の先は広々としたロビーであり、ソファやテーブルがいくつも並べられ、その奥には受付嬢らしき女たちが座るカウンターが見えた。

建物の中へ一歩踏み出してまず感じたのは、外で感じたもの以上に無遠慮な無数の視線。それらは好奇や嘲笑、羨望など様々な感情が混じり合ったものだったが、フォーマルハウトが一番顕著に感じたのは嫉妬の感情だ。

一級品と呼べる装備を身に纏っていることに対するもの。女連れであることに対するもの。その女が天上の美を持つことに対するもの。

冒険者たちから向けられるそんな視線に少しだけ居心地の悪さを感じながら、フォーマルハウトはヴェルフエニアを連れて一直線に受付嬢が座るカウンターへと進む。

建物の中は冒険者と思しき柄の悪そうな者たちで賑わっており、その合間を縫って歩くのは中々に疲れる。

「冒険者登録をしたい。俺と連れの二人ともだ」

ようやくカウンターへ辿り着いたフォーマルハウトが告げる。

フォーマルハウトの声に反応して顔を上げた受付嬢は微笑みながら顔を上げた。

冒険者登録は珍しいことではない。

たまたま剣を拾った農民が一攫千金を夢見たり、腕に自信のある命知らずが地位と名声を求めて訪れたり、冒険者登録を行う理由などいくらでもあるからだ。

受付嬢がこの組合で働き始めてからまだそれほど長い時間は経っていないが、それでも何人もの冒険者登録を行った経験がある。今日はどんな人が来たのか。そんな好奇心を宿した眼鏡越しの視線でフォーマルハウトの姿を見て、受付嬢は硬直する。

まず、見たことも無い凄まじい装備の数々に驚愕し、それだけの装備を身に纏っている二人組の若さに自らの目を疑った。そして、目に映る青年の美貌にすぐさま頬を赤く染め上げる。

それから隣に立つヴェルフニアへと視線を向けたところで、誰が見てもわかるほど残念そうにがくりと肩を落とす。女としての敗北を知り、勝てないと悟って。

その一連の動作の意味が分からなかったフォーマルハウトは、首を傾げながら受付嬢へと問い掛ける。

「あー……連れが何か？」

「い、いえ、失礼しました。冒険者登録でしたか？ それでしたら登録の必要書類料として一人五銀貨となります」

フォーマルハウトは懐から小さな革袋を取り出し、中から二人分の必要書類料となる銀貨十枚を取り出す。

この現地通貨はヴェンデ村から心ばかりの礼として受け取った物だ。

金銭による報酬はモモンガが断り、代わりに情報を貰ったのだが、やはり命の恩人に何も渡せないのは心苦しいと村長から半ば強引に渡された。

渡されてしまったものは仕方ないので、今後の活動資金として活用すべく、フォーマルハウト、モモンガ、セバスに配分されている。（現地通貨なんてすぐには必要無いと思っていただけ、まさか必要になるとは……つーか必要書類高っ！ 不味いぞ……）

受付嬢が必要書類を取り出している間に革袋の中身を見て、フォー

マルハウトは誰にも気づかれないう程度に眉を顰める。

中に入っているのは銀貨が二枚と銅貨が少し。

フォーマルハウトも貨幣価値がどの程度なのかは未だ把握出来ていないが、広場にあつた露店で出されている料理の価格を見た限りでは、二人でしばらく生活するには余りにも心許ない額だ。

金は主に宿屋や食事ですることになるが、毎日転移でナザリックに帰れる二人にその必要は無い。しかし、宿屋も使わず、食材も買わず、出来合いの食事すらないのは余りにも怪しい。

既に目立ってしまったので目立たずに行動するというのは半ば諦めているが、人ではないことが感づかれるような怪しまれ方をするのは、避けなければならない。

そのためには金を使い、宿屋を取って食事をする必要がある。

(それに、外の食事興味が無いわけじゃないしなあ。串焼き肉は美味そうだった……)

フォーマルハウトの好奇心を刺激したのは、串焼き肉だけでは無い。

広場にはいくつもの店が建ち並び、そこで供されている物の全てがフォーマルハウトの興味を煽る。

新鮮そうな野菜などの食べ物は何論のこと、現地産の装備や安っぽい庶民向けのアクセサリー、果ては何を象つたのか分からないような木彫り細工に至るまで、全てが現実世界には無かった物だ。

ゆえにフォーマルハウトはそれら全てを堪能し、楽しみたいと思っていた。

その子供顔負けの好奇心を満たすには当然ながら金が必要で、そういった用途も考えると銀貨三枚にも満たない量では圧倒的に不足している。

(フェニアにも色々を買ってやりたいしなあ。……というか、そうだ。ハーレムにも金が必要なんじゃないか？ ナザリックの外の娘は俺の個人資産で養わなければならぬんだよな……)

更に加えて、ナザリックの維持費用やこの世界での活動費も稼がなければならぬ。

いくら稼ごうとも終わりが見えないであろう金策地獄に、フォーマルハウトは肩を落とす。

「お待たせしました。それではまずこちらにお名前の方をお願いします」

受付嬢から差し出された書類を凝視する。

そこに記載されているのはオランジェに来てから何度か目にした、フォーマルハウトでは理解出来ない絵の羅列だ。

（……やっぱり読めない。数字は何となく分かるけど、文字はさっぱりだな。契約書みたいなものか？）

書類に書かれている絵の羅列はこの辺りで使われている文字であり、この書類には登録に際しての注意事項などが記載されているのだろう。

しかし、内容が分からなければ名前を書くことは出来ない。元事務員であるフォーマルハウトにとって、内容不明の書類以上に恐ろしい物は無いだろう。

「……すまない。実は旅をしてきて先日この都市に着いたばかりなんだ。だから、この辺りの文字が読み書き出来ない。代筆を頼みたい」
フォーマルハウトが軽く頭を下げて頼むと、受付嬢は一瞬だけ驚いたような表情を見せてから頷いた。

これだけの装備を持っているのなら貴族のように教養がある者だと思っていたのだろう。そんな立場にいると思っていた相手が頭を下げたというのも驚いた要因の一つに違いない。

「畏まりました。代筆で五銅貨頂きますが、よろしいですか？」

「……分かった」

嵩む出費に内心頭を抑えながら、五枚の銅貨を革袋から取り出して受付嬢へと手渡す。

「それでは、まずお名前の方を」

「俺はフェランで、こいつがセレーネだ」

受付嬢から出される質問に答え、その答えを受付嬢が記入するといふ遣り取りを幾度か繰り返す。

そして、最後の項目。

「では、最後にチーム名をお願いします。これは別に無くとも構いませんし、後から決めることも出来ます。しかし、チーム名があった方が依頼主などに覚えられやすくなりますので、早いうちに決めておいた方が良いかもしれませんね」

「チーム名か……」

フォーマルハウトは顎に手を当てながら考えて、ヴェルフニアの方へと視線を投げる。

「お前の好きにするといい」

「好きに、ね。困った、名前に悩むタイプなんだよ」

フォーマルハウトは名付けに悩むタイプだ。

どんなゲームでも新しいキャラクターを作る際には、行う予定のプレイスタイルや自分の感性にしっくり来る名前を考える。語感の良い言葉を組み合わせたり、字面の良い単語を探してみたり、時には何か参考になる名前は無いかと神話や伝承について調べ、ようやく見つけた頃には小一時間が経過していることすらあった。

フォーマルハウトという名前も、そうやって色々な神話を探しているうちに見つけて気に入った物だ。元々クトウルフ神話など名前だけ知っている程度で、特別な思い入れはなかった。

今回は余り長く悩んでいるわけにはいかない。何せ、目の前で受付嬢を待たせているのだ。代筆に金がかかることも考えると後日に回すのも気が引ける。

フォーマルハウトは俯いて、顎に手を当てて考える。

（何がいいか……マジで思いつかないな。色か？ 色でいくか？ 黒……漆黑……いや、髪の色か？ 赤と金、しっくりこない。やっぱ色でいくなら黒だ。クトウルフ神話ネタで何かあったか？）

さらに数秒経過したところで名案を思い付いたのか、ようやく顔を上げて意気揚々と口を開いた。

「チーム名は黒き鏡だ」



「酷い部屋だ……セレーネ、〈清潔〉頼む」

「そうしよう。〈清潔〉」

無事に冒険者登録を終えたフォーマルハウトたちは、受付嬢に紹介された二つ目の宿屋に到着していた。

時刻は既に夜。日は沈み、明かりの無い薄暗い部屋を照らしているのは窓から差し込む月の光のみだ。

フォーマルハウトたちは少し前、受付嬢から冒険者として依頼を受ける際の様々な注意事項や、冒険者としての規約に関する説明を受けていた。これが意外と時間がかかり、終わって解放された頃には夕暮れ前。

その後道に迷いながら紹介された宿へ向かうと、そこにあつたのは高級宿だった。

受付嬢はフォーマルハウトたちの一級品の装備を見て二人を金持ちの旅人だと勘違いしたのか、オランジエでも最も値の張る宿を紹介したのだ。

当然金など無いフォーマルハウトたちはそこに泊まることは出来ず、仕方なく冒険者組合へ引き返し、一番安い宿を教えてもらった。

そうした紆余曲折の末に辿り着いたのがこの宿だ。

この宿屋は冒険者としては駆け出しである銅や鉄カッパ・アイアン級の冒険者たちが多く寝泊まりする木賃宿だ。二階建ての建物であり、一階部分は酒場となっていて食事も出来る。宿泊費も料理も相応に安く、店主は元ベテラン冒険者であるため新人の指導も出来るとあって、普通であれば冒険者組合が登録を終えたばかりの冒険者に対して推薦する宿だ。

ただ、いくら安いとはいえ余りにも酷い。これは無い、とフォーマルハウトは薄暗い部屋の中を見渡して顔を顰める。

まず、汚い。ナザリックにも汚い場所や悍ましい場所というのは存在する。第二階層ブラック・カプセルの黒棺や第六階層の蠱毒の大穴などだ。

しかし、この宿の汚さはまた別の類のものだ。

床には何のものか分からないシミや食べかす。部屋の隅に降り積もった埃は一度拭いた程度では取れないくらいこびりついていて、漂う空気はどことなく濁っているかのような錯覚すら覚える。

現在進行形でヴェルフエニアがく清潔クリーンの魔法を使って掃除を

行っているが、余りにも汚れているために時間がかかっている。

次に客の質が悪い。

冒険者という荒事を生業とした職業である以上ある程度は覚悟していたのだが、冒険者となった初日にいきなり絡まれるのは、流石のフォーマルハウトも予測していなかった。

（ついカツとなって殴ったけど、大丈夫だよな？ フェニアに手を出そうとしたんだし、仕方ないよな。かなり加減したから殺してはいないはずだし……うん、大丈夫）

冒険者はその実力と実績に応じてランク分けが成されており、一番下がフォーマルハウトも属している銅級。そこから鉄、銀、金、白金、ミスリル、オリハルコンと上がっていき、最高位はアダマンタイトの称号を得る。

フォーマルハウトへ絡んだ冒険者の男は鉄級。宿屋へ姿を現したフォーマルハウトが銅級冒険者であることを知るや否や、新人への洗礼のつもりなのか、単に酒に酔っていたのか、いきなり難癖を付け始めた。

銅の癖にその装備は何だとか、お前じゃ宝の持ち腐れだから装備を寄越せだとか。

それだけならばまだ可愛げもあったし、最低ランクである銅級のフォーマルハウトから見ると先輩に当たる。酒にも酔っているようだったので、先輩として立てて穩便————に済ませようとする思っていたのだが、下手に出たフォーマルハウトの態度を見て男は増長した。

周囲で飲んだくれていた冒険者たちが面白がって男を囃し立てていたのもあって、気持ちが大きくなった男が次に放った一言は、フォーマルハウトの機嫌を一気に谷底まで突き落とすに相応しい発言だった。

女を一晩差し出せば許してやる。

その一言を聞いた瞬間には、フォーマルハウトは男を殴り飛ばしていた。

「……チツ」

その時の男がヴェルフエニアへ向けていた下卑た視線を思い出し、再びフォーマルハウトの機嫌が悪くなる。

考えてみればスタートからして幸先が悪かった。

目立たないように装備のランクを落とすたにも関わらず驚くほど相手を増長させる結果を招く。

気を遣った行動の何もかもが裏目。その事実がさらにフォーマルハウトの機嫌を悪化させる。

「終わったぞ。……どうした、フォーマルハウト？」

「……いや、何でもない。というか、今の俺はフェランダ」

「誰にも聞かれなければいいのだろうか？ <サイレンス>。これで聞かれまい。とりあえず座ったらどうだ？」

言われるがままにフォーマルハウトがベッドへ腰を下ろすと、すかさずヴェルフエニアが腕を絡め、しなだれかかるように隣へと腰掛ける。

白魚のような細い指がフォーマルハウトの胸板をくすぐるよう動く。その手に嵌められていた強欲と無欲は外され、ベッドの脇に置かれていた。

「お、おい」

「ふふ、そう機嫌を悪くするな。嬉しかったぞ、お前が怒ってくれて」
「……怒るのは当たり前だ。しかし、いきなり殴り飛ばしたのは不味かったと思うか？」

「問題があるのなら既に衛兵の類が来ているはずだ。問題は無いだろう」

それもそうか、と納得したフォーマルハウトは安堵の溜息を吐く。殴ったこと自体は後悔していないが、それによって問題が生じるのは褒められたことではない。今後のオランジエでの冒険者稼業に支障が出る可能性があるからだ。

「そんなことよりも……なあ、フォーマルハウト」

「ん？ どうし——おわあっ!？」

ヴェルフエニアへと顔を向けようとした途端、急に力を掛けられた

フォーマルハウトは対応しきれずに勢いよくベッドへと押し倒される。

木の板に薄っぺらい綿が詰められた布が敷いてあるだけの硬いベッドに背中を打ち付ける。

「ぐっ……な、何するんだ、フェニ……ア?」

押し倒されたフォーマルハウトがヴェルフニアの姿を見た時、思わず息を呑んだ。

フォーマルハウトの腰の辺りに馬乗りになったヴェルフニアは普段よりも一段と深い笑みを浮かべている。

「ふふ、ははは……やっつと、やっつとこの時が来た」

感動に打ち震えながら歓喜の言葉を告げるヴェルフニアが浮かべていたのは、淫靡な笑みだ。頬は紅潮し、リボンできっちり閉められていたはずの胸元は緩められ、露わになった白い肌は上気して熱を帯びている。

胸板に這わされた小さな両手がゆっくりと鎖骨や首筋をなぞり、その度に訪れる得も言われぬ快感がフォーマルハウトの脳髓を駆け抜けた。

「フォーマルハウト……一つになろう?」

「なあっ!?!」

驚きに身を震わせると、その振動でベッドが軋む。同時にヴェルフニアの口から短い声と共に熱を感じさせる吐息が漏れる。

「んっはあ……あ、暴れないでくれ。ずっつとこの瞬間を待っていたんだ。お前は転移初日以外第八階層へと来てくれなかったから、中々二人きりになれない」

「ま、待て待て! 急すぎて理解が追いつかん! あっ、ちよつと待て、そんな風に触るな! とうかういつ脱がされたんだ俺は!?!」

いつの間にか胸プレスト・プレート当ては外され、ベッドの下へ投げ捨てられていた。

衣服が大きく捲り上げられて露出しているフォーマルハウトの胸板を、ヴェルフニアの指先がくすぐるように撫でる。

「可愛いな、フォーマルハウト。私のために怒ってくれた時はあんな

に格好良かったのに……ああ、お前だけ脱いでいるというのは不公平か」

「っ！」

するり、と滑らかな動作でヴェルフエニアの服がはだける。

柔らかな月明かりに照らされた体は女性らしい豊満さとは無縁の体つきであったが、その美しさはまさしく芸術品の如きものであり、目の前に晒された極上の裸体にフォーマルハウトは言葉を失う。

「フォーマルハウト……」

熱を帯びた吐息を発しながら、ヴェルフエニアはその裸体をフォーマルハウトへと密着させる。

小さいながらも確かに存在する柔らかなものを胸板に感じたフォーマルハウトは即座に沈静化が引き起こされたが、幾度精神が冷静になろうともその興奮が消え去ることはない。

「なあ、私たちもそろそろ次の段階へ進んでも良いと思うんだ。私はお前にこの身を捧げたい……お前に愛して欲しいんだ」

「――」

ごくり。

囁かれた甘ったるい言葉に思わず飲み込んだ唾の音がやけに大きく聞こえた。

男として、これだけ求められて応えない訳にはいかない。

そう思う一方で、最後に残った砂粒一つにも満たない大きさの理性がフォーマルハウトの邪魔をする。

「で、も……こんなところで、か？」

「確かに、少しばかり情緒に欠けるが私は構わない。お前が嫌だと言うのなら我慢はしてみるが……きつと駄目だ。今隣にお前が寝ていたら我慢出来ない」

「っ……壁、薄いぞ？」

「＜魔法持続時間延長化・静寂＞、これでいいだろうか？」

「……俺、初めてだぞ？」

「私だって、そうだ。ふふ、初めて同士だな」

「……こ、心の準備が――」

「フォーマルハウト」

言葉を遮ったヴェルフエニアは、その両手をフォーマルハウトの頬へ優しく添える。

既に施された幻術は解け、本来の色を露わにしている神秘的なオツドアイがフォーマルハウトを覗き込んでいた。熱に浮かされたような潤んだ瞳は独特の淫靡さを醸し出している。

二人は暫くそのまま見つめ合い、その雰囲気フォーマルハウトが呑まれそうになった頃によくヴェルフエニアが口を開いた。

「駄目……か？」

その一言で、フォーマルハウトの理性は決壊した。

第十四話 初仕事

「……ふーむ」

時刻は昼の少し前。

日も既に高く昇り、出勤時間というには遅すぎる時間帯に組合へとやってきたフォーマルハウトは、一階部分に設置されている掲示板を眺めながら考え込むように唸った。

貼られている依頼書は数が少なく、銅^{カッパー}級のフォーマルハウトが受けられる依頼の量はもつと少ない。

別に閑古鳥が鳴いているわけではなく、これは当然のことだ。

条件の良い依頼というのは他の冒険者と取り合いになる。そのため、大半の冒険者は朝一で組合を訪れて依頼を探す。

昨夜の『運動』でただでさえ起きるのが遅かった上に、ヴェルフェニアに誘われるがままに起き抜けにもう一回戦などと張り切って時間を使ってしまえば、出遅れてしまうのは当然だ。

(……しかも、読めない)

おまけに文字が読めない問題も解決出来ておらず、依頼内容の把握どころか報酬額すら把握出来ない。

代読を頼むのにも金がかかる。十分一銅貨とリーズナブルではあるが、余計な出費を控えたいフォーマルハウトにとっては余り利用したくはないものだ。

つい、と横へ視線を向ける。

視線の先にいたヴェルフェニアは心底幸せそうな笑顔を浮かべながら、フォーマルハウトの腕を抱き締めて頬を擦り付けている。

腕から伝わるその柔らかな感触に昨夜と今朝の出来事を思い出し、自然と頬が緩む。

その光景を見た勘の良い冒険者や組合員たちから突き刺さるような視線を向けられるが、今の二人には何の意味もなさなかった。

「……いほんっー」

「！」

見兼ねた誰かが出したたわぎとらしい咳払いで我に返ったフォーマ

ルハウトは、頭を振ってピンク色になりかけていた頭の中身を急いで追い出す。

実際こんなところで腕にひつついたヴェルフエニアの感触を楽しんでいる場合ではないのだ。

宿の二人部屋は一泊七銅貨。相部屋は一日五銅貨であるが、ヴェルフエニアを連れて以上相部屋は選択肢には上がらない。そのため必然的に二人部屋になるのだが、二人分で一日十四銅貨も支払うことになる。

昨夜の宿泊で残金は銀貨一枚と銅貨が少しになっており、今日も泊まれば銀貨が無くなる。つまり、今日か明日で依頼を受けて報酬を手にしなければ残金^{カッパ}が底を^{カッパ}ついてしまうのだ。

ユグドラシルの金貨が使えたならば遊んで暮らすことも出来たのだが、そうはいかない以上、いつまでもここに立っている余裕はない。「……相談するか」

代読以外にも、受付嬢へ頼めば受ける依頼について相談することが出来る。

これもまた代読と同様に文字が読めない者に対するサービスの一環であり、駆け出しで自分の実力が良く分かっていない者の相談に乗って、銅^{カッパ}級の実力に見合った入門編とも言える依頼を斡旋してくれる。

文字が読めなくても依頼内容を細かに説明してくれるし、本人の希望を基にランクに見合った依頼を探してくれるため、駆け出しで勝手がわからない冒険者たちがよく利用するサービスだ。

無論、これも金がかかる。代読と同じく十分一銅貨だ。

背に腹は代えられないとばかりに溜息を吐いて、フォーマルハウトは受付嬢が座るカウンターへと動かないヴェルフエニアを引き摺りながら移動する。

ヴェルフエニアは宿を出た時からこんな感じだ。

昨夜のことか今朝のことか、或いはその両方を思い出しているのか、頭の中は完全な桃色お花畑状態でまともに歩こうとすらせず、フォーマルハウトに引き摺られるがままになっている。

傍から見れば邪魔で鬱陶しいことこの上ない状態だ。

ずるずると何か引き摺られるような音が近づいてくるのを耳にして顔を上げた受付嬢は、奇しくも昨日フォーマルハウトの冒険者登録を担当した受付嬢であった。

「あら、昨日の……如何なさいましたか？」

「昨日……？ ああ、登録してくれたお姉さんか。ちよつと相談に乗ってもらいたいんだが、構わないか？」

「畏まりました。それでは、十分につき一銅貨頂きますが、よろしいですか？」

領きながら、フォーマルハウトは懐から取り出した銅貨一枚を受付嬢へと差し出した。

差し出された銅貨を受け取った受付嬢は銅貨が偽物ではないか軽く確認してから引き出しの中に仕舞い込み、別の引き出しから紙束を取り出した。

この紙束は依頼書を束にしたものだ。

それぞれの依頼書には依頼者の個人情報や提示された報酬額、依頼内容などの詳細が記載されており、組合がその依頼を請け負うに当たって行った裏取りで得た情報なども書き込まれている。

この書類の要点だけを簡潔に纏めたものが掲示板に貼り出され、冒険者はそれをカウンターへと持っていくことで依頼を受けられる。その際にこの書類を基に冒険者へと詳細な説明がなされるという訳だ。

「ではこちらの砂時計の砂が落ちるまでの間が十分となります。砂が落ち切ってから相談を続けたい場合は、その都度銅貨を支払っていただく形になります。が、よろしいですか？」

「分かった。セレーネ、お前も話聞いてくれよ」

「……うん？ ああ、分かった。何のことか分からないが、任せろ」
声を掛けられながら大きく体を揺すられて、ようやくヴェルフエニアがお花畑から帰還する。

俺、こんな風に創ったっけ？ そんな疑問がフォーマルハウトの頭の中で湧き上がった。

「よろしいですか？ では開始します」

「銅カッパで受けられる依頼でおすすめは何かあるか？」

砂時計が時を刻み始めた瞬間に、フォーマルハウトはすかさず質問を投げた。

「銅カッパ向けの依頼ですと、荷物持ポちか薬草採取などの採取依頼が主となりますね。討伐依頼は現在ですと……御座いませんね」

荷物持ポちは、馬の代わりに冒険者についていつて荷物を持つ仕事だ。雇う側は馬を借りるよりも安い金で荷物持ポちを雇えて、雇われる側は自分よりも格上の冒険者の技術を見て、比較的安全に学ぶことができる。気に入られればそのままチームへ加入することもあるだろう。

経験を積むという意味でも、顔を売るという意味でも、駆け出しの冒険者にとつては丁度良い仕事と言える。

しかし、そんな詰まらない仕事をフォーマルハウトが選ぶわけもない。

「荷物持ポちは遠慮したいな」

「でしたら採取依頼となりますが、こちらなど如何ですか？ オランジェの北、山脈の麓に広がる森、フィベルナ大森林で薬草採取の依頼です。報酬は——」

（あの森、フィベルナ大森林つて言うのか……名前なんてあつたんだな。なんだっけか、トブの大森林？ しか覚えてないけど、モモンガさん言つてたか？）

受付嬢の説明を聞きながらそんなことを考えていたフォーマルハウトだが、モモンガは間違いなく会議の場で森林の名前も出していた。

重要度が低いため、他の雑多な情報と一纏めで説明されたためにフォーマルハウトが聞き流しただけで、モモンガに落ち度は一切無い。

「こちらの依頼に致しますか？」

「ふむ……」

受付嬢から説明された内容を自分なりに噛み砕いたフォーマルハ

ウトは、依頼を受けてもいいのではないかという結論に達した。

「セレーネ、どうする？ 受けようと思ってるが」

「構わないが……薬草の見分けなどつくのか？」

「特徴的な色と形をしていますので薬草の知識が無い方でも大丈夫ですよ」

「そうか。ならば私は問題無い」

「よし、ならばその依頼を受けさせてくれ」

畏まりましたと頭を下げた受付嬢は他の依頼書を引き出しに仕舞い、砂時計を回収する。

未だ砂は少しだけ残っていたが、既に依頼が決められた以上、ここから先は相談ではなく依頼の受注手続き——つまりは仕事だ。そこに料金は発生しない。

「それでは詳しくご説明させて頂きます。今回の依頼内容はフィベルナ大森林での薬草採取依頼となります。採取対象はフィベルナ大森林全域に自生している薬草、スオナ草です。肉厚な葉に棘が生えた赤紫色の薬草です。他の雑草と比べて背が高いため簡単に見つかると思います」

「ちなみに何の材料になるんだ？ 水薬か？」

「そのまま磨り潰しても効果がありますが、基本的には治癒の水薬の材料の一つとして使われますね」

スオナ草という薬草をフォーマルハウトは聞いたことがなかった。流石に全ての薬草を把握しているわけではないが、ユグドラシルには無い薬草である可能性が高い。

現在巻物の材料となる羊皮紙はデミウルゴスが探しているが、水薬ポーションに関しては後回しになっている。採取出来たスオナ草の数が多いのならばサンプルをナザリックへ持ち帰り、水薬ポーションの代替品とならないかを試してみてもいいかもしれないとフォーマルハウトは考える。

「旅をしていたのでしたら、モンスターとの戦闘経験はおありですね？」

そんな装備をしていて、しかも旅をして来たのだから当然あるよね

？　そう言外に伝えてきている受付嬢に、フォーマルハウトはどう答えれば良いのか分からなかった。

ユグドラシルでモンスターと戦っていた経験は腐るほどある。いくらPKばかりしていたとはいえ、経験が全く無い訳ではない。レベル上げやドロップ集めなど、モンスターと戦わなければならない要素はいくらでもあった。

しかし、それは全てゲーム内での話であって、現実での話ではない。そういう意味で、戦闘経験はたったの二回。相手はコキュートスとピーストマンだ。しかもそのうち一回は模擬戦とあつては、戦闘経験があると言つていいのか定かではない。

フォーマルハウトは悩んだ末に、あるということでもいいかと適当に思考を投げ捨てた。

「ああ、そりや勿論」

「ですよ。小鬼ゴブリンや人食い大鬼オーガが時折出る程度なので、それだけの装備をお持ちで戦闘経験もあるのでしたら問題は無いかと思われませう。ただ、森の奥には危険なモンスターも多いので入り込まないようにしてくださいね？　スオナ草は奥まで向かわなくても十分な量が採取出来ますので」

「……そうしよう。ちなみに森の奥だとどんなのが出るんだ？」

「ジャイアント・ビートル ハンギング・スパイダー 巨大昆虫や絞首刑蜘蛛などです。難度は二十後半くらいですね」

(……難度?)

聞いたことのない単語にフォーマルハウトは首を傾げる。

フォーマルハウトがいまいち要領を得ていないことを察知したのか、受付嬢が続けて口を開いた。

「難度というのはモンスターの強さを数値化したものです。大まかな強さのようなもので、参考程度にしておいて下さい。難度が低いからと油断して大怪我を負うということもよくありますよ」

「ピーストマンは難度幾つなんだ？」

「ピーストマンですか？　成人している者ならば三十前後ですね」

なるほど、と心の中で一人納得する。

詰まるところ、難度とはレベルを凡そ三倍した数値ということだ。

十レベル前後であるビーストマンが難度三十前後という受付嬢の話がそれを物語っている。

つまり、先ほど上げられた巨^{ジャイアント・ビートル}大昆虫などのモンスターはレベルに換算すると八レベルか九レベルということになる。

モンスターの種類によってレベルが固定であつたユグドラシルと違って、この世界には同じビーストマンでも個体によるレベル差があるため単純に当て嵌めることは出来ないが、強力とされるモンスターが何レベル程度なのかを知り得る有益な情報だ。

「なるほど。ならこの辺りに出るモンスターで難度の高いモンスターは何が？」

「この辺りですと、森の奥まで行かなければ出会うことはありませんが断トツでギガント・バジリスクですね。難度は八十三で、過去に森から出てきた時は恐ろしいほどの被害が出たとか」

「八十三か……」

レベルに換算すると二十七から二十八レベル相当の強さを持っていると考えられる。ユグドラシルのギガント・バジリスクと同じ程度だ。

確かに今まで聞いた中では最大クラスの力を持っているが、所詮はその程度。警戒するには余りにも弱すぎるモンスターの情報に、フォーマルハウトは込み上げた笑いを堪えようとして体を揺らす。

腕を絡めていたからか、その振動が伝わったヴェルフニアから怪訝な目を向けられるがどうしようもない。

たかだか三十レベル弱のモンスター。フォーマルハウトならば指先一つで消し飛ばせる程度に過ぎない存在が、この周辺では断トツの強さを誇っているという。

「……ふう。もしそのギガント・バジリスクが出たとして、最高位の冒険者——アダマンタイト級の冒険者なら対処は可能か？」

「それは……どうでしょうか。チームとしてならば対処は可能だと思われませんが、相手は都市一つを滅ぼすとも言われる強大な魔獣ですから、かなり苦戦することになると思います」

受付嬢の大袈裟な表現に再び笑い出しそうになりながら、その衝動

を必死に抑え込む。

三十レベルにも届かない雑魚が都市を滅ぼすのなら、五十レベル後のプレアデスは国を滅ぼせるだろう。百レベルならば世界だって滅ぼせる。

フォーマルハウトは自分が抱いていたこの世界に対する警戒心が、急激に薄れてゆくを感じた。

「ならアダマントイト級冒険者の強さも難度で換算すると九十弱ってことか？」

「そうなるかと。申し訳ありません。私はギガント・バジリスクを直接見たことはありませんし、アダマントイト級冒険者の方々とお会いしたことも御座いませんで、詳しいことまでは……」

「……そうか、分かった。ありがとう。で、これからどうすればいい？ すぐに出発してもいいの？」

「はい。北門を出て道なりに……徒歩でしたら三日ほど進めばファイベルナ大森林近くの農村に辿り着きますので、採取はその村を拠点にするのと良いと思います。街道沿いでも小鬼ゴブリンなどが出ることもあるので、油断はしないで下さいね」

最後まで丁寧に対応してくれた受付嬢に軽く頭を下げ、礼を述べたから、フォーマルハウトたちは冒険者組合を後にした。



オランジェの北門を出たフォーマルハウトたちは寄り添いながら、農村へ続くという街道を歩いていた。

街道と言っても道は舗装されておらず、幾度も人や馬、馬車が通つて踏み固められただけの土で出来た酷いものだ。馬車で通つたならば車輪が道のでこぼこや小石に引つ掛かり、酷く乗り心地の悪いものとなるに違いない。

徒歩で三日も掛かる道程を<飛行>を使わず馬鹿正直に歩いているのは、せつかなので景色を楽しみながら歩きたいとフォーマルハウトが言い出したためだ。

実際、歩きながら見る景色は中々のもので、青空の下に地平線まで続く広々とした草原は見る者に開放感を齎してくれる。草原の果て

は丘のように緩やかな傾斜が描かれ、その更に奥には頂を雲に覆われた大山脈が悠々と聳え立つ。麓に生い茂る広大なフィベルナ大森林との対比は見事なものだ。

とはいえ、やはり景色は景色。

如何に現実世界リアルで見たこともない物珍しい景色であつても、代わり映えのしない景色を一時間も眺めながら歩いて情緒を楽しみ続けられるほど、フォーマルハウトは人間が出来ていない。

これがギルド一自然を愛していた男、ブルー・プラネットであつたならば景色を眺めるだけでなく、もつと色々な楽しみ方を知つていたのだろうか、生憎その手の知識は持つていなかった。

今日を含めずともあと二日。

薬草採取時の拠点となる名も知らぬ村に辿り着くまではこの光景が続くであろうことに、フォーマルハウトは若干ながら顔を顰める。
(＜飛行＞で行けば良かったなあ。景色楽しみたいとか似合わんこと言つてないで……というか、よく考えたら高い位置……空から見た方が綺麗に見えるんじゃないか?)

後悔するが、既に徒歩で行くとヴェルフエニアに言つてしまった。ここで『やっぱり飛んで行く』と言うことも出来るが、これほど早々に発言を撤回するのは余りにも格好悪いと、フォーマルハウトのちっぽけなプライドがそれを許さなかつた。

隣を歩くヴェルフエニアは退屈してないのかが気になつて視線を向けると、微笑みを浮かべながら歩いてきたヴェルフエニアと目が合った。

「どうした、フォーマルハウト？ ああ、今は本当の名で呼んでも良いだろう？」

「構わないが……いや、楽しそうだなと思つてな」

「当たり前だろう？ ようやくお前と結ばれたんだ。愛する男と結ばれて喜ばない女などいるものか」

そう言つて微笑みから満面の笑顔へと表情を変えたヴェルフエニアを見て、フォーマルハウトは気恥ずかしさに頬を染める。

「お前はこう、何とかストレートだなあ」

「おかしなことを言う。お前がそうあれと創ったのだろうか」

さも当然のように答えたヴェルフエニアに対して、一つの疑問が浮かぶ。

それは今までフォーマルハウトが気にもしていなかったことだ。

「それはそうかもしれないが……嫌じやないのか？　そう創られたからといって、無理してそうしたりしてないか？」

「無理……？」

フォーマルハウトからの質問に、ヴェルフエニアはきよとした表情を浮かべた。

そして数秒程考え込んでから、再び口を開く。

「いや、別に無理などしていいいな。というよりも、質問の意味が分からない」

「分からない？」

「私たちは被造物だ。創造主がそうあれと望んで創り出したのならば、その通りにあるのは当然だろう？」

「……お前たち的にはそういうものなのか？」

やはり当然のように答えられて、フォーマルハウトは自らがヴェルフエニアの立場——NPCであったならと想像する。

自らの全て——外見も思考も趣味嗜好も全てが他人に定められ、その通りにあることこそが当然であると考えているなど嫌悪感しかない。

「俺だったら真っ平御免だな……」

「それはお前が被造物ではないからそう思うのだろう。では次は私から質問だ。アダマнтаイトをを目指すのか？　先ほど組合では興味がある素振りを見せていたが」

「アダマнтаイトか……金を稼ぐためにも情報のためにも、目指した方がいいかもな。モモンガさんも目指すだろうし」

当然だが、冒険者の報酬というものは依頼がより高難易度であるほうが良くなる。ゆえに報酬が目当てならば高難易度の依頼だけを受ければ良い。

しかし、高難易度の依頼というのは相応のランクでなければ受注す

ることは出来ない。

依頼は冒険者組合が依頼者から受け、それを組合に所属している冒険者たちへと斡旋するという形を取っている。そのため、依頼の失敗とは依頼を受けた冒険者のみならず、依頼をその冒険者に受けさせた組合の信用までもを失墜させることになりかねない。

そして、依頼内容にもよるが、失敗によって大きな被害が出る場合もある。例えば人間の生活圏内に出没したギガント・バジリスクなどの危険なモンスターの討伐依頼などであるが、こうした依頼に失敗すると、怒り狂った手負いのモンスターによって近くの村や街に大きな被害が出てしまうこともある。

組合の信用の失墜。そして、人類への実害の発生を防ぐために、高難易度の依頼や緊急性の高い依頼などは、依頼内容から見てやや高め
のランクの冒険者しか受注出来ないことも多い。

つまりは、報酬の良い高難易度の依頼を受けるには相応の高ランク冒険者とならなければならないのだ。

また、フォーマルハウトたちの主目的である情報の収集に関しても冒険者としてのランクが高い方が都合が良い。

そもそも冒険者として最高位に位置するアダマンタイト級冒険者は、数が少ない。全ての人間国家に存在するアダマンタイト級冒険者チームを合わせても、両手の指で足りる程度の数しか存在しない。

そして、そのアダマンタイト級冒険者とは所属する国家のモンスターに対する最大戦力だ。まさしく人類をモンスターの脅威から守る守り手にして英雄と呼んで差し支えなく、それゆえ様々な面で優遇される。

その優遇具合は凄まじく、単に入手出来る情報という面だけで見ても、銅や鉄で手に入る情報とアダマンタイトで手に入る情報とでは天と地ほどの差がある。実際に、組合でもミスリルやオリハルコンなど高ランクの冒険者でなければ情報すら開示されない依頼もあった。

金策的な面でも情報収集的な面でも、アダマンタイト級になった方が色々と都合が良いのは明らかだ。

「ならばなっつてしまおうか。幸い簡単になれそうだからな」

「いちいち昇格試験受けないとダメなんだろう？ 実力的には簡単だろうが、手順的には面倒臭そうだ」

冒険者登録の際にされた説明では、ランクを上げるには規定回数 of 依頼を達成した後 to 受けられる昇格試験に合格する必要があることだ。さらにミスリル以上のランクとなるには何らかの偉業を達成しなければならぬ。

アダマントタイトとなるには、アイアン、シルバー、ゴールド、プラチナ 鉄、銀、金、白金、ミスリル、オリハルコンと昇格し、さらにもう一度昇格試験を受けなければならぬ。その試験の数は七回だ。

加えて、これはフォーマルハウトたちも知らないことだが、アダマントタイトは人類の英雄であり他の冒険者たちの模範とならなければならぬため、人格者であることも求められる。

戦闘能力だけ高くとも駄目なのだ。強くあり、昇格試験に七度合格し、偉業を成し、人格者である。これら全ての条件を満たす英雄でなければアダマントタイトとは認められない。

「受付嬢が言っていたギガント・バジリスク辺りの死体を持ち帰ってはどうか？」

「良い手かもしれないが、飛び級は前例が無いらしいからな。アイアン 鉄級へは上がれるだろうが……いや、それすら怪しいか？」

フォーマルハウトは同じ会社に勤めていたお堅くて融通の利かなくなつた同僚を思い出す。

所属する組織によって定められたルールを守ること自体は何の問題も無いどころか、間違いなく正しい行いなのだが、傍から見ているいちいち面倒臭いことをする奴だとは思っていた。

もしもあの同僚が受付であつたのなら、アイアン 鉄級への昇格すら許されないに違いない。

流石に規則で雁字搦めにされたような現実世界リアルの同僚よりは融通が利くと信じたかつたが、そうだという保証も無いためにフォーマルハウトは憂鬱な気分となる。

「そもそもいきなりギガント・バジリスクの死体なんて持ち帰つたら馬鹿みたいに目立つだろう」

「常識の範囲内で目立つのならば構わないのではないか？」

「常識の範囲内？」

聞き返したフォーマルハウトに対して、ヴェルフエニアは頷く。

「うむ。一応はギガント・バジリスクを倒せる存在はこの辺りにもいるのだろうか？ ならば少なくとも、ギガント・バジリスクを倒したくらいで常識外の存在だと疑われるわけではないはずだ。それを可能とする前例が既にあるのだから、目立ちはしても問題は無いだろう」

「ふむ……確かに」

フォーマルハウトたちが警戒しているのは、自分たちを同じユグドラシルプレイヤーとこの世界における自分たちを脅かす未知の脅威だ。そういつた存在に自分たちの存在を気取られ、後手に回ることを避けるために隠密行動を是としている。

だが、この世界における常識の範囲内——例えば既に前例がある行動を取る程度ならば、目立ちはすれどもこの世界における才能ある者として判断される可能性の方が高いだろう。

（よく考えたらギガント・バジリスクを討伐したってだけじゃ見向きもされないよな……）

果たしてフォーマルハウトたちが警戒しているような存在が、ギガント・バジリスクを討伐した者が現れたからといって何らかの行動を起こすだろうか。

（……起こさんよなあ）

仮に自分がその立場にあったならば、気にも留めないだろう。

そう考えたフォーマルハウトは活動方針を変えることにした。

「よし、方針変更。ユグドラシルプレイヤーってことがバレなければいいってことにしよう。それでアダマンタイト級を目指す。これはまあ、どうせ先は長いんだしゆっくりやっていこうか」

「ではギガント・バジリスクを狩るか？」

「そうだな。アウラに頼んでみよう。魔獣使^{ビーストテイマー}いだし、適当にタイムした奴を連れて来てもらえばいいだろ」

「分かった。薬草の採取も忘れないようにしなければな」

「……そ、うだな」

「お前、今忘れていただろう?」

ヴェルフエニアから向けられた責めるような視線から逃れるために、明後日の方向へと目を向けた。

「そんなことは……む」

不意にフォーマルハウトは違和感を覚え、緩んでいた気を引き締める。

それはどこから見られているような感覚。それも複数の視線だ。ヴェルフエニアも同じものを感じたのか、絡めていた腕を放していつでも戦闘に移れるような体勢を取っている。

「何だ? 俺たちで気付くくらいだから大した奴らじゃないんだろうが」

「私の探知防御の魔法にも引つ掛かっていない。物理的監視のみだな。警戒するほどのことは無いか」

背中合わせに立ったフォーマルハウトたちが警戒を続けていると、がさりという草が擦れる音と共にやや離れた位置の草むらが揺れた。そのすぐ後に草の中から小さな黒い影が飛び出し、フォーマルハウトたちを囲むように動こうと迫り来る。

姿を現したのは、潰れた顔に平たい鼻をつけ、大きく裂けた口には小さな牙が上向きに伸びている生物だ。肌は明るい茶色をしており、髪は油で固まったようにぼさぼさとしている。人間と猿を掛け合わせて邪悪さを混ぜたような醜悪な外見だ。

「小鬼ゴブリンかよ……警戒して損した」

そう落胆しつつも、フォーマルハウトは警戒心を完全には捨て切らない。

目の前に現れた小鬼ゴブリンたちはどれもこれもそれぞれ異なった特徴を持っている。

体の大きさや顔の形、服代わりに身に着けている襤褸切れや毛皮の形状など、どれもこれも似てはいるが同じものはい一つとしてない。

ユグドラシルでは同種のモンスターは、吸血鬼ヴァンパイア・ブライドの花嫁のような例外を除けば基本的には同じ姿をしている。そのため、フォーマルハウトには個体ごとに違う特徴を持つ小鬼《ゴブリン》たちが、未知のモン

スターのようにすら見えた。

「数は九か。どうする、フォーマルハウト」

「殺して討伐証明部位持ち帰ったら報奨金が出るんだろ？　行きがけ

の駄賃だ、皆殺しにしよう」

「小鬼^{ゴブリン}九体程度では大した額にならなそうだが……私がやるか？」

さっさと自分で殲滅してしまおうかと考えていたフォーマルハウトだったが、ヴェルフニアの進言を受けて改めて考えなおす。

考えてみれば、ヴェルフニアは転移後の世界での実戦経験が皆無だ。

それはヴェルフニアだけに限らず、ナザリックに住まう全てのシモベたちがそうだ。一応はビーストマンと戦ったフォーマルハウトとモモンガも、あれは一方的な蹂躪であったため実戦経験と言っているものは怪しい。戦いらしい戦いといえば、コキュートスとの模擬戦程度のものだ。

詰まるところ、ナザリック全体として戦闘経験が圧倒的に足りていない。

戦闘に絡むことが無い一般メイドならばそれでも構わないが、戦闘を行う可能性のあるシモベたちや、とりわけヴェルフニアのようにナザリック外での活動が長くなるであろう任務を帯びた者たちがそれでは困る。

（経験を積ませた方がいいか？）

ユグドラシルでの小鬼^{ゴブリン}は一レベルから五十レベル辺りまで幅広いレベルが存在するモンスターであったが、総じて低級モンスターの代名詞でもあった。

そして目の前の小鬼^{ゴブリン}たちからは、どれだけフォーマルハウトが警戒レベルを引き上げて判断したとしても、予測レベルが一桁を脱しない程度の力しか感じない。

そんな吹けば飛ぶような強さの小鬼^{ゴブリン}を相手に経験が積めるのかは甚だ疑問ではあったが、やらないよりはマシだろうとヴェルフニアにやらせることにした。

「よし、フェニアに任せよう」

「分かった」

指示を受けたヴェルフエニアが不敵に笑う。

「魔法の使用制限は覚えてるな？　あとアイスの棒は使うなよ」

「分かっている。緊急時でもない限り、魔法は第五位階までだろうか？」

これもまた目立つことを避けるための措置だ。

魔法とは魔法詠唱者としてのレベルが上がれば上がるほど使用出来る位階が上昇する。

例えば、第十位階魔法を使用するには魔法詠唱者としてのレベルが七十レベルにならないといけないのだが、人間社会への潜入を決めた段階ではこの世界の平均レベルは非常に低いことが予測されていた。

そんな中で高位階の魔法を使えば間違いなく目立ち、ユグドラシルプレイヤーがいるぞと宣伝するようなものなので、潜入する際に使用する魔法の位階に制限を掛けた。

それがヴェルフエニアが口にした、緊急時以外には第五位階までの魔法しか使ってはならないという制限だ。

第五位階魔法を使えるようになるレベルは二十九から。

ギガント・バジリスクを倒せるアダマンタイト級冒険者が三十レベル前後であることを考えると、何も外の情報が無い状態で決めた制限にしては、現地基準と奇跡的な一致をしていると言えるだろう。

「さて、ようやく包囲が終わったか？　随分と鈍い足だ」

周囲へ展開した九体の小鬼たちは、包囲が完了したことと二対九という数の差で自分たちの絶対的優位を確信したのか、フォーマルハウトたちを威圧するように棍棒や錆びた剣を構えながら下卑た笑みを浮かべている。

黄色い歯を剥き出しにして大きく裂けた口を歪めた笑顔は、思わず目を背けたくなるような汚らわしきだ。

「ウマソウダー！」

「ニンゲン、ウマソウー！」

潰れた喉から音を発しているような濁声で喜びを露わに囁し立てながら、小鬼たちがゆつくりと包囲の輪を縮めてゆく。

隙だらけではあったが、見るからに頭が悪そうな小鬼^{ゴブリン}たちにしては良く出来た戦法だとフォーマルハウトが感心していると、一匹の小鬼^{ゴブリン}が飛び掛かるように前へと踊り出した。

それを合図にしたかのように、周囲を囲んでいた小鬼^{ゴブリン}たちもそれぞれの武器を振り上げながら一斉にフォーマルハウトたちへと襲い掛かる。

迫り来る小鬼^{ゴブリン}たちを視界に収めた瞬間、ヴェルフエニアの顔から笑みが消える。

「魔力の奔流」

虫を見るような冷たい視線を小鬼^{ゴブリン}たちへと向けたまま左手に持った杖を正面へと向け、小さな声で呟くように魔法を詠唱する。

同時に杖の先から強大な魔力の奔流が青い燐光を伴って迸り、ヴェルフエニアを中心として吹き荒れ、今まさに襲い掛かるとしていた小鬼^{ゴブリン}たちへと叩き付けられた。

放たれた高密度の魔力は群がっていた小鬼^{ゴブリン}たちを一瞬で呑み込み、その衝撃で以て小さな体をバラバラに引き裂く。奔流が収まった頃に周囲に残っていたのは、力任せに引き千切られたかのような、辛うじて原形が小鬼^{ゴブリン}であると分かる肉片のみだった。

ヴェルフエニアが放った「魔力の奔流」は、自分を中心とした周囲に魔力の奔流を放ち、相手へと叩き付けてダメージを与える第五階魔法だ。

第二位階にある衝撃波を放って相手を攻撃する「衝撃波」の強化版とでも言うべき魔法であり、ユグドラシルにおいては習得出来るレベル帯では比較的使い勝手の良い範囲魔法として重宝されていた。使いやすい反面、若干燃費は悪いが。

ヴェルフエニアはこういった、純粋な攻撃魔法の扱いに長けるマジック・キャスター魔法詠唱者として生み出されている。

「ふむ、やり過ぎたか?」

「証明部位が無事なら何だっというんだが……第五階魔法である必要は無かったな」

「久方ぶりの戦いだから、少し張り切り過ぎたな」

「戦いと言うより一方的な蹂躪だけだな。強欲と無欲の方はどうだ？
ちやんと経験値は吸えてるか？」

「少し待て……ああ、問題は無いようだ」

ヴェルフエニアが左腕に装着している悪魔の如き箒手を見ると、亀裂のような装甲の隙間から漏れ出す真紅の光が一際強く発せられている。その光はまるで歓喜に打ち震えているかのように脈動していた。

ヴェルフエニアにメビウスの輪の代わりに与えられた世界級アイテム、強欲と無欲は、悪魔の如き左腕と天使の如き右手を模した箒手だ。

その効果は装備者が得た経験値を悪魔たる強欲が吸収してストックし、ストックされた経験値を天使たる無欲が放出するというもの。

このストックされた経験値は装備者の任意で自由に使用出来るため、低レベルキャラクターの育成や経験値をコストとして消費する魔法やスキルの発動に必要なコストとして使うことが出来る。

ユグドラシルではないこの世界でその効果が正しく適用されるのかは分からなかったが、強欲は現地のモンスターからでも問題無く経験値を吸収したため、効果のチェックと共にこの世界の生物からでも経験値が発生することが判明した形になった。

「この世界のモンスターからも経験値が貰えるんだな。溜め込んでおけばウイッシュ・アボン・ア・スター星に願いを>も使い放題か？ いや待て、何ならあのスキルも……」

「期待しているところ悪いが、大した量は吸収出来ていないようだぞ。まあ低レベルのようだったから余り期待はしていなかったが、経験値消費型の魔法やスキルを使い放題にするには数万単位で殺さなければならぬのではないか？」

「む……そうか」

フォーマルハウトは肩を落として落胆する。

経験値消費型の魔法やスキルは、そのコストが重いこともあって強力なものが多い。

例えば第十位階を超えた先にある超位魔法と呼ばれる魔法に、<

ウィッシュ・アボン・ア・スター
星に願いを>がある。

これはユグドラシルでは、消費した経験値の割合に応じて出現する選択肢の中から好きなものを選び、それを叶えることが出来る魔法だ。その発動コストゆえにこの世界での挙動は未だ試せていないが、もし問題無く使えて、さらにコストを気にせず無限に使えるのであればこれ以上に有用な魔法もそうそう存在しないだろう。

そんな淡い期待も無駄になったが。

「とりあえず証明部位を回収して、もう少し歩いたら野営しよう。もうそろそろ日も暮れるだろう」

フォーマルハウトが空を見上げると、太陽は既にやや傾きかけていた。

未だ夕暮れには遠い位置にあるが、もう一時間もすれば空は夕焼け色に染まり始めるだろう。

「死体はどうする？ そのままでいいの？」

「ふむ……街道のど真ん中に放置つてのものな。草むらに適当に投げ捨てておけばいいんじゃないか？」

「分かった。そうしよう」

死体に触れたくないのか、魔法で肉片を草むらに吹き飛ばしてゆくヴェルフニアを余所に、フォーマルハウトは懐から解体用の短剣を取り出した。

モンスター討伐の報奨金を貰うには証明部位を剥ぎ取る必要があると知ったフォーマルハウトが急遽用意した、何の変哲もない短剣だ。使い道が無く倉庫に放り込まれていた物で、刀身はミスリルで出来ている。

「さて、やるか。ゴブリンは耳だったか？」

赤黒い肉片が散らばるややグロイ光景にも怯まず、フォーマルハウトは目的の部位が残っていそうなゴブリンの死体へと手を伸ばした。

◆ ◆ ◆

突発的な小鬼ゴブリンとの戦闘を終えたフォーマルハウトたちはそれから一時間ほど歩き、太陽が傾き始めたところで野営の準備を始めた。

準備と言っても、フォーマルハウトたちが行ったのはあるマジック

アイテムを使っただけだ。

グリーンシークレットハウス。

小さなカプセル状の形をしたアイテムだが、使用すると小さなコピーを一つ出現させることが出来る拠点作成用のマジックアイテムだ。種類は幾つかあり、フォーマルハウトが使用したのはログハウスの型のものだ。

見た目は小さいがマジックアイテムであるがゆえに中は想像も出来ないほどに広い。設備も充実しており、リビングやダイニングキッチンにシャワールームまで付いており、二階はダブルサイズのベッドが二つという脅威の広さを誇る寝室だ。

「じゃあモモンガさん、今日はこの辺で」

《ええ、また何か分かったら連絡を下さい》

そんな広々とした寝室で、フォーマルハウトは一人ベッドに寝転がって寛ぎながら、モモンガへと発動していたくメッセージの魔法を終了する。

忘れないうちに今日手に入れたアダマンタイト級冒険者の實力に関する予想やその他の情報、活動方針の変更などをモモンガへと報告していたのだ。

グリーンシークレットハウスを使用したフォーマルハウトは少し早めの夕食を済ませ、先ほどシャワーを浴びて数時間歩くうちに付いた汚れを落としたところだ。そのため、フォーマルハウトの格好はゆったりとしたガウンのような寝間着一枚という非常にラフな格好となっている。

ヴェルフェニアはシャワーを浴びている真っ最中。髪が長く手入れに手間と時間がかかるため、フォーマルハウトだけ先にシャワーを済ませた。

一緒に入るのも良かったかもしれない、と少しだけ後悔する。

「さて、次はアウラか。この時間ならまだ寝てないよな？」

微妙な時間だ。大人ならば寝てはいないだろうが、子供であるアウラやマーレならば既に寝ている可能性もある。

もしも寝ていたら悪いことをしてしまうなと思いつつ、フォーマル

ハウトはアウラへとく伝言^{メッセージ}を発動する。

「アウラか？ 俺だ」

《フォーマルハウト様！ 如何なさいましたか？》

聞こえてきたのはいつも通り快活さを感じさせる元気なアウラの声だ。

どうやら寝てはいなかったようで、声は活力に満ちている。

「お前に頼みたいことがあるんだが、問題無いか？」

《頼みなんて言わずに命令して下さい！ あたし、至高の御方々のためならなんだってやりますよ！》

まるで親の手伝いをしたくて仕方が無い子供のようなアウラに、フォーマルハウトは微笑ましい気持ちを抱く。

「それは頼もしいな。実は冒険者の依頼でお前が調査してるフィベルナ大森林に向かつてるんだが、そこにギガント・バジリスクが棲息してるらしいな？」

《はい。確認しています》

「そうか。なら、手間が少なくて済むな。明日には森に着くつもりだ、ギガント・バジリスクの死体を持ち帰りたいから、適当にタイムするか捕まえておくかしておいてくれ」

《畏まりました。でも、どうしてギガント・バジリスクなんですか？》

アウラの声色からは、何故そんな雑魚モンスターを態々という疑問の色がありありと感じられた。

「この世界の人間基準だとギガント・バジリスクは都市一つを滅ぼしかねない強力なモンスターだそうだぞ」

《えっ!?!》

「冒険者としての最高位、アダマタイト級冒険者が何とか倒せるくらいのもンスターらしいから、そいつを倒したことにして死体を持ち帰ったら俺たちの評価が上がるだろう？」

《あつ、なるほど。フォーマルハウト様の御力を証明するってことです。でも、ギガント・バジリスクなんかで都市が滅ぶって、やっぱり人間って弱っちいんですね》

笑いながら告げられたアウラの言葉で街にいた冒険者や兵士たち

の姿を思い浮かべ、フォーマルハウトは苦笑する。

ユグドラシルのプレイヤーと比較して、余りにも弱い。英雄と称されることもある最高位のアダマンタイト級冒険者でもギガント・バジリスクと同程度。これではアウラがそう思うのも無理はない。

「そうだな。俺も実際都市に潜入して驚いてるよ。俺が見た冒険者の装備だつていいところ中級アイテムだしな。でも油断はして足元を掬われるようなことが無い様に気を付けろよ？ 表に出てないだけで、俺たちと同等かそれ以上の力を持つ奴がいるかもしれないんだからな」

《畏まりました。十分に気を付けて森の調査を続けます。あと、ギガント・バジリスクの方も任せといて下さい！》

「頼む。森に着いたらまた＜伝言＞を飛ばすよ。ああ、夜は無理せずにはちゃんと寝るんだぞ？ じゃあ、お休み」

《は、はいっ！ お休みなさいませ！》

休めなさそうな元気な返事に微笑みを浮かべ、＜伝言＞を終了する。

「もう＜伝言＞はいいのか？」

「うわあっ!？」

不意に声を掛けられたフォーマルハウトは盛大に驚きながらびくと体を跳ねさせた。

フォーマルハウトに声を掛けたのは当然ながらヴェルフエニアだ。このコテージの中にはフォーマルハウト以外にはヴェルフエニアしかいない。

ベッドの横に立つ彼女は外で纏っていたゴシック調のドレス染みた聖遺物級装備ではなく、白いバスローブ一枚だ。長く艶やかな金髪はしつとりと濡れており、バスローブの隙間から覗く濡れた肌がフォーマルハウトの劣情を煽る。

しかし、『卒業』したことで多少の余裕を得たフォーマルハウトはそれを表に出すことなく対応することに成功した。

「フェニアか、脅かさないでくれよ」

「そんなつもりは無かったのだがな」

ヴェルフエニアは体を投げ出すようにベッドへ飛び込んで、フォーマルハウトの隣に寝そべる。

うつ伏せとなって頬杖を突いたことにより重力に従ってバスローブの胸元が緩み、隙間からは本当に僅かな膨らみが見えた。それをもろに目撃してしまったフォーマルハウトは僅かな反応を示しつつ目を逸らす。

くすり、とヴェルフエニアが笑いを漏らす。

「昨夜も今朝も、散々見ただろうに」

「それは……まあ、そうなんだが……」

「ふふ」

ヴェルフエニアは静かに笑いながら腕をフォーマルハウトの首筋へと回した。

「お、おい」

「何だ、今夜は可愛がってくれないのか？ お前はもつと自分の欲求に素直になるべきだ。いつだって、どこだって、何度だって、お前が望むのならば私は……な？」

誘うように囁かれた言葉によって、フォーマルハウトの理性は二日続けて崩壊した。

興奮に彩られた中に僅かに残った正常な精神でフォーマルハウトは思う。

(もう、恥ずかしいからって無駄に我慢するの止めよ)

第十五話 再会

太陽が昇り始めてから起きたフォーマルハウトたちはさっさと朝食と移動準備を済ませて、街道の遙か上空を飛んでいた。

今回は朝からもう一回戦などということはせず、アウラと合流するというのもあつてく飛行^{フライ}の魔法を使って移動している。

移動速度は徒歩の比ではなく、地上に見える街道に沿って飛び続ければ、アウラとの約束通り今日中には森まで辿り着くことが出来るだろう。組合が想定している日数よりも遥かに早く依頼が完了してしまうことになるが、この手の依頼にかかる平均日数との辻褄合わせは、ナザリックで過ごすことによって行うつもりだ。

(初めから飛んで移動で良かったなあ……景色も綺麗だし)

空から見える景色は地上で見たものとはまた違った良さがある。

雲と同じ高さから見下ろす広々とした草原はまるで黄緑色の絨毯の如く、遙か遠くに見える大山脈は地上から見た時よりも美しく鮮明に、そして雄大に見えた。

「ふむ、あの村か？」

フォーマルハウトの隣を飛んでいたヴェルフニアが、遠くを指差しながら呟く。

指の先にあるのは、山脈の麓に広がるフィベルナ大森林の外縁部に位置する場所にある人工物らしき小さな黒い点だ。

いくつかの建造物が集まって出来ているような形状をしていたために、受付嬢が言っていた拠点とすべき農村だろうと当たりを付ける。

「多分な。もう少し近づいたら降りて、歩いて村に入ろう。飛んで村に入ったら何事かと思われるだろうからな」

「分かった」

オランジエでは飛んで移動している人間はいなかった。依頼に出る他の冒険者達も街を出てからく飛行^{フライ}で一気に移動する様子は見られず、徒歩や馬、馬車などで移動していた。

つまりは、街中での魔法の仕様が制限されているのではなく、く

飛行機で移動すること自体が一般的ではないのだろうとフォーマルハウトは考えていた。何故という疑問は残るが、それが常識であるならば目立たないためにも従う他ない。

それから十分ほど飛び、黒い影がはつきりと村だと分かるころまで近づいてから地上へと降り立つ。

「……んー？」

フォーマルハウトはどこかで見ることがあるような景色に、大きく首を傾げる。

記憶を探ると、すぐさまその答えへと辿り着いた。

「ヴェンデ村だよな？」

「そのようだな」

フォーマルハウトたちが降り立ったのは、数日前にビーストマンの群れから救ったヴェンデ村の近くに広がる草原だった。

同じような景色が広がっているため正確な位置までは分からないが、ミリアを助けるためにモモンガがく転移門を開いた辺りだろう。

どうやら受付嬢が言っていた農村というのは、ヴェンデ村のことだったようだ。

ただ、すぐにフォーマルハウトたちが気付けなかったのには訳がある。

「あんな柵あったか？」

フォーマルハウトたちの場所から見えるヴェンデ村と思しき村は、記憶の中にある光景とは全く別の様相を呈していた。

野生動物の侵入を防ぐ程度でしかなかったみすばらしい柵は、太く頑丈そうな木で組み上げられた柵に変わっており、村全体が囲まれている。入口と思しき門は侵入者を拒むように固く閉ざされ、農村というよりは簡易的な砦のような雰囲気を感じられた。

「いや、無かったはずだが」

「ビーストマンやモンスター対策で立てたのか？」

「私に聞かれてもな。そもそもあの村にそれほどの余力があるとも思えないが……」

考えても答えは出ず、命の恩人として感謝されていたのだから少なくとも敵対することにはならないだろうと考えたフォーマルハウトは、とりあえず村へ入ってみることに決めた。

歩を進めて村に近づくにつれ、村を囲む柵の物々しさが露わになってゆく。

太い木を組み合わせて立てられた柵は大きく、フォーマルハウトの身長を優に超える高さだ。縄でしっかりと補強されているため、ビーストマン程度では破壊するのにも手間がかかるだろう。

とてもモンスターに襲われたばかりの田舎の農村が十日もかからず準備出来るような柵ではない。

「……ん、またか」

「まただな。しかし、これほど村に近い場所ですか？」

フォーマルハウトたちが違和感を覚えたのは、村の大きな門が目と鼻の先にある場所まで歩を進めた時だ。

その感覚は昨日小鬼たちに見られていた時に感じたものとよく似ていた。

ゆえにフォーマルハウトたちはこれを敵襲だと判断し、背中合わせに立って戦闘態勢を取る。

そのすぐ後にはがざりと草むらを揺らしながら現れたのは、やはり小鬼たちだ。同時に門が一人通れる程度に開き、中からも数体の小鬼が現れる。

しかしながら、フォーマルハウトはその小鬼たちから、昨日戦った小鬼たちとは違う印象を受けた。

あの時ほど不衛生ではないし、見た目の醜悪さは大差無いがこちらの方が理知的な雰囲気がある。武装も古びた棍棒や錆びた剣などではなくきちんと手入れされた物で、弓や槍など様々な武器が持たれていた。

さらに姿を現した後の動きも統率が取れており、フォーマルハウトたちを囲うのは剣と盾を持った前衛。続くようにして、槍を持ち狼に騎乗した中衛と言うべき小鬼が立ち、その後ろには弓を引き絞る小鬼が数体と神官と思しきメイスを構えた小鬼が一体立っていた。

低レベルながらもまるで軍隊のような陣形を形成する小鬼ゴブリンに警戒心を抱きつつも、フォーマルハウトは彼らの正体がなんとなく分かっ
てきていた。

「兄さん方、ちよつとそこで止まってくれやせんかねえ？」

剣を担いだリーダーらしき小鬼ゴブリンが一步前へ出て告げる。

その発音は野良の小鬼ゴブリンよりもずっと綺麗で、声も擦れてはいるが濁声と言うほど耳障りではなかった。

「出来れば戦いたくはないんですよ。兄さん方からはちつとばかしやばそうな雰囲気を感じるんですけどさあ」

「なら、武器を下ろしたらどうだ？ お前たちの正体は粗方分かってるが……武器を向けられたままだと落ち着けないな」

「すみませんが、そういう訳にはいかないですよ。姐さんが来るまでちよつと待っててくれやすか？」

睨み合いながら軽口を叩き合う。

尤も、軽口だと思っているのはフォーマルハウト側だけだ。小鬼ゴブリンたちはヴェルフエニアから向けられている殺気によつて凄まじいプレッシャーを受けているため、冷や汗をかいていた。

「殺すか？」

「よせよせ、あれはたぶんモモンガさんがミリア……だったか？ に渡した小鬼ゴブリン將軍の角笛から出てきたやつだ。何でか知らんが使ったみたいだな」

「む、そうか。あの娘か……ちつ」

ヴェルフエニアの舌打ちはとても小さく、フォーマルハウトの耳には届かなかつた。

そうこうしているうちに門の向こうから小鬼ゴブリンたち数体に守られながら一人の少女が姿を見せた。

「えっ!? フォーマルハウト様!?!」

やはりと言うべきか、現れたのはヴェンデ村でフォーマルハウトたちが最初に助けた少女、ミリア・トーレムだった。



「本当にすみませんでした！」

椅子に座るフォーマルハウトとヴェルフエニアに対して、勢いよくミリアが頭を下げながら謝罪する。

その後ろでは彼女に召喚された小鬼^{ゴブリン}たちが申し訳なさそうな顔をしながら、ミリアの謝罪に合わせて頭を下げている。

この小鬼^{ゴブリン}たちは予想通りモモンガがミリアに与えた小鬼^{ゴブリン}將軍の角笛を使ったことで召喚された者たちだった。

ビーストマンに襲われて村の男手が減ったことにより、労働力と自衛力確保のために召喚したようだ。

「気にしないでくれていいぞ。事情が事情だしな」

「大いに気にしろ。私だけでなくフォーマルハウトにまで刃を向けたのだから」

「す、すみません！ すみません！」

「おい、フェニア。本当に気にしないでいいぞ、ミリア。少し拗ねているだけだから」

噛み付いたヴェルフエニアをやや疲れた様子で制しつつ、ぺこぺこと頭を何度も下げるミリアへの対応も同時に熟す。

敵だと警戒していた小鬼^{ゴブリン}たちへの誤解が解け、ミリアによって村へと迎え入れられたフォーマルハウトたちを待っていたのは村人たちによる大歓迎だ。

村のそこかしこから次々と村人たちが現れ、口々に礼を述べてゆく。中には両手を合わせて拝み倒している者もいたほどだ。

一通りの村人たちと言葉を交わし、村長から改めて仰々しい礼を言われたフォーマルハウトたちは、ミリアが住んでいる家に招かれて謝罪を受けていた。

「で、ですが、命の恩人であり神様でもあるフォーマルハウト様にあんな……」

「いや、本当に気にしないでいい——待て、神様？」

聞き逃すには余りにもあまりな単語が聞こえ、フォーマルハウトは慌てて聞き返す。

「あつ、すみません！ 何か事情がおりなんですよね。大丈夫です、村の皆には言っていないから」

「待て待て、俺は神様なんかじゃ——」

「何もないところですが、どうぞ寛いでいって下さい。今白湯をお持ちしますね！」

フォーマルハウトは向けられた良い笑顔に何も言うことが出来ず、小鬼たちを退出させてから竈の方へ向かうミリアの背中を見送ってしまう。

伸ばされた手が虚しく空を彷徨う。

「……なあ、俺このままあの子に神様扱いされ続けるのか？」

「さあな。気に入らないのなら適当に記憶を弄ってしまうか？　というか、白湯と言っていたな。この家は恩人をもてなすのに茶も出ないのか」

にべもなくそう言い捨てたヴェルフエニアに、フォーマルハウトは眉を顰める。

ミリアと顔を合わせてから、ヴェルフエニアの機嫌はすこぶる悪かった。彼女のやることなすこと全てに噛み付いて、ミリアが頭を下げてもなお噛み付く場所を探す。

何故そこまでヴェルフエニアの機嫌が悪くなっているのかフォーマルハウトにはさっぱりだったが、流石にここまで理不尽に突っ掛かるのは褒められたものではない。

「フェニア、いい加減にしろ。怒るぞ」

「む……ぐ……」

いつもとは違う低い声を出して怒気を見せたフォーマルハウトに怯み、ヴェルフエニアは口を噤む。

しかし、浮かべられた表情に納得した様子はなく、むしろ悔しさすらも感じさせるものだった。

「はあ……」

フォーマルハウトは溜息を吐きながら竈の方を一瞥し、ミリアが戻るまでまだ猶予がありそうなことを確認すると、ヴェルフエニアの方へと体を寄せて小さな声で問い掛ける。

「何でそんな不機嫌なんだ、また俺が何かしたか？」

フォーマルハウトが思い出したのは、彼女にしたお姫様抱っこだ。

その時のように、自分が知らず知らずにヴェルフエニアを不機嫌に
してしまうような言動をしてしまったのかと思いつつた。

しかし、ヴェルフエニアは首を横に振る。

「違う、お前が今何かをしたわけではない」

「なら何であんなに突っ掛かるんだ？」

「……あの娘は、私からお前の初めてのお姫様抱っこを奪ったではな
いか」

「ああ……」

予想とは違ったが概ね間違ってもいない答えに、結局は自分が悪い
のだなとフォーマルハウトは苦い顔をしながら額を抑えた。

「分かった。その件に関しては俺が悪かった。後で埋め合わせをする
から、何とかならないか？」

「埋め合わせ？」

「ああ、何でもするから」

口に出してから、しまった、とフォーマルハウトは口を押さえた。

しかし、もう遅い。その言葉は既にヴェルフエニアの耳に入ってし
まっている。

「何でも？ 今何でもすると言ったな？」

バツと顔を上げたヴェルフエニアはフォーマルハウトへと念押し
するように詰め寄る。

今更否定など出来るはずもないフォーマルハウトが気圧されるよ
うに頷くと、ヴェルフエニアは先ほどまでの不機嫌さが感じられた表
情から一転、生氣を取り戻したかのような明るい表情を浮かべた。

「ふふふ、そうか、そうか。何でもだな？ ふふ、そこまで言われては
仕方ないな。あの小娘も無自覚だったことだし、今後お前が注意する
のなら許すことにしよう。ふふ、ふふふ」

「……俺は一体何をさせられるんだ？」

フォーマルハウトは疲れたようにそう言いながらも、上機嫌な笑顔
となったヴェルフエニアを見て笑顔を浮かべる。機嫌が直ったのな
らそれでいいかと。

その笑顔には苦笑も含まれていたが。

「お待たせしました。白湯ですが」

白湯が入った湯飲みを三つトレイに乗せて戻って来たミリアは、フォーマルハウトとヴェルフェニアの前にそれぞれ差し出すと、残る一つを持ってフォーマルハウトの向かいの席に座った。

そして、真剣な表情でテーブルに額が付きそうなほど深々と頭を下げる。

「改めて、先日は助けて下さって本当にありがとうございました。フォーマルハウト様たちがご降臨して下さいさらなかったらどうなっていたか……」

「降臨……ああ、うん、それも気にしなくていい。本当に。俺たちだって報酬目当てだったんだしな」

訂正することを諦めたフォーマルハウトは、苦笑いを浮かべながら答えた。

「それでも、ありがとうございます」

深々と頭を下げたままのミリアに、フォーマルハウトは居たたまれない気持ちになり、苦笑いから微妙な顔へと表情を変化させる。

正直、フォーマルハウトは最初はこの村を助けるつもりなどなかった。

どれだけ人間が殺されようと、生きてまま食われようと、その光景を見て義憤に駆られたから助けに来たわけではない。単に人間に対する同族意識を完全に失ってしまおうとしていた自分が怖かったから、人間を助けてそれを否定したかっただけだ。

しかも、安全が確保出来た後は少しの間だが実験にも使っていた。詰まるところ、全ては自分のため。たち・みーの言葉を借りて出撃したものの、たち・みーのように完全な善意からの人助けをしたわけではない。

だから、そのことでここまで感謝されるというのはフォーマルハウトにとって少々居心地が悪かった。

しかし、感謝を受け入れなければいつまでだって頭を下げていそうなミリアを見て、聞こえないように小さく溜息を吐きながら口を開く。

「はあ……分かったから顔を上げてくれ。モモンガさんにも村の皆が感謝していたと伝えておこう」

「は、はいー!」

元気の良い返事をして顔を上げたミリアはとても良い笑顔をしていた。

「あの、ところでフォーマルハウト様とヴェルフニア様は一体どのようなご用件で村まで? 村長を呼んできた方が良いでしょうか」

「いや、村自体に用があるわけじゃないんだ。実は冒険者になってな、依頼でここまで来た。それと、別の名前を名乗ることにした。フェランとセレーネだ」

「あつ、わかりました。村の皆にも伝えておきますね。それにしても、冒険者ですか?」

ミリアが意外そうな表情を見せる。

何故神様がそんなことを、とでも言いたげだ。

「まあ色々な理由があるんだが、一番の理由は金だな。この辺りで使える金が無い」

「す、すみません……私たちがきちんとお支払い出来ればよかったです。……」

「へ? あ、いや、そんなつもりで言ったんじゃないぞ」

「あの、一体どんな依頼なのですか? もしよろしければお手伝いさせて下さい。助けて頂いたお礼らしいお礼も出来ていませんし」

「手伝いか……」

フォーマルハウトは値踏みするようにじっとミリアを見つめる。

視線を受けたミリアは恥ずかしそうに顔を赤らめて、体を小さくした。

どうみても戦えるとは思えない体格だ。そして、事実ミリアは戦えない。もしも彼女の強さをレベルに換算するならば、間違いなく一レベルだろう。それは、フォーマルハウトにとっては足手まといであることを意味する。

今回の依頼は薬草採取。危険は少ないと思われるが、不測の事態というものがある。もしもフォーマルハウトが僅かでも本来の力を使

うことがあれば、彼女は巻き込まれて確実に死ぬだろう。

それに、ギガント・バジリスクのこともある。

戦うわけではなく、死体が欲しいだけなのでミリアを巻き込むということはあり得ないが、ギガント・バジリスクは現地基準で言えば強力なモンスターだ。そんなモンスターが現れたとなれば確実に大騒ぎになるだろう。

「気持ちありがたいが……」

「お、お願いします！ フォーマ……フェラン様のお力になりたいんです！」

「今は別にフォーマルハウトでいいぞ。しかし……うーむ」

ミリアが必死な様子だったためにフォーマルハウトは口に出せなかったが、これはありがたい迷惑というものだ。

しかし、邪魔だとストレートに言えばミリアは絶対に傷付く。それが本意ではないフォーマルハウトは唸りながら考えるが、妙案は浮かばない。

「おい、ミリア。私たちが受けた依頼はスオナ草という薬草の採取だ。森の中に生えているらしいが、お前は見たことがあるのか？」

考え込んでいるフォーマルハウトの横からヴェルフエニアが問い掛けた。

「えっ？ あっ、はい。あります。採ったこともあります」

先ほどまで黙って白湯を飲んでいたヴェルフエニアから唐突に話しかけられたからか、ミリアが驚きを隠しきれずに答えた。

ヴェルフエニアが言葉を続ける。

「ならば、どのような草か私たちに詳しく教えるがいい。それを以て協力とするのはどうだ、フォーマルハウト？」

「ふむ……よし、そうしよう。実際組合からは大まかな見た目くらいしか教えてもらってないからな。頼むよ、ミリア」

「は、はいっ！」

恩人から頼りにされたことに顔を綻ばせ、ミリアは上機嫌にスオナ草に関する説明を始める。

「スオナ草は背が高く葉っぱが厚くてとげとげした赤紫色の草で

す。茎から葉っぱが生えているんじゃないやなくて、根本から何枚かの長くてとげとげした葉っぱが生えてる感じですね。近くに何本か纏まって生えてることが多いです」

「採取する時は根本から引っこ抜けばいいのか？」

「いえ、そうすると次に採取する分が生えて来なくなってしまうから、根っこは残します。根っこさえ残っていればまた生えて来ますです。葉っぱを根本近くで千切っちゃって大丈夫ですよ。あっ、素手で千切るのは止めといたほうがいいです。汚してもいい手袋か何かあった方が良いでしょうよ」

「汁か何かで汚れるのか」

「結構汁が多くて、飛び散るんです。あと、臭いも強くて……ツンとしてて服とかに付くと何日も臭いが残っちゃうので気を付けて下さいね」

「……気を付けよう」

そうは言ったものの、フォーマルハウトたちは汚しても良い手袋など持っていなかった。そういう捨ててしまっても構わないような装備はナザリツクで倉庫の肥しとなっている。

しかし、こういった注意事項を事前に聞けてよかったとフォーマルハウトは安堵する。やはり現場の者の体験談というのは大切だ。話を聞かなければ知らずに草の汁塗れになっていたところだった。

「スオナ草は結構どこにでも生えてますし、村からすぐの森の入り口辺りにも生えています。それと、赤紫の草はスオナ草しかないと思うので見ればすぐに分かると思います。ただ……」

「どうした？」

「う……すみません。薬草は村の収入源の一つなので、その……」

ミリアの言葉を全て聞かずとも、フォーマルハウトは彼女が何を言っているのかを察することが出来た。

「村の近くのスオナ草は採取しない方がいいな？」

「！はい、はい、ありがとうございます！」

また頭を下げようとするミリアをやんわりと手で制する。

いくら大森林全域に自生していると言っても、戦闘能力が皆無な村

人では村に本当に近い場所での採取しか出来ないだろう。それすらも先日のビーストマンのように、突然モンスターが現れないとも限らないのだ。

フォーマルハウトは別に村人の採取場所を荒したいわけではない。依頼を熟して金を稼ぎつつ、アダマンタイト級を目指して堅実に歩を進めたいだけだ。他に自生している場所があるのならば、そちらで採取することに否やはない。

「さて、聞くことは聞けたし、そろそろ行くか」

「ああ」

「ありがたいな、ミリア。組合で聞いた話よりずっと分かり易かったよ」

フォーマルハウトはミリアへ軽く礼を言ってから立ち上がり、短く返事をしたヴェルフエニアも後に続く。

ミリアはその背中に声を掛ける。

「フォーマルハウト様、その、是非また来てください。精一杯おもてなしさせて頂きますから」

背後から掛けられた名残惜しそうな言葉に、フォーマルハウトはひらひらと背中越しに手を振り返して応え、ミリアの家を後にした。

◆ ◆ ◆

フォーマルハウトたちはヴェンデ村からフィベルナ大森林に入り、以前フォーマルハウトのテンションが振り切れた場所ではなく、ミリアとの約束通り村の近くではなく森の少し奥を目指して歩を進める。

移動している最中にもスオナ草らしき赤紫色で背の高い草が多く散見出来たため、採取に苦労することは無さそうだなと安堵した。

「ところでフォーマルハウト、あの娘をハーレムに加えるのか？」

歩きながらヴェルフエニアが口を開いたかと思えば、そんなことを言い出した。

「はあ」

フォーマルハウトは思わず歩みを止めて聞き返す。

急に足を止めたため、すぐ後ろを歩いていたヴェルフエニアが背中へと激突した。

「むぐつ」

「あ、すまん。大丈夫か？」

「あ、ああ、大丈夫だ。で、どうなのだ？」

言われてみて、フォーマルハウトは考える。

確かにミリアはフォーマルハウトの感性から見ても可愛いと思えた。可愛らしく、純朴な村娘といった感じの性格にもなんら問題は無い。どちらかといえば好みの部類だと言えるだろう。

しかし、あの神様扱いだけは全く理解出来ない。

一体何がどうなつて神扱いされているのか。向けられる視線からフォーマルハウトが感じたのは、尊敬や憧憬などではなくナザリツクの者たちと似た信仰心だ。

確かに命の恩人ではあるが、神と崇められるほどのことはしていない。現実世界で誰かの命を救ったとしても、こうはならないだろう。

有体に言えば、フォーマルハウトはミリアから向けられている信仰心が得体の知れない感情に見えて少し怖かったのだ。

「まあ、あの神様扱いだけはよく分かんが、それを差し引けば可愛いからいいかもしれないな。ただ……」

「ただ？」

「俺だけそのつもりになつても意味が無いだろう？　こういうのはお互いの気持ちが大切だと思うんだよ。俺が良いと思つても相手が俺のことを好きじゃないなら、一緒にいても楽しくないしな」

「ふむ、確かに。無理矢理が趣味でもないなら夜に楽しむことも出来ないだろうしな」

「……ま、まあ……うん、確かにそういう側面もあるな」

言葉に詰まりながらもそう答える。

むしろ、ハーレムと言われてフォーマルハウトが真つ先に思いつくのはそういう側面しかない。ならばそれは側面ではなく正面なのだが、ちつぽけなプライドからあたかもそれが副目的であるかのような言い草をした。

「だが安心しろ。あの娘に限つて言えば、そういう心配は必要ないだろう」

「どういうことだ?」

フォーマルハウトが訝し気な顔をすると、ヴェルフエニアは呆れたように肩を竦め、これ見よがしに大きな溜息を吐いた。

「あれは誘えば頷く程度にはお前に好意を抱いているはずだぞ?」

「……まさか」

「あの娘は恩を返したいではなく、お前の力になりたいと言った。それに、また来いと言ったのもお前にだけだ。私は言われていない。行動の端々からも好意が感じられた」

確かに言われてみれば好意を抱いている言動と捉えられなくもな
いかなどフォーマルハウトは思った。しかし、どうにもヴェルフエニ
アの考えすぎのような気もしないでもない。

ミリアが抱いているのは命の恩人への好意であって、異性への好意
ではないのではないか。そんな疑問を抱く。

ヴェルフエニアの言うことを鵜呑みにしてその気になって、いざ
誘ってみてそういう好意ではないと断られたら。

(いくら何でもそれは恥ずかしすぎるよなあ……)

そんな場面を想像し、フォーマルハウトは羞恥を感じて苦笑いを浮
かべる。

「流石に考えすぎじゃないか?」

「……お前はもう少しこう、女の好意に敏感になるべきだな。ハーレ
ムを作るのなら必須技能だぞ」

「むう……」

正論を言われたフォーマルハウトは呻くような声を漏らす。

フォーマルハウトには女性経験が無い。正確に言うならば、
現実世界における女性経験が無いと言うべきか。

家と仕事場を往復し、余暇は全てユグドラシルに費やすゲーム廃人
染みた生活をしていたフォーマルハウトに女性との接点などあるは
ずもない。唯一あったとすればアインズ・ウール・ゴウンの女性メン
バー三人であったが、彼女たちはフォーマルハウトにとっては女性と
いうよりは気の知れた友人だ。異性として認識したことはない。い
や、あるにはあるが、オフ会で初めて会った時によく『あ、そう

「いえばこの人たち女だったな」と思った程度だ。

そんなフォーマルハウトが異世界へ転移し、ヴェルフニアという少女とようやく接点を持ったとして、それほどすぐに女性の機微に詳しくなれるものだろうか。

それは、否。

元々三次元の異性に興味すら向けなかった男が、たった数日でその辺りに敏感になれるわけもない。

流石にヴェルフニアのような好意を素直に——過剰に——伝えて来るような相手であればすぐに分かるが、そういう訳でもない女性の機微を感じ取れというのは無理があるだろう。

「そう言われてもなあ……」

「どうにもお前はその辺りが鈍いようだな。まあ、お前は格好いいし、普段通り振る舞ってれば女は集まるだろうから、後は私がフォローしよう。気に入った女がいたら私に言えばいい」

「……そうさせてくれ」

「任せろ。ああ、ハーレムといえばシャルティアから吸血鬼の花嫁を
ヴァンパイア・ブライト
一体貰えることになったぞ」

ふむ、とフォーマルハウトは吸血鬼の花嫁の姿を思い浮かべた。

吸血鬼の花嫁は、ペロロンチーノが言うところのエロモンスターだ。その露出度の高い服装に美しい容姿はユグドラシル内でも人気が高く、根強いファンも多い。

低レベルのモンスターであるため、ユグドラシルを始めたばかりのプレイヤーでも気軽に会いに行けるというのも人気の要因の一つだ。

そして、フォーマルハウトもまたそんな吸血鬼の花嫁を気に入っているプレイヤーの一人だ。とはいえ、吸血鬼の花嫁だけが特別好きなのわけではなく、ペロロンチーノがエロモンスターと称するモンスターの大半を好きただけだが。

「あれはお前の好みか？ いらないのならシャルティアに断りを入れるが」

「いや、うん、好みだな」

「ふふ、そうか。ならば良い。楽しめるようにシャルティアが調教し

てから渡してくれるそうだ」

「シャルティアが？」

フォーマルハウトは不安感を覚える。

シャルティア・ブラッドフォールンはペロロンチーノが心血を注いで創り出した、彼の最高傑作だ。

ヴェルフエニアがそうであつたように、シャルティアもまたペロロンチーノの情熱と性癖をこれでもかとぶち込まれた存在である。そして、ペロロンチーノは変態だ。

ゆえに、変態の性癖をぶち込まれたシャルティアもまた変態。その変態度合いは変態^{ペロロンチーノ}を上回る。

例えばシャルティアに与えられた性癖。

その性癖は留まるところを知らず、色狂いだけでなくサディストでマゾヒストで死体愛好家^{ネクロファイリア}で両性愛^{バイセクシャル}だ。もちろんこれらはシャルティアの性癖を語る上では単なる表層に過ぎぬ設定であり、これらが可愛らしく見えるような性癖をも持っている。

至高の四十一人に捧げる供物である以上、シャルティアは調教に際して手を抜くことはないだろう。

ならば、超弩級の変態であるシャルティアから本気の調教を受けた吸血鬼の花嫁^{ヴァンパイア・ブライド}は一体どうなってしまうのか。

「……度を越した変態にならないだろうな」

「それは私も懸念している……が、まあ、大丈夫だろう。きつと」

「そうだな。うん、そうだといいな」

気の抜けた苦笑を浮かべてから、再び歩き出す。

鬱蒼と生い茂る森の中は陽の光が遮られて薄暗かったが、暗闇を見通せる目を持つフォーマルハウトたちならば問題は無い。木の根や石で出来たでこぼこの地面でも足を取られることなく進んでゆく。

フォーマルハウトたちは既にヴェンデ村からはそれなりに離れた位置に来ていたが、まだ歩みを止めることはない。

今回行うのは依頼の薬草採取のみだけでなく、ギガント・バジリスクの討伐もだ。単に殺すだけなので正体が露呈するような派手な戦いをする事は無いが、ギガント・バジリスクを連れて来るアウラの

姿を誰かに見られる訳にはいかない。

それから暫く森の奥へと進んだところで、二人は足を止めた。

「ここでアウラを呼ぶのか？」

「ああ。というかアウラのことだから、俺たちが森に入った時点で捕捉していそうだがな」

フォーマルハウトは〈メッセージ伝言〉を使用し、アウラへと呼び掛ける。

「アウラか？」

《はい、フォーマルハウト様！》

「準備は出来ているか？」

《もちろんです！ フォーマルハウト様たちの位置も既に把握しておりますので、今向かっています》

「そうか。なら待っているので頼む」

《はい！》

元気の良い返事を聞いて微笑みを浮かべながら〈メッセージ伝言〉を終了する。

それから十分も経たないうちに森の奥から地響きが鳴り渡る。ズシンズシンと巨大な何かが大地を踏み締めるような音だ。

「お待たせしましたー！」

徐々に近くなる大きな足音と共に、活発な少女特有の高い声がフォーマルハウトの耳へと届いた。

その方向へと目を向けると、草をかき分けながら姿を現したのは声色からは想像も出来ない恐ろしい外見をした巨大な蜥蜴だった。

ぎよろぎよろとした眼球は忙しなく左右で違う動きを繰り返しており、王冠にも似た形状をした赤いトサカを持っていた。体表は深い緑色をしており、その十メートルを越す巨体を八本の太い足で支え、しっかりと地面を踏み締めている。

しかし、小さな龍のようにも思える威圧感溢れるその外見は、フォーマルハウトたちに恐怖や圧迫感を与えるには及ばなかった。

フォーマルハウトたちからすれば、ギガント・バジリスクなどその辺にいる蜥蜴と変わらない。

「とうっ！」

ギガント・バジリスクの背から小さな何かが飛び出し、雑技団染みた動きで空中でくるくると幾度も回転してから、フォーマルハウトたちから少し離れた位置へと音も無く着地した。

「ぶいー」

活力に満ちた笑顔と共にピースをしてポーズを決めたのは、ナザリックが誇る第六階層階層守護者の片割れ、男装の闇妖精^{ダークエルフ}たるアウラだ。

「アウラは相変わらず元気そうだな」

「はい。元気いっぱいですよ！ 御命令にあつたギガント・バジリスクを連れて参りました！」

「ああ、ありがとう」

フォーマルハウトが微笑みながらアウラの頭に手を乗せて撫で回すと、アウラは驚きつつも照れくさそうな笑みを浮かべる。

その子供の様な仕草に癒されながらギガント・バジリスクの方を見る。アウラを乗せてきたギガント・バジリスクはしきりに目を動かしていたものの、完全にアウラの支配下に入っているようで大人しくしていた。

ただ――

「なあ、アウラ？」

「はい？」

「なんで、三匹いるんだ？」

そう。

森の奥からアウラを乗せて現れたギガント・バジリスクを先頭に、左右にはさらに二体のギガント・バジリスクが待機していた。やはり道中で見た小鬼^{ゴブリン}と同様に、個体によって鱗に傷があるものや大きなものなどそれぞれで特徴がある。

フォーマルハウトの言葉を受けて、アウラはきよとんとした顔になった。

「えっと、フォーマルハウト様の御力を証明なさるんですよね？ それでしたら一匹じゃ足りないかなって思いました……駄目でしたか？」

「ふーむ……」

アウラの頭から手を離し、腕を組んで考える。

（確かに、俺一体って言わなかったな……でも三体分の死体を持ち帰るのはまずいか？）

受付嬢はギガント・バジリスクの説明をする際に何体で都市を滅ぼすとは言っていないかったが、話の流れからして一体で滅ぶであろうことは何となく分かった。

つまり、一体で都市一つ。三体ならば都市三つが滅ぶ。

都市三つ分の死体を持ち帰ったらどうなるだろうか。

恐らく、蜂の巣をつついたような大騒ぎになるに違いない。それは間違いなくフォーマルハウトたちの力を証明することに繋がるだろうが、果たして常識の範囲内と言えるのだろうか。

悩んだ末に、フォーマルハウトはヴェルフェニアへと顔を向けた。

「……持ち帰る死体は一体分で十分だろうな。それ以上は過剰に思う」

うんうんと頷き返してから、フォーマルハウトは他よりも一回り大きな個体を指差しながらアウラへと指示を出す。

「そうだな、俺もそう思う。ということ、その一番デカイのだけにしよう。他二体は……お前の好きにするといい。貰っても困るなら森の奥の方で逃がしていいぞ」

「畏まりました。それじゃあ、その大きな子はどうしますか？ このまま待機させておけばいいんでしょうか」

「そうだな。手早く殺すから少し待っててくれ」

目の前で殺すと言われているのに、それに対してギガント・バジリスクはピクリとも反応を示さない。

主人であるアウラの待機命令に健気に従うその姿勢に少し感動し、せめて苦しまないように殺してやろうと考えたフォーマルハウトは、ギガント・バジリスクの側面へと移動する。

手刀で一撃で首を落とすつもりだ。

ユグドラシルとは違って個体で大きさが違う現地のギガント・バジリスクの強さが少し気にはなったが、態々確認するほどでもないだろ

う。

「ふんっ！」

フォーマルハウトは短い気合の声と共に手刀を放つ。

轟音。

寸分違わずにギガント・バジリスクの首元へと叩きこまれた手刀は、ミスリルに匹敵する硬さを持つと言われる鱗を容易に叩き割り、肉を抉りながら骨を断ち、さらにその下の地面までもを打ち砕いた。

今のフォーマルハウトは装備が神器級ゴツズから聖遺物級レリックへと変わったため、物理攻撃関係の能力補正が薄れている。例えば彼が身に着けている胸当てプレスト・プレートは防衛力と体力が増加するという盾役向けの補正を持つ装備であり、回避主体のフォーマルハウトにとっては効果が薄い。

これは、フォーマルハウトが装備を買う際に性能ではなく外装を基準に選ぶからだ。

ユグドラシルではユーザーが自由に装備の外装を変更することが出来る。そのため、基本的に装備の外見というものは一点物だ。似て非なる物は存在するが、完全に同じ外見の装備は意図的に作成しない限りは存在しない。

そのため、フォーマルハウトはどうせメイン装備は神器級ゴツズが存在するのだし、サブ装備には伝説級レジェンドもあるのだから、普段使わない聖遺物級レリック以下の装備は見た目重視で買えばいいだろうと、性能は気にせずに気に入った見た目の物を買って集めていた。

今彼が装備している装備たちもそうした方針で購入された装備であるため、フォーマルハウトが本当に望む性能をしていない。所持している装備の中でも比較的使える性能の物を選んだが、彼本来の強さにはほど遠かった。

そんな状態でも、この世界で強者と言えるギガント・バジリスクを一撃で殺せたことに安堵と満足感を感じながら頷く。

「うん。よし、じゃあさっさと解体して——」

懐から解体用のミスリルナイフを取り出したところで、フォーマルハウトは硬直した。

突然動きを止めたフォーマルハウトを怪訝に思ったヴェルフエニ

アが声を掛ける。

「どうした、フォーマルハウト?」

「……ギガント・バジリスクの討伐証明部位ってどこだ?」

「……どこ、なのだろうな」

モンスターを討伐したことを証明するために組合へと提出する討伐証明部位は、モンスターによってどの部位かが決められている。どんなモンスターでも小鬼ゴブリンのように耳を提出すればいいというものではない。

だが、ギガント・バジリスクの討伐部位に関する知識をフォーマルハウトたちは持ち合わせていなかった。

「受付嬢に聞いていないのか?」

「最初は討伐するつもりは無かったからな……向こうも俺が討伐してくるなんて思ってただろうし、教えてもらってないな」

基本的には討伐証明部位を提出しなければ、それ以外の部位を持ち込んでも討伐したとは見做されず、報奨金も受け取ることが出来ないし評価にも繋がらない。

流石に死体を丸ごと持ち帰れば否定のしようもない証拠となるが、それは骨だ。この十メートルを越す巨体を担ぐなりして持ち帰らなければならなくなる。

「……首から上を丸ごと持っていくか。フェニア、腐らないようにく保プリサベーション存>掛けといてくれ」

「分かった」

「残った死体は……アウラ、いるか?」

アウラは腕を組んでギガント・バジリスクの死体を見つめながら唸り、数秒ほど考え込んだ。

「皮がちよつとだけ欲しいかなって思いました。後はいらないます」

「そうか。なら皮の一部をデミウルゴスに渡して、巻物スクロールの素材にならないか実験させてくれ。残りはお前の物にしたいぞ」

「畏まりました。残った死体はどうなさいますか?」

「好きにしたいぞ」

「じゃあ、あたしのペットの魔獣たちに食べさせちゃいますね」

アウラの提案に頷き返す。

ビーストティマー

魔獣使いであるアウラが使役する魔獣型のモンスターには肉食の者が多い。高レベルの者ばかりなので、毒のある体液を持つギガント・バジリスクの肉を餌にしても毒への抵抗^{レジスト}は容易だろう。

「さて、フェニア終わったか?」

「ああ、問題無い」

「ならアウラ、血抜きは出来るか?」

「はい、お任せください!」

アウラがギガント・バジリスクの頭を掴んで持ち上げる。体も手も小さなアウラには重い荷物なはずのだが、アウラは意にも介さず流れるような動作で手近な木へと吊るした。

しっかりと血抜きをしてから持ち帰らなければ、毒の体液を撒き散らしながら持ち帰ることになってしまう。

「後はこのまましばらく放っておけば大丈夫です」

「分かった。後は……採取だな」

フォーマルハウトは辺りを見回して、目的の薬草であるスオナ草の姿を探す。ミリアが言っていた通り本当にどこにでも生えているらしく、視線を巡らせただけでも数か所に群生しているのが確認出来た。

そのうちの一つの前にしゃがみ込むと、ツンとした臭いが立ち込める。

フォーマルハウトは鼻の中を通り抜ける臭いに顔を顰めながら焔王の慟哭を外し、大きく深呼吸を一つ。細心の注意を払って汗が飛び散らないように薬草を掴んだ。

「……いい。おいっ! フォーマルハウト!」

「はっ!? な、何……くっつき! 何だこれ! くっせえ!」

フォーマルハウトが気が付いた瞬間には辺り一面にツンとした臭いが広がり、フォーマルハウトの服にはその臭いの元と思われる汁がべっとりと付着していた。

水つぽさを感じて手の方へ向けると、そこには握り潰された赤紫の草。棘が手に刺さるようなことは無かったが、ツンとした刺激臭のす

る汗が滴り落ちていた。

「……なんで？」

フォーマルハウトは首を傾げる。

百レベルの力を考慮せずに加減を誤って握り潰した訳ではない。そもそも握り潰した瞬間の記憶すら、フォーマルハウトの頭には残っていないかった。

まるでその瞬間だけ意識が飛んでいたかのような感覚だ。

「お前、採取スキルを持っていないのではないか？ 自信満々に採取依頼を受けるから、てつきり持っているものだと思っていたが……」

「採取スキル……あ」

ユグドラシルにおいては基本的には何をすることもスキルが必要だ。それは薬草などの採取行動も同様であり、適切なスキルを所持していない者が無理にその行動を取ろうとすると失敗する。

薬草採取や鉱石採掘などでは、対象のアイテムが破壊されてしまうのだ。

採取行動など長らくしていなかったために完全に忘れていた仕様を思い出し、フォーマルハウトは焦る。

「フェニア、お前採取スキル持ってたか？」

「持っているわけがないだろう」

ヴェルフフェニアは完全な戦闘用NPCとしてデザインされている。戦闘向けの職業であっても採取スキルを習得出来る職業も存在するのだが、生憎とヴェルフフェニアはその類の職業を習得していなかった。

このままでは薬草採取が出来ず、依頼失敗ということになってしま

う。
銅^{カンパー}向けの採取依頼の失敗だ。情けなさ過ぎて笑い話にすらならない。いくらギガント・バジリスクの首を持ち帰っても、評価が上がることはないだろう。

むしろ、ギガント・バジリスクを倒せるのに何故薬草は採取出来ないのかと訝しがられる可能性すらあった。

「あの……フォーマルハウト様」

「どうした、アウラ？」

「あたし、採取スキルなら持つてますよ」

フォーマルハウトにはアウラが救いの女神に見えた。

アウラは魔獣使いだが、同時に野伏系の職業も習得しているため、採取スキルを習得していた。森の奥で生きる闇妖精らしさを追求したぶくぶく茶釜のファインプレーと言えるだろう。

「おお！ なら、代わりに頼めるか？」

「任せて下さい！ どのくらい採ればいいですか？」

「現地の水薬ポーションの材料になるらしいから、ナザリックでも水薬ポーションの材料に使えないか実験したい。なるべく多い方がいいな」

「でしたら、マールを呼んでもいいでしょうか？ あたし一人だと時間が掛かっちゃうと思いますので」

マールが習得している森祭司ドルイドの職業は、魔法以外にも採取スキルなど一部の生産系スキルを習得することが出来る。

森の祭司と称するに相応しいスキルだと言えるだろう。

「マールか。いや、待て。せっかくだからマール以外にも何人か寄越せないかアルベドに聞いてみよう。あ、フェニア、＜清潔＞頼む」

ヴェルフエニアの方へ手を差し出しながら、フォーマルハウトは＜メッセージ＞を発動する。

至高の四十一人たるフォーマルハウトとモモンガが不在の今、ナザリックの管理を担っているのはアルベドだ。デミウルゴスの不在により警備責任者でもあるアルベドの警備プランを台無しにしないためにも、勝手にシモベを動かすことは避けるべきだ。

「アルベドか？」

《これは、フォーマルハウト様！ 何か問題がございましたか？》

「問題と言えば問題だな……実は冒険者として採取依頼を受けてフィベルナ大森林まで来たんだが、採取スキルを持っていないことをすっかり忘れていた。マールと採取スキルを持つてる奴を何人かこっちに回して欲しいんだ」

《畏まりました。対象のアイテムは何でございましょう？》

「薬草だな。スオナ草といって、現地では水薬ポーションの材料として使われて

いるらしい。ユグドラシルには無かった素材のはずだから、多めに採取してナザリックでの水薬ポーション作成材料の代替品にならないかも実験したい」

《なるほど、畏まりました。それではマーレを中心とした採取スキルを持つシモベを数名、シャルティアの＜転移門＞で送らせます。つきましては、探知系の魔法で御身の位置を探ることをお許し下さいませ》

「ああ、ヴェルフエニアには探知阻害系の魔法を解除させておく」

《ありがとうございます。早急に準備を整えますので今しばらくお待ちください。それでは、失礼致します》

アルベドとの＜伝言＞を終了する。

「フェニア、探知系魔法でこちらの位置を確認するらしいから阻害系の魔法を切っておけ」

「分かった」

転移系の魔法は自分が知っている場所でなければ転移出来ない。そのため、行ったことのない場所へ転移するには遠隔視ミラー・オブ・リモートビューイングの鏡や探知系の魔法などでその場所を視認する必要がある。

今回の場合、フォーマルハウトたちの位置を調べなければ直接＜転移門＞を開けないのだが、その際にヴェルフエニアが常時展開している探知阻害の魔法が邪魔となってしまうのだ。

それから十分ほど待っていると、唐突に地面から黒い霧のようなものが噴出して楕円形の穴を形作る。

どこまでも続く深い闇を思わせる穴から姿を現したのは、シャルティアだ。

優雅な足取りで現れたシャルティアはスカートの裾をつまんで一礼してから口を開く。

「第一、第二、第三階層守護者、シャルティア・ブラッドフォールン。御命令により参上いたしました」

「ああ、忙しいところ悪いな」

「そのような謝罪などお止め下さいませ。わたしは至高の御方々の忠実なるシモベ。ならばその御命令に従うことは当然でありんす」

「そうか。なら、ありがとうな」

「勿体無いお言葉！」

深々と頭を下げて大仰な礼を述べるシャルティアに苦笑しながら、フォーマルハウトはシャルティアの背後で未だ口を開けたままの<転移門>へと視線を向ける。

しかし、シャルティアに続いて送られてくるはずのマーレやシモベたちが姿を出す様子はない。

「シャルティア、マーレや他のシモベたちはどうした？」

びくり、とシャルティアが身を強張環らせた。

顔を上げたシャルティアの顔色は悪く、引き攣った笑みを浮かべている。

「シャルティア？ あんたどうしたのよ、何か顔色悪いよ？ や、アンデッドだから顔色は普段から悪いんだけど、変な物でも食べたの？」

「そ、そんなことはありません。ただ……ごほん。フォーマルハウト様、ご挨拶も済みましたし、わたしはこれで失礼いたしんす」

「あ、ああ」

出てきた時の優雅な足取りはどこへやら。再び一礼してからぱたぱたと忙しない動きで<転移門>の中へ戻っていくシャルティアは、まるで何かから逃げるような様子を感じさせた。

(階層守護者が何人か外に出てるから、警備の負担が増してるのか？)

肉体疲労は感じなくても精神疲労は感じるだろうしな

闇の中へ消えたシャルティアと入れ替わるようにしてマーレが姿を現す。

「あ、あの、フォーマルハウト様。お、お待たせしました」

「ああ、態々ありがとうなマー——」

警備で忙しいにも関わらずやって来てくれたマーレに礼を言おうとしていたフォーマルハウトだったが、マーレに続くようにして<転移門>から姿を現した者を見た途端、その笑顔が引き攣ったようなものへと変わった。

「いっ！」

「びゃっ!？」

アウラとヴェルフエニアが短い悲鳴を漏らす。

意外にも、奇声ともとれる悲鳴を漏らしたのはヴェルフエニアの方だ。

想像もしなかったような声に驚いたことで、フォーマルハウトは幾分か冷静さを取り戻した。

(シャルティアのやつ、こいつと顔を合わせる時間少なかったから入れ違いになるように先に出てきたんだな……)

「ご機嫌麗しゅう、フォーマルハウト様！」

爽やかな声と共にばさりと金の糸で縁取られた真紅のマントを翻して優雅な礼をしてみせたのは、マールよりも小さな黒い影だ。

影の形は楕円形。体は黒光りする焦げ茶色の外骨格に覆われ、その大きさは小さなマールの半分にも満たず、三十センチほどだ。頭部からは長い触覚が二本垂れさがり、その間には黄金に輝く王冠が乗せられ、手には純白の宝石が嵌め込まれた王笏を持っている。

手足は棒きれのように細長く、腕はコキユートス同様に四本。その先端は指と言うよりは鉤爪のような形状だ。

闇の中から完全に姿を現し、木漏れ日に照らされて鮮明となった姿を見てフォーマルハウトはさらに顔を引き攣らせる。それでもフォーマルハウトが笑顔を崩さずにいられたのは、目の前の存在もまた、かつての仲間たちが生み出したNPC——つまりは愛すべき子供のような存在であるからだろう。

喉の奥を振り絞るようにして、必死に平静を装いながら声を出す。

「ひ、さし、ぶりだな……恐怖公」

「はっ！ っご無沙汰しております！ 此度はフォーマルハウト様が採取スキルを持つシモベを探しておられると耳にしまして、我輩、これはお役に立つべく馳せ参じねばと任に立候補させて頂きました次第にございますぞ！」

彼の名は恐怖公。

ナザリツクが誇る第二階層にて、ブラック・カプセル黒棺と呼ばれる領域を授かる

二足歩行の巨大ゴキブリであり、ヴェルフエニアと同じ領域守護者である。

「そ、そうか。うん、お前たち、ナザリツクの警備で忙しい中来てくれて感謝する」

「か、感謝など勿体ないです」

「マーレ殿の言う通りですな。至高の御方々の御命令に従うは我輩共の喜びですぞ」

言葉ではそう言いつつもやはり喜びがあるのか、恐怖公はぴくぴくと触手を動かす。

それを見たヴェルフェニアが顔を青くしながら、さつとフォーマルハウトの背中へと隠れた。

(ユ、ユグドラシルで見た時の数倍キツイ！ るし★ふぁー！ あいつ、なんてやつを創りやがったんだ！)

フォーマルハウトの脳内では、恐怖公の生みの親たるギルドメンバー、るし★ふぁーが良い笑顔で親指と立てていた。

「ごほん。そうか。じゃあ、早速採取を頼めるか？ 対象はあの薬草だ。あっちの方角に村があつて収入源の一つらしいので、逆方向で採取するように」

ひやい、と震えた返事をしたアウラが勢いよくマーレを引っ張つて、早々に恐怖公から離れた位置へと移動してから採取を始めた。

が、恐怖公は動かない。

「恐怖公、どうした？」

「おお、少々お待ち下され。スキルの発動準備をしておりますゆえ」

「……スキル？」

嫌な予感があったフォーマルハウトが問い掛けると、意気揚々と恐怖公が語り出した。

「御存知やもしれませぬが、実は我輩、サマナーの職業を習得しております。そのスキルを使用しますと、我輩が持つスキルの一部を召喚した眷属が引き継ぐことが出来るのですぞ」

「眷……属……？」

「はっ。このスキルを使用して眷属を大量召喚すれば、時間を掛けずに大量の薬草採取が可能ということですね」

眷属を大量召喚の辺りで、フォーマルハウトの背に隠れていたヴェ

ルフエニアが大きく身を震わせた。ぎゅつと小さな手でフォーマルハウトの服を握り締めているのは、恐怖を押し殺すための無意識な行動なのだろう。

会話が漏れ聞こえていたアウラまでもが動きを止め、フォーマルハウトに助けを求めるような表情を向けている。

マーレは何の反応も示さずにせつせと薬草を採取していた。

「では、ゆきますぞー！」

「ま、待て、恐怖——」

フォーマルハウトが止める間もなく、それは始まった。

「眷属召喚！」

スキルの発動と同時に恐怖公の周囲から大小様々な大量のゴキブリが出現する。その数は百や二百では利かず、千を優に越す、

その日、フィベルナ大森林の一角が黒く染まり、その中心部では少女二人の奇声が響き渡った。